

---

# Muv-Luv Alternative The end of the idle

ねむり猫Mk3

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

M u v - L u v   A l t e r n a t i v e   T h e   e n d   o  
f   t h e   i d l e

### 【Nコード】

N 1 2 3 6 T

### 【作者名】

ねむり猫Mk3

### 【あらすじ】

ゼロ・レクイエムによりその生涯を閉じたルルーシュ・ヴィ・ブリタニア。

再び、意識を取り戻した時、そこはかつての世界とは異なるせかいであった。

異星起源種により滅びを迎えつつある人類。

死亡フラグ満載のM u v - L u v世界にて、新たな生を受けたルルーシュの新たな戦いが始まる。

この作品は以下の属性付きです。合わないと思った方は回避願います。

- ・ルル様はシスコン
- ・ヒロインは唯依
- ・ユウヤの嫁はスカーレット・ツイン
- ・武の嫁は207B
- ・まりもちゃんが行けず後家？

## うんちく(前書き)

本作独自の設定が幾つかあるので、簡単に纏めてみました。  
読まずとも話は通じますので、興味のある方だけどうぞ。

うんちく

うんちく

## 第一話

RTOS - 88

出典：無し

Revolutionary Tactical surface fighter Operating System type - 88の略

直訳するなら『革命的な戦術機OS 八十八年式』（安易な名前ですいません）

従来型OSの機能を整理・統合する事で、でOS自体のスリム化・高速化を実現

し、空いた分のリソースを利用して行われる見かけ上の並列処理により動作

間の硬直時間を従来の二割程度に押さえ込む事に成功する。また機体の自律制御自体は残されたが、各タスクの優先順位の付け替えと

イベント割り込みによる処理の中断・切り替えを組み込み、自律制御中の

操作不可という従来型OSの欠点を解消するなど、主としてレスポンスの改善

と操作性の大幅な向上がウリとなっていた。

製作者のルーシユ的には、不満の残る出来だったが、CPU等のハードウェア

との兼ね合いもあり、妥協した結果がこの製品。  
後々、枢木工業のドル箱商品となるRTOSシリーズの最初期型OS。

イメージ的には、MS-DOSがWindows 3.1に置き換わったようなものですね。

### 第三話

サクラダイト

出典：コードギアス及びスピンオフ作品群  
言わずと知れたギアス世界の文明を支える希少物質。

高温超伝導体の調整に必須の物質であり、その他様々な使い道も多数。

爆弾だったり、爆弾だったり、爆弾だったり。

本作中での独自設定

? フジサンには埋まってません。

第三話中で書いたとおりの理由から、埋まって無いものとして

扱っております。

代わりに、遺跡の建材の石に何割か含まれているものがあるという

設定にしております。

原作でも薄っすらと赤く発光したりもしてましたし、サクラダイト

自体、ギアスやコードと密接な関係があるようですので、多分、

含まれているんじゃないだろうか……な？

?高温超伝導体は、高温超伝導体です。

リアルの物理学では、高温超伝導体とは絶対零度よりも、  
やや高い

程度の温度（-200 ～ -100 位）で超伝導状態に  
なる物質を指しますが

これですとギアス世界の技術の説明に齟齬が出てしまいそ  
うなので、

ギアス世界における高温超伝導体とは、室温超伝導体（3  
00K）よりも、

更に高温で超伝導状態を維持できるものを指すという事に  
させておいて

いただきます。

マッスル・フレミング

出典：ナイトメア・オブ・ナナリー

合成樹脂と電動シエルの芯をサクラダイト合金繊維で覆った  
人工筋肉。

被覆材であるサクラダイト合金繊維がコイルの役割を果たし、  
発電機

としての機能を持つという優れたもの。

本作では、ハイブリッド車的なイメージとして捉えています。  
人工筋肉本体である合成樹脂と電動シエルを、超伝導コイル  
を兼ねる

サクラダイト合金繊維で覆い、本来熱などに変換されてロス  
になる分を

電気に戻して回収している感じかな、と。

また、マブラヴ世界には電磁伸縮炭素帯という人工筋肉もあ  
りますので、

それに対しては、反応速度・パワーレシオ面で優位にあると

位置づけています。

マッスル・パッケージ

出典：（名前だけ）フルメタ

マッスル・フレイミングの廉価版

人工筋肉自体の機能は、芯になっている合成樹脂と電動シエ  
ルにて賄える

ものと思われますので、被覆材を炭素繊維もしくはガラスフ  
アイバー等に

置き換えた廉価版。

サクラダイト不足に悩む本作独自の設定です。

メアフレーム

出典：無し

ギアス本編終了後、KMF民生活用に従事していたロイドの  
経験から生み出された

土木作業用人型機械。

後々出てくる戦術機とは異なる人型機動兵器『ナイトギガフ  
レーム』を産み出す

為の技術基盤を整える為に開発され、世界にばら撒かれた。

本作独自設定です。

多機能構造（マルチプル・コンストラクション・ストラクチ

ャ）

出典：無し

内骨格構造を更に推し進めた機体構造。

マッスル・フレイミングの様に、一つの構造体に複数の機能  
を付加する事で、

より効率良く機体内のスペースを活用する為の構造。

本作独自設定ですが、アイディアはサイコフレーム等の多



機能装甲。

## 第四話

マルチプル・コンストラクション・アーマー  
多機能装甲

出典：多数（リアル）リアルのリアクティブ・アーマーも広義では該当）

装甲そのものに電装機器等を内装させ、装甲以外の機能を付加した物。

第四話では、装甲に最新の制御システムであるOBLを組み込んだ物が

登場。

外骨格系である為、内蔵機器が装甲と密接な関係にあるので、内骨格系より

簡単な作業で換装可能な事がセールスポイント。

ファントム・ジーク（F-4G）

出典：なし（強いて言うなら名前だけ、サザーランド・ジーク）

日本の戦術機開発から弾かれた枢木工業が、独自の技術により開発した

アップデートシステムから産まれたファントム改修機。

母体となったファントムは、第一世代機だが、OBLを組み込んだMCAと

それに合わせて最適化されたRTOS-89Gにより段違いの機体制御と即応性を

実現。

更に装甲の構成を変更する事で、第二世代機以降の特徴であるトップヘビー

な機体構造を実現し、これにより第二世代機相当の運動性を

も獲得していた。

その他、跳躍ユニットの換装、データリンクシステムを含む電子兵装の更新、

肩部モジュールへの追加バッテリー搭載による稼働時間延長等の改良が加え

られた結果、準第三世代機相当の性能を獲得するに到る。

基本的な換装作業は、装甲の交換がメイン。

電子兵装の交換以外は、作業自体の簡便化が図られており、技術力の無い国

でも問題なく扱えるよう工夫がなされている。

日本製でありながら、日本の戦術機の特徴である空力特性を利用した装甲形状

を採用していないのも、各国の技術レベルのボトムラインに合わせた運用を

想定している為であり、満遍なく何処の国でも利用可能な様に作られている。

スエズ防衛戦での実験部隊キャメロット中隊の勇戦を切っ掛けとして、国連軍

から大量受注を獲得。

以後、各国への輸出も活発となり、枢木の生産能力では受注を捌き切れなく

なった時点で、ファントムの製造元マクダエル・ドグラム社と業務提携する

事で必要な生産量を確保していった。

世界で最も普及した第一世代機であるファントムが、このファントム・ジーク

へと更新されていった結果、人類側の戦力は短期間で大きく

底上げされる事と

なり、BETAの侵攻をユーラシア内部に押し込める上で、  
多大な成果を

挙げる事となる。

『戦争は数だよ、兄貴！』 by ドズル中将

## 第五話

撃震・甲型

出典：なし

日本戦術機開発から弾かれた枢木工業が独自開発したアップ  
デートシステムが

海外で大きく評価された影響を受け、光菱、富嶽、河崎三社  
により泥縄式で

開発された撃震強化型の試作戦術機。

基本的には枢木のアップデートシステムの模倣であるが、日  
本のお家芸とも

言える空力特性を考慮した装甲形状を採用している為、稼働  
時間については

本家を凌いでる。

但し、それ以外については特段の差異はなく、電子兵装に関  
してはMD社と

手を組んだ事により米国の最新機器を導入している枢木側が  
優位にある。

結果、性能面では、ほぼ同等。

しかし、製造工程の差から、価格面で大きな差がついてしま

った為、軍からは

不評を買い、結局、採用されずに終わった幻の機体となる。

スヴァルトオールヴヘイム

出典：なし

ゼロことスザクが、ルルーシュの為にラクシャータに依頼して建造させた

最新鋭浮遊航宙艦。

全長600mに達する巨艦ながら単独での大気圏離脱・再突入機能を有する。

(ダモクレスが3kmなんだから軽い軽い)

但し、純粋な戦闘艦ではなく工廠艦としての側面が強い。

(まあ、戦艦貰っても整備できなきゃ、すぐに鉄屑ですから)

最新型工作機械と膨大な技術情報を収めた量子コンピュータ

ー『ミーミル』を

有し、以後、枢木の技術力を時代から隔絶させる奇蹟の種となる。

また何故か、腹の中にフレイヤを抱え込んでいる何気に物騒な艦でもある。

艦名の語源は、北欧神話の『黒妖精の国』

ルルーシュの最後の乗艦となったアヴァロンに引っ掛けた命名名であるが、同時

に艦自体の特性も暗示。

(北欧神話にて、神々の武器を鍛えた工匠の妖精ドウエルグも、分類として

は黒妖精の仲間です)

詳細なスペックは、以後、ジワジワと公開？

以下、  
随時更新？

PHASE 0 …… 終わりは始まり

皇暦二〇一九年 トーキョー租界

いま一人の少年が逝こうとしていた。

自らに対する怨嗟と、その死を喜ぶ歓呼の声に送られながら。

既に聞こえず見えずの状態の中で、彼は静かに呟く。

「オレは、世界を壊し、世界を創る」

ささやき声にも届かぬその呟きは、泣き継ぐ実妹の耳にすら届く事無く、虚空へと消えていった。

後世において、悪逆皇帝の名を冠して呼ばれるルルーシュ・ヴィ・ブリタニアの生涯は、こうして幕を閉じた。

おれは、 『は』 『なり』 『は』 『なり』

『始まり』 は 『終わり』 であり、『終わり』 は 『始まり』  
である。

故に、『生』は『死』に因って終わり、『死』に因って始まる事となる。

PHASE 0・5：赤鬼と女狐

西暦一九八六年 春 帝都・帝都城

政威大將軍殿下のお膝元、帝都城内の一室で、一組の男女が向き合っていた。

一方は、巖の様な巨軀に両側に角のようにせり出した特徴的過ぎる髪型を持つ斯衛随一の有名人。

いま一人は、緩いウェーブを描く豊かな黒髪を背に流す美女で、これまた斯衛軍内に知らぬ者の無い人物であった 悪い意味であるが。

「やはり行くのか枢木よ？」

「意外と未練がましかったのですね、紅蓮少将閣下？」

野太い声に慙愧の念を滲ませて問う上官、否、元上官に対して、たった三十分程前に予備役編入となった枢木真理亜予備役少佐は辛辣な物言いで返した。

相変わらずの人をくった口調に、紅蓮醜三郎は疲れた溜息と共に反論する。

「抜かせ。大陸ではBETA共の動きが、ますます活発化してある。

こんなご時勢に貴様ほどの腕利きが、斯衛軍を辞めると言うのだ、止めぬ訳があるまい」



中国軍・ソ連軍のひく防衛線は、ズルズルと後退しつつあり、大陸東方の戦況は日々悪化の一途を辿っていた。

帝国内においても海外派兵が取り沙汰されるようになり、帝国本土防衛軍の創設等、帝国軍の再編も急ピッチで進められつつある。

その様な風雲急を告げる状況の中、斯衛内で唯一、己に比肩し得る目の前の女傑を失うのは痛過ぎたのだ。

だが、そんな紅蓮の引き留めを、当の枢木自身は鼻先で笑い飛ばす。

「その割りにすんなり辞表が通りましたわ。

上の方々は、よほど目障りだったのでしょうかね。

外国の男に股を開いた拳句、私生児を成した恥知らずが『山吹』を纏っている事が」

敵つい顔が苦々しそくに歪む。

真理亜の言うとおり、彼女の出した辞表は異例なほどのスピードで処理され、あれよあれよと言う間に事は決していた。

慣例や面子に固執する城内省の連中には、型破りな彼女が、とことん嫌われているのは知ってはいたが、ここまでとは流石の紅蓮も思ってはいなかった。

現状を全く認識していない城内省の小役人達の顔を、脳裏で踏み躪りながら、彼は柄でないと思いつつも苦言を呈する。

「止せ。それは自分の息子への侮辱にもなるぞ」

「この程度で凹むような柔な子じゃないですわ。私とあの人の子ですもの」

カラカラと笑う美女を前に、紅蓮は頭を抱えた。

虫歯の痛みを堪えるような表情のまま、諦めの溜息と共に吐き捨てる。

「まったく……ブリタニア大佐、いや二階級特進で少将であったな。よくもまあ、こんなジャジャ馬を御し得たものだ」

「嫁の来ての無い閣下には一理解できないでしょうね。男と女の機微というヤツは」

「……で、これからどうするのだ？  
斯衛を止めても、武家としての立場までは無くならんぞ」

ああ言えば、こう言つな展開に、最早打つ手を無くした事を紅蓮は悟った。

そして、相変わらずの天上天下唯我独尊っぷりに、天を仰ぎたくなる心境で投げかけた問いは、更に頭痛の種を増やしてくれる。

「とりあえず商売でも始めようかと。」

幸い元手は、それなりにありますから」

紅蓮の頬が引きつった。

「……ますます城内省から睨まれるぞ」

武家に商売はご法度。

明文化されている訳ではないが、暗黙の了解として開国以来続いているソレに真っ向から喧嘩を売る気満々な真理亜に紅蓮は冷や汗を流した。

基本、武家の収入というのは官職（大概が斯衛軍だが）に着いて得る物と元々ある資産を運用して得た利益とに分けられる。

その為、内情は火の車という家も少なからずあるのだが、それで

も直接商売に手を出す者は居なかった。

ある意味、伝統と慣習に縛られた武家社会から爪弾きにされる事が確定だったからである。

そんな事は百も承知だろうに、眼前の美女は嫣然と微笑みながら平然と言い切るのだ。

「背に腹は変えられませんもの。仕方ないという事で」

そう言って笑う元部下を前にして、紅蓮はこれ以上は言っても無駄と悟った。

この女は、敢えて乱を求めている。

そして、その先にある何かを望んでいる事も。

だからこそ、それだけは知っておかなくてはならなかった。万が一、それが帝国の害になるのならば、その時は……………

「最後に問おう。何を考えている真理亜」

それまでとは違う気迫をもって投げられた問い。

紅蓮の本気を悟ったのか、真理亜もおちゃらけた雰囲気を消し居住まいを正す。

真つ直ぐに向けられた瞳は、紅蓮を見ているようで見ていない。

そこを通り過ぎ、それよりも更に先へと向けられた目線のまま彼女は誇らしげに答えた。

「明日を……………ただ、明日を求めているだけです。あの子　ルルーシユの為に」

そのまま背を向け立ち去る様を見送った紅蓮は、特注の椅子に背

を預けると深々と溜息をこぼした。

西曆一九八六年七月

技術はあるが経営面で問題を抱えていた幾つかの中小企業を統合し、枢木工業が起業（代表は枢木真理亜）。

この枢木の横紙破りに一部の武家や城内省から強い反発が起きるが、法的には何の問題もない為、切齒扼腕しつつも、これを見逃す事となる。

とはいえ、この一件により武家社会における枢木の立場は大きく損なわれ、村八分に近い立ち位置へと置かれる事となった。

もつとも当の本人は、どこ吹く風と言わんばかりの態度を改めるでもなく、枢木工業の業績がグングン上がっていくのと合わせて、反枢木の立場を取る者達の血圧を、更に上げていく結果となるのだった。

PHASE 0・5：赤鬼と女狐（後書き）

さて、勇気を出しての初投稿。  
まあお暇な方はご一読を。

PHASE 1 …小さな魔王と幼い迷子(前書き)

本作の魔王陛下は、ナナナのマッチョゼロ方向へ進まれる模様です。

西暦一九八七年 夏 帝都・枢木邸

新緑が映えるよく手入れされた庭で、二つの人影が相對していた。

一つは巖の如き巨軀を筋肉の鎧で覆った偉丈夫。

いま一つは、その半ばにも達さぬ身長の十歳そこそこ見える少年。

一方は、その体格に相応しい權と見間違えそうな巨大な木刀を持ち、もう一方は、小太刀を模した二振りの木刀を構えていた。

両者の距離はおよそ五メートル。

しばしの間、互いに相手を伺いつつ、ゆっくりと弧を描きながら動くが、その間合いが縮まる事は無かった。

「ハアアアツ！」

幼い声で放たれる裂帛の気合が、その均衡を一気に打ち破る。

放たれた矢の如きスピードで、一瞬の内に互いの距離を踏み越えた少年は、巨漢の胸を薙ぐ一撃を放つがそれはアツサリと防がれた。巨大な木刀を、まるで小枝でも振るう様に速くしなやかに操って小太刀を弾いた男は、留まる事無くそれを振るう。

再び、木と木がぶつかり合う音が、男の足元で響いた。

「甘い」  
「グッ！」

本命の足を薙ぐ一撃を、軽々と凌いだ男　　紅蓮醜三郎は、そのまま木刀を振り抜く。

体重の無さ故か、諸共に弾き飛ばされた少年は、数メートルほど吹き飛ばされた後、最初の位置に近い場所に辛うじて着地した。

それでも、すぐさま体勢を立て直して己を睨みつける少年を、犬歯を剥き出した獐猛な顔で嘲笑う。

「どうしたルルーシュ。もう終わりか？」

「……冗談は、顔だけにしておくべきでは？」

紅蓮の挑発を受け、少年　枢木ルルーシュの口元が皮肉げに歪む。

全く闘志の翳りも見えぬ相手に、紅蓮は愉快そうに笑った。

「口の減らぬ奴よ。さすがはアレの息子　グオッ!？」

「聞こえてますわよ閣下」

「真理亜、貴様！」

横合いから頭部を直撃してのけた湯飲み茶碗に、目の前で火花を飛び散らされた紅蓮は、さすがに怒り狂って本来不干涉である筈の乱入者を睨む。

当然と言うべきか、その視線と注意は完全にルルーシュから外れた。

「ハッ！」

「むんっ！」



短い気合と共に、再び、一足で間合いを削ったルルーシユの放つ一撃を、こんどはギリギリのタイミングで防ぐ。下段から放たれた金的狙いの一撃のエゲツなさに、紅蓮のこめかみを一筋の汗が伝う。

「……はっ、こちらの気が逸れた処を狙うとは、少々卑怯では無いか？」

「勝負の最中に気を逸らす方が悪いのでは？」

母親譲りの黒髪の下で、長ずれば女性の視線を釘付けにするであろう秀麗な顔が、冷やかな笑みを描いた。

紅蓮の眼がスウツと細まる。

「全く。本当に屁理屈の上手い奴よ」

「論理的思考の持ち主と言っていたいただきたい。」

そもそも、貴方が隙を見せたから打ち込んだまで。

何処に非難される理由がありますか？」

可愛げなくうそぶくルルーシユを前にして、紅蓮の声のトーンが一段下がった。

「ああ、全く無い。だが」

「ムッ」

背筋を貫く悪寒に、自身が地雷を踏み抜いた事を悟ったルルーシユの顔色が変わる。

目の前の巨漢は、いい歳をして実に大人気ないとか子供っぽい面がある事を、今更ながらに思い出すが、時既に遅しであった。

「相手を仕留め損なえば、逆に怒りを買う事まで計算すべきであっ

「たな！」

「なっ！」

「本気ですか!?!」

紅蓮の構えから、何をやる気が悟ったルルーシユは、全身全霊の力を振り絞って後ろへと跳ぶ。

だが、それすらも無駄な抵抗であった事を、次の瞬間、少年は思い知った。

「喰らえ！」

「反重力乃嵐イイイッ！」

ルルーシユの身体が、重力の鎖を切られたかの如く、高々と宙を舞った。

「……あらあら、良い所までは行ったんだけど。詰めが甘かったわね」

紅蓮必殺の一撃を喰らい、塀の向こうへと吹き飛ばされる息子の姿を、ヤレヤレといった表情で見送った真理亜は、脇に置いてあった盆上のグラスを一つ手に取りポットから麦茶を注ぐと、肩や首を回しながらやってきた紅蓮へと手渡した。

グツと一息に良く冷えた麦茶を飲み干した紅蓮は、愉快そうに笑いながら縁側に腰掛ける。

「フム、いや良い汗をかいたわ」

「子供相手に本気を出すとは……相変わらず大人気ないですわね」

対して、先ほどから稽古を眺めていた真理亜は、半ば呆れた様子で呟きながら、空になったグラスにおかわりの麦茶を注いでやった。

それに軽く頭を下げて礼と為すと、再び、麦茶をあおった紅蓮は、片頬を歪めつつ反論する。

「ワシを責めるより、本気を出させた息子を褒めよ。

あの年齢で、あそこまで達するとはな。

一体、どういう修練を積ませれば、ああなるのだ？」

まだまだ荒削り、年齢故に力も無く、体重が無い故に重さも無い。だがそれでも、速さと鋭さだけは別格であった。

かつての真理亜の二つ名『閃光』には、到底届かぬものの『疾風』程度は名乗って恥じぬ速さが。

だからこそ疑問にも思う。

どうすれば、あの歳で、あそこまで行けるのかと。

そんな紅蓮の問いに、当の本人はと言えば、心当たりなさそうな素振りですぐ首を捻った。

「さあ？」

特に特別な事はしていませんわ。

強いて言うなら、私と同じ鍛錬をさせている位でしょうか？」

グラスを持つ紅蓮の手が、ビクリツと止まった。

そのまま信じられぬモノを見るような目つきで、眼前の美女を注視する。

「……試みに問うが、お前の鍛錬とは、斯衛軍に居た頃のままか？」

「はい、特に変える必要もありませんから」

「そうか……苦勞しておるのだな。ルルーシュは」

どこか遠くを見つめる眼差しで、そう呟く元上官を前に、訳が分からぬ風情で首を傾げる母親が一人。

それを横目にしながら、ごつい指先で、ソツと目尻を拭う。

勇猛をもつて鳴る斯衛軍衛士でも、裸足で逃げ出すと言われた枢木真理亜の鍛錬。

それに曲りなりにも耐えているという時点で、何となくルルーシユの歳に似合わぬ技量と落ち着きが理解できた紅蓮だった。

「ツツ……あの人型宇宙怪獣が！」

何でオレの周りには、あの手の脳筋イレギュラーが集まってくるんだ？」

これ以上やられてはかなわないとばかりに、吹き飛ばされた事を奇貨として早々に逃げ出してきたルルーシユだったが、痛む身体を摩りつつ、彼らしくない考えに囚われる。

もしかして、呪われているのか？

正直、今の境遇を思えば、それも否定しきれない。

何より、己自身に呪われても仕方の無い理由がある事を、彼は『自覚』していた。

『悪逆皇帝を演じて世界を制し、しかる後、ゼロレクイエムをもつて悪の象徴たる自分を消し去り、世界に満ちた憎悪を昇華する。その計画自体は上手く行ったが、これは完全な計算外、イレギュラー過ぎるにも程があるぞ！』

かつて、ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアと呼ばれていた少年  
枢木ルルーシュは、そう言って胸の内で慨嘆した。

『この世界』を知る身としては、死後の世界について否定する気はサラサラ無かったが、転生となると毛色が違う話。

しかも前世の記憶付きとなれば、尚更である。  
赤子の頃、己が境遇を認識した時は、頭を抱えてのた打ち回ったものだ。

これは、もう一度人生をやり直し、更に罪を償えとでも言いたいのかと不貞腐れた時期もあったが、成長するに従い世界の情報に触れる事で、本気でそう疑わざるを得なくなった。

『日本帝国、政威大將軍、異星起源種……極めつけは、マリアンヌにそっくりな母上、そして枢木！』

スザクはどうしたスザクは、これはアイツの役どころだろうが、何故オレが枢木の嫡子なんだ！？』

将来、自分も、ああいった体力バカな歩くイレギュラーになるのではないかと思うと気が気でない。

やはり知性派を自認する身としては、力任せに戦闘技能だけで戦略を引っくり返すような真似には、微妙な拒否感を感じるルルーシュだった。

もっとも、そんな彼の密かな願望を裏切るように、枢木の血故か、

或いは母の愛という名の修練の賜物か、彼自身は彼の望まぬ方向へとスクスクと成長中である。

九歳の子供が箸で八工を捕らえるわ、壁を平気で走るわ、もはや前世の親友が通った道を加速装置付きで着々と驀進している彼だった。

自身の未来に納得できない物を感じ、身体の痛みとは別の痛みを頭部に自覚しつつ、ルルーシユはフラフラと当てどなく街を彷徨い、無意味に思考を巡らせる。

『転生、そして並行世界……オカルトとSFがごちゃごちゃだぞ、全く』

記憶を持ったまま、生まれ変わっただけでも仰天モノであったが、そこはかつて生きてきた世界とは別の世界。

ユーラシア大陸に巣食ったBETA (Beings of the Extra Terrestrial origin which is Adversary of human race) により、人類は斜陽を迎えつつある世界。

『本当に、呪われているのかもしれない』

正直そう思う。

未だ、この国 日本帝国 は、BETAの侵略を受けてはいない。

だからこそ、大半の日本人は未だまどろみの中にある。

だが、それが仮初の平和であり、残り少ない秋の残照でしかない事を、明敏過ぎる彼は見抜いていた。

その遙か彼方を見据える瞳には、大陸を蹂躪し、半島を抜き、や

がて帝国本土をも奪つべく海を越えてやって来る化け物達が映っている。

『三十年……いや、いいところ二十年というところか。

滅び行く世界に、記憶つきで生まれ変るといふ喜劇……余程、あの世界に疎まれたか』

世界から弾き出された　そう罵られた経験のある身としては、苦笑するしかない境遇である。

だがそれでも、彼は諦める気などサラサラなかった。

押し付けられた理不尽に抗い続けるのは、もはや彼にとっては第二の本能と化しているのだから。

『ギアスも失い、大した基盤も無く、この身は未だ年端もいかぬ子供……状況は極めて劣悪と言えるな』

ブツブツと呟きながら、現状の手駒を分析する。

転生の影響か絶対尊守のギアスは失われ、実家は山吹を纏う事を許された譜代武家ではあつても、英国人との間に私生児を設けた母は化石化している武家社会では浮きまくった存在で、まともな知己と言えは以前の上官である紅蓮少将のみ。

更にダメ押しと言うべきか、自身も未だ幼少の身の上、母以外には、まともな話も聞いてもらえない年齢である。

これでは何も出来はしない。

そして、何か出来る年齢に達した頃には、既にこの国はチェックメイトをかけられている可能性が高かった。

何とかして状況の改善を、叶うなら自身で状況を作り出せるだけの手立てを得る必要がある。

結局の処、ルルーシュの思考はそこに帰結せざるを得なかった。

『やはりアレを、母上に見せるべきか？』

今のままではどうにもならない以上、全体的な戦力の底上げと枢木の発言力の強化は必須だ』

以前より伏せていた手札の一枚を、世に出すべきかと考える。

現時点での効果は、さほど望めないが、それでも今は兎に角、時間が欲しかった。

その為にも、最も有意義でかつメリツトの多い手段を模索する。

『軍の方には紅蓮少将から……いや、出来れば技術廠関連のツテがあった方が、よりインパクトが………んっ？』

その類稀なる頭脳の中で、数十通りの試案を産み出し、消し去り、取捨選択を繰り返していたルルーシュの意識が、不意にこちら側へと戻ってきた。

気が付けば、自宅の近場にある公園の傍。

物思いに耽りつつ無意識に歩を進めていた彼だったが、辿り着いたその場において、やや距離を置いて眼に映った光景に秀麗な眉をしかめた。

「どけよっ！」

「どきません！」

まだ幼い少女と彼と同年あるいはやや上と見える数人の少年達が



言い合っている。

『何だ？』

年端もいかぬ小さな女の子を、数人で取り囲む光景に不快感を覚えつつ、ルルーシュは事の原因を知るべく耳をそばだて眼を凝らす。

よく見れば少女の周りを取り囲む少年等は、この近くに住む武家の子弟達。

とはいえ、ルルーシュにしてみれば顔は知っているという程度の認識の相手に過ぎず、以前、群れ成して絡んで来た時、少しばかり礼儀を教えてやったら、それ以降は、彼の姿を見る度にそそくさと逃げ出すだけの連中だった。

対して、たった一人で彼らと対峙している少女の方には、彼も見覚えが無い。

抜群どころか異常といってもいい記憶力を誇るルルーシュの記憶に無い以上、この近所の子とも思えなかつたが、身に付ける山吹色の着物は遠目にも良い仕立てである事が分かり、相応の家の娘である事が伺えた。

そこまで見取った所で、ルルーシュの視界の端、手を広げて少年達と対峙する少女の足元に茶色い何かが見えた。

『ああ、成る程……』

その一事で、おおまかな理由を察したルルーシュは、軽く頭を掻く。

それは、小さな犬だった。

まだ子犬というよりも、幼犬とでも呼んだ方が良さそうな雑種の子犬。

それが、山吹色の着物を着た少女の足元で、うずくまりブルブルと震えている。

「それは俺たちの獲物だ。とつとと寄越せよ！」

少年達の中で、一番年嵩で身体も大きいリーダー格が、甲高い声で叫びながら威圧する様に出た。

仲間の少年達も、習うように一歩前へ出る。

彼等是不愉快だった。

折角の遊びを、武家の嗜みと称しての『狩り』を邪魔された事に。

とは言え、彼らも全くの馬鹿という訳ではない。

明らかに自分達の家よりも、格上と思われる出自の少女に手を出せば、後で親兄弟からきつく叱責される程度の事は理解していた。

ルルーシュに絡んだのも、枢木が武家社会での立場を無くした後の事であり、それまでは陰口を叩く程度に留まっていたのだ。

だからこそ、衆を頼んで威圧する。

自分達より頭二つ三つ小さい少女なら、取り囲んで睨みつけければ、それだけで怯えて逃げ出すか、或いは泣き出すかすると思っただから。そうすれば、格上の相手を手を出す事無く屈服させたという満足感を得た上で、楽しい遊びを続けられる。

そんな子供らしくない、或いは、らし過ぎる残酷さと小狡さを混ぜ合わせた行動は、予想外の反応によって報われた。

「こんな小さな仔をイジメて喜ぶなど、武家として恥ずかしくないのですか！」

山吹の少女の鋭く激しい叱責が、彼らの自尊心を痛撃する。怒りか、それとも羞恥か。

一瞬にして顔を真っ赤に染めたりリーダー格の少年は、粗雑な打算を完全に忘れ、自分を睨みつける少女へと殴りかかるうとする。

「この！ なっ？」

振り上げた拳が、背後から伸ばされた手に捕らえられた。

何事かと振り返った少年の顔が瞬時に青褪め、周りの仲間達も猛獣でも見たかのように悲鳴を上げて飛び退く。

結果、その場には二名の子供達 訳が分からず啞然として固まる少女とリーダー格の少年 と、空気読まないというか読む気の無いルルーシユ闖入者のみが残された。

「この娘の意見に、オレも賛成だ。

正直、見苦し過ぎるぞ、貴様等」

「く、枢木……」

軽蔑し切った目線と声が、捕らわれた少年とその仲間達の自尊心を、グツサリとばかりに抉る。

人を挑発する才にも長けたルルーシユの言動と態度は、それだけで未熟な彼らの理性を沸騰・蒸発させるには充分過ぎた。

かくして哀れな少年は、憤りのままに伏竜の尾を踏む事となる。

「はっ、やっぱり『混じり物』は、雑種の方ガッ ！」

背後を振り向き罵声を上げかけた少年の顔が、再度、赤から蒼へと一気に変わった。

顔全体にびっしりと脂汗が滲ませ苦悶する様を、つまらなそうに眺めながらルルーシュが吐き捨てる。

「喚くな。唾が飛ぶだろうが」

「ガッ！……ギイ……ああ！……ゲエ！……」

少年の腰椎をわずかにズラした二本の指が軽く揺れる度、彼の口から獣じみた呻き声が迸った。

その悲痛な叫びに周囲を囲む他の子供達が恐怖に震えて後退る中、事態の急変に着いていけなくなった少女のみが、ポカンとした表情でその場に残される。

少年の腰の辺りで、骨の軋む音が鳴った。

ルルーシュの指が無造作に引き抜かれるや、少年はその場に崩れ落ちる。

その尻の辺りの地面の色が異臭と共に変わっていくのを、冷ややかな眼差しで見下ろしていたルルーシュは、右足を上げ、そして下ろした。

地を打つ音が鳴る。

同時に、尻餅を着いていた少年が、意味不明の叫びと共に、脱鬼の如くその場から逃げ出した。

走る、走る、走る。

倒けつ転びつ、後をも見ずに逃げ去るその様を、啞然として見送っていた取り巻きの少年達。

だが、その背にも、氷の棒を突き込まれた様な悪寒が走る。

全く温度を感じさせない紫の瞳が、彼らを見ていた。  
次の獲物はお前達だ　　そう言わんばかりの捕食者の眼で。

後は、もう言うまでも無い。  
恐慌にかられ、蜘蛛の子を散らすように逃げ出すだけだ。

その醜態を、つまらなそうに鼻を鳴らしながら見逃したルルーシユの耳に、わずかに残った矜持からか、或いは、安全圏に逃げ延びた安堵故か、負け惜しみの罵声が届く。

「半端者が！」

「覚えてろよ日本人モドキ！」

母親譲りの美貌に無機質な笑みが浮かぶ。

遠ざかる背に冷ややかな視線を送りながら、発言者の希望通り、きつちりと顔と名を記憶に刻んでいたルルーシユの背後で、小さな声が発せられた。

「…………あの…………」

「何だ？」

オズオズといった具合にかけられた幼い声に、ルルーシユが振り返る。

見下ろす視線の先には、カチコチと固まった感じで縮こまる先ほどの少女が居た。

見上げる眼と見下ろす眼が、一瞬だけ交差する。

次の瞬間、俯いてしまった少女は、そのまま暫らくモグモグと何やら口箆っていたが、やがて決心が着いたのか再び顔を上げた。

「あ、ありがとうございます」

ただ、その一言を告げるだけで、少女の呼吸は激しく乱れた。艶やかな黒髪の内の一房　白い飾り布リボンで束ねられたソレが、その心を映す様にユラユラと揺れる。

正直に怖いという思いと、助けられた事への感謝の念。拮抗する正負の感情が、少女の内で渦巻いている事が、ルルーシユにも分かった。

未だ未完ながらも、秀麗と言つてよい容貌に苦笑が浮かぶ。

「気にするな。オレが気に入らなかつたのは事実だ。それよりも

「あつ」

ポンツと頭に置かれた手の重みに、驚き一色の声が漏れる。

苦笑が微笑へと移り変わった。

「偉かつたな」

先ほどとは、打って変わった優しい声に、彼女は一瞬呆ける。

だが、軽く髪を撫ぜる手の平の感触に、自分が褒められたのだと理解した少女の頬が薄く色づいた。

「……あ、ありがとうございます」

プニプニとした柔らかかそうな頬を、朱に染めながら応える姿に微笑ましさを感じていたルルーシユの視界の端で何かが動く。

「んっ？」

「あつ」

少女の足元から、茶色い塊りが弾けるように飛び出した。  
そのまま一直線に進む先には、親犬と思しき雑種の犬が居る。

「……母親のようだな。迷子を捜しに来たか」  
「よかった……」

安堵しジャレつく子犬の姿に、眼を潤ませながら呟く少女。  
ホツとした風情の中、どこか羨まし気な色が滲んでいるのにルル  
ーシユは気付いたが、所詮は行きずりの相手との思いから深く踏み  
込む事を避ける。

「では、な」  
「あ、あのー！」  
「ん？」

そのまま片手を振って別れ様としたルルーシユの背に、縋るよう  
な声が掛かる。

振り向けば、再びモジモジした山吹の少女がそこに居た。

「あ……あの……その……」

口籠り、言いかけては止め、止めては言いかける様からは、先ほ  
ど年上の少年達に取り囲まれても毅然としていた勇姿は、到底想像  
できそうに無い。

明らかにテンパっているその姿から、このままでは埒が明かない  
と思ったルルーシユは、出来るだけ刺激しないように柔らかな声で  
問うた。

「うん、何かな？」

少女の身体がピクリと震える。

そのまま、しばし逡巡していたが、やがて決心が付いたのか、大きく深呼吸をすると喉元に引っ掛かっていた願いを口にした。

「……み、道を教えてください！」

渾身の気合を込めて放たれたのは、思いもよらぬ一言。

思わぬオチを受け、ルルーシユの顔にも再び苦笑が浮かぶ。

「あ………君も迷子か？」

「………はい」

苦笑いをタツプリ含んだ問いを受け、少女は恥ずかしさに消え入りそうになりながらも、コクリと小さく頷いた。

「欧州各国の政府が、英国とグリーンランドへの避難を始めたそう  
だ」

「とうとう欧州も陥落しますか………」

感慨深そうに呟く。

彼女が愛した男が死んだのも欧州戦線の一角。

避難民を乗せた船団を護つての散華だったと聞く。



男の命を賭けた努力は無駄だったのか……それとも……

しばし物思いに耽る姿を、それとなく眺めていた紅蓮は、手にした麦茶を飲み干すと一呼吸置いた後、声を掛ける。

「枢木よ、斯衛に戻るつもりは無いか？」

大陸西方の戦況は悪化し続けているが、それは東方とて同じ事。昨年、帝国も協力しての第三次国共合作は成り、統一中華戦線が発足しているが、未だ防衛線は後退の一途を辿るのみ。

大陸失陥が免れぬのは、政府内の者の眼には見え始めており、可及的速やかな戦力の強化は急務でもあった。

事ここに至り、枢木嫌いの城内省の面々も、前年に引退を認めた筈の彼女を再び第一線に戻すべく画策しつつあり、紅蓮を介しての復帰要請もその一手である。

とはいえ、そんな見え透いた思惑に乗ってくれる様な可愛げのある女である筈もなかった。

「残念ながら、ここ一年の暮らして、すっかり鈍りきってしまいましたわ。」

ととてもとても、斯衛の方々のお役には立てません」

面憎くなるほど平然とした態度で、申し出を切って捨てる元部下に紅蓮は顔をしかめる。

「……真顔で嘘を言うな、嘘を。」

貴様、ルルーシユも、斯衛に入れるつもりはあるまい」

女の美貌に苦笑の色が浮かんだ。

それを肯定と取った紅蓮は、更に言い募る。

「あれほどの才の持ち主を……勿体無いとは思わんのか？」

断言しても良いが、長ずればアヤツは、ワシやお主を越えるだろう」

そう余りにも惜し過ぎる。

あたら帝国の歴史に名を刻める衛士に成れるであろう才を、野に置き腐らせる事など彼には到底認められなかった。

だがそれは、あくまでも紅蓮の視点、紅蓮の言い分である。

彼女には彼女の考えがあるのは、当然の事。

「だからこそです」

氷の刃で切り裂くような冷たく鋭い一声が、紅蓮の喉を薙ぐ。

発せられる気迫に息を呑む相手を、冷たく見据えながら、真理亜は更に言葉を重ねた。

「だからこそ、私はあの子に自由であって欲しい。そう願っています」

「……斯衛になる事は、アヤツにとって枷にしかならぬと？」

問い質す声に、応ずる事無く視線を動かす。

陽光の中、緑が映える庭園を見つめながら、無言を貫く真理亜の姿勢に紅蓮は肩を落とした。

「分かっているのだろうか？」

武家の嫡子は、成長すれば斯衛に入るが定め。

それを拒否するという意味が……」

「私にとっては枢木が武家で在り続ける事よりも、あの子の方が大事……そういう事ですわ」

瞑目して紅蓮は、天を仰ぐ。

前途多難としか言えぬ道程を前にし、厳つい顔には似合わぬ疲れた溜息が漏れた。

「なるほど、最近越してきたばかりなのか」

「はい、父様の仕事で、しばらく帝都を離れていたのですが、それが終わったのでこちらに」

チヨコチヨコと歩く少女の歩幅に合わせながら、その手を引き、帝都の小道を歩く。

ようやく迷子の不安から解放された反動か、ニコニコと笑みを浮かべ、楽しそうに自分の事を話す少女に相槌を打ちつつルルーシユも頬を緩めた。

幼いながらも整った目鼻立ちと癖の無い美しい黒髪は、長ずれば相当の美女になるであろう事を伺わせるが、今は年相応の可愛らしさの方が目立つ。

まるで共通点の無い容貌であったが、その少女に最早会う事も叶わぬ実妹を重ねてしまったのか、ルルーシユも、普段、見知らぬ人に向ける物とは百八十度異なる優しい声で、少女と会話を交わし続ける。

「ほう、そうか。それでは仕方が無いな。」

この辺りは、武家屋敷が多く道が入り組んでいるからな、初めての者は大概迷う」

「はい、昔住んでいた屋敷だったそうですが、私はその頃まだ赤子でしたから」

会話の中に引っ掛かるモノを感じて、ルルーシユは怪訝そうな表情を浮かべる。

脳裏に浮かんだ些細な疑問を尋ねるべく、脇を歩く少女に声を掛けようとして、また戸惑った。

「待て……あ、うん？……ああ、そう言えば、まだ名前を訊いていなかった。」

オレは、枢木ルルーシユという。君の名を良ければ教えて貰えないか？」

「あ、はい！」

篁 唯依と申します」

「篁？」

「はい、斯衛として山吹を許されております」

その一言をキーとして彼の意識野には、聞こうとしていた物とは別の情報が浮かんだ。

「……もしや、初の国産改造戦術機『瑞鶴』の開発主査を務めていた斯衛軍の篁少佐の縁者か？」

「はい、父様です！」

「ご存知でしたか？」

「帝都では、有名人だからな。」

昨年、矢白別演習場にて米軍の最新鋭機を撃破した事で、同じく

首席開発衛士を務めていた帝国軍の巖谷大尉と並んで時の人だろ  
「はい！」

父親を褒められて嬉し恥ずかしといった風情で照れる唯依。  
その仕草を微笑ましそうに見ながら、ルルーシユは考える。

『今をときめく篁少佐、いや昇進して中佐だったか、コネとしては  
申し分ないが……さすがに、な』

正直、技術廠へのツテは欲しいが、その為に目の前ではにかむ少女を利用するのは気が引けた。

一瞬だけ脳裏を過ぎった打算を捨て、話題を変えるように先ほどの質問に戻る。

「ところで篁嬢」

「はい？」

「先ほど聞きそびれたのだが、君は幾つなのだ？」

「今年の三月十三日で、五歳になりました」

年齢の割りにしっかりしている唯依に、ルルーシユは珍しい物を見たような顔をする。

言動と態度から、最低でももう二つ三つは上だろうと予測していたのだ。

「……篁嬢は、歳の割りに随分としっかりしているのだな」

「ありがとうございます。」

「……あのルルっう！」

褒められて頬を染めつつ、彼の名を呼ぼうとした唯依は、日本人のそれとは異なる発音に思わず舌を噛む。

痛みのあまり眦にジワリと涙が滲むが、幼いながらも武家の娘としての矜持故か、零れそうになる雫をプルプルと震えながらも必死で堪える姿に、見て見ぬフリを決めたルルーシュは、震えが収まつたところを見計らい柔らかく微笑みながら尋ねる。

「さすがに言い難いか、オレの名は」

「……はい、すみません」

シュンツとばかりにうな垂れる少女に、気にするなどジエスチャーで示しつつ告げる。

「謝る事はない。」

呼び良いように呼べばいい」

「はい……あの、枢木様は、外国の方なのですか？」

名前と容姿から察したのだろうが、興味ありそうな唯依の問いにルルーシュの眉が微かに寄った。

そうでなくても国粹主義が蔓延りつつあるご時勢、ハーフというのは奇異の眼で見られがちであり、閉鎖的な武家社会ではそれが特に顕著でもある。

ルルーシュの出自を知って、あっさり手の平を返した者など、大人でも子供でも枚挙にいとまが無い。

その事を思った時、ルルーシュの反応がホンの一呼吸だけ遅れた。

「……半分だけな。」

父は英国人で母は日本人、いわゆる混血というヤツだ」

「そうですか……あっ！ この辺は見覚えがあります」

予想外にもサラッと流された。

思わぬ反応に一瞬固まるルルーシュを他所に、ようやく自分も知

る場所に出た事で、唯依の思考は全てそちらへと移る。

無邪気に喜ぶその姿に硬直から解放されたルルーシュは、わずかに苦笑しながら、そろそろ潮時とみて繋いでいた手を離れた。

「あっ？」

「ここまで来れば、もう大丈夫だろう。ここでお別れだ」

そう言って軽く手を振り立ち去ろうとする。

だが、二歩目を踏み出そうとしたところで、その足が止まった。

振り返ると、服の裾を小さな両手で握り締めた唯依が、何か言いたげな表情でジッとこちらを見上げている。

必死さを感じさせるその仕草に、ルルーシュは当初の予測よりも大幅に帰宅が遅くなる事を確信し、一度だけ溜息を吐いた。

「ふむ、結局どこまで行っても平行線か」

「仕方ありませんわ。こればかりは」

あの後も、なお食い下がる紅蓮を、ヒラリ、スルリとかわし続けた真理亜は、容易に言質を与えることは無かった。

狡猾な女狐相手に、苛立ちを押さえつつ悪戦苦闘を繰り広げてきた紅蓮は、やむなく本日最後の切り札を切る。

「煌武院悠陽様は、知っておるな」

いきなり出てきた思いも寄らぬ名に流石の真理亜も、わずかに戸惑いを匂わせた。

「……順番からいけば次期將軍殿下最有力候補な方ですわね」

「うむ、それだけに色々と難儀な眼に遭われる事にもなるう。」

ワシとしては、叶う事ならルルーシュに悠陽様の近侍として力になつて貰いたいのだ」

また面倒な事を、と言わんばかりに真理亜の表情が歪む。

「ご冗談を、次期將軍殿下の側近を務めるなら最低でも『赤』、煌武院ならば月詠辺りが適任とされるお役目でしょう」

家格、家格と煩い連中の顔が浮かんだのか、心底うつとうしそうな口調で、らしくない正論を唱える。

紅蓮は、全くその気が無いと全身で示す様に落胆しつつも、それでも辛抱強く説得を重ねた。

文武に秀でた才気を示すルルーシュなら、きっと悠陽の役に立つという確信もあり、告げる言葉にも自然と熱が籠る。

「その辺りはワシがなんとでもしてみせよう。」

頼む、悠陽様に力を貸してはくれまいか？」

紅蓮の熱意にほだされたのか、冷やかな表情を浮かべていた真理亜の顔に、わずかな逡巡の色が浮かんだ。

だが、数瞬なにかを考える仕草を見せた後、ゆっくりと首を横に振る。

「……折角ではありませんが、ルルーシュがお側に上がれば、かえって要らぬ波風を起こすだけですわ」



既に、武家社会における枢木の立場は無いに等しい事を、彼女はキチンと把握していた。

そんな家の嫡子が、次期將軍殿下の側に近侍として待るとなれば、一悶着程度で済む筈も無い。

殿中スズメ達が、気が狂ったように騒ぎ立てるのが目に見えていた。

その点を、理路整然と告げられてしまえば、さすがの紅蓮も無理強いが出来なくなる。

この男には珍しく肩を落とし、凹んだ声で呟く。

「どうしても駄目か……」

「駄目です」

本日の赤鬼と女狐の鏢迫り合いも、やはり女狐の側に軍配が上がった瞬間だった。

賑やかに浮かれ騒ぐ声が、四十畳はあろう座敷の中に満ちていた。明るい掛け声と共に杯を交わし、或いは、饗された料理に舌鼓を打つ。

そんな平和な風景の一部となりながらも、それを拒むかのように浮かない顔で上座の一角に座す少年が一人。

『……どうしてこうなった？』

ルルーシユは、思いもよらぬ事態の変遷に巻き込まれ、その胸中で小さく嘆息する。

どうしてもと、それこそしがみ付きかねない勢いで、唯依に家へと招かれた際には、『まあ一言挨拶する位なら』といった程度の感覚で、結局、折れる事になったのだが、それが、そもその誤りであつた。

そのまま篁家まで、手を曳かれていったのが運の尽きと言つべきか。

帰らぬ娘の身を案じ、門の前まで来ていた父親達と、バツタリと出会つてしまつたルルーシユは、そのまま家の中まで連行され質問責めに遭う破目に陥つたのだ。

そして、そのままなし崩し的に、宴会の準主賓とでも言うべき立場へと祭り上げられ、今へと到つた訳である。

厚意には、感謝をもつて報いるべきとは思つ。

……そう思いはするのだが、やはり周りから注がれる視線が痛過ぎた。

早く終わつてくれ 針の筵に座つた気分で、切実にそう願ひ続けるルルーシユ。

そんな苦行に耐えるに彼に向け、左手より声が掛けられる。

「どうしたのかね、ルルーシユ君。

箸があまり進んでいないようだが？」

「む、何か嫌いな物でもあつたのか？」

「いかなぞ、子供が好き嫌いをしては」

宴たけなわのこの場にあっても、一部の隙無く背筋を伸ばし、真面目一徹を絵に描いたような容貌の主と、精悍な顔立ちにどこか稚気を感じさせる雰囲気を持つ男が、交互にルルーシュを覗き込む。

この家の主とその親友。

泣く子も黙る帝国の英雄にして、愛娘を愛してやまぬ親馬鹿な父親達。

彼　ルルーシュを、この場に巻き込んだ元凶とも言える面々なのだが……

『だがこれは、感謝すべきか？』

宴の主催と主賓が、揃って自分を気遣う事で、先ほどから感じていたイヤな視線が、うろたえるように減っていくのが分かった。

巖谷の鋭い眼差しに、一瞬だけ笑みが浮かんで消える。

『……………』

少年の口元がわずかに綻び、それを隠すかのように軽く頭が下げられた。

実父とルルーシュに挟まれる形で座り、先ほどからチラチラと様子を伺っていた唯依が、不思議そうに首を傾げる。

いかに利発とはいえ、未だ五歳の少女には、ホンの少し前まで場に流れていた空気を読むのは無理　　と言うよりも、未だ九歳のルルーシュが読めて、気遣いにまで応じられる事の方が異常なのだ。そんな自身の異常性を認識しつつも、特大の猫を被った彼は、良家の子息を熱演する。

「そういう訳ではありませんが……本当によろしいのですか、私などがお邪魔していても？」

ウチの悪評は、ご存知でしょ？

と、言外に告げる少年に、大人達は困ったような表情を浮かべる。

枢木の悪評と共に、その嫡子の聡明さも聞き及んではいたが、こうして直に接してみてもハッキリと分かったのだ。

噂は、事実の十分の一も表してはいない、と。

天才という修辭すら、この少年に冠するには不似合いに思えた。

もし、この異彩にして異端な存在に似合う言葉があるとすれば、それは……

「何を子供が遠慮しているのかね。

そもそも君は娘の恩人だ、相応の持て成しをするのが礼儀というものだろう」

胸中に浮かんだ一言。

斯衛軍の一員たる身が、唯一無二の例外を除いて、決して感じてはならぬ筈のソレを掻き消すように、篁は『常識』を口にした。

子供達を挟んで並ぶ巖谷の肩からも、微かに力が抜け、そのまま座の空気を入れ替えるように、わざとおどけて見せる。

「そうそう、その通り。

ほら唯依ちゃん、ルルーシュ君に何か勧めてあげなさい」

「あ、はい！

……あの、コレはいかがですか？」

大好きな父親達とキレイで優しいお兄さんの間に産まれた微妙な空気に、その意味を理解できぬまま不安そうにしていた唯依は、突然、水を向けられて半ば飛び上がりかける程に驚いたが、それでも父親譲りの律儀さで、膳の上の料理　彼女も好きな肉ジャガを器ごと取り上げて、ルルーシュへと差し出した。

小さな手で、やや大振りの器を持ち上げ、少しだけ不安そうに自分を見る少女に、ルルーシュが着込む透明な猫の着ぐるみも少しだけ綻ぶ。

「……………ただこう」

そう言って手を差し出す彼に、唯依の顔が嬉しそうに綻ぶ。

釣られて崩れたルルーシュの相好が、脇から聞こえた一言でピシリツと固まった。

「チツチツチツ、違うぞ唯依ちゃん。

そういう時はな、お箸で取ってアーンとやるんだ」

「なっ！」

「ふえっ？」

立てた人差し指を振りつつ、口元にニヒルな笑み、目には爆笑の色を浮かべた不良中年が投げ込んだ爆弾発言が、場の喧騒を一瞬で吹き飛ばす。

更には、

「ふふ、そうだな。

そうしてあげなさい唯依」

真面目そうな表情のまま、それを肯定し、推奨する父親の一言が続き、哀れ少女はパニックに陥る破目になる。

「あ……あの……あの……」

思いもよらぬ父親達の命令（？）に、頬を朱に染めてワタワタと慌てふためく唯依。

愛娘のそんな姿に、篁は楽しげに笑い、巖谷が精悍な顔をだらしなくにやけさせる。

子煩悩丸出しの親馬鹿コンビの悪ふざけに、ルルーシュの眉間に皺がよった。

「いや、そこまでして貰わなくても自分で　っ?」

制止をしようとした彼の目の前に、一膳の箸が突き出された。無論、よく味の染みたおいしそうなジャガイモ付きで。

「あ……ア……ア……ン」

ドモリつつも、しっかりと箸を差し出し、上目遣いでこちらを見る唯依。

柔らかなそうな頬は朱で染まり、その眼は恥ずかしさにウルウルと潤んでいた。

そんな可愛らしい生き物と、両サイドから威圧　ウチの娘に恥をかかせないよね?　してくる親馬鹿コンビ。

更には、周囲の客達からも微妙な圧力が掛かってくる。

完全なアウエーに、自身が追い込まれた事を悟ったルルーシュは、

潔く白旗を揚げる以外の選択肢が無くなっている事を理解した。

「……………あ〜ん……………」

「！ ア〜ン」

羞恥に耐えつつ、開いた少年の口に、程よい大きさと味のジャガイモが送り込まれた。

そのまま目をつぶり、モグモグと噛んで飲み込む。

正直、味などさっぱり分からなかったが、ルルーシュは男として果たすべき義務を果たすべく口を開いた。

「……………美味かった。ありがとう」

「はい！」

はにかみながらも、唯依は嬉しそうに笑う。

その様を肴に、楽しそうに杯を交わすオヤジが二人。

内心で殴りかかりたくなる衝動を抑えつつ、こちらを伺うように見上げる唯依の手前、怒る訳にもいかず、心の内で独り愚痴る。

『ふう……………本当に疲れた。』

……………しかし、篁中佐と巖谷少佐がセットで居るとはな』

今日は引越し祝いも兼ねた内輪での宴会との事で、集まった篁家の親族や技術廠の同僚達が、先ほどのイベントをネタに更に盛り上がりつつある。

中には、未だに嫌な視線を送ってくる者 篁の親族との事だがも居るが、その都度、さり気ない仕草で篁中佐がたしなめている様で、先ほどに比べればかなりマシといえた。

当面は、もう不快な目にあわずに済むと踏んだルルーシユは、再びの『アーン』攻撃を回避すべく、適当に饗された料理に箸を伸ばす。

口に入れた物を、ゆっくり咀嚼しつつ、脇に座った唯依が物足りなさそうな表情で箸を構えているのを意図的に無視し、しばらくの間、宴の様子を観察しながら思考を巡らせた。

『瑞鶴の成果に、皆が皆、舞い上がっているか……だが』

ルルーシユの視点から見れば、何を大騒ぎしているのかと云いたくなる。

アクロバティックなナイトメアの動きを見慣れた彼からすれば、現行の戦術機など、どれもこれも出来の悪い木偶人形程度にしか見えなかったのだ。

まして過日行われた模擬戦も、どちらかと言えば機体性能で押しただと言うよりも、巖谷少佐（当時大尉）の作戦勝ちの要素が強いと見ている。

単純に力押しで勝負を決めていたなら、恐らく勝ったのはF-15C側の筈。

瑞鶴の成果を敢えて挙げるなら、戦術機としての性能云々ではなく、純国産戦術機開発への途を閉ざさなかったという一事に尽きるだろう。

それなのに……

『やはり米国機など不要だ』

『そう我等には、瑞鶴がある！』

『これでBETA共など一捻りよ！』



あちこちから聞こえてくる威勢のいい声に、ルルーシユの眉目が寄った。

現状を正しく認識できていないのか、あるいは単なる逃避か。前者・後者いずれであっても、問題の有る話である。

そう思い、内心で落胆の溜息を吐いていたルルーシユは、ふと、ある事に気付いた。

「……………」

氣勢を上げる面々を、どこか苦い表情で見ている主催と主賓がそこに居た。

わずかに透けて見える憂慮の色が、両者の内心を少しだけ垣間見せている。

それがルルーシユの中の天秤を傾ける事となった。

「ご心配ですか？」

お二人の成果が、この国の行く末を歪めてしまうのではないかと「？」

「え？」

「……ッ！？」

唐突に掛けられた意味不明な一言に、訳が分からない唯依は首を捻る。

対して、脇に座していた父親達は、揃って顔を強張らせた。篋の視線に剽烈な光が宿り、巖谷の面に鋭い表情が浮かぶ。

「ルルーシユ君、君は……………」

「ご馳走になりました。」

ですが、そろそろ帰らないと母を心配させてしまいますので、この辺りで、お暇させて頂きます」

篁にみなまで言わせず、ルルーシユは礼儀正しく頭を下げて礼を言い、席を立つ。

出鼻を挫かれ、篁の頬が一瞬だけ強張るが、それを周囲に悟らせる事はない。

速やかに狼狽から立ち直った胆力に、ルルーシユが興味深そうに見やる中、ここではマズイと判断したのか、篁もまた立ち上がった。

「……そうか、では玄関まで送ろう」

そう言っつて、一瞬だけ巖谷に目配せする。

以心伝心というべきか、それだけで己の成すべき事を理解した巖谷は、座の空気を保つべくその場に残った。

篁に対する巖谷の信頼の厚さが、先ほどの言も含めてルルーシユの事は、友に任せておけば大丈夫と信じさせたが故である。

そんな父親達とルルーシユの姿を、啞然として見ていた唯依だったが、少し迷った後、彼女もまた父達の後を追った。

共にゆつくりと歩いていたのか、そう時間をかける事無く廊下を渡り行く大小二つの人影に少女は追いつく。

息を乱しつつも、ホツとして声を掛けようとするが、風に乗って聞こえてきたルルーシユの声が、少女の喉を凍りつかせた。

「……瑞鶴ではBETAに勝てない。」

いや、現行の戦術機の性能では、どこの国の機体でも不可能。

ならば、今は少しでも刃を研ぎ澄ますべき時、その為なら国の垣根に囚われるべきではない。

「……そう、お考えなのではないですか？」

尊敬する父の功績を、真っ向から否定するかのようなルルーシユ

の発言に、唯依はショックを受けて棒立ちになる。

対して、言われた当人はと言えば、ひどく落ち着いた口調で、不敵な批判者に問い返すのだった。

「何故、そう思うのかね？」

「私も、あの場でそう考えたからです」

「……そうか」

微かな溜息と共に、篁は頷いた。

その顔には、ルルーシユの問いを肯定する色が浮かんでいる。

自身の予測が当たっていた事を誇るでもなく、嵩に掛かる訳でもなく、淡々とした様子で、ルルーシユは自身の見立てを説き続けた。

「純国産戦術機の開発が必要なのは確かでしょうが、現在の帝国には、それを成し得る技術が無い。

瑞鶴とて、あくまでも国産改造機に過ぎない以上、今は可能な限り外国から技術を吸収すべき段階にある筈です」

「その通りだ」

『父様！？』

思わぬ父の肯定に、唯依は息を呑む。

米国の最新鋭機を撃破した事で、多くの人から賞賛された父達。

そうやって父を褒める人達の大半が、口を揃えて言うのは、『もはや米国に学ぶ事など無い』の一言だった。

そして唯依も、知らず知らずの内にはあるが、その考えに染まっていた。

父様や巖谷のおじ様が居れば、米国に頼る必要など無い、と。

だが、当の本人がそれを否定した。これ以上無いほど明確に。

唯依には、何がなんだかさっぱり分からなくなってしまった。

足元が、グラグラと揺れているような錯覚すら覚える中、聴覚のみが鋭敏になっていく。

そんな娘の混乱ぶりを知らぬ父は、小さく深く嘆息すると胸の内にわだかまる本音を吐露した。

「私自身、唯依が産まれる前には、米国に留学し戦術機について必死に学んでいたものだ。

だが、今回の一件で、もはや米国に学ぶ必要は無いと言い出す連中が増えてしまった」

この傾向を深く憂慮したのは、皮肉にも彼らに外国否定の根拠を与えた自分達のみ。

国粹主義・国産主義を全否定するつもりはサラサラ無いが、異なる思想・発想を完全に排除しかねない危険性を孕んでいる以上、それには一定の制約が加わるべきだと篋自身は思っている。

これは巖谷にしても同感との事だった。

現状を正しく知り、正しく理解しているが故の合意であったが、そんな自分達が、事もあるうに彼らの神輿として担がれそうになっているのだから世話は無い。

自嘲・自虐の溜息程度は漏れようというものだった。

そうやって持ち前の悪癖である自省に落ち込みかけた篋の鼓膜を、遠慮の欠片も無い言葉の槍が抉る。

「一方向に固定化された思考は、やがて視野狭窄を招き、結果とし

て帝国の戦術機は進化の袋小路に陥るわけですか」

「そんな事はさせんよ。」

私や巖谷の目の黒いうちはな」

冷笑すら浮かべてみせるルルーシユの舌鋒を受けながら、篁は齒を食いしばりつつ、忌むべき未来予想を否定する。

『瑞鶴』の事は仕方が無い。

何度も巖谷と話し合い、そして達した結論だ。

もし、あそこで負けていれば、国産戦術機開発の途は完全に閉ざされ、帝国は主力兵器の開発と生産という急所を米国に握られていた筈だ。

今後の帝国における政戦両略においても、それは致命的な問題となつて帝国の手足を縛り続けただろう。

だから、あそこは何としても勝たねばならない局面だった。

だが、その結果が、帝国の進路を誤らせる要因となると言つなら、それを正すのは自分達の役目であると彼らは認識している。

そして、それが途方も無い茨の道であるという事も。

「ですが、貴方達が志半ばで斃れた後は、そうなります」  
「……………」

不吉な予言に、篁の顔が強張る。

無いとは言えない。

いや、そうなる可能性が高いと、自身で認めてしまった事が彼の反論封じた。

自身と巖谷が理想とする国際共同開発による国産戦術機。

それを現実の物とするには、過激な国粹主義者と恥知らずな売国奴、その両者の間で絶妙なバランスを取りつつ、護るべき一線を死守する必要がある。

極めて危険な綱渡り、落ちれば間違いなく命が無くなる程の危険な道のりだ。

自分が斃れたなら、巖谷が夢を継いでくれる。

巖谷が斃れたなら、自分が志を継ぐだろう。

だが自分達が、共に斃れたその後は……………

帝国の未来に対する暗澹たる思いが、その胸中をゆっくりと満たしかけるが、思わぬ闖入者がソレを根底から覆す。

「私がやります!」

「唯依?」

思わぬところから、思わぬ人物が掛けた一声に、篁は驚きの声を洩らし、ルルーシユはわずかに目を見開いた。

「私が、父様や巖谷のおじ様の後をついで、立派な戦術機をつくります!」

小さなコブシを握り締めて、それでも必死な様子で言う愛娘の姿に、篁の中で生まれかけた絶望が、産まれ落ちる事無くゆっくりと溶けていく。

「そうか……………そうだな」

そう言って、誇らしげに娘の頭を撫ぜる父。  
くすぐったそうに、でも、嬉しそうに娘は目を細める。

そんな父娘の姿を見るルルーシユの眼差しにも、先ほどまでの冷  
厳さは無かった。

「……では、ここで」

そう言ってルルーシユは踵を返した。

玄関までは、まだ距離があるが、この父娘の間に水を注すのは無  
粋と感じ、立ち去ろうとする背に思わぬ声が掛かる。

「ああ、今日は有意義な話が出来た。

家も近い事だし、また遊びに来なさい」

先程、宴の場で見せていたのと同じ穏やかな笑みを浮かべながら  
告げる篋を、ルルーシユはひどく珍しい物を見たような目つきで凝  
視する。

「よろしいのですか？」

オレは、『あの』枢木ですよ」

あれだけ言いたい放題言った上に、その身は武家社会では爪弾き  
される家の出。

正直、塩ぐらいは撒かれるかと思っていたルルーシユに、篋はそ  
の予想を覆す返事を返す。

「さて、私には娘の友達に対して、閉ざす扉の持ち合わせは無いよ」

そう言って脇に立つ娘の髪を、愛しそうに撫でる。

友達認定され、若干照れながら、唯依も嬉しそうに同意した。

「また、いらして下さい」

「……………ああ、またお邪魔させていただきました」

数瞬の沈黙の後、ルルーシュは再度の来訪を約束する。

そして、更に嬉しげに笑う唯依と隣で微笑む篁に、軽く会釈して立ち去りかけるが、不意に、とある事を思いつき、二、三歩行ったところでその足が止まった。

「篁中佐」

振り返った少年の眼には、どこか歳相応にも見える悪戯っぽい光が踊っている。

「ん、何かな？」

「お嬢さんに触発された訳では無いですが、オレも、オレなりにやれる事を、やってみようと思っています。

貴方達とは、全く別のアプローチになるでしょうが、至るべき場所はきっと同じになるでしょう」

これまでとは違う面を見せるルルーシュに、興味を引かれて応じた篁に向け、ルルーシュは一個の时限爆弾を手渡した。

相変わらずの意味不明の宣言に不思議そうに首を捻る娘と、ルルーシュの底知れなさを悟ったが故、わずかに顔を引き締める父。

「では、い…ず…れ…ま…た」

彼らが、彼の残した言葉の意味を理解するには、少しだけ時間が必要だった。



縁側に腰掛け、月を見ながら昔を偲ぶ。

どこまでも思い通りに身勝手に生きてきたつもりだったが、それでも今振り返れば後悔ばかりだと彼女は思った。

あの時、ああしていれば、あの時、こうしていたなら。

昔なら、その未練がましさを鼻先でせせら笑ったであろう想いが、自身の内に息づいている事に苦々しさを覚えつつ呟く。

「……こういうのを、歳を取ったって言うのかしらね」

そう言っただけ空を見上げながら自嘲の笑みを浮かべていた真理亜だったが、その顔に浮かぶ憂いの色が不意に失せた。

縁側へと続く廊下の向こうから、微かに聞こえる足音に気付いた所為だ。

一瞬にも見たため間で、普段の様子へと戻った彼女の視線の先に一人息子の姿が浮かぶ。

「母上、ただいま戻りました」

「お帰りなさい、夕食は……食べてきたみたいね？」

「はい」

素直に頷く子供を前にし、真理亜は内心で首を傾げる。

小遣いは過不足無く与えているつもりだったが、儉約家の気がある息子が外食とは珍しい。

そんな胸中の思いが顔に出たのか、隣に座った息子は、紅蓮に吹き飛ばされた後の顛末を順を追って話し出した。

「へえ、あの瑞鶴コンビにねえ」

一通り聞き終わるとそう言って、クスクスと楽しそうに笑う。

どこへ行ったのかと思えば、思わぬ者達と知遇を得ていようとは、予想外にも程がある。

これだから人生は面白い 先ほどの憂鬱の残滓が晴れるのを感じながら、真理亜はそう思った。

そんな彼女の内心を知ってか知らずか、先ほどから庭を眺めて何かを考えていたルルーシュが口を開く。

「母上」

「なにかしら……アラ？ アアラ、怖い顔ねえ」

子供に似合わぬ醒めた表情を浮かべている事が多い我が子にしては、珍しく真剣な顔に真理亜も居住まいを正す。

正対する親子の間で、数拍の時が過ぎた。

「お願いがあります」

「……言ってみなさい」

許しを得て、滔々と語り出す。

これまで暖めてきた構想を、彼はこの夜、初めて口外した。

当初は黙って話を聞いていた真理亜も、話が進むに連れて疑問を問い、或いは、問題と思われる点を指摘する。

互いに激することは無く、だが、交わされる会話は刃の如く鋭く深かった。

やがて夜も更ける頃、ようやく親子の話し合いは終わった。

精神面は兎も角、肉体的には九歳の少年の身であるルーシユは、濃密過ぎた一日に流石に疲れは隠せぬらしく、フラフラした足取りで奥へと消えていく。

その背を見送った後、再び真理亜は空を見上げた。

既にして、月は中天を過ぎ、西へと傾きつつある。

だが、それを見る彼女の顔は、数時間前とはうって変わった生氣溢れるものだった。

「なんともはや、我が子ながら、恐ろしいというべきか、頼もしいと思うべきか……………」

未だ尚、若々しさを失わぬ美貌に、心底、楽しげな表情を浮かべて彼女は独白する。

空の月を見つめる瞳が、その視線がわずかに変わった。

月を通り過ぎ、それよりも更に先へ、もっと遠くへ、ここではないどこかを見つめるように。

「……………貴女は、どう思っていたのかしらね？……………ねえ、『マリアンヌ』……………」

最後の眩きは、誰の耳にも届く事無く、夜空へと消えていった。

西曆一九八八年 一月

民需主体で業績を伸ばしていた枢木工業が、突如として戦術機用新型OS『RTOS-88 (Revolutionary Tactical surface fighter Operating System type-88)』を発表。

この新型OSは、従来型OSの機能を整理・統合する事でOS自体のスリム化・高速化を実現し、空いた分のリソースを利用して行われる見かけ上の並列処理により動作間の硬直時間を従来の二割程度に押さえ込む事に成功する。

また機体の自律制御自体は残されたが、各タスクの優先順位の付け替えとイベント割り込みによる処理の中断・切り替えを組み込み、自律制御中の操作不可という従来型OSの欠点を解消するなど、主としてレスポンスの改善と操作性の大幅な向上がウリとなっていた。

当初は、技術廠の肝煎りで帝国軍にだけ納められたこのOSは、その性能と扱いやすさから直ぐに斯衛軍にも納入される事となり、やがて世界へも広がっていく事となる。

数年後には、ほぼ世界シェアの七割以上を占める事となったこの『RTOS-88』は、単に優秀なOSというだけに留まらず、ハードウェアの付属品に過ぎなかつた従来のOSの概念を塗り替え、

ソフトウェアによる戦術機の性能向上という新たな可能性を世界に示したとして高く評価される事になるのだった。

PHASE 1 …小さな魔王と幼い迷子（後書き）

唯依姫幼女バージョンでした。

イメージ的には、2、3頭身のデフォルメルキャラが、ちょこちょこ動いているのを想像してみてください（そうやって書きましたから）

文中で巖谷氏の階級が、大尉と少佐の二つになっていますが、これはイーグルに勝った時点で大尉（公式設定です）。

で、その功績で昇進したろうなという事で、現在は少佐（こちらは妄想です）になっております。

閑話 ・ 篁唯依の日記（西暦一九八七年七月）（前書き）

本編を今日中に上げたかっただのですが、ちょっと無理っぽいので場  
つなぎを。

何となく思いついて1時間ほどで書き上げた駄文ですが、まあ暇つ  
ぶしがてら後一読してもらえるとうれしいですね。

では、副題「巖谷さんは、こうして柩木が苦手になった」逝きます。

閑話　：　篁唯依の日記　西暦一九八七年七月

西暦一九八七年七月一日

きょう父さまから、日記ちょうをもらいました。

ていとへかえってきたのがよいきかいとので、日記をつけて  
みたらどうかとすすめられました。

はじめての日記、とてもたのしみです。

西暦一九八七年七月三日

きょうていにもどって初めてのお友だちができました。

くるるぎるるーしゅさまというとてもきれいでやさしいかたです。  
唯依より四つとしうえの男のひとで、父さまはとても頭のよい方  
だとほめていました。

もし、唯依に兄上がいたら、こんな方だったらよかったなとおも  
いました。

西暦一九八七年七月七日

きょうは七夕でした。



七夕のおまつりにまねかれて、はじめてくるるぎさまのお家をたずねました。

くるるぎさまの母うえは、まりあさまといいとてもきれいな方でした。

でも、あとで父さまにおききしたところ、このえぐんのなかでもさいきょうといわれるぐれんしょうしょうのぶかをつとめていた方で、じつりよくだけならぐれんしょうしょういじょうにつよい方だとおききました。

すごい方なのだなとおもいました。

おまつりは、ささのはにたんざくをつけて、おいしいごちそうをたべて、たのしくすごせました。

父さまといっしょに家にかえつてくると、おおきなさをかかえたいわやのおじさまがものところでしょうんぼりしていました。

せつかくなので、おじさまのささにもたんざくをつけると、おじさまはとてもよろこんでくれました。

そのあと、父さまとおはなしがあるからといってどこかにいってしまいました。

父さまは、なぜかひきつったかおをしていましたが、あれはなんだったのでしょうか？

しばらくまってもかえってこなかったので、唯依はねむくなつてしまいました。

おやすみなさい父さま。

西暦一九八七年七月八日

きょう、あさおきると父さまがあおいかおしてしょくたくについていました。

おさけのおいもつよかったので、どうしたのかときいてみると、あけがたちかくまでいわやのおじさまとおさけをのんでいたそうです。

ほんとうにこまった父さまです。

おさけはひやくやくの長といわれますが、すごせばどくにしかありません。

そのことをいうと、父さまもわかってくれたらしく、これからはひかえると約束してくれました。

ほんとうによかったです。

あ、あとでいわやのおじさまにも、いっておかなければいけませんね。

ほんとうにこまったひとたちです。

西暦一九八七年七月二十三日

ていとのなつは、とてもあついです。

ちけいのかんけいで、かぜがとりにくいためだと、るるーしゅさまがおしえてくださいました。

うまれてはじめてすごすていとのなつは、唯依にはすこしこたえました。

にっちゅうぐったりしているとしんぱいしてくれたまりあおばさ

まが、かわどこにつれていってくれました。

かわのうえにもつけられたざしきで、ひえたおりょうりをいただくとてもすずしくおいしくいただけました。

そうすずしかったから、しょくがすすんだだけです。

唯依は、くいしんぼうではありません、わらわないでくださいるーしゅさま。

そうやってたのしくすごしたのち、いえにもどるといわやのおじさまがおおきなすいかをもってあそびにこられました。

いどでひやしたすいかをおいしくいただいていると、おじさまがすこしはすずしくなったかときいてこられました。

たしかにすずしくなったのですが、かわどこのほうがすずしかったので、そのことをいうとおじさまはうつむいてしまいました。

そのまま『かわどこ……んと、かわどこ……』とぶつぶついっていました。

もしかして、おじさまもかわどこにきたかったのでしょうか？  
でも、おじさまもりっぱなていこくくんしょうさです。

いくらくるるぎのおうちが、おかねもちだといっても、おじって  
もらうのはどうかとおもいます。

それをそのままいうと、なぜかおじさまは、なきながらかえって  
しまいました。

やはりはずかしかったのでしょうか？

でも、おじさまのめいよをまもるためにもしかたのないことだったとおもいます。

西曆一九八七年七月二十四日

きのうのことを、るーしゅさまにはなすと、すこしまったよ  
うに笑いながら、そういうときあいてをおもいやれるのがくつきが  
よめるということだとおしえてくれました。

唯依は、くつきのよめないこなのかとおききすると、だまってく  
びをふりあたまをなでてくれました。

けつきよく、唯依がくつきをよめるのかどうかはおしえてもらえ  
ませんでした。

けつして、あたまをなでられるのがきもちよくて、きくのをわす  
れてしまったわけではありませんよ。

閑話　・簗唯依の日記（西暦一九八七年七月）（後書き）

どうもです。

五歳の日記という事で、ひらがなメインでやってみました。

でも、もつちよっと漢字を入れても良かったかな

PHASE 2 ・今はまだ平穏な日々〜そして、嵐の予兆（前書き）

今回のお話は、どちらかというところ閑話に近いかな。

まあ、シリアス分は少ないので、気を緩めてどうぞ。

PHASE 2

・今はまだ平穏な日々々々そして、嵐の予兆

西暦一九八八年三月十三日 静岡県御殿場市・東富士演習場  
内帝国軍技術廠戦術機試験場

試験場の管制室内で、追加評価試験の実施を見守っていた篁は、  
本日の予定項目の消化が完了した所で巖谷へと声を掛けた。

「全項目クリア。」

「よし、巖谷上がってくれ」  
『おう分かった』

モニター内に映る精悍な顔が、ホツとしたように緩む。

当初予定外の任務をこなし、やや疲れを滲ませた親友に篁も済ま  
なそうに目線で詫びた。

地響きを立てながらハンガーへと向かう瑞鶴が、徐々にこちらへ  
と近づいてくる。

第一世代戦術機である撃震をベースとしつつ、近接格闘戦能力の  
向上が図られたその機体は、重装甲による高防御をコンセプトとす

る撃震とは一線を画す鋭角的なフォルムに仕上がっていた。

完成した試作機を見た斯衛軍高級将校が、『まるで折鶴のように端正だ』と見惚れたシャープな機体は、その外観を裏切らぬ滑らかな機動を見せているが、これが一年前のソレとは雲泥の差があると知る者は未だ少数派に含まれる。

R T O S - 8 8 ( R e v o l u t i o n a r y T a c t  
i c a l s u r f a c e f i g h t e r O p e r a t i n g  
S y s t e m t y p e - 8 8 )

それが、瑞鶴を産まれ変らせた物の正体であった。

今年に入って早々、枢木工業が発表したこの新型OSが、当初は殆ど見向きもされなかったという事実が、今となつては信じられない程である。

紅蓮少将の口添えと個人的に知己を得た篁と巖谷の協力が無ければ、あるいは時の流れに埋もれていった可能性も否定できないこのOSは、現在は帝国軍・斯衛軍問わず軍関係者の注目の的となつていた。

当初、帝国軍主力戦術機である撃震に試験的に導入され評価を受けたこのOSは、大半の者の予想を裏切る圧倒的な高評価を獲得し、今年二月には限定的な導入から全面的な採用へと切り替えられている。

現在は、同地の富士教導隊にてより効果的な運用法の研究と、各部隊への導入の為の教導マニュアルの整備が急ピッチで進められていた。

この現状を受け、流石に枢木嫌いの城内省も無関心では居られなかった様である。

何とかその成果を否定しなかったのか、今年二月二十日に帝都郊



外にて行われた合同演習においてRTOS - 88搭載型の撃震と瑞鶴の模擬戦を強引に実施するも、これに物の見事に完敗を喫してしまった。

この結果を受け、中堅層の斯衛軍士官達より出された瑞鶴へのRTOS - 88採用要求に上層部は大きく面目を損ないつつも、応じざるを得ない状況に追い込まれてしまい、技術廠に対して瑞鶴へのRTOS - 88搭載及び評価試験の依頼を出す破目になったのである。

一方、依頼を受けた技術廠としては、技術ではなく意地の領域で問題発生が懸念されるこの事態に困惑した挙句、OS採用に到る発端の一角であり、同時に『瑞鶴コンビ』として今や帝国内に知らぬ者なき名声を得た篁中佐と巖谷少佐にその任を丸投げする事で事態の收拾を図った。

まあ、ぶつちやけて言えば、城内省に対しては瑞鶴の英雄達が評価したという実績を楯にして押し切り、篁らに対しては厄介事を持ち込んだ責任を取って貰おうという訳である。

状況の推移をリアルタイムで見ていた篁と巖谷にもその辺りは分かっていたのか、苦笑いしながら瑞鶴へのRTOS - 88搭載及び評価試験の任務を拝命し、この地にやって来てから早くも三週間近い時が過ぎていた。

篁は、本日の評価試験結果の整理をスタッフに命じると、自身も手早く日報の作成に入る。

室内にキーを打つ音が満ちる中、強化装備のまま巖谷が管制室へと戻ってきた。

軽く挨拶を交し合うと、篁の側から水を向ける。

「どつだ、瑞鶴の調子は？」

「ああ、相変わらず上々だな。  
正直コイツなら、イーグル相手でも小細工無しで勝てるぞ」

疲れた様子を見せつつも、機体の調子には十分な手ごたえを得ていた巖谷は上機嫌で答えた。

誰もが賞賛する一昨年の矢臼別での勝利も、巖谷の認識では相手イーグルの衛士が凄腕であったからこそ拾えた勝ちという認識に過ぎない。

どんな形であれ勝利は勝利と割り切れる程度には大人であったが、やはり一人の衛士としては凄腕だからこそ正面から打ち破りたいという欲求は少なからずあったのだ。

今、それを可能とし得る機体に生まれ変わった瑞鶴を得て、燻っていた血が滾るのを抑え切れない気分が巖谷の内で渦巻いている。

そんな親友の胸中は、篋にも痛いほど伝わっていた。

彼とて斯衛軍高級技術将校の身ではあるが、衛士としても充分過ぎるほどの技量を持っている。

機体のポテンシャルを十二分に引き出してくれるこのOSの威力も、それを得た友の思いも、分からぬ筈が無かった。

だがしかし、である。

巖谷が忘れていている事実を指摘する程度には、彼は冷静だった。

「そうか……だが、その時は、向こうも同じRTOS - 88に載せ変えているぞ」

あくまでもOSの差が前提であるというなら、同じOSに載せ変えてその差を埋められてしまえば元の木阿弥になるだけだ。

それでも勝てるかと問う篋を前に、少しはクールダウンした巖谷が首を捻る。

「……まだ、海外には出回っていない筈だが？」

「米国とEUでの特許は取得済みで、アフリカ、中東、オセアニア、南米も審査完了だそうだ」

「オイオイ……」

枢木の動きの早さに巖谷は啞然とするが、そこでふと考え直す。

元々の帝国内での評価の低さからみて、初めから帝国内での販売に見切りをつけ、海外に売り込むつもりだった可能性に気付いたのだ。

巖谷の背筋を、一筋の冷たい汗が流れる。

この技術が日本から流出し、外国の物となって自身の前に現れたかもしれない可能性に、彼はゾツとしながら気にすべき事を問う

「アジアは、まだなのか？」

それにソ連は、どうなんだ」

やはり帝国の周辺国家の動向は外せない。

特にソ連、中国、そして半島の二国は、帝国とは様々な因縁のある相手であり、対BETAの協力体制は取りつつも、決して安心して背中を預けられない相手というのが軍人としての常識であった。

「ソ連については梨の礫。

上っ面を差し替えたソ連製を出す気満々だな。

……アジアの方は、東アジアの三ヶ国を除いて、ほぼ完了だそうだ」

篁の顔になんとも表現し難い色が滲む。

それだけで巖谷にも、彼に情報を伝えたであろう人物の心中が、

わずかながら伝わった。

「あ……怒ってたか？」

「予想の範囲内だと言っていた。

……目が全然笑ってなかったがね」

アレは、絶対にタダで済ます気の無い眼だった　胸中で、そう思いつつ答える。

この時の篁の印象が正しかった事は、後年、証明される事となる。これ以後も、枢木工業がヒット商品を出す度、劣化コピー品や海賊版を出して市場を荒らしたかの国々は、血圧を上げまくったルルーシユの怒りを買い、かなり悪辣なやり口で報復される事になるのだが、それはまだ未来さきの話であった。

「しかし、廉価なコピー品とかが出回ると困るんじゃないのか？」

「その辺は対策済みだそうだ。

最低でも向こう三年間は、絶対にプロテクトは破れないと豪語していたよ」

触らぬ神に祟り無しとばかりに、その辺りをさり気なくスルーした巖谷に、篁も苦笑しながら応じる。

要は、不正コピー品が出回る前に、圧倒的なシェアを確保してしまえばいいとの目論見である。

民生品以上に軍用品は、信頼性と実績が重視されるものだ。

幾ら安価とは言え、後から出てきた信頼性の欠片も無い不正コピー品に、己が命を預ける考え無しなど極少数に限られるとの判断は正しい。

ましてや部下に使う事を強要しようものなら、最悪、背中から撃

たれる程度の覚悟は必要だろう。

自殺志願者でもない限り、誰も犬死などしたくないのだ。

「それはそれは……彼が、そう言うならそうなんだろうが、表面的な機能だけ似せた贗物までは、どうにもならんだろ」

「『贗物と分かっていて使う奴、使わせる奴の面倒までみれるか』  
だそうだ」

ルルーシュの口調を真似た篁の一言に、巖谷の頬が盛大に引き攣った。

馬鹿はさつさと死ねと言わんばかりの苛烈さは、とても年齢相応とは思えない。

「相変わらず辛辣だな。

本当に九歳か、彼は？」

「……戸籍上は、その筈だな」

引きつり笑いを見合わせる大人達。

本当にアレは九歳かと、疑っている親友がそこに居た。

だが、誰がどう調べようが、枢木ルルーシュが戸籍年齢九歳であるという事実は覆らない。

それまで誰も考え付かなかった新機軸のOSを生み出そうが、会社経営に参画していようが、それは否定されることは無いのだ。

病とは異なる頭痛を感じた篁らは、阿吽の呼吸と言うべきか、癒しを求めて話題を転換しようとする。

そうなるに彼らにとっての心のオアシスが、話題となるのは必然だったのだが……

「……そういえば、唯依ちゃんは柩木に預けてきたんだっとな」  
「ああ、そういう意味でも、彼らには世話になっているなあ」  
「そうだな……」

何となくいつの間にか取り込まれ、頭が上がらなくなっている現  
状に繋ぐべき言葉を見失う。

それに反発を覚えるどころか、納得してしまっている自身が居る  
事に、何とも妙な気分になりながら篋と巖谷の間に沈黙が落ちた。

初春の風が吹く柩木邸の庭で、木と木が打ち合う音が間断なく続  
く。

攻めるは一刀、防ぐは二刀。

本来なら、護る側が手数で勝る筈なのだが……

「ほら、ほら。」

遅い、遅い、遅いわよっ！

笑いながら左手で振るわれる小太刀の速さは、まさに神速そのも  
の。

受ける少年の眼には、一本の筈のそれが何本にも視えていた。

双刀をもつてしても防ぐのに精一杯、いや、辛うじて防ぎ切れる  
程度に手加減されている。

ソレを悟ったルルーシュの口元で、歯軋りの音が鳴った。

「ハッ、ハッ……ハアッ！」

屈辱をバネに防御を捨てた相打ち狙いの一閃を放つ。

踏み込み、速さ、刃筋共に、今の自身が放てるであろう最高の一撃。

だが、彼をして、そう断言させる程の渾身の一撃も、目の前の女傑を捕らえる事は叶わない。

「うーん……ダメ」

空を斬った一閃と視界から消え失せた母の姿に、一瞬、硬直したルルーシユの鼓膜を楽しそうな声が叩く。

左手から聞こえたソレに、慌てて反応した少年の視界で『光』が閃いた。

ただ一呼吸の間で七度。

放たれた斬撃に全身を滅多打ちにされたルルーシユの身体が、青々とした芝の上に沈む。

それを見下ろす真理亜の呼吸には、わずかな揺らぎも無く、その瞳は満足そうに微笑んでいた。

そのまま地面に突っ伏す息子の頭を、木刀で軽く弄りつつ腕時計に眼をやる。

残念ながら（主観的に）楽しい触れ合いの時間が終わった事に、内心で不満を呟きつつ、まだノビたフリをしている息子に声を掛ける。

「そろそろ時間かしらねえ。

じゃ、今日の稽古はここまで」

「……ハアッ……ハッ、ハッ……」

拷問終了のお知らせに、息を乱しつつも顔を上げるルルーシユ。  
その様子に、少しだけ眉を潜めた母親は、とんでもない事を呟いた。

「もうちよつとスタミナも付くメニューを、追加すべきかしら？」  
「……こ、殺す気ですか……」

魂の奥底から搾り出されたような悲痛な呻きが、造作の良い唇からこぼれ落ちた。

対して、不可視の爆弾を落とした張本人は、抜け抜けと言いつつ返す。

「いやあくねえ、人聞きの悪い。」

「じゃあ、お母様は、お仕事だから」

そう言い残すと、縁側にちょこんと座っている見学者へ軽く手を振ってから、鼻歌交じりで去っていく。

息一つ乱した素振りも見せぬその姿に、登るべき頂の高さをひしひしと感じたルルーシユは眩暈にも似た感覚を覚えながら、最後の力を振り絞って立ち上がった。

膝が笑っている。

呼吸が早く、心臓の音がバクバクと耳に木霊した。

本音を言えば、このままここでへたつてしまいたい。

そう思いながらも、ヨロヨロとした足取りで縁側へと向かう。

たとえ痩せ我慢とバレバレであっても、貫かねばならぬ矜持があったから。

そのまま酔っ払いの千鳥足の様にヨロけつつも、何とか縁側まで



辿り着いたルルーシユは、オロオロしながら待っていた意地を見せねばならぬ相手　　篁唯依の横手にゆっくりと腰を下ろした。

自身の激しい呼吸音に満ちた聴覚に、心配そうな少女の声が割り込んでくる。

「大丈夫ですか、ルル兄様？」

「すま…ハア…んな唯依…ハツ、ハア…心…配を掛…ける」

些細な出来事で出会ってから早数ヶ月。

互いの間で結ばれたささやかな縁は、途切れる事無く今日まで続き、今では親しげに呼び合う程度には太くなっていた。

もともと『ルルーシユ』の発音は、まだ少女には難しいらしく、二回に一回は舌を噛み続けた結果、いつしか彼の名前は省略され、代わりに妙な敬称が付く様になったのはご愛嬌というべきか。

ともあれ、その重責上、泊りがけでの仕事も少なくなない篁中佐から、不在時に唯依を預かるようになってから既に半年近い。

今ではこうやって、ここに居るのにまるで違和感も無くなっているが、やはり稽古というには苛烈に過ぎる真理亜の鍛錬には、まだ慣れることが出来ないらしく、心配そうにルルーシユを気遣う顔色はあまりよろしくなかった。

「どうぞ横になってください」

そう言って、自分が座っていた座布団を折り、ルルーシユの脇へ置く。

少年の端整な横顔に、羞恥の朱が走るが、それでも既に限界に達していたのか、大人しく即席の枕に頭を乗せて横になった。

「……面目無い」

「真理亜おば様が、強過ぎるだけです。  
ルル兄様が、恥じる事など何もありません！」

そう言いながら用意してあった濡れた手拭で、甲斐甲斐しく汗を拭う。

そんな年下の少女の配慮に自身の不甲斐なさを感じながらも、ありがたく世話を受け入れるのがルルーシュにとっても恒例となっていた。

正直、腕を上げるだけでも億劫で、身動きする事すら出来そうに無い。

小さな手で、一生懸命汗を拭ってくれる唯依に感謝しつつ、溜息まじりに呟いた。

「確かに……アレは規格外だ。

人型宇宙怪獣

紅蓮閣下が、勝率五割を切っていたというのも頷ける」

何でオレの周りには人類の規格外品ばかりが集まるのかと、本気で頭を捻りたくなったルルーシュの頬を、優しい風が撫ぜる。

その風に誘われて動いた視線の先には、手にした団扇でルルーシュを扇ぐ唯依が居た。

紫の視線と紫の視線が絡み合い、唯依がはにかむ様に眼を伏せる。  
ルルーシュの口元が、わずかに綻んだ。

そのまま何もいう事は無く、縁側に佇む二人。

黒い髪、紫の瞳 同じ色を備えた少年と少女は、そうしていると仲の良い兄妹にも見える。

やがて緩やかな風に、ルルーシュは眠気を誘われ出した。

ウトウトとしかけたその時、不意に躊躇いを帯びた気弱な声が届く。

「……………ルル兄様だって、充分お強いです。」

それに比べて唯依は、まだ木刀も振らせてもらえませんか」

兄と慕う少年と我が身を引き比べたのか、唯依はシュンといった様子で落ち込んでいた。

この辺りは、父親譲りの自省癖が出たのか、やや暗い表情で俯く仕草に、飛びかけていたルルーシュの意識が即効で覚醒する。

枢木家の鍛錬に刺激を受けたのか、以前から父親に本格的な剣の修行をせがんで、まだ早いと言われて落ち込んでいた事を思い出したルルーシュは、困ったような表情を浮かべつつ、唯依をたしなめた。

「小さい内から過剰な鍛錬を積むと、余分についた筋肉が骨格の正常な成長を阻害する。」

篁中佐は、その辺りも充分に考えていると思うが……………唯依は、父上の事が信じられないのか？」

唯依の顔に不満そうな色が浮かんだ。

少女の眼から見れば、あれだけ過酷な鍛錬を積んでいる当の本人が何を言うのかという気分だったのだろう。

それでも、父を否定することなど出来ない少女の反応は、自ずから決まっていた。

「そんな事は、ありません！」

「なら、何も問題無いじゃないか」

打てば響くように返ってきた反応に、ルルーシュは苦笑しながら止めを刺す。

ウツとばかりに硬直した唯依は、数拍後、搾り出すような声で咳いた。

「……………ズルイです」

尊敬する父を否定する事など出来ないのを承知の上で、言い包めて来るルルーシュに唯依は恨めしそうな視線を投げた。

そのままプニプニとした頬を膨らませ、全身で『私怒ってます』と主張する妹分に対し、ルルーシュは苦笑しながら考え違いを説く。自身が受けている鍛錬も、その辺りは充分考慮されているのだと。基本的には速さ重視の鍛錬で、動体視力、反射速度の向上こそが主眼であり、逆に筋肉は極力つけないように配慮されている事を、こんこんと説明する。

まあ、あのブツ飛んだ母親基準であるから、どこまで本当か非常に疑問ではあったが、その辺りはこじれる元なので口にはしない程度の分別はルルーシュにもあった。

そんな配慮と努力の結果、当初は胡散臭そうにしていた唯依だったが、順序立てて説明していく事で、やがて納得してくれる。

とはいえ、怒りがそれで完全に収まった訳でもないらしい。未だにジト目で見てくる唯依に、さてどうやってご機嫌を取ったものかとルルーシュは思案し、キツチリ一分間考え込んだ少年は、見出した解答を実行すべく、疲れた身体に鞭打って立ち上がると奥へと入っていった。

この唐突なルルーシュの行動に、一瞬どうすべきかを悩んだ唯依であったが、結局は、その後をいつもの様にトコトコついていく。

やがて両者は目的地につき、その三十分後には、唯依の機嫌もよ

うやく直った。

それがルルーシユお手製の餡蜜を、三杯完食した後の事だったのは、乙女の名誉を守る為、二人だけの秘密となったのである。

風雲急を告げる　という程でもないが、この日、帝都城では小さな嵐が巻き起こっていた。

異様にザワつく会議室内に、淡々とした　風に装った男の声が木霊する。

「　当初予定の試験項目では、ほぼこちらの予想以上の成果を挙げております。

また、城内省からの要望により急遽追加された項目は現在評価中ですが、こちらに関しても今のところ目立った問題等は発生しておりません」

男　帝国軍技術廠第壹開発局部長の報告に、室内のざわめきが一際大きくなった。

それを受けて上座に居た城内省の高官の一人が、苦虫を噛み潰した様な表情のまま忌々しそうに口を開く。

「……つまり、何が言いたいのだ」

「技術廠としましては、瑞鶴へのRTOS・88搭載により、安価で確実な戦力増強が見込めるものと考えております」

意味無く威圧してくる相手に対し、流石に腹に据えかねたのか開き直って断言する部長の声を切っ掛けに、ざわめきはその領域を越え討論へと発展する。

枢木に対する誹謗中傷と新OS採用を主張する声が、会議室内の各所でぶつかり弾け、やがて一定の流れへと向かい始めた。

くだんの高官とその取り巻き達の意に沿わぬ方向へである。

男の緩んだ頬が、ヒクヒクと痙攣し出した。

「たかがOSごときを交換しただけで、それ程の効果が本当に望めるのかね？」

ましてや、あの枢木の製品だぞ 到底、信じられんな！」

不愉快極まりないといった口調で吐き捨てる高官に、取り巻きの斯衛軍将校が追従する。

「そうだ、武家でありながら、下賤な商人の真似事をするような恥知らずなど信用できるか！」

一部で賛同の声が巻き起こるが、それは決して大きな物ではなかった。

それどころか、オブザーバーとして参加していた軍需産業の面々が、時代錯誤な発言に一樣に渋い顔をする。

流れが傾きつつある場の雰囲気を読んだのか、面倒ことはサツサと終わりにしたい部長は、宥めるような口調でダメ押しを図った。

「しかし、今回の試験にあたっていているのは、瑞鶴の開発を行った篁中佐と巖谷少佐ですし……」

切られたカードは、帝国の英雄。

瑞鶴の産みの親とも言える両者の評価に、まさかケチはつけまいとの思惑は、だが予想外の反応で報われる。

「フン、信じられるものか！」

篁は最近、枢木と深い付き合いがあると云うではないか、大方、あの女狐に誑かされたのだろう」

「そうですね、篁中佐も細君を亡くしてから、結構経ちますからな」

もはや完全に依怙地になったのか、予想に反して英雄すら罵倒し出す始末。

更に追従者が、火に油を注いでのける。

悪意に塗れた含み笑いに、周囲の者達が眉を顰めたその時、雷鳴の如き一喝が室内に轟いた。

「下種が！」

「なっ、なんと言われた紅蓮少将！」

「下種を下種と言った。」

聞こえぬと言つなら、もう一度言つてやろうか？」

犬歯を剥きだした獰猛な笑いを見せる紅蓮に、一瞬、腰が引けるが、それでも怒りが勝つたのか反枢木の高官が食って掛かる。

「ぶ、無礼　ッ!？」

怒声が途中で凍りつく。

肉食獣、いや肉食恐竜めいた紅蓮の一睨みが、男の心臓を鷲掴みにしていた。

暴力的なまでの威圧感を前にし、一様に脂汗を流して押し黙る反枢木一派へ紅蓮の怒声が襲い掛かる。

「そもそも、この追加試験自体、貴様等の言い掛かりが元であろうが！」

そこまでやって尚、何の問題も無いとの結果がでた以上、正式に採用されてしかるべきではないか」

正論であった。珍しい事に。

無理が通れば道理引つ込むを地で行くあの紅蓮閣下が　と感動か、意外感か、良く分からない感覚を覚える一堂を他所に、一気に崖っぷちへと追い込まれた面々が、しどろもどろに言い返す。

「しかし、あの枢木の　」

「枢木、枢木と、いい加減、喧しいわ！」

どこの物であれ、正規の手続きを経て、斯衛の戦力強化に繋がると判断されたなら採用するのが筋であろう。

それでも文句があるというなら、これ以上の物を持ってきてからモノを言えっ！」

それが止めの一撃だった。

そんな都合の良い物がある筈も無く、反対派は沈黙を余儀なくされ、会議はそのまま決を採る流れに入る。

結果については、もはや言うまでもなかった。

こうして一部に根強い反発を残しつつも、RTOS - 88は斯衛軍にも採用される運びとなる。

そして物でしかない製品が嘘をつけない以上、使っていく内に否応なしに上がっていく評判に反枢木の面々は苦虫を噛む事になるのだった。



「しっかし、結局、唯依ちゃんの誕生日には、間に合わなかったなあ」

本日の試験結果の取りまとめに勤しむ篁の傍らで、軍服に着替えた巖谷が仕事を手伝いながら残念そうに呟いた。

親友の愛娘であり、自身にとっても娘の様に思っている少女の誕生日を、祝ってやれなかった事を素直に嘆く。

「まあ仕方あるまい。」

唯依も、その辺は分かってくれるさ」

「物分りが良過ぎるのも良し悪しだぞ。」

子供は、多少、我俣を言うくらいが丁度いい」

肩をすくめて諦めの言葉を口にする篁に、巖谷はしたり顔で意見する。

この歳まで独身貴族を謳歌している親友から、子育て論を聞かされた一児の父は、苦笑まじりに切り返した。

「未だに独り身の貴様にだけは言われたくないが、まあ、確かにそうだな」

「貴様だって男やもめだろうが……ああそつだ、少し気をつけた方がいいぞ篁」

途中まで砕けた感じの巖谷の声が、後半、わずかに陰しくなる。そこに見過ごせない匂いを感じた篁は、眉を顰めて問い返した。

「?……何のことだ?」

「お前と唯依ちゃん、枢木に出入りしている事で、色々と陰口を叩く連中が増えてきてるんだよ」

篁の表情が渋くなる。

「……人様に後ろ指さされる様な関係ではないのだがな」

「そんな事は、皆分かってるさ。」

ただ枢木には敵が多い。

奴等に見れば、帝国の英雄と懇意にしているのが気に食わないんだろ」

馬鹿ばかりさと不愉快さが、半々といった口調で巖谷が吐き捨てた。

この手の陰険なやり口は、彼の気性からすれば不快感を煽るだけなのだろう。

ましてや、それが親友に対する根も葉もない誹謗ともなれば、不快指数の上昇速度は倍付け確定だった。

そんな友人の胸中を慮りつつ、篁も難しい顔をして呟く。

「まあ、分からん話でも無い。」

……だが、唯依の事を考えるとな」

仕事仕事で寂しい思いをさせている娘の事を思い、フウツと溜息をつく。

それに連動するかのよう、巖谷の眉も八の字を描いた。

「随分と懐いているそうだな。」

やはり、母親が恋しいのか?」

篁の頬が、わずかに緩む。

物心つく前に母を亡くした娘が、柩木に母親の面影を見ているのは確かだが、それだけでも無い事を彼は知っていた。

「優しくて綺麗な兄上も、だな。

それに、こう言つては何だが、私が家を空ける際には、あちらに居てもらつた方が安心できる」

『兄上』のくだりで、一瞬だけ不満げな色を浮かべた巖谷に、内心で突つ込みたくなる思いを噛み殺し、もう一つの理由を口にする。そんな親友に対し、不承不承といった様子で巖谷も同意した。

「まあ『閃光』殿に正面切つて喧嘩を売れるような非常識人は、帝国内では紅蓮閣下くらいのもものだからな」

ルルーシュに唯依の関心を取られてしまい、ちよっぴり不満を感じつつも、まずは愛娘の安全第一と涙を呑んで納得してみせる。

だが、そんな男の涙ぐましい努力に対し、彼の親友たる唯依の実父は、苦い顔で首を横に振った。

「外だけではない。内もだ」

精悍な面に、心底、苦々しそうな色が浮かんだ。

「分家から男子を養子に取れ、あるいは、唯依ちゃんいいなずけの許婚いいなずけにしろ  
だつたか、ふざけた事を言いやがる！」

現状、お家騒動という程ではないが、現当主の一粒種が娘であると言つ事で、篁家の内情はやや不安定になっていた。

男尊女卑の風潮が、未だ拭いきれていない武家社会においては、暗黙的なものではあるが、家を継ぐのは男という空気が根強く残っている。

それに乗じる形で、篁の分家から自分達の息子や弟を本家の養子に、あるいは唯依の許婚にとの話が、ひっきりなしに持ち込まれていたのだ。

その事を、親友から愚痴られていた巖谷は、唯依の人格を完全に無視した分家の思惑に激しく憤る。

一方、そうやって険しい顔をして怒りを露にする友に、篁は水口苦い顔のまま嘆息混じりにこぼした。

「篁の家の存続の為という大義名分があるからな、そうそう簡単には引き下がらんさ。」

とはいえ、最近は唯依にまで面と向かって言うようになりだしただからな……私を睨むな巖谷」

凄まじい目つきで己を睨む親友を、宥めるように付け足す。

「……まさかとは思うが、好き放題言わせてる訳じゃあるまいな？」  
「当たり前だ！」

次の当主は唯依で、意に添わぬ婚約もさせんと、それこそ耳に夕コが出来るほどな」

疑い混じりの巖谷の問いに、心外とばかりに篁も口調を荒げる。

どちらも可愛くて可愛くて仕方がない愛娘の将来が懸かっている為か、やや常とは異なり冷静さを欠いているようだった。

だが、やがてそれに気付いたのか、互いに顔を見合わせると示し合わせたかのように、一つ深い息を吸い体内の余熱と共に吐き出し

た二人は、やや無然とした様子で会話を続ける。

「それでも、諦めんか……」

「ああ……だからな、私が居ない時は、枢木に預かって貰うのが、一番安心なのだよ」

無論、篋くらいの家なら、少なからぬ数の使用人が屋敷内に居るのだが、それらが分家の者に対して強く出るのは難しい。

どうしても気後れしてしまい、押し切られる可能性が高かったのだ。

その点、枢木ならば、そういった心配をする必要も無い。

もし分家連中が血迷って押しかけたとしても、その非礼を咎めて大義名分とし、半殺しにした上で門から叩き出すくらいは平然とやる筈だ。

少なくとも、現状、帝都においては、あそこそが最も安全という事になる。

ましてや

「瑞鶴は、ようやく我等の手を離れたが、耀光計画は、未だ大きな問題を幾つも抱えている。

今後、そちらに忙殺される事になるだろし、その辺りを考えるとな………」

耀光計画

一九八三年に公表された米国のATSF計画に衝

撃を受け、開発目標を第三世代戦術機に改め再始動した国産次世代機開発計画は、未だ技術面に多大な問題を抱えて難航し続けている。

『瑞鶴』の開発で名声を得た彼らも、以後そちらへシフトする事

になっているのだが、これまでの経緯と現状を見る限り、『瑞鶴』以上の難物となるであろう事は、二人にとって言わずとも知れた事

だった。

場合によっては、何日も、あるいは何週間も家に帰れぬ日々が続く恐れも有る。

その間、唯依の身を案じずに済むかどうかというのは、篁や巖谷にとっては大問題だった。

「ふん……まあ確かに、な」

ベストではないがベターな選択に、巖谷も消極的にはあるが賛意を示した。

彼的には、あの家はやや敷居が高いので、唯依と接する機会が減るのが残念ではあったが、その辺はグツと堪えてみせる。

そんな巖谷の態度に、篁も苦笑混じりで応じた。

「正直、こちらの都合だけで、相手を良い様に利用しているようで、気が引けるのだがな」

「その辺りは、キチンと話しておくべきだろう。」

こちらが誠意をもって頭を下げれば、無下にするような相手じゃない」

「……そうだな。」

唯依を迎えに行く時、少し時間を作って貰うか」

そこまで言うと、篁は何かを思い出した様に微かな笑みを浮かべた。

友の奇妙な反応に、巖谷は怪訝そうな顔をする。

そんな親友に対して、彼は軽く頭を掻きつつバツ悪そうに白状した。

「いやなに、本当に世話になりっぱなしだと思ってな。」

唯依への誕生日プレゼントも、預かって貰った訳だと待て！」

巖谷がドスの利いた声で、篋の白を遮った。

月が東の空に浮かんだ頃、小さなレディを主賓としたささやかな祝いの宴が、ここ枢木邸では開かれようとしていた。

「唯依ちゃん、お誕生日おめでとう！」

「おめでとう唯依」

「ありがとうございます！」

参加者は、主賓を入れてもわずかに三名。

知らぬ者から見れば寂寥を感じる布陣かもしれないが、祝われる当人にしてみれば、敬愛する父親達が来れぬ寂しさを埋めるのに充ち過ぎるほどだった。

むしろ一族の集まりの様に、妙に気を張らなくて済む分、心が軽く、浮かべる笑顔も明るくなる。

まあ、卓の上にバースデー・ケーキと鯛の尾頭付きが並んでいる光景は、微妙にミスマッチだったが、そこまで気にする程、神経質な者も居らず、子供2に大人1という構成上の都合から、ジュースでの乾杯がされた後、感慨深そうに真理亜が口火を切った。

「うん、でも唯依ちゃんも、これで六歳。四月からは、学校へ行くのよね」

ここ半年、殆ど家に居た少女が、来月からは居なくなると思うと、さすがの彼女も寂しく思うらしい。

尋ねる声に微かな寂しさが混じっているのを、ルルーシュは耳聡く聞き取ったが、それを指摘するほど無謀でもなかった。

一方、いかに聡明とはいえ六歳になったばかりの少女に、そこまです察する事ができる筈も無く、問われるままに嬉しそうに答える。

「はい!……でも、できれば……」

チラチラとこちらを気にする唯依の仕草に、その内心を悟ったルルーシュは、すまなそうに詫びる。

「すまない、一緒に行つてやれなくて」

既に枢木の仕事に参画し始めたルルーシュは、昨年の秋口には学校へ行くのを止めていた。

無論の事、表向きの理由は別である。

曰く、『生来の虚弱体質から来る健康不安により、義務教育を通信教育へ切り替える』等という事情を知る人間なら、怒るか笑うかするしかないレベルの理由いいわげではあったが、武家の子息が多く通う学校側としては、正直ルルーシュを持って余していた為、渡りに船とばかりに了承。

結果、今では自宅で片手間に通信教育を済ませつつ、残りの時間をソフト開発や経営・投資に回している次第だった。

傍でそれを見ていた唯依にも、その辺りの事情は良く分かっているらしく慌てて首を横に振る。



「ルル兄様には、大事なお仕事があるのだから仕方ありません」  
「……すまん」

もはや謝る時のクセになってしまった 唯依の頭を撫でながら、聞き分けの良過ぎる妹分の姿に昔の実妹ナナリイを思い出し、妙にしんみりした気分を味わう。

そんな少年の表情に、本能的に自分以外の誰かを見ている事を勘付いた唯依は、少しムクれた様子を見せた。

「?……どうした、唯依?」  
「何でもありません!」  
「?????」

怪訝そうな問い掛けに、プイツとそっぽを向く。  
何故か機嫌を損ねた事に、訳が分からずルルーシユは首を捻った。

そんな二人のやり取りを傍観していた真理亜は、ヤレヤレといった様子で軽く肩を竦めると、微妙になつてしまった場の空気を換えるべく手を軽く叩いて子供達の注意を惹き付ける。

「それじゃ、お楽しみのプレゼントね!」  
「あつ、はい!」  
「私からはコレ」

思わぬ横槍に、わずかに狼狽した唯依へと、化粧箱に納められた時絵を施した美しい櫛を渡す。

「キレイ……」

手渡された櫛の装飾の美しさに、それまでの不機嫌さも忘れ、唯依は感嘆の溜息をついた。

してやったりと言わんばかりの笑みが、真理亜の面に浮かぶ。

この日の為に、腕の良い職人に注文して作って貰った逸品。

これが気に入って貰えなかったら、正直かなり凹んでいただろう。

「やっぱり、なんだかんだ言っても、女の子は自分を磨く事を忘れちゃダメよ。」

これは、その為の第一歩という事で」

「あ、はあ……………」

期待通りの結果にテンションが上がり、イイ笑顔を浮かべたまま畳み掛ける真理亜に唯依はやや困惑するが、言いたい事は何となく分かるので曖昧に頷く。

だが、それは間違いだった……………かもしれない。

「唯依ちゃんは、素材が良いんだから、キチンと磨けば男なんて選り取り見取り！」

今から念入りに磨き上げれば、十年後には、求婚者達が門前に市成すこと請け合いね」

「ッ!?!……………あ、あ……………あの……………あう……………」

軽くウインクしつつ、放り投げられた爆弾発言に、唯依の顔が熟れたトマトのように真っ赤に染まる。

それは『求婚者』の一言が少女の想像力を刺激し、一つの未来像を描かせた所為だったが、それに気付いたのは彼女を除いてただ一人だった。

一方、言葉に詰まり、テンパったままチラチラと自分を見る妹分の仕草を、救いを求めているものと解釈したルルーシュは控えめな口調で困った母親を嗜める。

「母上、あまり擲揄かしがうのは、どうかと」  
「……………」

唯依の顔から赤みが薄れ、代わりにルルーシュを見る眼が微妙に細まった。

視線を向ける事無く器用に全体を見ていた真理亜は、息子の育て方を間違えたかと胸中で首を捻りつつ、この場はおどけてみせる。

「だって可愛いんだもの！」

ああ、ホント、娘も欲しかったわ。

そうだ、いつその事、ルルーシュのお嫁さんにならない？」

「ふえッ!？」

「……………母上」

ビキリツと硬直する唯依。

ルルーシュは、痛みを堪えるように額に手をやった。

そんな二人を前に、真理亜は更にテンションを上げていく。

「何よ不満でもあるのルルーシュ？」

唯依ちゃんなら、将来、とんでもない美人になること請け合いよ」  
「！」

まあ私には及ばないけどね、と盛大に自画自賛しつつ豊かな胸を張る。

だが、それを見る息子の視線は、氷雪の如く冷たく白かった。

「……………茹ってます」

「へっ?」

呆れたような声で、指差す先を見た真理亜の顔が、少しだけ引き  
攣る。

視線の先 湯気でも出そうな感じに耳まで真っ赤にしてアウア  
ウ言っている唯依の姿に、流石の彼女も頬を掻き苦笑するしかなか  
った。

「……………まだ、ちょっと早かったかしらね」

「当たり前です。」

ほら唯依、これを飲んで落ち着け」

そう言いながら差し出されたミカンジュースを、センマイ発条仕掛けの人  
形のようなぎこちない動作で受け取り、コクコクと飲む黒髪の少女。  
飲み終えた後、ほう、と一息つきつつ、ようやくこちら側に帰還  
する。

「……………ありがとうございました、ルル兄様」

小さく頭を下げると、未だに真っ赤な顔でルルーシュを見ては眼  
を伏せるを繰り返す。

そんな唯依の仕草と内心を慮り、真理亜はチェシヤ猫めいた笑い  
を浮かべた。

『充分、脈アリ……………ってところね。』

うーん……………真面目に篁中佐と相談してみようかしら』

『唯依ちゃんお嫁さん化計画』の発動を、少しだけ本気で考える  
真理亜であったが、数日後、唯依を迎えに来た当の篁から篁家の現  
状を聞き、これを断念する事になるうとは神ならぬ身が知る由もな  
かった。

如何に強心臓の彼女とはいえ、許婚云々を迫る親族を避ける為に

預かって欲しいと言われた少女を、息子の許婚にと言える筈も無く、結局、この日の思いつきは誰にも語られる事無く終わる事となる。

対して、そんな母の様子をジト目で見ていた息子はと言えば、『まだ引つ掻き回し足りないのか?』と胸の内マリアンヌミレイで溜息をついていた。

この手のお祭り好きは、前世の母や元許婚という前例を知っている分、対処法をそれなりに体得している彼は、速やかにソレ 意図的にサラリと流す を実践する。

「ふう……では、オレからはコレだ」

今までの悪ふざけが無かったかのような声と態度で、小さな鈴のついた可愛らしい財布を手渡す。

こちらも気に入ったらしい唯依は、まだ赤い顔のままではあったが子供らしく目を輝かせた。

「ありがとうございます！」

大事に使わせていただきます」

そう言って貰った財布を、嬉しそうに胸に抱く。

その愛らしい仕草に、ルルーシュの相好も綻んだ。

「ああ、そうしてくれると嬉しい」

顔一杯の笑みを浮かべて頷く唯依に優しい眼差しを向ける。

代償行為であると自覚しつつも、やはり『妹』にはトコトン甘い兄であった。

そうやって兄妹二人の世界を創っている彼らを他所に、いつの間  
にやら部屋の片隅に移動していた真理亜が、長細い物を抱えて戻っ

てくる。

「さてと」

「おば様？」

「母上？」

何故か気合を入れるその姿に、唯依が不思議そうに首を捻る傍らで、ルルーシュはさり気なく警戒レベルを上げていた。

この辺りは、付き合いの長さの差とも言えるが、今回は幸いにも杞憂に終わる。

「ハイ、これ」

そう言って唯依の目前に差し出されたのは、淡い山吹色の細長い袋だった。

手渡されたその口を促されるままに解き、中を覗いた唯依の双眸が驚きに見開かれる。

「これは……」

呆然として呟きながら袋を払ったその後には、一振りの黒檀の木刀が握られていた。

物問いた気に向けられた視線に、微笑みながら真理亜が応じる。

「篁中佐から、お預かりしていたのよ。」

誕生日までに戻れないようなら、唯依ちゃんに渡して欲しいと。それと、『今年の誕生日は、一緒に居てやれずに済まなかった』ですって」

「父様……」

市販されているものよりも、やや短かめなその一振りには、まだ小さな彼女の手に測ったように馴染む。

全体のバランス、重さ、柄の握り、どれもが彼女にピッタリと合っていた。

「どうやら唯依ちゃんの体格に合わせて、わざわざ注文して作ったよね」

「……父様……」

真理亜の解説に、感無量と言った風情で再び父を呼ぶ唯依。

一連の流れを傍らで見ていたルルーシュは、正直、女の子の誕生日プレゼントに木刀はどうかと思いはしたものの当人がこれ以上は無い程、感動しているのを目の当たりにし、その辺りの感想は封印する。

「良かったな、唯依」

「ハイッ！」

キツチリと空気を読んだルルーシュに、満面の笑みを浮かべて応える唯依。

それを微笑ましそうに見ながら、不意に脳裏を掠めた何かにルルーシュは、はたと首を傾げる。

誰かを忘れているような気がしたが、何故か思い出せない。

何かが喉元に引っ掛かっているような妙な気分を感じつつも、喜ぶ唯依の姿に気を取られた彼は、それを取るに足らぬ些事として意識から消し去った。

此処は帝国軍・東富士基地内PX。

忘れ去られた男の嘆きが、陰々滅々と木霊する

「そう怒るな巖谷」

もう二時間近くもネチネチと厭味と愚痴をこぼし続ける親友を、  
流石に辟易とした様子の篁が嗜める。

だがそれは、巖谷の胸中で燠火の様に燻る恨みの火種に油を注ぐ  
だけだった。

「……汚いぞ、篁。」

自分だけチャツカリ、唯依ちゃんへのプレゼントを預けて来るな  
んて」

もう、何十回となく放たれた呪詛にも似た響きを持つソレに、篁  
も眉を顰める。

まあ恨まれるのは分からないでもないが、ここまで延々とやられ  
ると気が滅入って仕方が無かった。

手にしたグラスのウィスキーを、景気づけに一口呷ると、巖谷を  
宥めにかかる。

「まあ、予定がここまで延びるとは思っていなかったが、念の為に  
な」

他意は無い。

と、言外に告げる篁を、巖谷はやや焦点のボヤけ始めた酔眼でジ  
ロリと睨んだ。



「……卑怯者が……裏切ったな、俺の信頼を裏切ったな！」  
「……………」

もはや完全にダメダメだった。

泥酔し、説得も懐柔も効く状態に無い親友を前に、半ば匙を投げかけた篋は嘆息混じりに愚痴る。

「大袈裟な……帰ってから渡せば良かるうに」

「大袈裟じゃないっ！」

酔っ払い特有の変な敏感さで、ささやかな呟きを耳聴く聞き取った巖谷が、激昂してテーブルを叩いた。

卓の上でグラスとツマミを盛った皿が激しくダンスする中、周囲の耳目を集めているのもお構いナシに天を仰いで男が嘆く。

「きつと、きつと今頃、唯依ちゃんは、『巖谷のおじ様だけが、プレゼントをくれなかった』とか、思っているに違いない！」  
「……は……はは……」

完全にコワれてしまった友の姿に、篋は乾いた笑いを漏らす。

周りから注がれる視線が痛かった。

他人の振りが出来ぬ我が身の不幸を嘆く彼を他所に、激情を吐き出して気が抜けたのか、悄然と肩を落とした巖谷がボソリと呟く。

「……ハア……唯依ちゃんの中で、俺の株は大暴落だ……」

相方の醜態を前に、もはや笑うしかない篋とル〜ル〜と悔し涙を流して嘆く巖谷。

偉いさんの意地の所為で、愛娘から引き離された親馬鹿コンビの

寂しい夜が更けていった。

西暦一九八八年 三月十八日 英国・倫敦

「……………みつけたあ！」

明るい室内に、音程のズレた歓喜の声が木霊する。

クルクルと白衣の裾を翻しながら、喜びも露に踊る男が一人。その手には、やや厚めの書類が握られている。

「あつはあゝ、さつすがあ天才のボクウ！」

舞い上がる白衣が、振られる手が、室内に置かれていた書類の束を弾き飛ばす。

雑多な紙ふぶきが舞う中、一通の高級そうな書簡が床に落ちるが、青年は気にする事も無くそれを踏み躪った。

騒々しく、けたたましく、やかましい。

本来この場所 大学の研究棟の一角では、忌まれるソレに気が付き、血相変えて一人の女性、いや、少女が飛び込んでくる。

「なに騒いでいるんですか？」

……………つて、アアアッ！」

人型台風に蹂躪された室内の惨状を目の当たりにし、十代前半と  
思しき少女が悲鳴を上げる。

彼女の昨日の成果の悉くが、床に散らばっている有様を見れば、  
それもまた無理の無い事。

己の苦勞を台無しにしてくれた戯け者に向ける視線は、凶悪殺人  
犯でも裸足で逃げ出しそうな程の迫力で、狂騒に捕らわれていた白  
衣の青年すらも、思わず二、三步後ずさった。

「もう、こんなに滅茶苦茶にして！」

メインスタッフ

………これって、ECTSF計画主任開発員としての招聘通知じ  
やないですかっ!？」

怒声を上げつつ、床に散らばっていた書類を拾い上げていた少女  
の顔色が、踏み躪られた書簡の見た瞬間、サツと青褪める。

ECTSF計画 この欧州独自の戦術機開発計画は、大陸失陥  
と米国のF-15売り込みにより、一度は半ば空中分解の憂き目に  
あっていた。

だが独仏の脱退後、単独開発国となっていたここイギリスが起死  
回生を狙って、昨年、開発ターゲットを近接格闘戦能力を高めた第  
三世代機相当に切り替えて計画を再始動した結果、新たな開発目標  
を今度こそ達成すべく、貪欲に優秀な人材を狩り集めており、その  
中で主任開発員として選ばれたという事は、眼前で狂態を示してい  
た人物が、研究者としては卓越した存在である事を示している。

この書簡は、云わば政府のお墨付きによる自己の能力証明書。  
それを、こつもアツサリと踏み躪るとは

呆れと、どこか納得する気分が、ない交ぜになった表情のまま己

を見る少女へ、当の本人がヘラヘラと笑いながら答える。

「ああ良いんだよ、そんな紙屑」

本当にどうでもいい。

そう思っている事が、万人に分かる面倒臭そうな声と表情で、青年と少年の境目にある男は告げた。

そのあまりの無関心さに、一瞬、絶句した少女は慌てて問い直す。

「良いんだよって……ECTSF計画の主任ですよ！

これで私達の作りたかった物が、造れるじゃないですか！」

「別に総責任者って訳じゃないよ。

どうせ頭の固いロートル達が、ああだこうだ言って邪魔するに決まってるさ」

そう言っただけで肩を竦める青年に、少女の方も、思い当たる節があったのか思わず口籠る。

スキップを繰り返して、年齢十三にして大学の門を叩いた彼女は、ここで既に天才、或いは奇才との評価を確立し研究室をせしめていた彼と再会した。

あれから既に一年が過ぎ、この若過ぎる天才コンピは、若いというだけで味わう破目になった窮屈さを嫌うほど感じている。

確かに青年の言う通り、仮にこのまま計画に参加したとしても、このことと同じ結果になる可能性は捨てきれなかったが、それでも、あるいはという期待が捨て切れないのも事実だった。

「で、でも……」

「万が一の可能性に掛けてみませんか？」

そう続けようとした彼女の口を、青年の次の言動が塞ぐ。

「それに、もし総責任者って事でも違わないよ。

もう、そんな物は、どうだっていいんだからねえ。」

一転して楽し気に笑いながら、手にしていた書類らしき物を放つて寄越す。

反射的に、それを受け止めた少女の眉が怪訝そうにしかめられるが、一瞥した瞬間、驚きによって跳ね上がった。

「これはっ！……この方は……」

「まさか日本、しかも枢木とはねえ！」

ハハハ よっほどあの方は、悪戯好きな神様に愛されてるんだネエ」

「……陛下……」

探し求めていた人の写真を食い入る様に見つめながら、化粧ツ気の薄い少女 セシル・クルーミーの唇から、万感の思いが声となって零れた。

そんな彼女の聴覚に、パンパンと手を打ち鳴らす音が響く。

「さあさあ、あの方の居場所が分かったんだから、もうこんな処に用は無い。サツサツと行くよお！」

トレードマークの眼鏡の奥で、爛々と眼を輝かせた青年 ロイド・アスプルンドが、ハイテンションな声で叫ぶ。

いつもなら、周りの研究者からの苦情を気にし、注意・叱責する側に回る筈のセシルも、今日ばかりは、今度ばかりは別だった。

「大学への退職届け、下宿の引き払い、移動手段の手配 は、ア

メリカ経由ですね」

ロイド以上のテンションで、素早くこれ以後の行動を確認する。セシルは、そんな自分を自覚しながら、確かに大学が、自分達にとっては『こんな処』でしかなかった事を理解した。

居心地が悪かったのは事実だが、それでも仲の良い者達が居なかった訳でもない。

だが、それでも、行くべく場所を持っていた、いや、探していた自分達にとって、ここは仮の止まり木でしかなかったのだ。

そうやって、綺麗サツパリこの地への未練を捨て去ったセシルに、ニヤニヤ笑いを浮かべたロイドが応じる。

「うん、任せるよ。」

どのくらいで済むかな？」

「今日中に全部終わらせます！」

ロイドさんは、持って行く物をまとめといて下さい」

こちらの内心を見透かした様な相棒の態度は気に入らなかったが、それ以上の重要事を前にした彼女にとっては瑣末な事だ。

後を任せる一言を投げ捨てるや、そのまま室外へと走り出す。

本来なら数日、いや一週間は掛かる作業を、たった一日で終わらせると宣言した以上、一分一秒たりとも無駄には出来なかったのだ。

「頑張つてネエ」

そんなセシルの背中を、わざとらしくハンカチを振って見送ったロイドは、彼女が机の上に置いていった書類 新興の日本企業が売り込みを掛けて来た戦術機用新型OSの調査資料を手に取ると、実質的な開発者と目される少年の写真へと視線を注ぐ。

新型OS 『RTOS-88』というらしいが、その概念に既存の戦術機に対する物とは全く異なる、それでいて彼に馴染み深い物を感じ取り、あらゆるツテを使って手に入れた物だが、彼の勘通り完全なビンゴだった。

写真の中で、完璧な営業スマイルを浮かべる十歳そこそこにしか見えない少年へと、彼は語りかける。

「さて、今度は最後まで付き合わせて頂きますよぉ………ねえ、我が君」

前世と今世を合わせた中でも、唯一人だけ敬意と忠誠を持って頭を垂れた人へと呟く。

羨ましい事に馬鹿は死んだら直るそうだが、ロイド・アスプルンドというどこか壊れた人間は、結局死んでも直らなかつた。

こんな壊れた人間が、まともな相手に仕えられる筈も無い。

こついつた壊れた人間を扱えるのは、それ以上にイカれた人間だけ。そう、『世界を壊し、世界を創る』そんなイカれた妄想を、現実に変えてしまった非常識なあの方だけ。

「壊れた従者とイカれた主人。

うんうん、実に似合いの主従だよねえ」

だから、ボクこそが、あの方の第一の臣下なのさ。

どこそのオレンジ卿が耳にしたら怒り狂いそうな事を呟きつつ、いつもの彼からは考えられない手際の良さで荷物をまとめていく。

鼻歌混じりで要らない物、要る物を選別し、要らないと判断した物は徹底的に隠滅していくその手が、不意に止まった。

「……………ああ、忘れてた。  
一応、彼にも連絡しとかないとね」

恨まれては堪らないからねえ　と、うそぶきつつ、ロイドは面  
倒くさそうに受話器を持ち上げたのだった。

西暦一九八八年　三月十九日

この日、グレートブリテン島より三名の男女が忽然と姿を消した。

内二名は、再建を図るECTSF計画の主任とその補佐として招  
聘される程の逸材であり、失踪直後、彼らの研究成果が完膚なきま  
でに抹消されていた事も相まって、他国の謀略の可能性が疑われた  
為、情報部による綿密な追跡調査が敢行されるも結局はロスト。

また残り一名は、欧州撤退戦で勇名を上げた英陸軍若手のホープ  
であったが、脱走同然の除隊から失踪へと至った為、こちらも憲兵  
隊による執拗な追跡が行われるも同じくロスト。

後に士官の実家である伯爵家と軍の間で話し合いが持たれ、相続  
権の全てを放棄する代償に通常の除隊として扱う事で手打ちとなっ



た。

いかに優秀な人材とはいえ、所詮一個人の帰趨にいつまでもかまけている余裕など情報部にも憲兵隊にも無かったが故の処置であるが、後年、彼らの消息と成し遂げた偉業を知った当時の関係者一同は、そろって悔し涙にくれる事となる。

思ったよりも時間が掛かってしまい申し訳ないです。

しかし、まだBETAのBの字も出てこない……先は長いですね。

今回の話を書いていて疑問が幾つか

もし分かる人がいたら教えてください。

? 二次創作で見る巖谷さんが、お見合いマニアor唯依を嫁に出したがる件

SSで見る巖谷氏は、大概、こんな傾向を持っているんですが、私の持っているTEの小説四巻と総集編三冊のいずれにもその手の描写が無い。

これは上記以外のTE本編にあるって事なんですかね？

? 戦術機の機体構造

よく技術系に凝ってるSSでは、戦術機の機体構造が外骨格形式とされてるのを

みるんですが、手に入れた公式メカ設定集には、その辺の事が書いてない。

これも公式ネタがあるようでしたら教えてください。

うーん、実に他力本願。

PHASE 3      ・再会・邂逅・そして……（前書き）

うーん、思った以上に長くなった。

おまけに巖谷さんが、コワれ気味な気が。

まあ、とにかくどうぞ。

西暦一九八八年 四月二日 太平洋上

波をかき分けて進む船の舳先で、水平線の彼方を見据えていた少年は、潮風に揺らされる前髪を鬱陶しそうに払い除けた。

端正な横顔に、わずかに浮かぶ険が、彼の機嫌の悪さを物語っている。

そんな少年を慮ってか、舵を握っている忠義の騎士も、当たらず触らずに徹していたのだが、今この場には、その微妙な空気を敢えて掻き乱す者がいた。

「おお、見渡す限りの大海原！

……まあ、日本に来るまでに嫌という程、見てきたんですけどねえ」

道化した仕草とセリフを吐きながら、脇に立った青年を一瞥した少年 ルルーシュは、フツと吐息を洩らした。

自分らしくなく気を張り過ぎていた事に気付き、わずかに肩の力を抜くと視線を動かさぬまま問う。

「見飽きたか？」

目的を達したロイドの口元が綻び、次いで悪戯つ子めいた形を描いた。

そのまま後ろを振り返りつつ肩を竦めるといふ器用な真似をしながら、青年は甲板に敷かれた毛布の上で呻くナニかを覗き込む。

「まっ、正直ボクは見飽きましたかたねエ〜。

でも……ねえねえセシル君、海だよ海、見ないのかい？」

「……後で……覚えて……てください……」

嘔吐感を必死に押さえながら、搾り出された呻き声が上がった。

真つ青な顔をしてマグロのようにぐったりと横たわったセシルが、眼に憤怒の色を浮かべてロイドを睨む。

だが体調不良の影響か、いつも程の迫力はなく、それではこの男が黙る筈も無かった。

「うわぁ〜怒られちゃった」

「くっ！……ウプツ……」

クルリと回ってみせる相棒の惚けた仕草に、セシルの額に青筋が浮かぶが、次の瞬間、襲い掛かってきた吐き気に慌てて口を押さえた。

そんな夫婦漫才を呆れた表情で見ていたルルーシュが、仕方なく助け舟を出す。

「……セシル、ロイドに構うな。

眼を閉じて横になっていれば、直に治まる筈だ」

「……申しわけ、あり……ません」

すまなそうに消え入る声で応じる。

足手まといになっっている自覚がある身としては、その責任感の強さも相まってただただ恥じ入るばかりであった。

とはいえ、である。

「そうそう、船酔いってのは、身体が感じる揺れと視覚情報の差異が原因だから、視覚を閉ざしていれば直ぐ調整が着くのさ」  
「……………」

軽く指を振りつつ軽薄な口調で告げる青年への怒りまで消える訳も無い。

眼を閉じたままにいるセシルの額の青筋が倍になった。

だが、先ほどの反省からか激昂することは無く、その分、深く静かに怒りを燃やす。

陸についたら絶対グーで殴る！

胸中で固く誓うセシルの横で、調子に乗ったロイドが我が世の春とばかりに騒ぐ。

そんなささやかな喜劇を横目で見ながら、冷静さを取り戻したルーシユは、己がこんな場所に来た経緯を思い返していた。

そもそも、こんな事になったのは……………

『ルーシユ、神根島へ行きなさい。

貴方の求める答えが、そこで待っているわ』

脳裏に蘇る母の言葉。

かの因縁の地へ行けという。

理由すら言わずに。

いや、それについては見当がついている。  
問題なのは

「……………母上、貴女は……………」

甲板を吹き抜ける風が、ルルーシユの呟きの一部を削る。  
傍らで道化を演じていたロイドの瞳が、一瞬だけ陰しく鋭くなっ  
た。

西暦一九八八年 四月一日 帝都

桜の花が咲き誇る季節。

春の木漏れ日の中、ここ帝都の一角に在る武家御用達の名門小学  
校では、新たな児童を受け入れる春の一大イベントたる入学式が肅  
々と執り行われていた。

未だあどけない幼児達は、当初は緊張からカチコチに固まり、今  
は春の陽気に誘われ、舟を漕ぐ者が多数散見できる。

一方、毎年の事として慣れた教員達は、それを咎める事は無く、  
自身も退屈なお歴々の挨拶に欠伸を噛み殺しつつ耐えていた。

そして、それは子供達の後ろで、セレモニーを見守る保護者達も  
変わらない。

誰もが退屈な時間が速やかに過ぎる事を願いつつ、襲い掛かる睡

魔に抗っていた。

そんな中

「くううっ！」

やけにテンションが高いナイスミドルな男が、一人感涙に咽び泣いていた。

精悍な容貌と鍛え抜かれた体躯、何よりその身に纏う帝国軍の制服が、彼の身分を如実に物語っていたが、感激の涙と鼻水に濡れた顔が全てを台無しにしている。

周囲の親達が、何かと声を潜めて囁きあう中、その脇に座していたもう一人の軍人が、堪りかねた様に声を掛けた。

「……泣くな巖谷」

「ああ、唯依ちゃん、立派になって」

完全にスルーされる。

その視線は、新入生達の中にある愛娘へと固定されたまま、ピクリとも動かなかった。

篁のこめかみが、ヒクツと震える。

「それは父親のセリフなんだが……」

「フン早い者勝ちだ！」

堂々と開き直る様は、いつそ見事ですらあった。

未だに先の誕生日の一件を、根に持っているらしき友に、篁も匙を投げる。

「……もう好きにしてくれ」



そう言って、下ろしていた左手に持つビデオで撮影を再開する。

何だかんだと言いつつも、軍需が民需に優先されるこのご時勢、当然、民間向けのビデオなどある筈も無く真正の軍用品 端的に言ってしまうは軍の備品を借り出してきたものだ。

軍用品故に性能は保障付きのソレを、前列にて姿勢を正したまま来賓の挨拶を聞く唯依へと向ける。

「後で俺にもコピーを頼む」

「分かった、分かった」

唯依から視線を外す事無くダビングを頼む巖谷と、それに相槌を打ちつつ、微動だにせぬまま撮影を続ける筈。

どちらも程度の差はアレ、親馬鹿コンビである事は否めない光景だった。

そんな彼らの注目と暑苦しい程の愛情を受ける当人はと言えば

『……………退屈です』

以前より欠かす事無く続けてきた精神鍛錬の成果を遺憾なく発揮し、歳に似合わぬ凜然たる態度を守りつつも、内心で落胆の溜息を吐いていた。

正直つまらない。

言っている事に中身が無く、同じ事を言い回しを変えて言い続けている来賓達に、黒髪の少女は退屈の虫が疼くのを押さえ切ることが出来なかった。

以前の彼女なら、そう帝都へ来る前の唯依であつたなら、恐らく  
こうはならなかつただろう。

例えどれほど退屈な話であれ、目上の者の挨拶を聞き流す事など  
有り得ず、堅苦しいまでの姿勢を崩す事無く最後まで式に臨んだ筈  
だ。

しかし、今の少女は違う。

表に出す事は無くとも不満を感じ、そしてそれを自覚し許容する  
事を己に許していた。

この変化が、天上天下唯我独尊な母子の影響である事は疑い無い  
ところだが、これを成長と取るか、スレたと見るかは人それぞれで  
あろう。

もつとも、『天上天下唯依が独尊』を地で行く某親馬鹿少佐なら、  
『ウチの唯依ちゃんがアッ!』とばかりに悔し涙で頬濡らしそうで  
はあつたが……………

ともあれ、一皮剥けた(?)らしい生真面目な美少女は、体内に  
巢食う退屈の虫を紛らわすべく、周りにバレない程度にさり気なく  
視線を周囲へと投げる。

そして、数瞬後、慣れぬ真似をした自分を酷く後悔する事となっ  
た。

『おじ様……………父様も止めて下さい!』

感動に打ち震える巖谷と撮影に没頭する父を見つけ、内心で頭を  
抱える唯依。

悪目立ちしまくっている父親達に、白皙の頬がわずかに赤く染ま  
った。

『……他人のフリ、他人のフリ』

胸中でそう呟きつつ、自身に暗示を掛ける。

互いに面識の無い者達が、多数を占めるこの場なら、こちらが気にしない限り巻き込まれる事はないと信じたかった。

そうやって父親達の事を、意識から締め出した薄情な娘は、残る『家族』の方へと意識を向ける。

もう一度、周囲を見回した。

視界に映るどこかのオジサン達の事を、意図的に認識から外したままに。

そうして今度は、本当に微かな溜息を洩らす。

『……やっぱりルル兄様も、真理亜おば様も……』

求めた人達は居なかった。

どちらも昼間は用があると聞いていたので、それほど期待していた訳でもなかったのだが、それでも落胆している自分を唯依は自覚する。

『つまらないです』

わずかに唇を尖らせたまま、そう胸中で呟いた。

我が儘を言う事を覚えた彼女は、それをぶつけるべき相手を思い描き、この埋め合わせに何をねだろうかと夢想する。

とはいえ、決して多くは望まない、望むつもりも無い唯依であった。

彼女はただ、他愛ない自分の我が儘を、困ったように笑いながらも叶えてくれる優しい兄に甘えたかっただけなのだから。

そうやって楽しい予定をアレコレと立てている内に、いつの間にやら時は過ぎ、退屈な式典は終わりを迎えたのだ。

……………そう、迎えたのだったが、彼女の受難は、まだ終わらない。

「立派だったぞ唯依ちゃん！」

おじさんは、おじさんは……………ウウウツ」

式を終え、明日からの予定の伝達も終わった後は、そのまま散会となった。

他の子供たちと同様に教室から離れ、校庭へと出てきた唯依を、満面の笑みで迎えた巖谷の辺り構わぬ第一声がコレである。

真っ赤に目を泣き腫らし、男泣きに泣く厳つい軍人が一人。

果てしなく目立つソレは、周囲の耳目を引きつけて止まず、自然その前に立つ唯依も周囲に散らばる父兄児童達の注目の的だった。穴があつたら入りたい　その言葉の意味を、しっかりと体感しつつ、唯依は半ば涙目になりながら、引き攣った顔で脇に立つ父へと哀願する。

「おじ様を止めて下さい、父様」

スツと眼を逸らされた。

「……すまん」

言葉少なく詫びを言う父。

父が全く頼りにならない事を理解した唯依は、即座に全てを諦めた。

明日からは、校内一の有名人として、暫らくは噂の的となる己の不運を受け入れた少女は、恥ずかしさに頬をリンゴの様に染めたまま、ぶつきらぼうに呟く。

「……もういいです。

早く帰りましょう」

ルル兄様達も、もうすぐ来られるでしょうし。

胸中で、そう付け足した唯依は、明日からの事は頭から締め出して、父の手を引き歩き出す。

今日はこれから自分の入学祝いに、親しい者のみを集めた、ささやかな祝宴が開かれるのだ。

当然、枢木の方にも声が掛かっており、快く出席するとの返事も得ている。

ここ数日、互いに忙しく顔を合わせる機会が無かった為、唯依自身とても楽しみにしていたのだった。

そうして足取りも軽く家路へとつく娘に引かれ、父親も苦笑しながら続く。

愛娘の内心は、彼にも見え透いていたが、それを突くような野暮な真似をする気も無かった。

いっそのこのままルルーシユを許婚にしまえば、喧しく囁く親族連も黙るのではと思う事もある。

「思ふ事もあるのだが……」

『まだ早い！』

そう、まだ早い。

まだ六歳、嫁に行くなど十年は先の話だ』

十年後の未来の事とはいえ、未だ愛娘を手放す覚悟を決められぬ親馬鹿な父親がそこに居た。

そうして親子は、仲良く家路に着く。

親子水入らずで。

「あれ？……アレ？

……唯依ちゃん？

篁ああつ！！」

十分後、忘れ去られた男の悲痛な叫びが、無人の校庭に響き渡った事を知る由も無く。

ゴォーン……ゴォーン……と低く重く響き渡る時を告げる鐘の音が、ただキーを打つ音のみが響いていた室内へと侵攻してきた。

一心不乱にキーボードを叩いていた黒髪の少年が、釣られるよう

に面を上げる。

「そろそろ時間か」

壁に掛けられた時計にて時刻を確認したルルーシユは、軽く眉間を揉みつつポツリと独り言を呟くと、取り纏めていた経営資料  
今後の各部門の開発方針、新組織計画、新規業種への展開案等々のファイルを保存して閉じる。

表向き、年齢故に直接経営に携わる事は憚られるが故、自宅にて業務をこなしてはいるものの既に枢木工業は彼の辣腕により切り盛りされていると言っても過言ではなかった。

まあ、飛ぶ鳥を落とす勢いとはいえ、所詮は極東の島国の一新興企業。

わずかな期間で世界の半ばを押さえる超国家組織を立ち上げ、更には史上初の世界征服まで成し遂げた稀代の組織運営者たる彼にしてみればどうという事も無い。

そう、本来ならどうと言う事も無い筈なのだが、眉間を揉みつつ首を回し始めたその姿には、微量の疲れが見え隠れしていた。

「……やはり一人では手が足りんな」

会社経営全体としては母が取り纏めてくれているものの個々の案件 技術開発の指揮から各種業務の運営、急拡大しつつある組織の再編と最適化、更には投資に到るまで、彼一人で動かしてきた無理が祟り始めていたのだ。

「どうしても、優秀で信頼のおける子飼いのスタッフが要る」

かつてゼロであった時には、技術部門はラクシャータが、軍事部門は藤堂と星刻という担当分けが出来た。

後にブリタニア皇帝となった際にも、技術ならロイドとセシル、軍務ではジェレミアという優秀な人材が彼を支えてくれていた。

翻って、今のルルーシュは、全てを一人で賄っている訳である。

それでも破綻を見せず、計画を推し進めているのは、流石と言えば流石だが、このままの状態を続けていれば、いつか必ず躓く時が来る事が彼にも予想できていた。

とはいえである。

各部門を統括させるという事は、能力面のみならず信頼できるか否かが大きなネックだった。

能力面で必要とされる水準を満たし、且つ、絶対の信頼も置ける人材。

そんな都合の良い人材は、流石においそれと調達できる筈も無かったのだ。

「……今、悩んでも意味がないか」

暫しの間、黙考していたルルーシュであったが、簡単には解決のつく問題でない事も分かり切っていたので、適当なところで思考を打ち切る。

当面は、今のままでも持つと踏んでいる以上、根気良く人材を育てるか、或いは発掘するかして調達するしかないと割り切った彼は、意識を切り替える事とした。

疲れているからこそリフレッシュは重要だ。

そう自身に言い聞かせたルルーシュは、ワークステーションを落とすと、そのまま手早く身支度を整える。



「さて、行くか」

姿見で、おかしな所が無い事を確認し終えた少年は、用意してあった唯依への祝いの品を手に持つと、疲れを感じさせぬ軽い足取りで玄関へと向かう。

わずかに心が浮き立つのを、彼も感じていたのだ。

妹の様に、いや、妹として可愛がっている少女の祝いの宴は、彼にとっても楽しみにしているイベントだったのだから。

しかし、そんな彼の心の癒しは、数分後、無情にも取り上げられる事となる。

「ん、なんだ？」

玄関を出たところで、門の辺りが騒がしい事にルルーシュは気付いた。

何やら数名が言い争う声が聞こえてくる。

ここ暫らくは鳴りを潜めていた格式大事な武家連中の抗議の類かと首を捻りつつ、歩を進めたルルーシュは、門の前に仁王立ちして誰かと言い合いをしている家令の谷崎を見つけた。

決して切れる類の男ではないが、謹厳実直で忠誠心も篤く、家中の事を万事遺漏無く取り仕切れる人物である。

もう少し若ければ、先ほど考えていたスタッフにも当てられぬ事も無かったのだが、祖父の代から仕えていた身は既に老齢の域に達しており、今更、畑違いの場所に引きずり出すのも躊躇われた。

数瞬、そんな事を考えていたルルーシュが声を掛けるよりも先に、

こちらに気付いた谷崎老がやや驚いたように声を上げる。

「あっ、若様」

「何事だ騒々し　　「ルルーシユ様っ！」」

応じようとした少年の声を第三者が遮った。

主家の若君に対する無礼に老人の眉がギリリと吊り上る。

だが、彼が怒声を発するよりも一瞬早く、驚愕に目を見開いた当の若君の声がソレを押し止めた。

「……………ジェレミア……………か？」

「ハッ！」

ジェレミア・ゴツドバルトであります！」

驚きと戸惑いが混じる問いに、問われた側は跪き応えを返した。

仕立ての良いスーツが土に塗れるのを躊躇う素振りも見せずに行われたソレは、文化の違いこそあれ、主君に対する臣下の礼である事を察した家令の老人は、喉元に留まっていた叱咤の罵声を飲み込む。

ジェレミアと呼ばれた青年の為した礼は、それほどまでに見事であつた為だ。

だが、その背後に続く者達の反応が、人生経験豊富な老人をして、自身の判断の誤りを疑わせてくれる。

「あゝボク達も居ますよお」

「お久しぶりです」

「……………ロイド……………セシル……………」

軽薄としか言い様のない口調で自己主張する眼鏡の青年と、その脇からオドオドといった感じで挨拶をする生真面目そうな少女。アンバランス過ぎる一行に眩暈にも似た感覚を覚えた老人の脳を、初めて聞く若君の呆然とした声が更に揺さぶってくれた。

「若様、あのこちらの方々は……？」

谷崎老は、脳の奥からジンジンと響く頭痛を堪えつつ、ルルシーユに尋ねる。

主の交友関係に口出しするのを憚りつつも、胡乱な輩を近づける訳には行かぬとの使命感が老人の背を押していた。

そんな忠誠心溢れる家令に対し、一瞬だけ口籠った少年であったが、その後は、先ほどまでの動揺を微塵も感じさせぬ口調でサラリと答える。

「父上の知人だ。欧州でのな」

「齢九歳にして、舌先三寸の嘘がお手のものな困った若君であった。同時に、老人に悟られぬよう目配せ飛ばす辺りは、既に名人芸の域である。」

対して

「ハイハイ、その通りですよ。」

「そのご縁で何度か、お目にかかった事がありました」

「亡きお父君には、一方ならぬお世話になりました」

「……え〜と、その通りです」

約一名を除き、見事なまでにホラ話に合わせてみせる辺り、君臣

の息がピタリと合っていた。

以前、ロイド自身が呟いた様に、良くも悪くも相性の良い主従と言えるかもしれない。

そうやって、余りにも自然に吐かれた嘘を見破るには、家令の老人は実直過ぎた。

「は、はあ……」

まさか阿吽の呼吸で吐かれた嘘とは、夢にも思わぬ谷崎老は、多少の違和感を感じつつも矛を収めると、家令としての職務上、この唐突ではあるが、もてなすべき客人達への対応を、脳内で検討しようとするが、それに待ったを掛ける者達が居た。

「すまないが、篁の家へ連絡を頼む。

伺うのが、少し遅れると」

「その必要は無いわよ。

私の方から伝えておくから」

脳裏を過ぎる頬膨らませた唯依に、手を合わせつつ出そうとした指示が、別方向からの声に遮られる。

その場に居た全員の視線が、一斉に同じ方向へと向けられた。

ジェレミアの双眸が、驚愕に見開かれる。

門の向こう側、今帰ってきたのであろう自家用車の前に、この家の女当主が薄い笑みを浮かべて佇んでいた。

予想外の闖入者に、理解が追いつかず固まる一同。

そんな中、もっとも早く動いたのは、意外にも、或いは順当にも谷崎老だった。

慌てて帰宅した女主人へと駆け寄ろうとした彼に、真理亜は軽く

手を振って下がる様に伝える。

一瞬だけ老人の面に不満の色が滲むが、それは本当に一瞬だけだった。

そのまま不満を飲み込んだ谷崎老は、自身に課した節度に従い、恭しく礼を返すと屋敷内へ戻っていく。

去り行くその背を見送った真理亜の視線が、息子達へと向けられた。

その静かな眼差しに込められた無言の圧力が、息子の声帯と舌に過剰な負荷を与える。

「は、母上……か、彼等は……その……」

どうしたものかと、脳内でこの場を切り抜ける思案を數十通りも走らせつつ、時間を稼ぐかのようにドモリながら言い訳を口にしようとするルルーシュ。

だが、続く真理亜の言葉が、彼の舌を完全に凍てつかせた。

「……ジェレミア・ゴッドバルド、ロイド・アスプルンド、セシル・クルーミー……ようこそ我が家へ『魔王の臣下』殿」

「……っ!?」「……」

「母上!?!」

名乗っていない筈の姓名を呼ばれた三人組が、ギョツとした表情で立ち竦み、その後ろで目を張り裂けんばかりに見開いたルルーシュの口元から、ひび割れた叫びが迸った。

対して母の美貌には、柔らかな笑みが浮かぶ。

「あらら、どうしたのルルーシュ?」

そんな鳩が豆鉄砲を喰らったみたいなおかしい顔して「

「アナタは……アナタは……」  
「ま、マリアン……又……様？」

絶句する息子を他所に、嫣然と笑う美女の姿に、かつて憧れた女傑を見たジエレミアが呻くように呟く。

一方、その呻きをキーワードとして、思わぬ不意打による混乱から立ち直ったルルーシユの胸中に、また騙されていたのかとの疑念が噴出し、足元が崩れていくような錯覚を彼に覚えさせた。

また手の平の上で踊らされていたのかと、これまで信じてきた愛情は、以前と同じく贗物だったのかと、叫び出したくなる想いが彼の内で渦巻き猛る。

そんな息子の姿を、静謐な眼差しで見定めていた真理亜が、一同の面前で、ゆっくりと口を開いた。

「知りたい、ルルーシユ………真実を？」  
「当たり前だ！」

剥き出しの感情のまま激昂する。

もし、もしそうならば赦せる筈が無い。

燃え盛る怒りと憎悪のまま、一歩前に踏み出した彼の足が、二歩目を踏み出す事無く止まる。 否、止められる。

「クッ？」

「こ、これは、ちょっとキツイかな」

「……………」

実体をすら錯角させる程の濃密な殺気が、彼と彼の臣下に襲い掛かってきたのだ。

発生源は言うまでも無く、彼らの眼前に佇む美女。

だが、先ほどまで浮かんでいた微笑は既に無く、鋭く冷たい光を湛えた眼差しが、彼らを映している。

『ば、化け物』

二度の生を通じても、一度として感じた事も無い鬼気迫る圧力に、胸中で呻きながら、それでも屈さぬとの意志が、押し込められようとしていた少年の頭を上げさせた。

紫と黒の視線が互いの間で衝突する。

真理亜の顔に、微笑が戻った。

「そう、なら」

嘘のように消えた威圧感に、尻餅を着き、或いは膝を折るジェレミアらを気にする様も見せず、美女の右腕がスウツと持ち上げられた。

謎めいた微笑みを浮かべながら、真理亜の指先が南を指す。

「ルルーシユ、神根島へ行きなさい。

貴方の求める答えが、そこで待っているわ」

ただ、それだけを言い残すと、最早、用は済んだとばかりに彼女は背を向ける。

完全に気を吞まれた一同は、そのまま歩み去る後姿を、呆然として見送る事しか出来なかった。

「キヤアッ!」

「おっと!」

浅瀬に足を着けた途端、崩れかけた肢体を咄嗟にジェレミアが抱き止めた。

そのまま青い顔をしたセシルに肩を貸し、砂浜へと引きずり上げる。

背後で、引き波に捕らわれたゴムボートに引つ張られるロイドの悲鳴が聞こえていた。

沖に流されかけているロイドの救助に向かったジェレミアを見送ったルルーシユは、砂浜にへたり込んだセシルを覗き込む。

「大丈夫かセシル?」

「……ウプツ……申し訳ありません陛下」

真つ青な顔のまま、それでも律儀に応えを返す姿に、ルルーシユは苦笑を浮かべると、彼女の発言の一部に訂正を入れた。

「陛下は止せ。」

「この国では不敬罪モノだぞ」

お飾りと化している將軍よりも、なお形骸化してはいるが、一応この国のトップにしか使ってはならない敬称だ。

その辺りに五月蠅い連中に聞かれれば、一悶着起きかねないソレをやるわりと注意すると、その意図を汲み、ひたすら恐縮するセシルの横手から、余計な茶々を入れてくる困った奴が現れる。



「うんうん、その通りですよええ。」

それじゃあ、『我が君』という事で

「……それも止せ。目立つだろうが」

「エエエ」

濡れ鼠のまま明らかに面白がっているロイドに、ジト目で提案を蹴り返す。

打てば響くように上がる不満げな声を黙殺するルルーシュに代わり、水も滴るいい男になったジェレミアが強い口調で釘を刺した。

「はしゃぎ過ぎだぞ、ロイド！」

申し訳ありませんルルーシュ様」

「まあ、その辺りが妥当だな」

相変わらず生真面目に、至極真つ当な呼び方を選んだ忠義の騎士に、仕方ないといった風情で応えた。

さすがに呼び捨て、あるいは君付け程度では納得しないのも分かっている。

そうやって今後の呼称に合意を取る中、一人不満そうにブーイングしている男が居たが、これは残りのメンバーから完全に黙殺され続けた為、しばらく後には不満そうに押し黙った。

その辺りを見計らっていたルルーシュは、軽く肩を回して固まった筋肉を解しつつ、一つ指示を出す。

「少し休んでから移動しよう。」

朝から船に乗りっ放しで、流石に疲れたしな」

「はあ〜い」

「ハッ！」

一行は、その指示を契機に、砂浜から少し離れた適当な場所にシートを敷くと、持参の軽食や茶で喉を潤し腹を満たす。

流石にへばっていったセシルは、茶をわずかに口に含んだ程度だったが、それでも先ほどよりは幾分マシな顔色になってきた。

もう暫らく休めば大丈夫かと思案しつつ、ルルーシュは時間潰しも兼ねた確認をしておく事にする。

「ロイド」

「ハイハイ」

唐突に名を呼ばれたロイドであったが、それを感じさせぬテンポの良さで反応した。

手にしていたカップをシートに置くと、ルルーシュの方へと向き直る。

「単刀直入に訊く。」

現時点で、ナイトメアフレームの製造は可能か？」

「無理です」

「ロイド、無礼であろう！」

余りにも素っ気ない返事に、ジェレミアの方が過剰に反応する。

対して、その返答を予想していたらしきルルーシュは、ジェレミアを軽く制しつつ先を続けた。

「やめるジェレミア。」

それは、サクラナイトが存在しないからだな？」

「それが最大の理由ではありませんねえ。」

でも、それだけじゃないですよ」

お分かりでしょ？

と、言外に訊いてくるロイドにルルーシユは渋い顔をする。彼にも、その答えが分かっていたからだ。

「基礎技術力の差か」

「ええ、ここは並行世界つばいですけど、時間軸に数十年以上のズレがあるようですし、技術面に限って言えばそれ以上ですからねえ。SFなんかでよく言われますが、現代の技術者が百年前の世界にタイムスリップしたとして、そこで現代と同じ物が作れると思いませんか？」

道化めいたニヤニヤ顔を改め、真面目な科学者としての表情で問うロイドを前に、ルルーシユも数瞬だけ考え込む。

彼自身の判断としても、この世界とあの世界の時間的差異は数十年でも、科学技術面では一世紀近い差があると踏んでいた。

これだけの差異が産まれたのも、サクラダイトという希少物質の有無にあると言える。

こちらの世界での産業革命は、蒸気機関による外燃機関から始まり、それが石油を主体とする内燃機関へと切り替わったのに対して、あちらの世界では、最初からサクラダイト系技術が進化・発展していったのだ。

主とする動力源の変遷が無かった事、またサクラダイトという非常に使い勝手のいい資源があった事等が、後々大きな差へと広がっていったものと推測でき、事実、産業革命以降の技術発展速度はあちらの世界の方が数段上を行っている。

では、その技術格差を、一人の人間が埋められるかと言えば、答えは『否』である。

この場合、そもそも一人の人間の頭の中に、全ての知識と技術を詰め込めるのかという基本的な問題は抜きにしても不可能なのだ。主に生物学的あるいは物理的な理由で。

単純に考えてみれば、すぐに分かる事である。

ネジ一本から集積回路まで一人で自作する訳にも行かない以上、誰かに協力して貰わなくてはならないのは当たり前前の事だ。

では、その誰かに、クロロシどうやって理論オーバーテすらない一世紀以上先の超越技術の詳細を伝えられるというのだろうか？

口で説明する？

資料を作成して見せる？

どちらもナンセンスである。

一個人が喉が張り裂けるまで説明をしたとしても、伝えられる情報量などたかがしれているし、資料を作るにしても一世紀以上のアドバンテージが持つ膨大な技術情報の全てを書き記すとすれば、下手をしなくても一生モノの仕事となる筈だ。

例えて言うなら、琵琶湖の水を、水道の蛇口一つで、全て汲み出そうとする光景をイメージすればいい。

この場合、水が当人の持つ未来知識・技術であり、蛇口が他者への伝達手段という訳だが、それがどれ程の難事かは、簡単に理解できるだろう。

つまり脳内のデータをアウトプットする手段が、人の口と手といった極めて非効率な方法のみというボトルネックがある以上、流出可能な情報量は厳しく制限され、結果、大した事など出来はしないのだ。

故に、結論は

「……無理だな」

「ええ、無理です。」

ましてや主力兵器ともなれば、その時代の知識と技術の集大成。いくら知識があっても、実際にそれを造れる設備や技術が無ければ造れる筈がない」

皮肉気に口元を歪めたロイドは、大きく手を広げ、おどけてみせる。

「ボクは、技術者であり科学者であって、魔法使いじゃないんですよ」

無から有は産み出せない。  
基礎技術という土台が無いところに、KMFという家は建てられない。

常とは異なる伶俐さすら漂わす眼差しで、ロイドがルルーシュと正対する中、それを不遜と感じたジェレミアが口を挟んできた。

「ロイド……」

「ん〜、怒らないでよジェレミア君。」

そんな事、ルルーシュ様は、先刻ご承知なんだからさあ」

相変わらず生真面目一筋といった友人に興をそがれたのか、眼鏡の青年は軽く肩を竦めると普段の口調に戻り、無責任にもボールをルルーシュへと投げた。

「なに!?!」

「何の為に、ルルーシユ様がOSを作ったり、強引に会社を大きくしたりしてると思ってるのさ？」

そうでしょ？

と言わんばかりの口調で、眼を剥くジェレミアを他所に、苦笑いを浮かべた主へと視線を向ける。

新たな技術基盤の確立と発展。

今後の事を考えるなら、それが必須の要件である事は、ルルーシユにも分かっていた。

だからこそ、その命題を達成する為の方針として、あちら側の超越技術ハイテクノロジーを一足飛びに再現するのではなく、こちら側の技術ローテクをベースとして進化・発展を図り、最終的にそこへ到るべく手を打っているのである。

OSを売り捌いて金を作るのも、会社の規模を大きくするのも、優秀な技術者を囲い込み、潤沢な研究資金を与える為の手段でしかなかった。

そもそも、ポンツと気前良くオーバーテクノロジー超越技術恵んでやっても、それが技術の発展に正しく寄与するかは、大いに疑問が残る。

そこに到る思考を省略してしまえば、技術者は育たないし、本当の意味での技術も育まれることは無い。

故に、ルルーシユも大局的な指針を示す事はしても、微に入り細に入り指示を出したりはしなかったし、実際問題としてそれで充分だった。

辿り着くべきゴールと其処へ至る道筋を知っている分、不要な試トラ行錯誤によるロス無くせるだけでも、技術開発という面から見れ

ば大きなアドバンテージとなり、結果、枢木の技術力を大きく押し上げられている。

ましてや、これからはロイドらも居るのだ。

これまで狩り集めた優秀な人材達が、この奇矯ながら天賦の才に恵まれた男の薫陶を受ける事で、今後そちら方面に関する進捗の向上は目に見えている。

となると、残る問題は

「……サクラダイトが有ればな」

「ストーンヘンジの辺りには無かったですからねえ」

「富士山にも埋まっていない。それは確実だな」

仮にも日本で一番有名な山であり、古来より人の出入りも多い。

火山という性質上からも、その成り立ちを調べる為の地質調査は、これまで充分以上に行われているし、無資源国の悲しさから来る一縷の望みを賭けた資源探査も当然の如く行われていた。

こちら側では未知の物質であるサクラダイトが、数多の人の目、そして科学の眼を逃れて埋蔵されている可能性は限りなくゼロに近い。

無論、富士山以外にも、あちら側にあつた有望なサクラダイト鉱床の場所は、ほぼ全て洗っていたが、その悉くが外れであつた。

そうやって落胆を隠さぬ調子で呟くルルーシュに対し、ロイドがトンでもない事を口にする。

「まあ、アテが無い訳でもないんですけどねえ」

「本当か!？」

「ええ、まあ多分有るんじゃないかな、と」

「何処だ？」

思わぬ情報に勢い込む主の問いに、ニヤリと笑う。

「これから行く場所ですよ」

「ッ？」

盲点を突かれたルルーシュが、数瞬、啞然としてから呻く。

「……成る程な、地面に埋まっている物を探す事に気を取られ過ぎたか」

「まあ、半分埋まってるような物ですから、大した違いは無いんじゃないですかネエ」

おどけた調子で返す青年に、少年は苦笑混じりの笑みを浮かべた。

「違ういな。」

しかし、これで目処がついた」

最大の懸案事項であったサクラダイトが、確保できるかもしれないという朗報にルルーシュの頬も緩む。

それだけでも、ここに来た価値があったと言えるよう。

サクラダイトさえあれば、停滞気味な超伝導技術を始めた多くの超越技術開発への途が開かれる事は確かだったのだ。  
オーバーテクノロジー

五里霧中に思えた前途に射し込んだ光に希望を見出したルルーシュは、それまで敢えて眼を瞑っていた事へと意識を向け愚痴る。

「……本来なら可能な限りの知識を開示し、人類全体で技術の底上げを図るべきなのだがな」



今の枢木だけでは、時間が掛かる。

例えばサクラダイトの入手が叶ったとしても、それを基とした技術体系が実用レベルへと到るには、数年の歳月を要するのは間違いないかった。

だが、人類の総力を傾けて、それを行う事が叶うなら、大幅な時間短縮も決して夢ではない。

……そう、それ自体は夢では無いのだが。

「あつははっくムリムリ。」

そんな事したら、人類が自滅しちゃいますよお」

夢も希望も無い現実を、眼鏡の道化師は平然と口にして、主人の端整な顔を顰めさせた。

幸せを求める人の性は、あちら側もこちら側も変わらない。

だが、こちら側には、あちら側と違い、個々人によって異なる思いのベクトルを取りまとめ一定方向へと向ける為の物 象徴とシステムが欠けていた。

『ゼロレクイエム』により世界に満ちた憎悪を昇華し、『ゼロ』という名の象徴を以って人の思いを取り纏め、『超合衆国』というシステムにより世界を運営していく。

彼が思い描き、そして実現した構想に伍し得る、或いは、準ずる物が、この世界には無いのだ。

大国の意向に翻弄され、調整機関としての役割も充分には果たせていない今の国連には、それを望むべくも無い。

そんな世界に一世以上先の<sup>オーバーテクノロジー</sup>超越技術を放り込んだらどうなるか？  
今の段階では世界に関する影響力を持たぬ身としては、恐ろし過

きて、とても試す気にはなれなかった。  
ましてや

「……………欧州を失って尚、人類は一つになれなかったからな」  
「ユーラシア全土を失っても変わらないさ、間違い無くねえ」  
「ロイドさん、言い過ぎです！」

ジェレミアの嘆きを受けて、皮肉たつぷりにロイドが断言するのを、流石に言い過ぎと感じたセシルが嗜める。

だが、ロイドは肩を竦めるだけで、発言を訂正する事は無かった。ジェレミアも渋い顔をしつつも否定はせず、ルルーシュに到っては眉間に皺を寄せている。

どちらも、ロイドの言を正論と認めざるを得ないからだ。

この不吉な予言が正鵠を射ていた事は、十年の歳月を経て証明される事となる。

そして、未だ道半ばにして、十分な力を持たなかったルルーシュは、その現実に歯噛みしつつも抗い続ける事になるのだった。

改めて認識した先行きの暗さに、どことなく嫌な雰囲気場が満ちる。

そんな空気を振り払う様に、ルルーシュが腰を上げた。

「さて、そろそろ行くか」

「はっ！」

「ハイハイ」

「……………え〜と、どこへ行くのでしょうか？」

申し訳無さそうに首を傾げるセシルに一同の視線が集中する。

「「「……」「」」  
「うっ？」

困った様な呆れた様な視線に、少女の腰が引けた。

そうやって、どう反応を返すべきか、互いに悩む一同の上に、思わぬ声が降って来る。

「なら、私をご案内致しましょう」

「「「「！？」」「」」

控えめな女性の声。

だが、無人島の筈のこの場においては、警戒する以外無いソレに、ジエレミアが敏感に反応する。

「何者！？」

一瞬で、声の放たれた方角とルルーシュの間に割って入った青年は、懐から銃を抜き放つや、木々の向こうに僅かに覗く人影へと向けた。

わずかでも怪しい素振りを見せれば、即座に射殺する事も辞さないジエレミアの気迫を感じ取ったのか、或いは、始めからそうしていたのか、人影は敵意の無い事を示すかの様に両手を挙げたまま近づいてくる。

そして十数秒後、木立の間を抜けたその人物は、彼らの前へ姿を現した。

「「「「ッ？」「」」

一同が驚きに目を見張る中、メイド服を着た十代前半と思しき少

女が、ルルーシュにむけて、恭しい仕草で頭を垂れる。

「お久しゅうございます、ルルーシュ様」

そう言って上げられた少女の容貌が、ルルーシュの記憶の中にある女性と一致した。

「咲世子……か？」

「はい」

まだ年若い、だが間違いなく篠崎咲世子のソレと瓜二つの顔を持った少女は、ルルーシュの問いを嬉しそうに肯定する。

その声、その仕草、その挙措。

それら全てが、少女が旧知の人物の若き日の姿であるとルルーシュに告げていた。

紫の視線が転じられ、恐らくは同類である筈の三人へと向けられる。

「……知っていたのか？」

ルルーシュの問いに、そろって首を振る一同。

そんな一行の姿を見ていた咲世子が、以前通りの控えめな調子で助け舟を出した。

「御三方には、連絡を取っておりませんでしたから。

こちらに居られるとの確証も、ありませんでしたし………」

その瞬間、ルルーシュにはピンと来た。

そもそも自分達と咲世子が、ここで出会った事自体、偶然である筈が無い。

咲世子が、この島に住んでいるとでも言うなら別だが、そうでなければ誰かに教えられ、或いは、指示されて此処に居た筈なのだ。そして、そんな真似が出来る人物は、一人しか居ない。

「ならば、お前を此処に来させたのは母上か？」

「ご明察、恐れ入ります」

そう言っただけでルルーシユの問いを肯定する少女を、彼は複雑な眼差しで見つめた。

咲世子の返答は、彼女が母の意向を受けて動いているという意味でもある。

それは、自分にとって、彼女が敵である可能性をも示していた。

篠崎咲世子は、ルルーシユが信頼した数少ない人物であり、そして最後までその信頼に応えてくれた相手でもある。

それを疑うような真似は、彼としても、したくなかった。

そう、したくなかったのだ……

軽く瞑目し、深く息を吐いて心を落ち着けたルルーシユは決断する。

「分かった。

ならば、案内を頼む」

「はい、それでは参りましょう。『遺跡』へ」

以前と違わぬ恭しさで、一礼を返した咲世子は、予想通りの場所を口にする。

かつての富士決戦と並ぶ、知られざるもう一つの決戦の地。  
忌まわしきコードとギアスに因縁深き場所。

そこが、彼の求める真実が、彼を待っているという場所であった。

春の陽射しがさす縁側で、何をするという訳でも無しに、枢木真理亜は腰掛けていた。

満開の桜が春風に揺らされて、静々と花びらを散らしていく様を、ぼろっと見つめながら、心ここに在らずの態で座している姿は、バイタリティに溢れた彼女には、余りにも似つかわしくない。

フウつと一息、溜息を吐くと傍らに置かれた盆の上から湯飲みを取って茶を啜る。

どごそのご隠居と間違われても、おかしくなさそうならしくない姿。

どこか風景に解けて消えてしまいそうな存在感の無さが、ある時、不意に濃くなった。

片手に持った茶碗を盆に置き、視線を巡らす。

その先、廊下の奥の方から、微かな足音が響いてきた。

真理亜の表情に感情の色が戻る。

「お帰りなさい、唯依ちゃん」

「ただいま戻りました、真理亜おば様」

やや息を切らした少女を笑顔で出迎えた。  
対して唯依は、いつも通り礼儀正しく帰宅の挨拶をする。

昨日の宴会の後、急ぎの出張が入った篁中佐から、再び唯依を預かる事になったのだ。

もはや、どちらが自宅がよく分からなくなりつつある唯依であったが、当人には特に不満は無いらしい。

いや、それどころか……

「思ったよりも早かったわね。

学校は、楽しくなかった？」

キョロキョロと辺りを見回している唯依に水を向ける。

「そんな事は……ないです」

「ふふっ……なら、別に早く帰ってくる理由があったって事かしら？」

慌てたように首を振り否定する少女を、面白そうに追い詰めるのは中々に意地が悪かった。

そうやって、瞬く間に追い詰められた唯依は、言葉に詰まる。

「うっ……」

「……残念、ルルーシュは、まだ帰ってないわよ」

「……別に、そういう訳では……」

口籠る唯依に、お目当ての不在を告げる。

明らかな落胆の色を、少女は浮かべた。

だが、はしたないと思ったのか、口を突いて出たのは否定の言葉

である。

しかしそれは、この場合、トンでもない悪手であった。  
真理亜の美貌に、悪戯っぽい笑みが浮かぶ。

「あら、違うの？」

ルルーシュが帰ってきたら落ち込みそうねえ。

唯依ちゃんにとっては、居ても居なくても同じと言われちゃった  
んじゃない」

「そ、そんなこと言ってませんっ！」

ルル兄様が居なくって、私が　　ッ!？」

煽られて思わず本心を口にする、否、口にさせられる唯依。

ひどく楽しそうな笑い声が響き、嵌められた少女の頬が、真っ赤  
に染まる。

「……………おば様、また唯依をからかいましたね!」

「ごめん、ごめん。」

……………だって可愛いんだもの。

ムキになって否定するところなんか、もう最高!」

ジト眼で睨む唯依の前で、腹を抱えた真理亜がケラケラと笑う。

少女の頬が、風船のようにプクツと膨れた。

「……………おば様の意地悪」

明らかにムクれた様子で、恨み言を口にする。

そんな唯依の姿に、流石にやり過ぎたと感じたのか、目尻に溜ま  
った涙を拭くと真理亜は手を合わせて詫びを言う。



「ごめんなさいね。」

お詫びに髪を梳いてあげる。

走ってきたんでしょうけど、少し乱れてるわよ」

「……………」

そつぽを向いた唯依の耳が、一瞬だけヒクついた。

だが、意地があるのか、そう易々とは靡いてはくれない。

そんな少女の姿を、微笑ましげに見ながら、真理亜は更に下手に出ることにした。

「おばさん、唯依ちゃんと仲直りしたいなあ

ね？」

「……………なら許してあげます」

真理亜の誘いに、しづしづといった様子で、こちらを振り向く唯依。

だが、その瞳が期待に輝いているのが、彼女の本心を如実に表していた。

なんだかんだと言いつつも、真理亜に懐いている唯依は、最後はこうして許してしまうのである。

何よりも、からかう事自体が、彼女にとっての愛情表現の一種である事を、少女自身が感じ取っていたのが大きかった。

「そう、ありがとう。」

そつ、いらっしやい」

そう言っつてポンポンと自分の膝を叩く真理亜。

少し怒った風を装いつつも、隠し切れぬ嬉しさと共に唯依は膝に乗ると、袖に入れていた誕生日祝いに貰った櫛を渡す。

渡された櫛を手を取った真理亜は、まず乱れた箇所を整え始めた。程なくして、それが終わると、今度は唯依の髪全体をゆっくりと梳かしていく。

まだ、少し背に掛かる程度の長さの黒髪は、持ち主同様の素直さで、櫛に絡む事も無く綺麗に梳かされてくれた。

そうやって、優しい手つきで髪を梳かれる感触に、唯依は気持ち良さそうに眼を細める。

柔らかな膝の弾力と包み込まれるような感覚、母の匂いを強く感じるこの時が、彼女はとても好きだった。

「うん、ちゃんと手入れしてるみたいね。

枝毛も無いし、色艶も申し分ない素敵な髪よ」

一房だけ前へと流された飾り布リボンで束ねられた黒髪を手に取り、満足そうに呟く真理亜。

明らかな褒め言葉に、唯依のうなじが少し赤らんだ。

「おば様に教わった通りに、毎日やっていますから」

「ルルーシユの為に？」

「お、おば様！」

隙を見せた途端、再び入れられた茶々に、白い頬が真っ赤に染まる。

心臓の鼓動が早くなり、耳まで熱くなるのが感じられた。

そうやってうるたえる様子を、楽しそうに鑑賞していた真理亜が、小さな含み笑いを零す。

「ふふふ……」

「むうう……」

唯依の頬が、また膨らんだ。

それを見てクスクスと笑いながら、真理亜は膨らんだ頬を指でつつく。

「そんなに膨れないの可愛い顔が台無しよ」

「……知りません！」

誰の所為ですか！ 誰の！

と、頬とは違い未だ膨らむ兆しすらない胸中で、そう怒鳴りながら、再びそっぽを向く。

だがそれでも、膝から降りる気配はなかった。

そこから降りるのは、母の温もりを知らぬ少女にとって惜し過ぎたから。

そんな唯依の内心を知ってか知らずか、真理亜は手にしていた櫛をゆつくりと脇に置く。

「あらあら、また怒らせちゃった」

そう言っつて膝の上の少女を、柔らかく抱きしめた。

一瞬強張る小さな身体、だが伝わる温もりに、緊張が淡雪のように儚く融けていく。

「じゃあ今度は、お詫びに御伽噺をしてあげましょう」

「……………」

ポンポンっと、唯依のお腹の上でリズムを取るように、或いは幼

子をあやす様に真理亜の手が動く。

身体力が抜けてしまった唯依は、良い香りのする大きな胸元に頭を預けながら、拍子に誘われるように、そうっと眼を閉じた。

朗々たる声が響く。

戦場で兵を率い、叱咤し、激励する武人の声が高らかに謳う。

「そこは遠い世界。

此処ではない場所。

今ではない時。

でも、同じ人々が生きる世界」

混迷するその世界に、光をもたらした王と魔女と英雄の物語を。

「その世界を、閃光のように駆け抜けた優しく悲しい魔王のおとぎばなし」

『ゼロ』と呼ばれた記号の御伽噺を

咲世子に導かれた一同は、森の奥深くに眠る黄昏の門を潜り、遺跡内部『Cの世界』へと通ずる黄昏の間へと到っていた。

「ここが……」

薄暮に染まる世界を、呆然として眺めながらセシルが呟いた。その声を背に受けながら、自身が確認するかのようルルーシュが応える。

「黄昏の間、『Cの世界』へと通ずる場所」

それに続く声が、金色に沈む世界に響く。

「どこでもなく、どこでもある場所。」

現実と乖離したこの世界ならば、私もこうしてお前に会える」

世界の住人が一人増えた。

背に届く髪を持つ年齢不詳の美女。

かつて、彼の共犯者であった者。

コードの呪いに囚われ、永遠を歩む事を運命付けられし魔女

C・C・

「……久しいな我が契約者。」

愛しき我が魔王よ」

一瞬だけ、眉を顰めた彼女は、次の瞬間、不敵な笑みを浮かべると、変わらぬ口調で彼に語りかけてきた。

「……やはりおまえか、C・C。」

「ふむ、その言い様では粗方察していたか？」

不機嫌そうではあっても、驚いていないルルーシュの声に、魔女はフムとばかりに首を傾げた。

そこまで伝える予定は無かった以上、独自に察したという事。  
まあ、眼前の契約者の頭の切れ味なら、断片的な情報からでもある程度は真相に近づけるかと納得する。

そして、それは正しかった。

「この因縁の場所に行けと言われたのだ。

ある程度は、察せて当然だろう」

「相変わらず血の巡りが良い事だ。

……さて、お前達も久しぶりだな。

無事ルルーシュの下に辿り着けて何よりだ」

ぶつきらぼうに謎解きをするルルーシュに、魔女の美貌にも苦笑が浮かぶ。

驚く顔を見て楽しむつもりだったが、まあ良いかと諦めると、今度は同行者達へと水を向けた。

「どうも」

「お久しぶりC・C」

「貴女に感謝を。」

貴女の導きにより、私は再び忠義を尽くす機会を得られた」

三者三様の変わらぬ態度に、今度は純粹な笑みが浮かんだ。

「まあ、上手く行くかどうかも分からぬ賭けだったのだからな。

勝ちを拾えたのは貴様等の運の良さ……いや、執念の強さと言っべきかな」

そう、彼女にしても初めての試みだった。

前例の無い危険な賭け。  
勝ったのは、紛れも無く、この彼ら自身の力に拠るものだ。

賞賛の一つや二つはしてやっても、バチは当たらないだろう  
そう思ったC・Cは、彼女にしては珍しく素直に褒めたのだ。

だが、一刻も早く、問い質したい事がある人物にしてみれば、それは時間稼ぎのようにも思えたらしい。

やや不機嫌さを増した声で、ルルーシュは、以前の共犯者へと詰め寄った。

「さて、明かしてもらおうぞC・C・

貴様と母上の関係……いや、母上は『マリアンヌ』なのか？」

誤魔化しも逃げも赦さない。

問い質す言葉の隅々にまで染みこんだソレに、魔女は皮肉げな笑みを浮かべて返答を返す。

「……その問いの答えは、イエスであり、ノーでもあるな」

「……………」

ルルーシュの双眸に宿る光が、鋭く険しくなる。

背後に控えていたジェレミアが、万一の場合に備えて身構えた。

それをすら弄う様に、魔女はクツリと笑う。

「フフ……そう怖い顔をするな。

順序立てて説明してやる……まず、この世界が並行世界である事は理解しているな？」

「ああ、その程度はな」

どうやら真面目に受け応える気になったと悟ったルルーシュは、溢れ出ていた殺気を収め、魔女の問いに頷いた。

その態度の変化を受け、満足そうに魔女も頷く。

「結構、時間軸に多少の差異はあるようだが、私が観測していた限りでは時の流れ、世界の根本については基本的に同じ物だ」

いきなり世界について語り出したC・C・に、BETAもかと、突っ込みたくなるのを堪え先を促す。

「故に、この世界にも『お前達』が存在する確率は、初めからあったのだ……ここまで言えば分かるだろう」

それは以前から予想していた事。

だからこそ、すんなりとルルーシュの口から零れ落ちる。

「……母上は、この世界の『マリアンヌ』という事が……しかし、それなら何故？」

自分達の事を知っている。

それだけが解せない。

そう問うルルーシュに、魔女は可笑しそうに笑ってみせる。

「何故？……簡単な事だ、オマエが教えたのだよ」

「オレが！？」

「そうだ。」

お前という異世界の魂を、その身に宿した際、あいつはお前の記



憶を視たのだ『夢』という形でな」

流石は『調整者』の末裔というべきか。

愕然とするルルーシュを他所に、C・Cは、そう感慨深げに述べ、そして言葉を紡ぐ。

「そして真理亜は、夢で見た此処を訪れ、観測者たる私と出会った」

パズルのピースが噛み合った。

ルルーシュの肩から、ホッと力が抜ける。

「……そういう事か」

「そういう事だ。」

アイツには感謝しろよ、並の女なら気味悪がって墮胎おんごうしていても不思議じゃない」

明らかに安堵した様子のルルーシュを、からかう様に魔女が告げる。

お前が、今ここにこうして居られるのは、真理亜が母親だったからだと。

そんな母を疑ってしまった息子は、バツ悪そうに眼を逸らす。

「……言われるまでもない」

「ふふ、良かったなルルーシュ。」

今世の母上が、佳い女で

「言ってる、魔女が」

楽しそうに追い討ちを掛けて来るC・Cに、そっぽを向いて吐

き捨てる。

だが、わずかに染まった頬が、彼の心情を如実に表していた。

どうにも素直になれない共犯者を、魔女は心底おかしそうに笑いながら話題を変えてくる。

「さて、今度は私からの問いだ」

黄昏に沈む朽ちた神殿の柱を撫ぜながら魔女が語る。

「この遺跡本来の機能では、異なる世界間を越えて物質が移動する事など出来ない。

だが、遺跡そのものを壊す覚悟があるなら、一度だけそれを行う事も可能だ」

「へえ〜凄いですねえ」

遺跡から別の遺跡への瞬間移動システム。

そのイレギュラーな使い道を解説し出す魔女に、興味を惹かれたロイドが眼を輝かせながら相槌を打つが、それとは対称的にルルーシユの表情は、硬く強張った。

魔女の言わんとしている事に、いち早く気付いたからだ。

わずかに棘の生えた声が、少年の口から放たれる。

「……何が言いたいC・C」

魔女の面に嫣然たる笑みが張り付いた。

誘うような、嘲るような声音が、形よく整った唇から零れ落ちていく。

「お前達は、本来この世界の存在ではない。  
こんな滅び行く世界に義理立てして、一緒に死んでやる理由もな  
かるう?」

言外に続くその誘惑に、ある者は逡巡し、ある者は不快感を露に  
する。

「だから、この世界を見捨てる、と」

「その通りだ。」

なに心配することは無い。

こちらでは、あの日から既に三十年近く経っている。

『悪逆皇帝』も、今では歴史上の人物でしかない」

隠し切れぬ憤りが混じった声で問うルルーシュに、魔女は平然と  
言い返した。

そんな事ではない。

そんな事を気にしている訳ではない。

喉元まで込み上がってきた叫び。

しかし、それを遮る様に魔女が嗤う。

「それとも母親が心配か？」

そうそう篋唯依と言ったか、お前がナナリーの身代わりに可愛が  
っている少女が居たな、そっちが気になるのか?」

ルルーシュの中で何かがキレた。

押さえを無くした感情が、怒声となって迸る。

「取り消せC・C・！  
唯依は、ナナリーの代用品じゃない！」

発散される怒気に、思わずセシルが後ずさる。  
だが、直接それを向けられた当の本人はと言えば……

「おお〜怖い怖い。  
フフツ……まあ良い。  
気になる連中が居るなら全部まとめて連れて来ればいい」

それなら問題あるまい　　そう言って、平然と肩を竦めて見せた。

ルルーシユの奥歯が、ギリギリと軋む。  
負け犬となって逃げ出せと言う元共犯者に強い反発を感じ、そして同時に、心のどこかでそれに賛同する部分があったのが赦せなかったのだ。

ルルーシユの世界は意外と狭い。  
C・C・の提案に乗って、親しい者のみを連れて逃げ出す事も不可能ではなかった。

何よりも、予想外の援軍　ジェレミアらの助力を得てなお、勝算は決して100%に届く事は無い。

いや、このまま戦いが続くなら、いつか必ず、誰かが失われる  
口ロやシャーリー、或いはユフィの様に。

そんな事になる位なら、いつそ！

そう思ってしまう己が、どこかに居る事が堪らなく嫌なのに切り捨て切れないジレンマ。

秀麗な容貌に、深い苦悩の色が滲む。

一方、一転して、一触即発となった雰囲気にセシルは青褪め、ジエレミアは再度身構えた。

唯一、ロイドのみが興味深そうに両者を見据える中、C・Cが再び口を開く。

「さあ、選ぶが良い。

この滅び行く世界と決別し、本来あるべき世界へと戻るか否かを」

甘く芳しい誘惑の実を掲げ、魔女は再び嗤った。

「かくして世界は平和になりました。

優しい魔王のついた悲しい嘘に支えられて……おしまいっ」と

「……………」

そう言っつて、長い長い御伽噺を締めくくった真理亜は、膝の上に居る唯依の頭を撫でながら声を掛ける。

「どうだった唯依ちゃん？」

「……………」

頭を撫でられて我に返った少女は、目尻に溜まった涙をゴシゴシと拭う。

それを見てみぬフリをした真理亜は、御伽噺の感想を尋ねた。

「どうしたの気に入らなかった？」

「……初めて聞くお話です。」

「……悲しいお話だと思います」

気に入る入らないは言わず、ただ悲しいとだけ言う唯依。

そんな少女の答えに、一つ頷くと、優しい手つきで髪を撫で続けながら、真理亜は更に問いを重ねる。

「唯依ちゃんは、どう思う？」

魔王の採った行動を

「……あっ……う……」

唐突な問いに口籠る。

真理亜の口元が、微かに綻んだ。

「思ったままを言ってみれば良いわ。」

正しい答えが、ある訳じゃないもの」

「そう正しい答えなど無い。」

胸中でそう呟きつつ、穏やかに促す。

その声に背を押される様に、唯依がポツリポツリと口を開いた。

「……間違っていると……思います」

「……」

たどたどしい自分の言葉に、大好きなおば様は、ゆっくりと頷いてくれた。

それに力を得た唯依は、感じたことを素直に話し続ける。

「……嘘はいつか、いつかきつとバレる時が来ると思っています。だから……だから、その時が来たら、きつと皆が後悔します」

全ての人が後悔すると言う唯依に、真理亜は眼を細める。

そんな少女の純粹さを好ましく思いつつも、彼女自身の意見は少し異なっていた。

そう、真実を知ってなお、後悔した者としなかった者は、半々だった事を、彼女は知っていたから

そんな真理亜の内心を他所に、拙いながらも一生懸命言葉を紡いでいた唯依が、最後に結ぶ。

「……だから、魔王は間違っていると思います」

最後にそう言い切ると、唯依はホッと息を吐いた。

緊張で、カチコチになった身体から、ゆっくりと力が抜けて行く。

そんな少女の様子を、微笑ましそうに見ていた真理亜は、唯依の答えに応じるように彼女自身の考えを口にする。

「そう………確かにそうね。」

嘘はいつかバレる。

一年後か、十年後か、あるいは百年後か………」

自分の考えに賛同して貰え、嬉しそうに頷く唯依。

だが、その後に続いた言葉には、戸惑う事になる。

「でも、おばさんは、こう思うの。」

そんな事は、魔王にも分かっていたんじゃないかって……」  
「えっ？」

「たとえ、いつかバレる嘘、いつか終わる平和であったとしても、それでも魔王は、優しい明日が欲しかったのよ。」

……それが、いつか必ず壊れる仮初のモノであったとしても」

そう、世界が如何に移ろい易いかを、『彼』ほど知っていた者は居まい。

『彼』が愛した肉親達は、『彼』を欺き、罵り、刃を向けた。

『彼』に仕えた部下達は、『彼』を裏切り、叛き、敵に売り渡した。

そして、『彼』を愛した者の多くが、『彼』の目の前で非業の死を遂げた。

そんな『彼』が、永遠などという物を信じられた筈が無いのだ。

『彼』が、『王』が、信じ求めたのは 『明日』

『昨日』<sup>過去</sup>でもなく、『今日』<sup>現在</sup>でもなく、『明日』<sup>未来</sup>を。

永遠という名の停滞ではなく、希望という名の変化をこそ是とした。

きっと『明日』は、『昨日』よりも、『今日』よりも、良くなる<sup>と</sup>信じて。

幸せを求める人の性を信じ、その行くべき道を開き指し示した。

そんな『王』の魂を宿す我が子を誇りに思い、そして、それ故に、その未来を案じる。



もう二度と、人柱になどさせない。  
させてなるものか、と。

世界よりも、何よりも、自分が腹を痛めて産んだ息子の方が大事。

奇しくも、同じ時刻に不老不死の魔女が告げた様に、彼女もまた『マリアンヌ』である事に変わりはない。

自分の一番の為なら、それ以外の全てを笑って切り捨てられるのが、良くも悪くも彼女なのだから。

だからこそ、その為なら、あらゆる布石を打ち、いかなる手段を採る事も躊躇うことは無い。

そう、例え

「ねえ唯依ちゃん。

唯依ちゃんが、もしいつか、魔王に……いえ魔王になりそうな人に出会ったら、止めてあげてね」

例え、自分を母の様に慕うこの好ましい少女を、利用する外道と成り果てようとも。

「おば様？」

唐突な言葉の意味が分からず、可愛らしく首を傾げる唯依。

その仕草を愛おしく思いつつも、それでも彼女の唇は言葉を紡ぐ事を止めない。

これが絶対に必要な一手であると、彼女の中の何かが告げていたから。

「魔王を止められるのは、英雄でも、魔女でも、聖女でもないのよ。……ましてや、正義の味方気取りの道化ビエロなんて論外ね」

脳裏を過ぎる夢に見た道化達に、思わず冷笑を浮かべてしまう。初めて見る冷たく硬いその笑みに、見上げる唯依の顔に一瞬だけ怯えが浮かんだ。

だが、真理亜の真意が分からずとも、なにか大事な事を伝えようとしている事を悟った唯依は、躊躇いがちに問い掛ける。

「……なら、誰が止められるのですか？」

「ふふっ……それはね……」

桜の枝を揺らしながら一陣の風が吹き、真理亜の声を散らす。

この時、唯依のみに届いた言葉の真意を、彼女が本当の意味で理解するのは、十年以上の歳月を経て後の事だった。

統一暦二十七年 黒の騎士団総本部・軌道ステーション『アス  
ガルド』

いかなる国家にも属さぬ象徴として、地球周回軌道上に座するその人工の星は、今日は比較的穏やかな一日を終えようとしていた。

そう、海賊討伐が七件、紛争調停が一件、苦情処理が多数という近年稀に見る平穏な一日。

この黒の騎士団を総括する人物『ゼロ』が、日付が変わる前に自室に戻れるという事が何よりの証左であった。

コツコツと足音を響かせながら通路を歩む彼は、常と変わらぬ仮面と黒衣。

人種・性別・年齢その他全てが謎のままな仮面の英雄が、かの悪逆皇帝を倒し世界を解放してから既に三十年近い時が流れていた。

あの解放の日より二十七年、破壊と闘争に向けられていた人類のエネルギーは、仮面の英雄の指揮の下、統一と発展へと振り向けられている。

既にその足跡は月を越え、内は金星に、外は木星へと至り、火星においては増大し続ける人口の将来的な受け皿と為すべく一世紀に及ぶタイムスケジュールの下、テラフォーミング作業が始まっていた。

全ては、『彼』の描いた理想のままに。

人類は、今も明日に向かって歩み続けている。

コツン……

英雄の足が止まった。

認証システムに手を翳し、自室の扉を開く。

そのまま一歩踏み入ったところで、再び彼の足が止まった。

プンツと香る濃厚なチーズの匂いに仮面の下で眉を顰める。

匂いまで感じられる辺り、妙に凝ったギミックであるが、いま重要なのは其処ではなかった。

彼以外に入れぬ筈の室内から、それがしているという事こそが、重要なのである。

数瞬、逡巡を見せたゼロであったが、ふとある事に思い至り、警備への連絡をする事無く奥へと入っていった。

稀代の英雄の居室としては質素過ぎる廊下を抜け、匂いの発生源と思われる応接間の前に立つ。

気配を隠す気も無いらしい室内に居る人物の動向は、扉越しにも粗方ゼロには察せられた。

黒い仮面の内側で疲れた溜息を零すと、彼はドアを開けて中に入る。

「君か、C・C。」

廊下と同様に質素なソファにふんぞり返った予想通りの人物に、呆れた口調で声を掛けた。

「ああ、私さ。

久しぶりだな、魔王の代理人」

「間違えなくてもらおう。私は『ゼロ』だ」

十年前、最後に会った時と寸分違わぬ姿で、ピザを片手に応える不遜な魔女に、彼は激する事も無く切り返す。

そう、その身は『ゼロ』。

あの日、あの時、交わされた誓約キアスの下、その生命が燃え尽きる瞬間まで、ただの記号ゼロとして世界を導くモノ。

それだけは否定させぬという強靭な意志を載せた言葉に、魔女は微かな笑みを浮かべた。

「フフン……そういう事しておこうか」

そう言ってニヤリと笑うと、手にしたピザを口に作る。  
問う様な、咎める様な視線がゼロから放たれた。

「ああ、このピザか？」

私が注文した、お前のツケで」

「C・C……………」

ケロツとした調子で、無言の問いに答える魔女に、ゼロは微かな頭痛を覚えた。

床に無造作に詰められた空き箱の山。

テーブルに載った未開封のピザの箱の数々。

ザツと見ても三十枚は下らぬソレを、あるうことか『ゼロ』のツケで注文するとは……………」

明日以降、『アスガルド』内で流れる噂を想像し、彼はゲンナリとした気分を味わう。

そんな英雄の姿を、ニヤニヤしながら楽しんでいた魔女は、笑いを噛み殺しつつ本題に入った。

「そう怒るな。」

「情報料代わりだ、ピザの十枚や二十枚、安い物だろう？」「情報料？」

不審げな応えに、魔女は再びニヤリと笑った。

そのままピザを呑み込み、油で汚れた指を拭くと、言葉の爆弾を放り投げる。

「我が愛しき魔王の紡ぐ新たな物語……聞きたいだろ？」

そう言って不老不死の魔女が嫣然と笑う。

彼女の言葉の意味する物　それを知りたいという誘惑に、さしもの『ゼロ』も打ち勝つ事は叶わなかった。

西暦一九八九年二月

先年、戦術機用新型OSを発表し、世界の軍事関係者から注目を集めていた枢木工業が、戦術機とは機体構造からコンセプトの異なる人型機械『メアフレーム』を土木作業用として発売開始。

後にRTOSシリーズと並ぶ枢木グループのドル箱商品として、グループの隆盛に大きく貢献する事となる。

メアフレーム・シリーズは大別して、全高四〜六mの『ライト・メアフレーム』、八〜十mの『ミドル・メアフレーム』、十二〜十四mの『ヘビー・メアフレーム』の三種類に分類されるが、全高が戦術機の半分以下に収まるライト・ミドルは、機体サイズの小ささから縦揺れが少なく適性等はあまり問われない為、多くの人に好まれた。

特に前線もしくはその近辺での作業に当たる者からの信頼は厚く、

小柄ではあるが、↑「バブル・フレーム・ストラクチャ」内骨格構造を採用した機体そのものは極めて堅牢で、熟練者がBETAの小型種を撲殺したという逸話を数多く残し、予期せぬ戦場と化した前線で多くの作業者の命を救う事となった。

また前線国家では、戦術機よりも安価で、かつ頑丈なヘビーに、簡易装甲を施し拠点防衛に用いる例も多く見受けられる様になるほど素性の良い機体としても知られている。

だが、この新たな巨人の逸話で、最も特筆すべきなのは、後年、人類史上初の通常兵器のみによるハイヴ攻略を成し遂げた人型機動兵器『ナイトギガフレーム』の原型となった機体とされる事である。KGF開発の経緯については関係者が黙して語らぬ為、ほとんど事情が明かされていないが、各国及び国連の執拗な要請に応え、二〇〇一年アラスカ州・ユーコン基地にて開示された情報により、その特異な機体構造 発電機と人工筋肉を兼用するマツスル・フレミングを始めとし、一つの構造体に複数の機能を付加した『マルチ多プル・コンストラクション』は、メアフレーム・シリーズの『MFS内骨格構造』を、進化・発展させた物と結論付けられたからだ。

尚、この結論を受けて、各国がヘビー・メアフレームを研究用に大量購入したりしたのは、完全な余談である。

PHASE 3      ・再会・邂逅・そして……（後書き）

色々ネタが出てきましたが、話に出せるのはいつの日か。  
一話一年で飛ばしても、後、何話になることやら。



閑話　： 篁唯依の日記（西暦一九八八年四月）（前書き）

今週は本編更新は無いので、まあ、前菜代わりに  
それでは、どつど。

閑話　：　篁唯依の日記　西暦一九八八年四月　

西暦一九八八年四月三日

今日、ルル兄さまが、かえって来られました。

ぶじもどられたのは良かったのですが、見たことの無い方たちも  
いっしょでした。

兄さまが言われるには、亡くなられたルル兄さまの父さまのお知  
りあいの方たちとの事です。

これからとうぶん、こちらのお屋しきでごやつかいになるとの事  
でした。

唯依にもなか良くやってほしいとたのまれました。

兄さまが、そのぞまれるなら、がんばろうと思います。

でも、少しだけ……いいえ、なんでもないです。

おしまい。

西暦一九八八年四月七日

ルル兄さまは、今日もいそがしくされています。

お仕事に、しゅうれんに、

でも、唯依は、少し不まんでした。

いえ、ルル兄さまが、唯依のあい手をしてくれない事ではないで

すよ。

あたらしく、くるる木の家にやとわれた女中のさよ子さん。

あの人が、唯依のお仕事を、ルル兄さまにお茶をいれたり、あせをぬぐってあげたりを、とってしまっただです。

それは、唯依のお仕事です。

おいそがしいルル兄さまと、ゆっくりおはなしできるき会なので  
す。

そうおもっていたら、なぜか今日は、さよ子さんから、ルル兄さまに、お茶をいれてあげてほしいと、たのまれました。

……うん、しかたありませんね。

女中さんとしては、間違いありとおもいますが、ルル兄さまのためです。

今日からは、また唯依が、ルル兄さまにお茶をいれてあげましよう。

西暦一九八八年四月十四日

めずらしくいわやのおじさまが、父さまといっしょに、くるる木のお屋しきにやって来ました。

お仕事が片づいたので、唯依をむかえに来られた父さまについて来たとの事でした。

しばらく、くるる木の方たち、とくにジェレミアさんや、ロイド

さんとさわいでおられました。が、夕食をいただいたあと、おいとまする事になりました。

今日は、久しぶりに篁の家にもどってきました。

でも、少しだけ気になったのは、かえりぎわのセシルさんの表じようでした。

なにか、おじさまをにらんでいるような感じが………

唯依の気のせいだったのでしょうか？

西暦一九八八年四月二十日

今日は、またくるる木の家にお世話になりました。

父さまとおじさまがかかわっている新しい戦じゅつきの開はつで、色色とおいそがしいそうです。

でも、お国のための大じなお仕事です。

唯依のことは気にせずがんばって下さいと言ったら、なぜかおじさまが、わんわん泣いてしまいました。

唯依は、何か、おかしい事を言ったのでしょうか？

あと、またセシルさんが、おじさまをにらんでいました。

唯依をだきしめるおじさまのよこ手から、こっ、じいいっといつかんじで。

なぜなのでしょう？

よく分かりませんが、きくのもこわい気がしたので、ききませんでした。

西暦一九八八年四月二十二日

しょうげきの事じつを知ってしまいました。

おじさまが、いわやのおじさまが、不ちのやまいに、かかられて  
いるなんて。

そんな、そんな……信じられませんでした。

あんなにお元気そうなおじさまが……

でも、セシルさんとおばさまが、二人ではなしていたのです。

おじさまが、びょう気だと。

それも、なおす方ほうの無いやまい 『ろりこん』だと。

はじめてきくやまいです。

もしかしたら、西よつのびょう気なのかもしれません。

ああ、どうしておじさまが、そんな目に。

唯依は、唯依は、どうすればいいのでしょうか？

西暦一九八八年四月二十八日

お仕事のおわった父さまにつれられ、篁の家に戻りました。夜になり、いわやのおじさまも、うちあげと言ってあそびに来られました。

とうさまといっしょに、たのしそうにお酒をのんでいるおじさま。

不ちのやまいに、おかされているにもかかわらず、いつも通りのよう気さを、よそおっているおじさまを見ているうちに、唯依の目からポロポロと、なみだが、こぼれだしてしまいました。がまんできなくなったのです。

おじさまのいたいたしいすがたを、見ているのが。

いきなり泣き出した唯依に、父さまも、おじさまもおどろかれ、オロオロしながらどうしたのかときいてきました。

もうだまっている事に、たえられなくなった唯依は、セシルさんとおばさまが、はなしていた事を、打ちあげました。

おじさまが、不ちのやまい『ろりこん』にかかり、あすをも知れぬみなのだと。

しゃくり上げながら、はなしおえたとき、唯依はようやく気づきました。

なんと言うか、くうきがかたいと言うか、つめたいと言うか……（これが、むかしルル兄さまが、おしえてくれたくうきをよめるというかんかくだったのかもしれない）

そんなくうきの中、むごんのまま立ち上がったおじさま。

そのまま、へやを出ていくすがたに、あっけにとられていた父さ

まが、おいすがります。  
ろつかの向こうがわでの、はげしい口ろんの声が、唯依のところまできこえてきました。

『ぶしのなさけ！』とか、『せめてひとたち！』とか、さけぶおじさまの声にまじり、『でんちゅうでござる、でんちゅうでござると、必死に言っている父さまの声がきこえました。

いったい、何事だったのか、唯依にはサツパリわかりませんでした。

そのまましばらく、さわぎがつづいていたのですが、あるときパタリと、それが止まりました。

不しぎにおもっていると、もどってきた父さま　なぜか左目に青あざができていました　が、もうねるようと、つげました。

唯依としては、おじさまがどうしたのか、とても気になったのですが、父さまにさからうわけには行きません。

この日は、しかたなく床につく事になりました。

西暦一九八八年四月二十九日

めずらしくルル兄さまが、お休みとの事でしたので、あさから、くるる木の家におじゃましていました。

今日は一日、唯依の相手をしてくれるというルル兄さまに、とてもうれしい気分になりながら、気になっていたタベのでき事を、お

はなししました。

はなしおえると、また、くつきがかわっている事に気づきました。何というか、虫ばのいたみを、こらえるような表じょうで、ひたいをおさえている兄さま。

ちよつと、こわかったです。

しばらく、そうしていたルル兄さまでしたが、やがてためいきを一つつくと、『そういう事か』とつぶやかれました。

何の事かとおたずねすると、『唯依が気にする事ではない』とわらって言いながら、あたまをなでてくれました。

兄さま、つごうがわるい事は、あたまをなでてごまかせるとでも？

唯依は、そんな子どもではありません。

そんな事では、ごまかされませんよ！

……でも、けつきよく、ききそびれてしまいました。

た、ただ……そう、ルル兄さまが言われるとおり、唯依が気にする事はない。

そうおもったからです。

決して、あたまをなでられるのが、気もちよくてわすれたわけではないのです。

唯依は、もう小がく生なのです。

そんな、お子さまではありません！



西曆一九八八年四月三十日

父さまから、いわやのおじさまが、事に合い、入いんされたときかされました。

おどろいて、お見まいに行こうと言つと、なぜか父さまは、きのうのルル兄さまと同じような表じょうをうかべ、『そのひつようは無』と言われました。

『いささか、はくじょうなのは』と、もうし上げると、大した事はないので、かえっておじさまが気にするからと、さとされました。

そう言われてしまうと、唯依としてもつよくは言えません。

とても、気になりましたが、今日は、それで引き下がりました。

おじさま、父さまの言われる通り、大事がなければよろしいのですが……

閑話　：簗唯依の日記（西暦一九八八年四月）（後書き）

うん、段々、唯依姫が魔性の女化している気が。

このままいったら、成長の暁には、『傾国の美姫』とか呼ばれそう  
だ。

PHASE 4 : 伏したる竜、鳳の雛と出会う(前書き)

祝・トータル・イクリップスアニメ化決定

うらむ、前回を上回る大増量。

前後編に分割すればよかった。

などと後悔しつつ、公開します。

西暦一九八九年 七月三十日 神根島

寄せては返す波の音が響く砂浜。

広げられたパラソルの下、ルルーシュは、専用の暗号回線を経由して、携帯端末に届けられたばかりの報告書に眼を通していた。

世界は、この瞬間も留まる事無く動き続けており、情報を常に更新しておくのは常識以前の事。

そう認識していたルルーシュにとって、これは息をするのと同義でもあった。

そんな中、ふと眼を惹く報告に、彼は暫し黙考する。

「<sup>F15</sup>イーグルのライセンス生産決定か……」

こぼれた眩きは、わずかに不愉快さを帯びていた。

今年に入り、ようやく念願の兵器開発メーカーとしての認可を受

けた枢木工業であったが、主力兵器である戦術機開発については、帝国軍・斯衛軍のいずれからも、入札資格を与えられてはいないというお寒い現状である。

まあ、それすらも彼の予測の範囲内ではあったが、実際にやられてみれば不快感を覚えぬ筈もなかった。

開発に参加したければ、まず実績を作れ。

それが先方の言い分であったが、開発に参加出来なければ実績など作り様も無い。

要は遠回しに、枢木を戦術機開発に参加させる意思が無いと言っている訳で、裏で動いている既存の戦術機メーカーからの圧力が、それを言わせている事を百も承知な彼にしてみれば、もう少しマシな言い訳を言ってみると詰ってやりたい気分だった。

そこに来てこのニュースである。

あれだけ毛嫌いしてきた米国に頼る決断は出来ても、新しい血を入れる事は断固拒否という彼らの偏った姿勢には、正直、失望を禁じえないと言つのが彼の本音だ。

……まあ、それとは別に、心の何処かで、敵を作りまくっている難儀な性格の母の件も、少なからず影響しているのだろうな、とは密かに思っていたりもするのだが。

とはいえ、である。

やはり駄目かとの思いは、彼の中で日増しに強くなっていた。

元々、旧態依然とした政治機構と複雑怪奇な権力構造を持つ帝国には、あまり期待を抱いた事などなかったが、それでも尚、失望感と苛立ちが募っていくのを彼は自覚する。

いつそ飛び出してしまおうか？

そう思う事が、このところ日増しに多くなっていた。  
元々、武家としては、極端に柵が少ない枢木である。

その気になりさえすれば、いつでも国を捨てる事も出来たのだ。  
それをしないのは、ごく僅かではあるが、彼をこの地に引き留める絆が出来た所為でしかない。

それさえ無ければ、あるいは……

……と、取り留めなく回り続ける彼の思考が、ふと、その内の一  
つへと繋がった。

「しかし、イーグルF-15の導入に踏み切るとはな……良くもまあ、国粋主義者共を黙らせられたものだ」

この件を、主導していたであろう技術廠の知己達へと意識を移す。  
彼らにとっては、あくまでも第一ステップでしかない今回の一件。  
だが、それが純国産主義に凝り固まった国粋主義者達にしてみれば、許し難い暴挙であり、卑劣な裏切りに見える事を想像するのは  
難く無い。

斯衛軍側の知己と同様、今が大事な時期だからと、戦術機開発から弾かれた際にも、口添えを頼まなかった両氏の今後、そこはか  
とない不安をルルーシュは感じた。

彼にしてみれば、逆恨みとしか思えぬ事だが、そもそも逆恨みする程度の小人に、公明正大な姿勢を期待する事自体が間違っている  
という事も、前世の経験から学んでいる。

「……連中が、このまま引き下がればいいのだ 痛っ!？」

内心の懸念を呟きかけた彼の頭頂部に、強烈な痛みが走った。びつくりしながら振り返ると、片手に持ったサンダルを振り抜いた姿勢の母が居る。

歳に似合わぬ赤いビキニが、メリハリの利いた身体に良く似合っていた。

「何やってんのよルルーシュ？」

海に来てまで、仕事してるんじゃないの？」

「母上……しかし」

「あゝ、口ごたえしない！」

ワーカーホリック 仕事中毒なのは仕方ないけど、休む時は休みなさい」

相変わらずの女王様気質で、息子の反論を封じた真理亜は、空いているもう一方の手でテーブルの上の端末を閉じてしまう。

いつもながらの強引なやり口に、ルルーシュは天を仰いで嘆息した。

「……わかりました」

そのまま渋々といった風情で、母の言いつけに従うと、閉じられた端末を専用のバッグにしまう。

そんな息子の反応を、やや白っぽい目で見ていた真理亜は、今の自分の気分同意を求めるかのように、自身の背後へ声を掛けた。

「ねえ、唯依ちゃん、ホントしょうがない兄様よね」

真理亜の背に隠れ、首だけ出してはモジモジしている女の子が一人。

今や、ルルーシュを、この地に引き留める最大の絆の内の一つとなった少女　　篁唯依。

そんな自分の立ち位置など、全く認識していない彼女は、白い頬を薄っすらと上気させたまま、母の背後から出てこようとはしなかった。

「……………え……………えつとぉ……………」

どうにも踏ん切りがつかないといった風情で、逡巡する唯依。そんな少女に苛立ったのか、真理亜は強引に身体を入れ替える。

「ホラ、見せて上げなさい」

「キヤッ！」

可愛らしい悲鳴と共に、これまた可愛らしい淡い黄色のワンピースに白いフリルがあしらわれた水着を着た唯依が、ルルーシュの前に差し出される。

そんな妹分の仕草に、少年の相好も柔らかく崩れた。

「ほう……………良く似合っているぞ、唯依」

「あ……………」

気負いの無い素直な褒め言葉に、唯依の幼い美貌が赤く染まった。それを見た真理亜の口元が、ニヤリと歪む。

「ねえ〜とっても似合ってるて可愛いわよね？」

「ああ、そうだな。」

「とても愛らしいぞ」

黒い尻尾を生やした母の誘いに、ルルーシュはアツサリと乗った。その唇から、柔らかな声で、更なる賞賛が放たれる。

実際、水着姿の唯依は、生来の容貌と相まって、とても愛らしか



ったのだ。

骨の髄までシスコン気質に染まった彼にしてみれば、褒めて当然だったのであるが、言われた本人にしてみれば、切れの良いフックを喰らいフラフラになった処で、ダメ押し of 右ストレートを貰った様なモノである。

「っ！！」

……あ、ああ……あ、ありがとうございます、ルル兄様」

ボンツ！ とばかりに、擬音が付きそうな勢いで真っ赤になった少女は、裏返った声で礼を言うのが精一杯だった。

そのまま俯き、全身を赤一色で染め上げた唯依は、嬉しさと恥ずかしさの余り、顔を上げられなくなってしまう。

そんな妹分の姿を、怪訝そうな様子で眺めていたルルーシュの耳に、能天気な声が聞こえてきた。

「ん〜、いやあ〜爽快、爽快。

やっぱり夏は、海に限りますよネエ。

まあ、ジェレミア君は、海は海でも砂の海の真っ只中だろうけどね」

「もう、ロイドさんったら……」

砂漠で苦勞しているジェレミア卿に悪いですよ」

浮き輪にゴーグル、更にシュノーケルまでつけたロイドが、意気揚々といった感じでこちらへと歩み寄ってきた。

その脇には、いつも通りセシルがついていたが、流石に言い過ぎと思ったのか、眉を顰めて苦言を呈する。

だが、チラツと脇を見たロイドの眼は、面白そうに輝いた。

「……そういうセシル君だって、遊ぶ気満々じゃないか」  
「こ、これはその……」

思わず言い淀む。

ロイドの指摘の通り、白いパーカーの下には青を基調としたワンピースの競泳水着が、キツチリと着込まれていた。

気恥ずかしさに、赤く染まるセシルの耳朶。

それを、笑いを抑えたルルーシュの声が叩く。

「セシル、気に病む事はない。

ジェレミアのサポートの為、ハードワークが続いていたのだ。

少しくらいは休んでも、バチは当たらんだろう」

「ハ、ハイ！」

主君から与えられた免罪符に、セシルの顔から強張りが抜けた。

実際のところ、ここ数ヶ月、各地を転戦していたジェレミアのサポート及び彼の率いる部隊から齎される貴重な実戦データの解析等で、昼も夜も無い日々を送っていたのである。

さすがに、少しは骨休めがしたい気分だったセシルは、そんな心情を的確に汲み取ってくれた主に感謝を捧げつつ、今日ぐらいはと遠い空の彼方に居るのである。ジェレミアに手を合わせると、全てを忘れて遊び尽くすべく蒼い大海原へと走っていった。

そんな年上の少女を、面白そうに見送ったルルーシュの背後で、こちらは完全に寛ぎモードと化した母の声が上がる。

「うん、ありがとう咲世子さん」

いつの間にもやらやっけて来た咲世子から、よく冷えた麦茶を受け取った真理亜は、ゆったりとチェアに身を預け、満足そうに寝そべっていた。

常にマイペースを崩さぬ母の姿に、息子の口元にも苦笑が浮かぶ。

「咲世子は、いいのか？」

「私は、メイドですので」

こちらにも常と変わらぬメイド服を、きつちりと着込んだ咲世子に声を掛ける。

返って来たのは、予想通りの答えだった。

この辺は、頑固な彼女を知っているのだから、ルルーシュとしても無理強いはいらない。

息抜きの仕方は人それぞれ。

そう思いながら、ようやく復活したらしき唯依の頭に手を置き、いつもの癖から愛おしそうにその髪を撫ぜる。

再び、頬染めながらも、今度は気持ち良さそうに目を細める少女。穏やかな空気が、その場に満ちかける。

だが、しかし

「まあ……残念ながら、完全な休暇という事にはならないみたいね」  
わずかな苦笑が籠った声が、一同の間にあつた雰囲気をかき乱した。

椅子に寝そべった美女の眼が、こちらに向かって来る禪一丁の巨漢と、その後続く水着姿の少女達を意味有りげに見る。

ルルーシュの双眸に、一瞬だけ困った様な色が浮かんで消えた。

「ふう……」

厄介事の匂いに、思わず溜息が漏れる。

そんな兄の変化を、敏感に感じ取った唯依が、わずかに小首を傾げた。

「ルル兄様？」

「いや、何でもない。」

……そう、少しジェレミアの事を、思い出したただけだ」

接近しつつある一行から視線を外し、心配そうに己を見上げる妹分に誤魔化しの答えを返す。

それを補強するかのように、紫の視線が、遙か西方へと向けられた。

夜の砂漠の凍える冷気が、風に乗って青年の頬撫でる。  
風に混じる油と硝煙の匂いを嗅ぎ取り、男は不敵な笑みを浮かべた。

「この風、この匂い。」

「これぞまさに戦場よ」

良く通る男の声が、開放された戦術機の管制ユニットから響く。

ここスエズでは、凡そ一月前のBETAの奇襲から始まった防衛

戦が、一ヶ月近い時を経てなお、未だ継続中だった。

初戦においてBETAの地中侵攻により、縦深陣のど真ん中に奇襲を受け、大混乱に陥った中東連合軍は、奇襲を受けたエジプト軍第三軍の重大な損害を代償として、辛うじて戦線を再構築する事に成功。

そのまま長期に渡る防衛戦へと移行していた。

何しろこのスエズを抜かれれば、紅海沿岸も中東連合の手から滑り落ちる。

そうなってしまうえば、彼ら中東連合の手に残された貴重な資源地帯も失われてしまうのだ。

ましてや、そのままアフリカ大陸まで攻め込まれれば、未だ無傷な資源供給地として残されているアフリカ諸国すらも失陥しかねない。

そんな破滅的な危機感に襲われた中東連合は、形振り構わぬ国連への増援要請を出すと共に、これまで溜め込んだ資金を惜しげも無く費やして戦力を掻き集め戦線へと投入していた。

そんな中、傭兵部隊の一つとして潜り込んだのが、彼、ジェレミア・ゴッドバルトが率いる枢木傘下の民間軍事会社P M S C Sカメラロットの戦術機部隊である。

このご時勢、独自に戦術機部隊を抱えたP M S C Sというのは珍しくは無いが、その殆どが何れかの国家の紐付きであり、色々と後ろ暗い事に従事するのが大半であった。

当初は、そういった胡散臭さから、遠ざけられていた感のあるキヤメロットの一团であったが、苦しい戦況の中、実績を積み上げる事で、徐々にではあるがその立場を好転させつつあり、今では正規のローテーションに組み込まれ、防衛戦に従事する日々となっている。

そして今夜も

『CPよりキャメロット1、ポイントL09にBETA群の侵攻を  
確認。』

規模は大隊規模、光線属種は未確認、迎撃を要請します』

待機中の一団に、担当CPからの連絡が入った。

担当エリアの一角に、迫りつつあるBETAへの対処を求められ  
る。

軍属ではなく、あくまでも雇用契約でしかない彼らに対するCP  
オフィサーの声には、普段とは異なる指示出しに僅かな戸惑いが残  
っているが、それは些細な事だった。

「キャメロット1よりCP、要請を受諾、これより迎撃行動に移る」

必要な情報を提供し、的確な戦域管制をしてくれるなら文句など  
無い。

始めから、そう割り切っているジェレミアは、管制ユニットを閉  
じつつ、CPへと復唱を返した。

主機に火が入り、待機状態にあった機体が力強い唸りを上げる。

「行くぞ、キャメロットの兵共つわもの、我等の精強さを、再び見せつけて  
やれ！」

『『イエス・マイロード！』』』

ジェレミアの飛ばした激に従うかの様に、砂漠の冷気と砂塵を避  
ける為の外套を脱ぎ捨て、鋼の巨人達が立ち上がる。

電磁伸縮炭素帯が軋みを上げ、オレンジ色に染められた機体を先  
頭に、一個中隊計十二機が次々に発進していった。

滑らかな主脚<sup>ラン</sup>走行から水平噴射跳躍<sup>ホライソナルブリスト</sup>へと移行し速度を上げる。  
それでも一糸乱れぬ陣形を維持し続けるのは、中隊を構成する衛士の腕が良い事もあるが、それ以上に、彼らがこの地へと来た本来の理由に拠るところが大だ。

### ジークフリード計画

現在、枢木が新市場開拓の為、推進中のこの計画こそが、その理由である。

邪竜の血を浴びる事で、鋼の肉体を得た彼の英雄の名を冠したこの計画は、装甲そのものにOBLを組み込んだ多機能<sup>MCA</sup>装甲を主軸とした第一世代戦術機アップデート・システムの開発・運用を目的としていた。

現在、実験部隊としての任務も帯びているキャメロットの機体には、全てこの計画により開発された装備が施されている。

目標とされるのは、第二世代機を越えて第三世代機相当、所謂、準第三世代機レベルであった。

計画自体は、二年近く前から動き出していたものの技術的な難易度が高く足踏み状態が続いてたが、奇才ロイド・アスブルンドの参入により、それも終わりを告げる。

現在、最も普及している第一世代機<sup>F-4</sup>ファントムにターゲットを絞り、外骨格も兼ねる装甲自体に最新の機体制御システムOBLを組み込む事で、機体の制御能力と即応性を飛躍的に向上させ、併せて装甲の構成そのものを変更し、第二世代機以降の特徴であるトップヘビーな機体バランスを構築、意図的に静安性を落とす代わりに運動性の向上を実現していた。

これに追加装備として、跳躍ユニットの換装、データリンクシステムを含む電子兵装の更新、肩部モジュールの追加バッテリー搭載

による稼働時間延長が加わる事で、仮称ファントム・ジークは一応の完成を見たのである。

より迅速かつ簡便な換装、より効果的な性能向上、そして何より安価での対応。

その三つを基本構想として開発された多機能装甲を主体としたアップデートシステムは、耐環境試験も兼ねて幾多の戦場に投入され、ここスエズは都合四箇所目の戦場となる。

当初は、初期不良等の問題も見られたものの問題点の洗い出しと改修は随時行われ、今では不具合らしい不具合は見当たらなくなっていた。

近づきつつある任務完了の日と、それを主へと報告する時を思い浮かべながら、砂上を疾駆していたジェレミアの眼が、わずかに陰しさを増す。

「フン、あれか」

明度補正を受け網膜投影される視界の中、砂煙を上げて疾走する異形の集団が映る。

忌まわしき異星起源種。

人類の怨敵　　B E T Aだ。

突撃級を前衛にした、ごくスタンダードな隊形で進む敵の姿に、ジェレミアの口元に獰猛な笑みが浮かぶ。

いい位置に出た。



砂丘を乗り越えながら、内心でそう呟いた彼は、的確な誘導を成し遂げたCPを賞賛しつつ、素早く段取りを決める。

「陣形を縦型トレイルから楔式型アローヘッド・ツィーに変更」

突撃オンリーの吉型ではなく、側面防御も考慮した式型を選択した。

個々の技量は高いが、部隊としては、まだまだ練成過程である。無理な戦闘で、損害を出す気は毛頭無かった。

戦闘の合間に弛まず繰り返された訓練の成果か、中隊を構成する三個小隊は、滑る様な機動を維持しつつ遅滞無く陣形を組み替える。

「制圧射撃後、敵群左側面より殴り込む。

目標は前衛・突撃級の漸減及び後続群との分断だ。

光線属種が確認されない限り、突撃級を最優先で撃破しろ。

「キヤメロット9からキヤメロット12、制圧射撃開始！」

ジェレミアの号令一下、楔の握りに当たる後衛が射撃体勢に入る。

「キヤメロット9、フォックス1」

「キヤメロット10、フォックス1」

「キヤメロット11、フォックス1」

「キヤメロット12、フォックス1」

後衛四機の肩部ミサイルランチャーが次々に火を噴き、こちらの接近に気付き迎撃に移ろうとしていたBETA群の横っ腹に強烈な打撃を与えた。

無数の火柱が夜の砂漠に上がり、疾走する突撃級と後続の間に明白な間隙が産まれる。

楔を打ち込むクラックが、刻まれた瞬間だった。

「全機突入！」

左翼は後続からの防御を、右翼は突撃級の尻に一発お見舞いしてやれ」

換装された新型跳躍ユニットを吹かした高G加速で、楔の刃に当たる二個小隊が空いた隙間に強引に突っ込み亀裂を拡大する。

ミサイルを撃ち尽したランチャーをパージし、後衛一個小隊が、その後続続いた。

WS-16C突撃砲が間断無く火を噴くや、強靱な装甲殻の防御を持たない柔らかな背面から突撃級を穿ち、次々と葬り去っていく。第一世代機とは到底思えぬ機敏な動きと高速機動が、大型種の迎撃の悉くに空を切らせ、返す一撃が逆にソレ等の命を刈り取っていた。

「足を止めるなよ！」

小型種に取り付かれるぞ」

サーフェイスング  
噴射地表滑走での高速機動を維持しつつ、突撃砲二門を手にした強襲前衛仕様のファントム<sup>F-4G</sup>・ジークを駆り、忌々しい異星起源種を血祭りに上げながらジェレミアが吼えた。

実際の処、高速機動中の戦術機にとって、戦車級以下の小型種は脅威足り得ない。

戦車級が戦術機殺しとしての価値を持ち得るのは、大抵が損傷や推進剤切れ等で行き足が落ちた状態での話だ。

よほど運が悪いか、さもなければ注意を怠っているかしなければ、普通は百km超の速度差から跳ね飛ばされるのがオチである。

欧州で積み重ねた実戦経験から、その事を十分に理解していたジエレミアの指揮に連中の付け入る隙は無かった。

「このまま一気に抜けるぞ」

そう部下を鼓舞した瞬間、ジエレミアの視線が一際鋭さを増す。網膜投影に映るアラートが不吉に輝いていた。

間髪入れず背後へと向けられた右手の突撃砲が、突撃級の掃討に夢中になり、わずかに速度が落ちた機体に忍び寄る数体の戦車級を撃ち砕いた。

「気を抜くな！」

死にたいかっ!？」

痛烈な叱責が飛ぶ。

未だ十代と見える若い衛士は、自分に襲い掛かろうとしていた運命に、真っ青になりつつも頭を下げた。

『申し訳ありません!』

「詫びは後で聞く！」

今は敵に集中しろ」

『イエス・マイロード!』

わずかに強張った顔。

だが、そこに怯えまでは無い事を、瞬時に見て取ったジエレミアは、素早く意識を切り替えさせる。

未だ、戦場のど真ん中にある状態で、問答を交わしている時間など、どちらにも無かった。

若い衛士も、その事は分かっているのか、短く復唱するや、再び、敵前衛を削る事に注力し出す。

その切り替えの早さに、ジェレミアは満足そうに笑った。

いい衛士だ。

胸中で一つ呟く。

まだ若い故の荒さはあるが、あと数年生き延びれば、一流と呼ばれる域に辿り着くのは確実だった。

いや、彼だけではない。

この部隊を構成する衛士は、自分や真理亜が、これはと見込んだ逸材ばかり。

いずれは、ルルーシュの剣として、彼の率いる軍の中核となるべき男達である。

だからこそ、こんな処で犬死させる訳にはいかないのだ。

それでは国に帰って後、主君に合わせる顔が無い。

そう心に誓ったジェレミアは、最後の鞭を打った。

「このまま敵集団を貫き、右側面から反時計周りで連中の後背を突く」

突撃級により構成されていた前衛は、乱入したキヤメロット中隊に背後から削り捲られた結果、ガタガタの状態に成り下がり、既に防衛側の外周陣地を蹂躪する力を失っていた。

後は、後背に部隊を展開し、前面の陣地との間に挟み込んで磨り潰す。

一瞬で戦況を見極め、判断をつけたジェレミアは、再び、部下達に喝を入れた。

「各機、足を止めるなよ！」

止めたら死ぬぞ！」

『『『イエス・マイロード！』』』

打てば響くような応え。

ジェレミアの頬に不敵な笑みが浮かぶ。

「いい返事だ　　行くぞ！」

再び二門の突撃砲が唸り、120？砲弾が前方を塞ごうとしていた要撃級を血と肉の塊りに変えた。

部隊先頭で勇戦する指揮官に感化されたか、他の中隊機も次々にBETA共を血祭りに上げていく。

そのまま疾走するキャメロット中隊は、程なくしてBETA群を貫き、その右側面へと抜けた。

同時に、CP経由の伝達により、それを待っていた前方外周陣地から砲撃が開始される。

次々と放たれた面制圧射撃の砲弾が、完全に突撃衝力を殺されたBETA共の頭上へと降り注ぎ、大型種・小型種の区別無く、均等に、平等に、全てを粉碎していった。

もはや、進む事も退く事も叶わなくなった異星起源種達。

そんな連中に、最後の災厄が襲い掛かる。

「撃てえ！」

米国P&W社製跳躍ユニットの機動力を生かし、背面展開を素早く完了させたキャメロット中隊十二機による砲撃が開始された。

遮蔽物さえない砂漠の只中、前後から挟み撃ちにされる形となったBETAには逃げる場所も防ぐ術も無い。

砲火が閃く度に、赤黒い血と不気味な色の内臓器官が、白い砂漠を汚濁で染め上げていった。

これまで同胞達を、好き放題蹂躪してきた忌まわしい化け物達が、血飛沫を上げて斃れていく姿に、陣地の各所から歓声が上がリ、砲手達の引き金を引く指にも更に力が籠る。それが戦況が、完全に確定した瞬間だった。

そして三十分後、ジェレミアの目論見通りに、前後から挟撃される形となった大隊規模のBETA群は、アッサリと磨り潰され、砂の海に醜い軀をさらす事となったのである。

「ああ……ウミ、うみ、海いい……」

遙か窓外を虚ろな目で見つめる男の呻きが室内に響く。

普段は精悍なナイスミドルとして、技術廠内の女性士官から熱い視線を注がれている彼だったが、これを見れば百年の恋も一瞬で醒めるだろう。

『いや案外、母性本能を刺激されて、積極的になる者が現れるか？  
そのまま身を固めて、自分の娘が出来れば、少しは落ち着くんじやないのか？』

などと埒も無い思考をを巡らせつつ、先ほどから無視して作業を

進めていた篁も、流石に鬱陶しくなったのか、白っぽい目付きで諦めの悪い親友を睨みつけた。

「いい加減、諦める巖谷」

ビクンツと友の背が震えた。

そのまま熱病にでも罹ったかの様に震える身体が、こちらへと向き直る。

振り返った面に浮かぶ憤怒と嫉妬の表情に気圧され、篁の身体がわずかに仰け反った

「クツ、父親の余裕か？」

その気になれば、いつでも唯依ちゃんと海に行けるといふ余裕なのか！」

ダンツとデスクを叩き、身を乗り出してくる巖谷に、篁の頬が引き攣った。

友の怒りに触発され、負けじとばかりに立ち上がった男は、胸中の奥底に沈めてあった不満をブチまける。

「行ける訳なからうが！

俺達の現状を考えろ、現状をな！」

そう行ける筈が無い。

本当なら自分だって行きたかったのだ。

眼の中に入れても痛くない愛娘との貴重な思い出の時間を作れない筈が無い。

謹厳実直な仮面を割って覗いた親友の心情が伝わったのか、憑き物が落ちた様な顔になった巖谷は、そのままがつくりと頭を垂れた。

「うつつ……無念だ……」

絞り出されたその一言は、巖谷の魂の叫びであり、そして篁のそれでもあった。

技術的難易度の高さから停滞していた耀光計画であったが、表面的にはイーグルをライセンス生産する事で技術蓄積を図り、問題を打破する事を選んだ一派が主導権を取る事で一応の進展を見せた形にはなっている。

だが実態はと言えば、導入派と国産派の綱引きは、水面下で未だ続いている状態にあり、そんな中、国産派の旗印になる事を拒んだばかりか、イーグル導入を推進した兩名は、彼らの憎しみや恨みを最高値で買う形となっていた。

流石に直接的な暴力まではエスカレートしなかつたとは踏んでいたものの、少なからぬ嫌がらせや警告は頻発している昨今、万が一にも愛娘が危難に巻き込まれる事は避けたいとの考えから、断腸の思いを堪えて唯依と距離を取って来た親馬鹿コンビである。

とはいえ、心の癒しを遠ざけた結果、ストレスは溜まり、更に国産派との折衝で、神経をすり減らす日々が続いた末が、先ほどのアしであった。

落胆のあまり目の幅涙を流しつつ、黄昏る巖谷を横目に見ながら、篁も息抜きを兼ねて窓辺へと近づいた。

無意識に懐を探る右手の指先が硬い感触を覚える。

取り出されたアンティークの懐中時計を、篁はジツと見つめた。

米国留学中に知り合った人物から贈られたソレを、懐かしむように撫でる。

遠き日の記憶が、男の脳裏に浮かび、そして消えた。



篁は、再び時計を懐へとしまつと回想を断ち切るように一つ溜息を吐き、気を取り直す為に窓外を見下ろす。

眼下に見える敷地内に、何かの資材と思しき物を抱えた人型の機械が見えた。

「……メアフレームか」

「枢木のところの新製品だな。」

斯衛では見向きもされていない様だが、帝国軍内では工兵隊や歩兵に大人気だそうだ」

思わず零れた呟きに、いつの間にやら隣に来ていた巖谷が応じた。

枢木を嫌う斯衛軍上層部の中では、刀戦術機ではなく鋤建機を造つたと悪口が囁かれる代物ではあつたが、巖谷の言う通り、帝国軍内では工兵隊や歩兵から人気を集めている。

各々の分野では、それ専用の土木作業機械に劣るものの工事や運搬の各工程でオールマイティに使える分、使い勝手が良いと好評を博していた。

特に通常の建機では、到底入れぬ山奥にも人型故に踏み入れ、また急斜面等でも備え付けのハーケンを打ち込んで作業が行える為、山岳部ではえらく重宝されているらしい。

現在、民需、軍需を問わず飛ぶ様に売れており、輸出品目としても増加傾向にあるとの事で、枢木の関係者は皆ホクホク顔との噂だった。

「乗ってみたか？」

「ああ、まあな。」

正直かなりのモンだと思つぞ。

造りがえらくしっかりしている上に扱い易い」

場の空気の入れ替えも兼ねて水を向けると、相応に関心があったのか巖谷もアツサリと乗ってきた。

実際の乗った感じとしても好印象だったのも、それを後押ししている。

衛士としての感覚的なモノではあるが、戦術機のものとは異なる芯が入っている様な感覚が、巖谷的にはポイントが高かったのだ。

そんな親友の感想を的確に理解した篁は、わずかに笑みを浮かべると技術将校としての意見を述べる。

「内骨格構造を採用しているからな。」

「単純な機体強度のみを問うなら戦術機以上だろう」

「結構、詳しいんだな。」

「調べたのか？」

「一通り調べさせて貰った。」

非常にバランスの良い機体だったよ。

新機軸の機械としては、信じられない程の完成度だ」

意外そうな顔を見せる巖谷に表向きは軽く答えるが、その内心はひどく複雑だ。

己だけでなく、一緒に調べた技官達が、揃って舌を巻く程にメアフレームの完成度は高い。

基本的には戦術機の技術を応用しつつも、今までに無い新機軸の機構を幾つも備えており、そしてそれらを無理なく融合させ、一つの機械として完成させていた。

戦術機とは異なる可能性の萌芽と言っても過言ではない機体。

アレを造り出した人物　ロイド・アスプルンドは、紛れもない天才と言えよう。

だが、それ故に……

「まったく、あれだけの技術があるんだから、戦術機開発に参入させても良かるうに」

篁の内心を悟ったかの様に、巖谷が痛いところを突いて来る。生真面目そうな表情に、一瞬、苦い色が走った。

「無理だな。」

国内の戦術機メーカーは、飽和状態に近い。

新規メーカーの参入は、彼らにとっては死活問題だろう」

ましてや、既存の技術を軒並み引っくり返しかねない代物を、産み出すような相手なら尚更だ。

と、言葉に出来ぬ思いを内心で呟きつつ、篁は疲れたように首を振る。

そんな友の態度に、巖谷は不満そうに舌打ちした。

「チツ……そんな事、言ってられる状況じゃないだろうが。」

こっちにしてみれば、少しでも優秀な技術が欲しいんだぞ」

「それでもだ。」

それに機体構造が、根本から違っているのもネックだな。

もし、枢木を戦術機開発に参入させようとしても、必ずその点を突いて潰しに掛かるだろう」

そうしなければ、自分達が潰される。

目端の利く者なら、間違いなくそう判断するだろう。

いや、そう判断したからこそ、彼らは一致団結して枢木を弾いたのだと、篁は確信していた。

一方、どこか引つ掛かる友の態度に、巖谷が怪訝そうな視線を向

ける。

「お前、さっき内骨格構造の方が、優れているみたいなき事言うてたろう。」

それなら戦術機の機体構造を、そちらに切り替える事も視野に入れるべきじゃないか？」

更に痛いところを突かれた篁の顔が、苦味を帯びて歪んだ。

この話題を振った事を後悔するが、文字通りの後の祭りである。

そもそも機体構造そのものを変えろという事は、それまで蓄積してきたデータを全て捨てるに等しかった。

全てを捨てて相手の土俵に乗るなど、メーカーにして見れば自殺行為でしかなく、到底、乗ってくれるとは思えない。

そして今の状況で、メーカー側との関係を拗らせる訳にはいかなかった。

「……………無理だ。」

それに強度が上がるとは言ったが、優れているとまでは言っていない」

妥協せざるを得ないとの判断から、不義理を承知で篁は現行の機体の肩を持つ。

唯一の救いは、それが現時点では嘘ではないという事だけだ。

煮え切らない篁の返答に、巖谷が不審気に首を傾げる。

「どういう意味だ？」

「戦術機が産まれてから十数年。」

その間の試行錯誤において、機体構造を内骨格に変更する事は、

当然の如く考えられたが、結局は没になった」

これは事実だった。

外骨格モノコックよりも、内骨格ハイパブルフレームの方が、強度的に優れている事は、技術者達にとつては周知の事実でしかない。

だが、その当時では解決し切れない問題が、内骨格構造MFSの採用を否定したのだ。

「ほう……何故だ？」

「機体内のスペースの問題だ。」

内骨格構造MFSにするという事は、当然、骨格を入れる分だけ機体内の利用可能スペースを圧迫する事になる」

それが内骨格構造MFSの持つ回避不能なデメリットだった。

そもそも機体内の利用可能スペースが圧迫されるという事は、搭載可能な機材が制限されるという事でもある。

それはそのまま機体の機能を制限する事にも繋がる訳で、強度を上げる代わりに機能を削らなければならないというジレンマを産み出す結果となったのだ。

兵器としての強度と性能。

共に捨て難い二つの要素を、天秤に掛けた開発者達が、苦心の末に辿り着いたのが

「結果、戦術機の機体構造は現在の内骨格セミ・モノコック・ストラクチャ外骨格併用構造に収斂していった訳だ」

強度においては完全内骨格に劣り、利用可能スペースにおいては完全外骨格に及ばない。

悪く言えば中途半端であり、良く言うなら双方の特性をある程度

生かせるという折衷案。

それが現在の戦術機の大元となっていた。

不服そうに目を閉じていた巖谷が、諦めたように口を開く。

「成る程な……そういう訳か」

「ああ、そういう訳だ。」

それに恐らく彼は、そこまで承知の上でメアフレームを造らせたんだろう」

ようやく納得してくれた友に、胸中でホッと一息ついた篁は、自身の予想を口にする。

あの恐ろしい程に伶俐な少年なら、その辺まで計算していても不思議はなかった。

……まあ弾かれた事を、不快に思うかどうかまでは不明であったが。

「他の企業とは、全く別分野で勝負を掛ける為にか？」

「ああ……あれほど切れるルーシユ君が、現状を理解していない筈が無い」

事実、彼は、枢木は戦術機開発から外された。

様々な思惑による物であろうが。

だが、めげる素振りすら見せずに、業績を上げ続け、規模を拡大し続けている。

光菱や富嶽、あるいは河崎にしてみれば、脅威としか思えない速度でだ。

このまま行けば遠からず、枢木が日本最大の企業へと押し上がる

日が来るだろう。

今あるパイの取り分に血道を上げるより、新しいパイを次々に作り出し、それを思う存分貪る方が、伸び代が大きいのは当たり前的事だ。

恐らくは、今あるシェアを守る事だけに汲々としている既存のメーカーや、その尻馬にのった軍部を、内心では軽蔑しているだろう事は想像に難くない。

同じ思いに到ったのか、巖谷が苦い表情で呟いた。

「……何となく、見限られている様な気がするの、俺だけか？」  
「安心しろ、私も同じだ」

枢木が、ルルーシュが、いつの日か帝国そのものを見限る時が来るのでは、と思う二人であった。

打ち寄せる波間に、微動だにせぬまま屹立する男の影があった。腰まで海に浸かる鍛え抜かれた巖の様な巨躯が一際大きく膨れ上がる。

「はああ〜」

繰り返される力強い息吹。

積み重なることに鋼線を縋り合わせたような筋肉に力が満ちていき、それが臨界へと到る瞬間

「どおおおりゃあっ！」

気合一発、海面に放たれた掌底が巨大な水柱を産み出した。吹き上がる水飛沫が、男の巨軀をも覆い隠す。

「おおおお！」

「……本当に人間？」

「相変わらず非常識な……」

機雷でも爆発したかのような光景に、見守っていた一同の口から感嘆と呆れの呻きが漏れた。

そんな一同を他所に、水中衝撃波を喰らい浮かび上がった魚達を、両腕一杯に抱え込んだ紅蓮が、意気揚々と浜辺に戻ってくる。

「大漁、大漁。」

「これだけあれば昼飯には充分であろう」

「お疲れ様です、紅蓮閣下」

化け物でも見るかのような一同の視線を他所に、相変わらずマイペースな咲世子が、ニコニコとして紅蓮を出迎えた。

いつの間にも用意したのか大きめの籠を差し出すと、紅蓮は手に持った獲物をドサドサと放り込んでいく。

「うむ、調理を頼むぞ」

「お任せを、腕によりを掛けて、仕上げてご覧にいきます」

上機嫌そのものといった紅蓮に、咲世子も相槌を打つ。



小気味の良い応対に、紅蓮が楽しげに哄笑した。

「ハツハツハツ、楽しみにしておるぞ」

「はい、それでは」

そのまま一礼をして、別荘の方へと戻っていく咲世子を見送った紅蓮は、皆の方へと振り返った。

「ふむ、どうだ悠……楽しんでおるか？」

「あ、はい、紅蓮……おじさま」

「……………」

紅蓮の問い掛けに戸惑いながら応える六歳程度の少女とその脇でムスっとした顔を隠さぬやや年長の少女。

どちらも幼いながら整った容姿には、将来性を大きく期待させるモノがあった。

紅蓮の敵つい顔に、嬉しげな笑みが浮かぶ。

「それは重畳、まあ普段は色々とあるのだから、今くらいは楽しむが良い」

「はい」

そう言われて悠と呼ばれた少女は、儂げに微笑む。

それを見て、一つ頷いた紅蓮は、成り行きを見守っていたルルーシュへと水を向けた。

「……………」

「何が、という事なのか聞きたいところですが、答えては貰えないのでしょうか？」

「分かっておるではないか。」

なに、篁の娘同様、妹と思つて相手をしてくれれば良い」

そう言つて、己の背後に隠れようとする悠を、ルルーシユの前に押し出してきた。

一瞬、慌てたような表情を浮かべた少女であつたが、観念したのかルルーシユに向けて頭を下げてくる。

「よろしくお願い致します」

「ああ……よろしく」

互いにぎこちなく挨拶を交わす。

実を言えば、これが双方にとって初めて交わす言葉でもあつた。何故なら……

「お待ち下さい！」

先ほどから、露骨に二人の接触を邪魔していた年高の少女が、堪りかねたように両者の間に割つて入る。

「このような男に、悠　の事を任せる事など出来ません！」

「真耶さん？」

「悠の面倒は、私が見ます。」

「コヤツの様な半端者など不要です」

隠し様の無い敵意を込めた真耶と呼ばれる少女の反応に、ルルーシユの口元が歪んだ。

「ほう、随分とデカイ口を叩く」

「黙れ、武家の誇りを忘れた恥知らずが！」

軽い挑発に、痛烈な罵声が返された。  
さすがに非礼と感じたのか、悠が真耶の腕を掴んで止めようとする。

「真耶さん！」

「っ！……お下がり……なさい、悠。」

このような下郎に近づいてはなりません！」

わずかに言葉に詰まりつつも、自分を楯とするかのように悠を背に隠す真耶。

一方、面と向かっての下郎呼ばわりに、流石のルルーシュも、少しカチンと来たらしい。

形の良い眉がわずかに釣り上がり、真耶を見据える視線が鋭さを増した。

対して、相手の敵意を感じ取った真耶も、無意識の内に身構える。  
一触即発の空気が、両者の間で満ちるが、それは発火する事無く霧散した。

第三者の介入によって。

「いい加減にせんかあっ！」

「ッ？」「ッ？」

強烈な一喝に、肩を竦める悠と真耶。

一方、長い付き合いから紅蓮の反応を予期していたルルーシュは、ちやつかりと耳を塞いでいたりする。

「真耶、どうしてもと言うから連れてきたというに、その態度はなにか！」

「そ、それは……しかし！」

「もういい！」

悠の面倒は、ルルーシュに見てもらおう。

お主は、少し頭を冷やしておれ！」

「なっ？」

一方的な紅蓮の宣言に、言葉に詰まる真耶。

だが次の瞬間、それすらも粉々に粉碎する事態が彼女に襲い掛かる。

「反重力乃嵐いいい！」

水着に包まれた小柄な少女の身体が、高々と天空を舞った。

「……相変わらず自重しないというか、なんというか」

女の子に、アレはないでしょう。

などと呟きつつ、海中に没する真耶を遠目に見送った真理亜は、テーブルの上のアイステイーを啜る。

「しかし案外、狸よね」

視線の先では、紅蓮の姪と称した少女・悠が、ルルーシュの前で畏まっていた。

無論、長い付き合いである真理亜は、紅蓮に姪など居ない事を知っているし、それはアチラも重々承知している。

これは、互いに相手の手札、思惑を、承知の上で行われる女狐と大狸の化かし合いであった。

「……まあ、ここにも子狸が居るけど」

チラリと傍らを見る。

頬膨らませ、まん丸顔になった唯依が居た。

いい感じにぷっくりと膨らんだ頬は、真理亜の評した如く、子狸そのものに見える。

但し、『極端に虫の居所が悪い』と形容が付くのだが……

「唯依は、子狸ではありません」

そんな印象を肯定する様にムスツとした表情で応えると、手に持ったオレンジジュースを音高く啜る。

不機嫌そうに細められた紫の視線の先には、どこかぎこちない風情を漂わせつつも、水遊びに興ずる少年と少女が居た。

唯依の手の中で、グラスの氷が甲高い音を鳴らす。

「……」

「行かなくていいの？」

「……ルル兄様なんか、知りません」

頬をプクツと膨らませたまま、少女は、そう言い切った。

だが、チラチラと忙しなく動く彼女の目線が、その言葉を裏切っている。

気になって気になって仕方が無いと、全身で主張している唯依の前に、真理亜の口元がニンマリと歪んだ。

「……まあ、女房と畳は新しい方が良いというし、妹もそうなのかしらねえ」

ビクツと唯依の背が震えた。

驚いたように向けられた眼に、戸惑いと微かな怯えがたゆたっている。

「唯依ちゃんが、良いって言うなら、まあ仕方無いわよね」

腹の中でケラケラと笑いつつ、神妙な顔で性悪女狐が告げた。唯依の整った容貌が、今にも泣き出しそうに歪む。

本音は、不安で不安でしようがなかったのだ。

大好きな兄を、見ず知らずの少女に盗られてしまいそうで。

そんな不安に苛まれる哀れな少女に、情感タップリな一言が、グサリツと止めを刺す。

「嗚呼、可哀想な唯依ちゃん。

飽きられてポロ雑巾の様に捨てられてしまうのね、こっぴーと」

砂を蹴る音が鳴った。

「……まあ、あの娘がルルーシユの妹分になる、なぐんて事はある得ないんだけどね」

無人となった椅子に向かい、どこか醒めた響きを帯びた真理亜の呟きが漏れる。

そのまま残ったアイスティーを飲み干すと、ヤレヤレといった風情で首を巡らした。

転じた視線の先には、ルルーシユの右腕を抱え込み、悠という少女を威嚇するように睨みつける唯依が居る。

まるで、子犬が毛を逆立てているかのような光景に、真理亜の口元が楽しそうに綻んだ。

「おい、三番のヤツ持ってきてくれ！」

「こっちは交換だ！」

間違つても捨てるなよ、データ取りに回せ」

喧騒の中、整備に、データ取りにと勤しむスタッフ達が忙しなく動いていた。

仮設ハンガー内を小柄なライト・メアフレーム数機が、音をたてて走り回りながら、あちこちへと資材を運び、或いは、貴重なデータ収集の材料として本社へと送り返す消耗した部品を運び出していく。

戦闘が終わつてもカメラロットの者達の忙しさは変わらなかった。いや、実験部隊であるカメラロット中隊にしてみれば、実戦データの収集こそが主目的でもある為、これから先が本当の戦いとも言える。

そうやって慌しく動くスタッフ達を見ながら、CPから譲って貰った明け方の戦闘詳細をザッと斜め読みしたジェレミアは、面白くなさそうに呟いた。

「主攻は別方面であつたか。

道理で歯応えが無かつた筈だ」

どうやら自分達が相手にしたのは、防衛線全体に襲い掛かった内の小集団の一つであつたらしい。

主力と思しき師団規模のBETA群に襲撃を受けた陣地の一角が、大損害を被つた上、放棄された事が記載されていた。

光線属種が居なかつた以上、当たり前とも言える事だったが、ジェレミア的には不満が募る。

そんな部隊長を宥めるように、湯気の立つ珈琲を差し出ししながら、副長を務める男が声を掛けてきた。

「そうは言われますが、一個中隊で大隊規模のBETA群を殲滅したんですよ、充分な戦果ではありませんか」

「まあ、そうだがな。」

だが我等の武名を上げるには足らんよ」

受け取った珈琲を飲みながら、ジェレミアは苦々しそうに呟く。

不満気な様が、ありありと浮かぶ物言いに副長は首を傾げた。

陣地から砲撃の援護があつたとは言え、先の戦闘での殊勲が前衛の突撃級を切り崩した自分達にある事は多くの者が認めている。

CPが、一介の傭兵風情に戦闘詳報を融通してくれる事自体、彼らが高く評価されている事を示していた。

だが、この歳若い隊長は、それでも不足と言い切っている。

男は、戸惑い半分、興味半分と言つた様子で、疑問を投げかけた。

「足りませんか？」

「足らん。全く足らん！」

いずれは、あの方も戦陣に立たれる。

それまでに我等の勇名を鳴り響かせ、ルルーシュ様が率いるに相應しい軍に育て上げねばならんだ！」



背後に燃え盛る炎を幻視したくなる様な熱さで、拳を握り締めて語る。

ジェレミアにとっては、それは至極当然の事だった。

己の主君が率いるは、最優にして最強の軍であるべき、と。

一片の疑いもなく信じ、それを実現する事こそが、己が忠義の証と心に刻んでいるのだから。

我等、一騎当千、万夫不当の精鋭足らんと欲す。

天を目指して、拳を振り上げんばかりに彼は燃えていた。

一方、副長はというと……

「はあ……」

あゝまた始まった、とばかりの表情で、困惑気味に返事を返す。

彼とつてキャメロット、いや、枢木に仕える形でこの戦場に来た以上、それ相応の忠誠心は持ち合わせていた。

そもそも、元は黒の斯衛にまでなった身が、傭兵になどなったのも、元上官であつた真理亜への尊敬と忠誠があつたればこそだ。

だからこそ、敬愛する上官をイビリ出すような形　実際は違うのだが　で放逐した斯衛軍、ひいては城代省には、少なからず含む所もあり、また無位無官の身となった自分を拾ってくれた真理亜への恩義、そしてその息子であるルルーシュに対しても、充分な思い入れはある。

もし、ルルーシュの身に、凶刃が迫る様な事があれば、己が身を楯にする事も厭わぬ覚悟もあつた。

だが、その彼をしても、目の前で燃えている隊長のそれには、遠く及ばないと自覚してしまう。

それほどまでに、ジエレミアの忠誠心は熱かった。

そう、暑苦しい程に、暑かったのだ。

そうやって、精神的にちよっぴり退いている副長の前で、思う存分、思いの丈を開陳していたジエレミアが、不意に、面白くなさそうに吐き捨てる。

「……とはいえ、並行して新装備の試験も、行わねばならんのだがな」

またまた意味不明なセリフに、再び、副長は首を傾げる。

新装備の実戦テストは、ほぼ成功と言っていい状態と、彼は認識していたからだ。

最も過酷な戦場の一つである砂漠戦においても、ジークフリード計画により産み出された彼らの愛機達は、不平一つ洩らす事無く戦場を駆け抜け、誰一人として脱落する事無く今日まで過ごしてきている。

兵器を評価する上で、最も重要な要素である実戦証明<sup>コンバットレポート</sup>としては、充分な戦果とデータを上げていると断言できた。

それとも、こちらはまだ不足と言っのだろうか？

そんな思いを抱きつつ、上官に質問する。

「ですが、もう充分、形になってきたのでは？」

「まあな、実戦使用には何の問題も無い。」

これまで取って来たデータを基に、既に量産化に入ったそうだ」

意外な返答が返された。

副長が目を丸くするのを横目で見ながら、ジェレミアは珈琲を啜る。

OBLを組み込んだ多機能装甲を主軸としたファン<sup>F</sup>トムのアップグレードシステムが、充分に実戦に耐え得ると判断した枢木は、これまで得られたデータを元に最終改修を施したバージョンの量産を既に開始していた。

昨日遅く、ジェレミアの所にも、その一報が入ってきている。併せて、新たな指示も、また

「それでは、何も問題が無いのでは？」

副長の言う通り、全く問題など無かった。

元々、その件では、ジェレミアにも否やは無い。

主命とあらば、万難を排してそれを実行するだけだ。

ただ単に主の下へ戻るのが、当初の予定よりも更に遅れるかもしれないという事だけが気に入らない。

そうやって何となく面白くない気分になりつつも、ジェレミアは律儀に説明を続けようとした。

「まあ、それなりに別の思惑が……………」

「ジェレミア隊長？」

中途半端に切れた言葉に、副長は不審気な表情を浮かべる。その視界の中で、ジェレミアが期待を込めて呟いた。

「……どうやら、そちらも上手くいったかな？」

そう呟きつつ、内心の期待を押し隠しながら、ジェレミアは精悍な表情を繕った。

そのまま案内を受けて、こちらへとやって来る浅黒い肌の国連軍士官を迎える。

「キヤメロット代表の方ですか？」

「キヤメロット代表代行を務めているジェレミア・ゴッドバルドだ」

誰何の声に、堂々とした態度で応える。

名乗りの通り、己は主君の代行者。

だからこそ、侮られるような事は許されない。

その矜持があればこそ、もし傭兵と蔑む色が見えるなら、ここから先の話はご破算とする覚悟もあった。

だが、そんな彼の気構えも、今回は杞憂に終わる。

「国連軍・地中海方面総軍第二軍・第七戦術機甲師団所属イブラヒム・ドーウル少尉であります」

二十歳そこそこかと思われる青年士官は、惚れ惚れするような見事な敬礼を返してみせる。

一分の隙も見えない立ち居振る舞いには、こちらを侮蔑する色は露ほども見えなかった。

「……第二軍は、黒海周辺が担当ではなかったかな？」

これは当たりか？ と、内心で呟きつつ、一応の確認は取る。

ここスエズは、一応は地中海方面総軍第三軍の担当範囲だが、紅海沿岸を担当する印度洋方面総軍第三軍との境界にあたる重要拠点の所為で、何かと気を使う場所でもあったのだ。妙なトラブルに巻き込まれては面倒とのこちらの思いを察したのか、ドーウル少尉は苦笑しながら返答してくれる。

「地中海方面総軍司令部の命により、三日前に援軍として派遣されました」

「ふむ……了解した。」

では、ご用件を承ろう」

その一言で大方の察しはついたジェレミアも、わずかに苦笑しながら頷いた。

要は地中海総軍と印度洋総軍の綱引きの結果なのだろう。劣勢を強いられるスエズ防衛線に印度洋総軍を出しゃばらせない為、身内の第二軍から戦力を抽出して投入したという事だ。

回された方に見れば、いい面の皮だろうが、こちらにしてみれば関係の無い事と言えよう。

取り合えず問題無しと判断したのが伝わったのか、向こうも要件を切り出してきた。

「第七師団師団長が、キャメロット代表との面会を希望されております。

よろしければ、お時間を取って頂きたく、お願いに参りました」

「急ぎの用件かな？」

「できれば、可能な限り早くとの事です」

ここでジェレミアは、しばし沈黙した。

相手も急な話と承知しているのか、急かす様な真似はしない。

直立不動の姿勢を保ったまま、こちらの返答を待っている青年の前で、ジェレミアは思考を巡らした。

これが大西洋方面総軍辺りなら、昔の知己がという可能性もあったが、地中海方面総軍となると、その可能性は低かった。

ましてや相手は、ジェレミア・ゴッドバルド個人ではなく民間軍事会社<sup>S C S</sup>キヤメロット代表との面会を希望している以上、そちら絡みの要件という事になる。

となれば、他の軍と契約している民間軍事会社<sup>P M S C S</sup>を、強引に引き抜くなどという横紙破りも考えにくい以上、答えは自ずと出てきた。

『これもルルーシユ様のご加護か。』

命を受けた翌日に、それを果たす事が叶おうとは『

なにやら胸中でルルーシユを神格化しつつ、感動に打ち震えるジェレミアであったが、表にまでそれを出すようなへマは流石にしない。

そつと決まれば、善は急げとばかりに早速行動を開始した。

「……分かった。」

今すぐでも構わないだろうか？

幸いローテーションが終わったばかりだ。

余程の事が無い限り、当然、出撃は無いと思うのだが」

この地では、昼夜を問わぬBETAの侵攻に、ローテーションを組んで戦術機部隊を手当てしていた為、一度、ローテーションが終われば、次にキヤメロットが戦闘待機に入るまでには最低でも半日以上の間がある。

余程、話がこじれたりしない限りは、時間的余裕としては充分だろうというこちらの意図を、相手も的確に汲み取ってくれた。

「」配慮に感謝します。

正直、こちらとしても有り難いです」

その返答に頷くと、ジェレミアは傍らに居た副長に残務を託す事にする。

いきなりな展開に目を白黒させていた副長ではあったが、業務自体の引継ぎに異論がある筈もなく、やや釈然としない顔つきながらも一礼して、それらを引き受ける事で話はまとまった。

「では、行こうか」

「ハッ！」

「ご案内させて頂きます」

そうしてジェレミアは、連絡係から案内役へと早代わりした少尉の先導の下、次なる『戦場』へと駒を進めるのだった。

「ふう……」

寄せては返す波の音が、月明かりに白く照らし出された砂浜に響く。

「星が美しいな」

深い藍色の空の下、煌く星々を見上げながら、少年は独り呟いた。

昼間の喧騒が、まるで嘘の様に静かな夜の浜辺。

海面を渡る優しい風が、彼の下へ心地よい涼を運んで来る。

「あの美しい星空の彼方から、BETAのような醜悪な侵略者がやって来たとは、何とも皮肉な話だ」

そう言いながらルルーシュは、己が背後を振り返った。まるで、そこに居る誰かに話しかける様に。

いや

「そうは思わないか？」

「……………気付いていらしたのですか」

明らかに自分へと向けられた誘いに、浜から少し離れた岩陰より一人の少女が現れた。

バツが悪そうにしかめられた顔は、悠、いや悠と名乗っていた少女のモノである。

ルルーシュの頬が、わずかに緩んだ。

「まあな。

慣れぬ真似などせぬ事だ。

反って目立つただけだぞ」

紅蓮辺りに学んだのか、歳に似合わぬ見事な気配の消し方。

だが、それ故に反って目立つ。

生命の息吹とも言えるものが溢れているこの島で、それを全く感じさせない箇所があれば、逆に違和感を煽るだけだ。



悠の頬が、少しだけ赤くなる。

「……すみません」

「謝る事は無い。」

それに忍びの真似事など、貴女がする事ではあるまい」

相変わらずナチュラルに頭の高い物言いだったが、そこに込められた意味を覆い隠す程ではなかった。

少女の身体が、少しだけ強張る。

相手が、自分の正体を当の昔に見抜いていたと悟ったからだ。

「私の素性を、ご存知なのですね？」

「気付いていないのは、唯依とセシル位だろうな」

唯依は幼さ故、そしてセシルは外国人故の世事の疎さから来るもの。

一方、妙なところで鋭いロイドは、大まかな事情は察している様だったが、興味が無いのか特に突っ込むという事もなかった。

少女の目の前で、少年は優雅に、しかしどこか芝居染みた一礼を試みせる。

「さて、私めに何の御用でしょう………煌武院悠陽様」

次期將軍殿下たる高貴な少女に、武家のはぐれ者たる異端の少年が問う。

何の用だ、と。

言葉こそ丁寧ながら、そこには武家の棟梁たる身に向けるべき敬意は無い、忠誠も無い。

それを敏感に感じ取りながらも、悠陽は咎める素振りも見せなかった。

何故なら……

「今の私は悠　　紅蓮醜三郎の姪の悠にございます」

ルルーシュは、小さく肩を竦めた。

昼間の様子から大人しいだけの少女と思っていたのだが……と、悠陽の評価を付け直す。

正直、次期將軍殿下と関わるなど、厄介事の種にしかならないとの判断から、怒らせて早めに終わらせる目論見が、あっさりとかわされてしまった。

だが、それ自体は不快でもない。

逆に話す程度の価値は有ると判断した少年は、苦笑混じりに言葉を継いだ。

「……では、そういう事にしておきましょうか。

それでは改めて訊こう。

オレに何か用があるのだろうか？」

多少の興味を込めて再び問う。

ルルーシュの纏う空気が変わった事に、悠陽はわずかに戸惑いながら、目を伏せる様にして答えた。

「それ程、大袈裟な事ではありません。

少し、お話がしてみたかったです。  
……あちらでは、色々と……その……」

少し言葉を濁しながら、悠陽は別荘の方を遠慮がちに見る。  
その仕草で、お邪魔虫な二人を思い出し、ルルーシュは苦笑した。

「唯依にも悪気は無いのだ。  
許してやって欲しい」

あの後、ずっと自分にくっ付いて、悠陽が近づくだけで、敵意を露わにしていた唯依。

「それを言うなら、私の方も、真耶さんの無礼を御許し下さい」

危うく溺れかけながらも執念の生還を果たすや、己とルルーシュの間に再び壁となって立ち塞がった真耶。

どちらも、どちらであった。

さすがの紅蓮も呆れ果て、真理亜とロイドは、ニヤニヤと生暖かい眼で見るばかり。

正直、彼らにして見れば、気恥ずかしいばかりの一日だったと言えた。

互いの顔に浮かぶ苦笑いに、少年と少女は、相手に対し少なからぬシンパシーを抱く。

それは、ルルーシュの態度を、少しばかり軟化させる程度には効果があった。

「お相子という事か？」

「……そうですわね」

笑い合う声が砂浜に響く。

屈託の無いソレが、先ほどまでであった硬い空気を、ゆっくりと解かして行くのを感じながら、悠陽は淡い笑みを浮かべてルルーシユを見つめた。

注がれる視線から、本題を切り出す意図を読み取った少年も姿勢を正す。

悠陽は、緊張を解すように軽く咳払いをすると、ゆっくりとした口調で話し始めた。

「貴方の事は、紅蓮から色々と聞かされておりました。ですので、是非一度、お話がしてみたかったです」  
「紅蓮閣下は、どの様に？」

余計な事を　　内心で、そう思いつつも、素振りには見せずに先を促す。

会話を交わすと決めた以上は、それ相応の態度という物があるというのがルルーシユの考えだった。

ましてや悠陽に非がある訳でなし、あえて不機嫌な顔を見せる事も無い。

それが、この場における彼のスタンスだった。

そんな相手の内心を知ってか知らずか、促された悠陽は、クスリと小さく思い出し笑いを零すと、とても楽しそうな様子で先を続ける。

「文武に優れた俊英。

未来を見通す慧眼の持ち主。

若くして、会社経営を成功に導いた偉才。

「……それから」  
「いや、もう結構」

なに言ってるんだ、あのオヤジは！

少女の口から、立て板に水を流すかの如く、スラスラと流れ出てきた賛辞の奔流にルルーシユの頬が、わずかに赤くなる。

そんな相手の反応に、悠陽は翳した手の平で隠した口元を面白そうに綻ばせた。

「ふふっ……兎に角、褒め言葉ばかりでした。

まるで自慢の息子を、褒める様に

だから真耶さんも、妙に貴方を意識してしまった様です」

少年の眉が、わずかに寄る。

少女の言葉の意味が、掴めなかったからだ。

紅蓮が自分を褒める事で、何故あの生意気な小娘が自分を意識する？

その辺りの繋がりが、いまいちピンと来ないルルーシユは、戸惑いを帯びた眩きを洩らす。

「……意識、ですか？」

「ええ、真耶さんは、私の近侍となるべく、昔から色々と努力されてきましたから」

ますます怪訝そうな顔になった。

そんなルルーシユの反応に、何かに気付いた表情を浮かべた悠陽は、恐る恐るといった様子で問う。

「もしかして、ご存知無いですか？」

紅蓮が貴方を、私の近侍として推している事を」

「……………初耳だな」

そう初耳だった。

彼は。

紅蓮から、幾度となく打診があったのは事実だが、その全てが真理亜のところまでシャットアウトされ、ルルーシュにまでは伝わっていないかったのだ。

当人に全く知らせず断るのは、どうかとも思うが、伝える意味が無いとして、伝えなかった真理亜の判断も、あながち間違いとは言えまい。

少なくとも、彼の今後の予定表には、政威大將軍の近侍になるという項目は、一字たりとも存在してはいなかったのだから。

互いの間にあつた些細な認識違い。

それに気付いた悠陽は、微かに落胆の色を浮かべながらも、気を取り直し言葉を継いだ。

「……………そうですね。」

まだ公にはなっていないませんが、紅蓮が貴方を推挙しているのは事実です」

そう言いながら、自分を真つ直ぐに見る少女の視線に、ルルーシュはわずかに興味を覚えるが、返す言葉は常識の範囲を超える事は無い。

「フム……しかし、それは有り得ないだろう。」

次期將軍殿下の側近ともなれば、最低でも『赤』でなければ周囲が黙ってはいない」

「ええ、周りの方々の殆どが、反対されています。」

……しかし、それでも紅蓮は、強硬に貴方を推しているのです」

私にとって、きっと必要な方だからと。

だから会ってみたかった。あの紅蓮が手放して褒める人に。

それなのに、目前の少年自身が、それを否定する。

「買い被り過ぎだな。」

オレは、武家でありながら、金儲けに精を出しているはぐれ者だ」

自虐 いや、それを装っただけの謙遜を返す少年に、悠陽は思わずムキになる。

「そうでしょうか？」

貴方の、いえ枢木のやられた事を調べさせて頂きましたが、私には、そうは思えません」

そう、そんな筈が無いのだ。

新型OSの開発は言うに及ばず、様々な分野での枢木の隆盛に伴い輸出は増え始め、失業率は下がり出している。

国を豊かにし、民の生活を安んじるといふ観点から見れば、ここ数年の枢木の貢献は充分以上に賞賛に値するものだ。

そんな枢木を非難する者は、現実が、民が、見えていないだけ。

武家社会という狭い世界に安住し、外を見ない、見ようとしてい

ないだけだと少女は断じる。

そして、だからこそ

「それに比べて……私は……」

未だ、何も成せぬ身である己を、悠陽は恥じた。

物心つく前から、次期政威大將軍最有力候補とされてきた少女は、様々な分野で最高の環境と最高の師を与えられていたが、それらの教育により蒔かれた種は、未だ実を結ぶ機会を得る事はなかった。

いや、それどころか、この先も実を結ぶ日が来るかどうかすら分からぬ有様。

特に、ここ一年程は、第二次大戦の敗戦と米国の占領政策により、名誉職へと追いやられてしまった將軍という存在の無力さを、学べば学ぶ程、理解できてしまう彼女の聡明さが仇となり、彼女自身を徐々に追い詰めていく日々が続いていた。

そんな中、数少ない信頼できる臣下である紅蓮が、折に触れ話してくれる少年の逸話。己の無力さをヒシヒシと感じ取っていた悠陽にとって、さして歳も離れていない少年が次々に成し遂げていく業績の数々が、彼女の劣等感を刺激すると同時に、強い興味を抱かせたのは、ある意味、必然でもあった。

今回の来訪も、半分は彼女から紅蓮にねだった結果である。

そして、良い顔をしない家中の者達を強引に説得して来たこの島で、彼女は彼に出会った。

底知れぬ程に深い知性と強き意志を宿す瞳は、とても綺麗で印象深い輝きを帯びていた。

ただ其処に居るだけで、無視しようの無い強烈な存在感を有する



彼は。

紅蓮の語った逸話の全てが、紛れも無い事実である。

そう確信させる程に、鮮烈な覇気を伴い、彼女の前に現れたのだ。

「ダイナスト  
霸王」

その一言を、否応無しに連想させる。

そんな彼を前にして、彼女の劣等感は更に煽られ、それ故に、より強く興味を掻き立てられた。

燃え盛る焰に惹かれ、我が身を焼かれる羽虫の如く。

どうしようも無い程に、惹かれてしまった。

何を思い、何を考え、何を求めているのか？

どうすれば、そんな風に成れるのか、と。

憧憬と羨望、そして僅かばかりの嫉妬と共に、悠陽はルルーシュを仰ぎ見る。

まるで夜空に輝く星を見るが如く。

決して届かぬと諦めかけた者の瞳で。

ルルーシュの眉目が、ホンの少しだけ寄った。

「オレから見れば、貴女も充分優秀だと思うが……」

彼は、世辞ではなく、本心からそう思っていた。

初めて唯依に会った時は、歳に似合わぬ聡明さに驚いたものだった。

だが、いま目の前に居る少女は、明らかにそれを上回っている。

だが同時に、それが余り幸せな事では無いという事も、彼は理解していた。

それは、彼女が子供のままで居る事を、許されぬ立場に居る事を示していたから。

環境が人を作るとは良く言われる話だが、恐らく悠陽は、その典型例なのだろう。

形骸化した存在であるとは云え、いや、だからこそ次期將軍という立場のもたらずものは重い。

何かを為す力を持たぬ存在が、人々の希望と期待を一身に受ける矛盾と歪み。

それは、本来なら何の屈託も無く笑って過ごせる筈の年代の少女に、今の様な苦渋に満ちた表情を覚えさせる程に重かったのだろう。

その事が、ルルーシユの不快感を、強烈に刺激する。

何故なら、彼も又、子供である事を許されなかった過去があるから……

だからこそ、そんな悠陽に対し、ある種の親近感を感じつつも、否、それ故に。

「そんな事は、ありません。

……私は、何も出来ていない。

何も……出来ないのです……」

己の無力さに俯き嘆く少女の姿に、少年は微かな苛立ちを覚える。

『人の生は、重い荷を負って、遠い道に行くが如し』

かの

神君・家康公は、そう言われたとか……」

この若さ、いや幼さで、どこか疲れた老人めいた空気を漂わす彼女に、彼は怒りを感じた。

「……重いのです、辛いのです、次期將軍という荷は……余りにも……」

血を吐くような告白に、醒めた吐息が重なる。

「なら、降ろしてしまえばよかるっ」

「えっ？」

降る様な星が瞬く夏の夜に、真冬を思わせる冷たく硬い声が響いた。

此処は帝国軍技術廠。

帝国の未来を切り開くべく、日々多くの英才達が、瞳に希望と使命感を宿し、励み続ける場であった。

場の筈だった？

今この場にて、第三者が居たのなら、やさぐれて机に突っ伏す二人のオヤジ、もとい、二人の軍人を見たのなら、そう思いたくなる

に違いない。

きつと、多分、間違いなく……………

「ああ、しかし……………」

「……………疲れたな、本当に」

ぐったりと机に顔を伏せたまま呻くように言葉を交わす巖谷と篁。先ほどまで続いていた会議という名の陰湿な罵り合いが、残り少ない彼らの精気をごっそりと削り取っていたのだ。

歯に衣着せて、笑顔を取り繕いつつ、三回転ほど擦れ捲くつた表現で、外国機導入に踏み切った事を非難する国産派と、彼らの視野の狭さを論い、外国機導入の正当性を主張する導入派の言い合いは、不毛としか言い様が無く、胃が痛くなること夥しかった。

思い出す度にムカついてきたのか、小刻みに震えていた巖谷が、デスクを叩いて立ち上がった。

「あのエネルギーを、もつと別の事に使いやがれてんだ！」

「言つな巖谷……………空しくなるだろうが……………」

「言わずに居られるか！」

ネチネチ、ネチネチ、ネチネチと、七時間だぞ、七時間っ！」

疲労の余り、投げやり気味に答える親友に、更に怒りを触発された巖谷が食って掛かった。

とはいえ、それも無理の無い事。

昼過ぎに始まった会議は、前述の如く紛糾し、混乱し、延々と続けられた結果、終わったのが夜の八時近く。

午後からの予定の悉くを潰され、残務が有るが故に、帰る事も促ならない。

これで何らかの成果が上がっていれば、まだ、腹の虫も騙せようと言う所だったが、それすらも無かった。

そして、会議の△はと言えば、『また日を改めて』の一言。

やり場のない憤りに、巖谷が吼える。

「どうして、あそこまで外国に敵意を抱ける！」

何故、我が国が、未だ未熟である事を認められない！

俺には、到底、理解できんぞつ！」

国産派の言いたい事も分からないではない。

国防の要となる主力兵器を、外国に頼るなど本来褒められたモノでは無い事くらいは百も承知だ。

だが、悔しいが、帝国の技術は未だ未熟。

ここで国外からの先進技術の導入を止めてしまえば、十年先まで国を護るに足る物が造れなくなる。

それでは駄目なのだ。

それでは帝国の未来が閉ざされる。

そんな焦りにも似た感情が、巖谷を急き立てていた。

彼らの根拠の無い自信の一角が、自身の挙げた『戦果』に拠るものだと理解している分、その思いは重く根深い。

己の所為で帝国が滅ぶ光景を想像する度に、心臓が締め付けられるような錯覚を覚える程だ。

だから、巖谷は止まれない。

止まるわけには、行かないのだ。

己の出した結果が、国の行く末を誤らせるというなら、もう一度、己の手で正しい方向へと引きずり戻す。

そう決意したからこそ、彼はこれまで奮闘し、そして『分ならず屋達』に怒るのだ。

そんな友の心情を、正確に洞察していた篁は、一度、瞑目して心を落ち着けると、己の思うところを口にする。

「……それは、お前が強いからだ」  
「篁？」

ひどく落ち着いた親友の声に、巖谷の激情も僅かに抑えられた。困惑気味に己を見る親友に、篁は訥々と話し続ける。

「お前は強い。  
だからこそ、己の未熟さを、至らなさを認められる。  
たとえ今は及ばずとも、いつか必ず届くと信じられるからだ」

それが、この敬愛すべき硬骨漢の美点だった。  
己の未熟も、相手の有能も、自然に受け入れる器量を持っている。

そして、そんな男だからこそ、『分ならず屋達』の心情が理解出来ないのだという事も篁は分かっていた。

「だが彼等には、それが出来ない。  
己を、同胞を、国を信じられないんだ。

自分達が劣っていると認めてしまえば、もう決して同じ域に到れないと心のどこかで思っている」

小人の愚かさと言うは容易い。

だが、常に大度をもって動ける人間が、この世にどれ程居ると言うのか？

世の大半を占めるであろう普通の者達は、多かれ少なかれそういったものだろう。

そう結論付ける篁自身、己の内にそういった卑小な部分があったのを知っていた。

そうでなければ、彼等の心情を忖度する事など、出来る筈も無い。そして、それ故に彼は、親友を尊敬し、その真つ直ぐな有り様に敬意を持つのだ。

一方、そんな親友の複雑な胸中までは思い至らずとも、冷静に順序立てて為された謎解きに、巖谷は深刻な表情で呻く。

「……………だから、認められない……………か……………」

「……………そうだ。」

だからこそ、言っても空しくなるだけだと言ったんだ」

わずかに見える自嘲の影。

冷静沈着・謹厳実直を地で行く親友の見せたそれに、巖谷は眩暈にも似た感覚を覚えた。

彼が、そこまで言い切る以上、この先に待つのも茨の道のみ。

「……………やれやれ、相変わらず前途多難という事が」

思わず愚痴がこぼれた。

イーグル<sup>F15</sup>導入まで漕ぎ着け、少しは息がつけるかと思えば、これである。

疲れた表情を浮かべた巖谷に、篁は軽く肩を竦めて見せた。

「今に始まった事ではないさ……………だろ？」  
「……………ふう……………そうだな」

そう呟いて、ドサリと椅子に腰掛けた巖谷が、深い溜息を吐いた。

道は未だ遠く果てしない。

分かっていた事だが、実感させられるとやはり凹んだ。

そうやって眼をつぶり、天井を仰ぐ巖谷の耳に、穏やかさを取り戻した友の声が響く。

「何はともあれ、一步踏み出せたのは事実だ。  
今は、それを喜ぶべきだろう」

障害を一つ乗り越えた事は、紛れも無い事実。

例え未だに反対派による嫌がらせがあろうとも、帝国は精神的な鎖国へと向かう道からは遠ざかったのだ。

「イーグルのライセンス生産により、第二世代機の技術を蓄積。  
しかる後、それを踏み台にして、次期主力戦術機となる第三世代機を造り上げる」

それが今の自分達の取れる最善の道。

少なくとも、これが成功すれば、帝国は後十年は戦える力を維持できる。

そして、それだけの猶予が出来るなら

「相応の物を造り上げられれば、連中も少しは静かになるだろう。  
そうなれば、私達は次に進むことが出来る」



自分達が語り合った夢の実現へと到る為に。

天井を見上げていた巖谷の面が、篋へと向けられた。

「国際共同開発による国産戦術機か……」

「そうだ、帝国の未来を開く為にも、それは絶対に必要だ」

かつて語った夢。

そして一度はルルーシュに否定され、唯依が拾ってくれた夢。

嬉しかった。

本当に嬉しかった。

だが、だからこそ、娘には重荷を遺せない。

自分達の世代で、必ず決着を着ける。

そう心に誓う篋に、巖谷が男臭い笑みを浮かべて見せた。

「胃薬の買い置きも、だな」

笑い声が弾ける。

明日への扉を開く意志が、彼等の疲れを吹き飛ばしていった。

……後に、巖谷榮二は、この日の事を思い返す。

親友を喪い、遺された夢を背負い、ただ一人歩き続ける中で。

挫折しそうになる度に、何度も、何度も……

「なら、降ろしてしまえばよかるつ」  
「えっ？」

降る様な星が瞬く夏の夜に、真冬を思わせる冷たく硬い声が響いた。

思いも掛けない一言に、悠陽の思考が固まる。  
生き人形と化した幼い少女に、玲瓏たる美声が鋼の斧となって振り下ろされた。

「辛い、重たいと嘆くなら、さっさと降ろしてしまえば良い」  
「……そんな……そんな事が……」

出来る訳がない。

混乱する思考の中、蚊の鳴く様な小さな声で呟く少女に、微塵も容赦の無い声が覆い被さる。

「迷惑だと言っている」  
「ッ!？」

切り捨てる鋭い声が、悠陽の心を深々と切り裂いた。  
呆然と立ち竦む事しか出来ない無力な少女に、慈悲の欠片も無い糾弾が突きつけられる。

「やりたくも無い事を、義務感だけでやったところでロクな結果に  
ならん。」

周りの者が、迷惑するだけだと何故気付かない」

それは弾劾そのものだった。

熱意を持たぬ形だけの將軍<sup>王</sup>への憤りであり。

雞壇に飾られるだけの人形である事に甘んじている事への怒りで  
あった。

「お前が、その荷を降ろしたところで、別の誰かが背負っただけだ。

いや、嬉々として奪い合うのが先か？

いずれにせよ、オレには理解できんがな」

そう吐き捨てて、ルルーシュは不愉快そうに鼻を鳴らす。

蔑みすら帯びた眼差しが少女に注がれ、反論すら出来ない悠陽は、  
我が身を竦めるだけだった。

全てが彼の言う通り。

自分がこの荷を投げ出せば、きっとそうなるだろう。

形だけの將軍<sup>王</sup>、飾られるだけの人形、それを承知の上で、醜く奪  
い合う様を想像し、幼いが故に潔癖である少女は吐き気すら覚えた。

余りの情けなさに俯き涙を滲ませる悠陽を、じっと見据えていた  
ルルーシュが、再び口を開く。

「降ろしてしまえ、捨ててしまえ、そうすれば楽になれる」

一転した柔らかな声。

それが、悠陽の耳朵を優しくくすぐる。

曳かれる様に上がった彼女の眼に、唯依に向けるものと同じ、優しい兄の微笑を浮かべたルルーシュが映った。造作の整った手が、スツと差し出される。

「この身は、武家のはぐれ者。

だからこそ、お前がその荷を背負う限り、我等の道が交わる事は無い」

逆に言うなら、その荷を捨てるなら

「我が名、我が誇りにかけて、貴女を守護しよう」

慈愛に満ちた優しい声が、悠陽の鼓膜を、心を震わせる。伸ばされた手にしがみ付きたい衝動に、彼女は襲われた。

その手を取れば救われる。

この重荷から、苦しみから解き放たれる。

それが分かってしまったから……

フラフラと熱に浮かされるように頼りなく伸ばされた彼女の手が、彼の手を取り掛かかり 止まった。

「……………捨てられません。

捨ててはいけません」

引き戻した己の手を、恥じる様に握り締めながら、悠陽は搾り出す様に呟いた。

一瞬だけ、脳裏を過ぎった影。

一度だけしか会った事の無い、会う事が許されない妹の姿。それが、彼女の手を止めた。

醒めた眼差しを向けたルルーシュは、そんな彼女を鼻先でせせら  
嗤う。

「下らん義務感からか？」

「……そうかもしれません。」

今の私には、この荷を背負い続ける理由が、それしかないのです  
から」

失望と嘲りが入り混じった問いに、悠陽は気圧されながらも答える。

確かに、今の彼女には、それしかなかった。

そう分かっていても、捨てる事が出来ない。

それを愚かとルルーシュが嗤う。

「下らんな、実に下らん。」

そうやって宿命とやらの奴隷となって、人生を磨り潰すのか？」

「それでも、それでも、捨ててはいけないのです!」

下らないと嘲られ、愚かしいと嗤われても……

それでも捨てられない、捨ててはいけなかったのだ。

その一生を、日陰で過ごさなければならぬ妹の為に。

そう想いつつも、注がれる冷たい視線を前に、少女は力なくうな  
垂れる。

折れ砕けようとする心が、重荷に耐えかね軋みを上げた。

「俯くな！」

「アツ！？」

鋭く力強い一声が、沈み逝く彼女の面を上げさせた。

「お前が『王』足らんとするなら俯くな。

肩を落とし、背を丸め、地べたを見るだけの『王』に誰が従うか  
っ！

もし、それでもお前に従うというなら、それは忠誠ではなく、  
ただの憐憫に過ぎん」

鋭く激しい声が、悠陽を打ち据える。

だがそれは、先ほどまでの嘲笑とは、どこか異なっていた。

心を萎縮させる事無く、否、昂ぶりを呼び起こす声………そして、  
意志。

吸い寄せられる様に見詰める未だ『王』足りえぬ少女に向けて、  
異界の『王』の言葉が高らかに響く。

「その背に負った重荷を、降ろすつもりが無いのなら心に刻め」

それは、とある王が、苦難と絶望の果てに掴み取ったモノ。

「王は怠ってはならない。

王が己の意志を示す事を怠れば、多くの者が戸惑い、無為に血を  
流すだろう」

怠れば、全ては無へと帰す。

初恋の異母妹の汚辱に塗れた死を踏み台とした大反逆が、  
ブラックリベリオン 彼が王

としての立場を忘れ、己が意志を示す事を放棄した時、敢え無く潰えた様に。

「王は誤ってはならない。」

王が選択を誤れば、それは民草の下へ大いなる災いとなって降り注ぐだろう」

誤れば、大いなる災いを産む。

最愛の妹に眼がくらみ、親友の裏切りに逆上した果てに判断を誤った時、数千万の生命を女神の生贄フレイヤと為した様に。

「王は揺らいではならない。」

王が揺らげば、臣下も揺らぎ、やがては国そのものを揺るがせるだろう」

揺らげば、全てを揺らがせる。

妹の死に錯乱し、動揺した果てに、部下の裏切りを招き、世界を二分する大戦を招いた様に。

怠らず、誤らず、揺らがず。

王であろうと望むなら、かく在れ、と。

後悔と自戒の果てに辿り着いた己自身の答えを説く。

未だ『王』足りえず、されど『王』足らんとして足掻く事を選んだ少女への贈り物として。

そして最後に告げる。

この幼い少女が、自分なりの答えへと辿り着く為の道標として。

「どんな時でも俯くな、胸を張れ、そして空元気でも良いから笑ってみせろ」

それはとても辛い事。

だが、王として生きるなら、避けては為らぬ事。  
何故なら

「王とは、全ての者達が仰ぎ見る存在<sup>モ</sup>。」

先の見えぬ世界を歩む指針として、或いは、混迷する時代の中の希望として、これから先、全ての者がお前を仰ぎ見るのだから」

無数の希望を、夢を、想いを束ね、行くべき道を指し示す為に。

語り終えたルルーシュは、静かに口を閉ざす。

語られた言葉、そこにある想いを噛み締める様に、悠陽はジッと目を閉ざした。

ただ波の音が響く中、どれほどの時が過ぎたのだろうか？

一分か、十分か、あるいは一時間……もしかしたら、ホンの数秒だったのかもしれない。

悠陽の顔に、ゆっくりと笑みが浮かぶ。

まるで泣き笑いのような歪んだ笑みは、自身がこれから行く道の険しさを理解したが故だ。

それでも彼女は、笑って見せた。

己自身で、それを選んだと分かっていたから。

「……これで、よろしいですか？」

「上等だ」



震える声に、ルルーシユは優しく答える。

昔の自分とは、異なる道を行くであろう幼い王を後押しする様に。

「さて、夜も深くなった。

もう子供は寝る時間だ」

明日は、早いのだろうか？

言外にそう問うルルーシユに、悠陽の笑顔にわずかな陰が射す。

紅蓮をしても、許された滞在は、わずか一日。

明日には、もうこの島を離れなければならなかった。

まだ語りたいたい事、問いたいたい事があつた。

だが、未だ明確な形を成さぬソレに、かすかな焦りを感じながら、  
続けるような声で問う。

「……また、お会い出来るでしょうか？」

「無理だな」

「ッ！」

ささやかな希望を込めた少女の問いを、少年は、にべも無く否定する。

「言った筈だ。

この身は、武家のはぐれ者。

お前が、その荷を背負う限り、我等の道が交わる事は無い」

多くの無理を重ねた上で成ったこの出会いは、同時に別れでもあった。

歳相応の我が儘を言える立場を、自ら捨てた以上、それは必然である。とルルーシュは思う。

……とはいえである。

落胆に肩を落とす悠陽の姿を見ると、彼自身の良心、というよりも死んでも直らなかつたシスコンな部分がジクジクと痛んだ。

それが、余計な事を言っていると承知の上で、続く言葉を紡がせる。

「そして、こつも言った。

お前が王で在り続ける限り、全ての者が、お前を見る、と」

その一言で、悠陽は愁眉を開く。

幼いながらも整った容貌に、安堵と歡喜の色が浮かんだ。

そのまま一礼し、別荘へと足を向けた背に、柔らかな声が掛かけられたのは、ルルーシュ本来の優しさ故だろう。

「義務感だけで突き進むなら、いつか必ず挫折する。

ならば探すが良い。

貴女が、その道を歩み続ける理由を」

驚いた様に振り返る少女に向けて、不敵な笑みと共に最後の言葉が贈られる。

「なに、人は確固たる理由さえあれば、世界にすら挑めるものだ」

オレが保障してやる。

そう言つて、もう一度笑つて見せる。

釣られる様に、悠陽も花の綻ぶような笑みを浮かべた。

「ルルーシユ様、貴方のご助言に、感謝を」

万感の想いを込めた礼と共に、深々と頭を下げた少女は、そのまま身を翻すと確かな足取りで歩み出した。

迷いの無いその後姿を、見えなくなるまで見送つた少年は、軽く一息つくくと視線を動かす。

「……さて、オレも貴方に感謝すべきですか？」

暗がりの一角、先ほど悠陽が潜んでいた場所から、少し離れた位置へと声を掛ける。

闇の中から、野太い男の声が返つて来た。

「不要。

むしろ此方から言いたい位だ」

「………そつちは、そうは思っていない様ですが？」

ノツシノツシといった感じで、暗がりから姿を現した偉丈夫

紅蓮醜三郎の姿を視認したルルーシユは、眉を顰めてそう尋ねた。

紅蓮の小脇に抱え上げられ、口元を押さえ込まれながらも燃えるような眼差しで、ルルーシユを睨みつける少女・月詠真耶。

明白なまでの敵意を叩きつけてくる彼女は、どう見ても感謝しているようには見えなかった。

わずかに眉を寄せる紅蓮に、もがく真耶を解放するよう身振り伝える。

一瞬、躊躇した紅蓮であったが、仕方ないといった風情で、少女の拘束を外した。

ドサリと砂浜に落ちた小柄な身体が、跳ね上がるように起き上がる。

次の瞬間、可憐とすら言える唇が、強烈な罵声を放った。

「当たり前だ！」

よくも、よくも好き放題言ってくれたな！」

沈黙を強いられ溜め込まれた鬱憤を、怒りと共に叩きつける。

何も知らぬ半端者が、したり顔をして主君を傷つけた事が許せなかった。

「何も知らぬクセに、小賢しくもっ！」

激昂し糾弾する真耶を、困ったような表情で見る紅蓮とルルシーユ。

その態度に、自身の認識誤りを彼女は悟った。

少女の美貌が、サツと強張る。

「まさか、貴様っ！」

「そのまさかだ。」

大まかな事情は把握している　ああ、紅蓮閣下から聞いた訳では無いぞ」

弱みでも見つかれば儲け物。

その程度の発想で、帝国上層部の内情を探らせた際、偶然、引っ掛かった情報に過ぎない　煌武院悠陽に忌み子として、里子に出された双子の妹が居るとい話話は。

ルルーシユ的にみれば、意味の無い情報。  
事実、悠陽と顔を合わせるまで、記憶の端に除けられていた程度  
の代物だ。

だがそれは、あくまでも彼の視点での話。

見るべき場所を変えるなら、それは許し難い事として映るだろう。

そう、例えば今、彼の眼前でブルブルと震える少女の様に。

「き、貴様……全て承知の上で言ったのか!？」

承知の上で、あの方を……悠陽様をつ!」

怒りの余り、喘ぎながら真耶が叫ぶ!

どんな想いで、悠陽がこれまでの道を歩んできたのか。

幼い頃から、己が使えるべき主君として、傍にあった真耶は、目  
の前が真っ赤になる怒りに我を忘れた。

『赤』としての気品ある立ち居振る舞いも、『月詠』として鍛え  
上げた武も、全てを忘れて、ただの『真耶』として吼える。

「私は貴様とは違う!

私は、あの方を信じている。

悠陽様こそが、きつとこの混迷する帝国を救って下さるとっ!」

幼き頃から見守ってきた少女の聡明さ、思慮深さを、真耶は愛し  
ている。

この少女なら、きつと、きつと帝国の歪みを正し、あるべき姿へ  
と戻してくれると信じていたのだ。

そして、それは自分だけに限った事ではない。  
悠陽を知る多くの者が、彼女に期待していた。

それがどれ程、彼女の重荷となっていたかも気付かぬままに。

だからこそ許せなかった。

納得できなかった。

自分達が気付かなかったソレを引き出し、その上で選択を促したのが、目の前に居る男であるという事が。

枢木の悪評は、武家社会全体に鳴り響いており、特に上位の武家では顕著だ。

そんな悪名高き家の嫡子が、大事な主君に道を示してのけた等という事は断じて認められない。

自身の内で猛るこの思いが、醜い嫉妬であると半ば理解しつつも、それでも真耶は反発する思いを捨てられなかった。

「貴様などに、貴様のような半端者如きに、決してあの方を否定などせん！」

それは一途なまでの忠誠と、気付いてやれなかった後ろめたさ。  
だから彼女は否定する。

「この思いが、同情などと、憐憫などと、言わせてなるものか！」

憤怒と嫉妬に燃える女侍の視線と、全てを俯瞰する王の視線が衝突する。

後世、煌武院悠陽の無二の忠臣として、その名を残す事になる月

詠真耶は、目の前の男を、己の終生の敵として心に刻み付けた。

そのまま身を翻し、主の後を追う様に走り去る小柄な影を見送った紅蓮は、無言のまま立つルルーシュに向けて、溜息混じりに呟く。

「ワシは、お主を斬っておくべきなのかもしれんな」

ボソリと物騒な言葉を告げる紅蓮を、ルルーシュは温度を感じさせぬ眼差しで見詰める。

「……………ワシは、お主が恐ろしい。」

恐ろしくて、恐ろしくて堪らんのだ」

最強の二文字を、欲しいままにする筈の豪傑が、わずかに身震いました。

伝えた通りの恐怖と……………そして、身の内から湧き上がる衝動に。

「『天に二日無く、地に二王無し』」

煌武院の双子を忌むという因習も、同時代に二人の王を産まぬ為の悲しい智慧なのだ」

姓を奪われ、半身からも引離された少女を想う。

哀れとは思っても、正しい処置であると彼自身は認めていた。

無論、肉親の情の上では忍びなかつた。

だが煌武院家を、否、帝国を割らぬ為には仕方が無い、と。

「……………なのにお主は現れた。」

悠陽様ですら及ばぬ程の王の器を備えてな」

背筋が震えた。

恐怖と歓喜に。

星空の下、超然として立つ黒髪の少年の中に、紅蓮は紛れも無い王の姿を幻視した。

在ってはならない二人目の王。

それも悠陽よりも、遙かに完成された王。

武の王、力の王　　すなわち『霸王』。

それが武人としての彼の魂を揺さぶった。

この者と共に征けば、己が生命を燃やし尽くせると、彼の武人としての本能が歓喜の叫びを上げ、そして帝国の楯としての理性が恐怖に打ち震える。

「そして、今宵こそ確信した。

ルルーシユ、お主はいつの日か、きっと帝国に仇なすであろう」

地に二王が在る以上、いつか必ずその日が来る。

そう紅蓮は確信した。

「お主自身の意志だろうが、そうでなかるうが、いつの日か、きっと……な」

少年の性が、覇の王である限り、穏便な形で済む筈が無い。

この国の歪みと腐敗を、彼が見逃すとも思えなかった。

苦い想いを噛み締めながら、炎の中で瓦解していく帝国の姿を想像した紅蓮は、深い溜息を吐く。

「所詮は、無駄な足掻きであったな。

……地に伏す竜を、何とか御そうなどと」



恐らく、心のどこかで悟っていたのだろう。  
その成長を、息子のように見守っていた彼の本質を。

だからこそ彼を、悠陽の下に縛りつけようとしたのだ。  
それが徒勞に終わるのであると承知の上で。

「いつの日か時を得て、竜は雲を呼び、天へと駆け登る。

『伏竜』とは、元々そういうものだ」と分かつていた筈なのにな

どこか感慨深けに、あるいは寂しそうに紅蓮が呟く。

沈黙を保っていたルルーシュが、ゆっくりと口を開いた。

「そこまで確信しながら、何故斬らない？

これが、最初で最後のチャンスかもしれないというのに」

今この場には、唯一紅蓮に比肩する母は居らず、忠義の騎士も遠  
い空の下。

己の武人としての技量は、未だ紅蓮には遠く及ばず、彼がその気  
になった瞬間、自身は真つ二つにされると承知の上で問う。

何故、斬らぬ、と。

紅蓮の顔に、いつもと同じ豪快な笑みが浮かんだ。

「フンッ、ワシに人でなしになれと？

これでも、お主の父親代わりとして、乳飲み子の頃より見守って  
来たのだぞ……………ムッ、なんだ、その妙な表情は？」

「いや、何でも……………」

だがそれでも、いつもの貴方ならそうする筈だ」

煌武院の、帝国の敵を、紅蓮醒三郎が見逃す事などあり得ない。  
例え我が子同然の相手であろうとも、だ。

「……お主は、帝国に災いを齎す。  
そう確信したのは事実だ。だが………」

この豪放磊落な男が、珍しく言葉を濁す。  
整理のつかない思いを持って余すように、一瞬だけ瞑目した紅蓮は  
言葉を継いだ。

「……だが、それが人類全体にとって、どうなのかまでは分からん」  
帝国の不利益と人類全体の不利益は、決してイコールではない。  
そして、これまでのルルーシユの動きを見ている限り、彼の視点は  
帝国に無く、常に世界に置かれているのは分かっていた。  
まあ、その辺りが、国粹主義に偏り易い軍関係者に、敬遠される  
理由でもあるのだが………」

「だから、今は斬らぬと？」

ルルーシユの顔に、不敵な笑みが浮かぶ。  
応じるように、紅蓮も犬歯を剥きだして笑った。

「……さて、な。  
それに、もしお主を斬ろうとしても、お主の臣下達が、そうそう  
こちらの思い通りにさせてくれるとも思えぬな」

一旦、そこで言葉を切った紅蓮は、誰かに向けて話すように大声  
を放った。

「そうであるう篠崎の娘よ！」

砂の鳴る音が鳴った。

ルルーシュと紅蓮を別つ様に、ほっそりとした人影が忽然と現れる。

メイド服ではなく、忍びとしての完全装備に身を固めた咲世子だ。緊張に薄っすらと汗を滲ませながらも、手にしたクナイを構え、油断無く紅蓮の動きを見ている。

一分の隙も無いその姿に、紅蓮の片頬が面白そうに釣り上がった。

「何年前か前、篠崎の麒麟児が出奔したと、小耳に挟んでいたがな……枢木に身を寄せていたか」

護衛と諜報のエキスパートとして裏の世界では有名な篠崎。

五撰家からも引く手数多と呼ばれるこの家に生を受け、百年に一人の天才とまで呼ばれた娘が、数年前、突如として失踪したという話は、その筋ではそれなりに有名な話だった。

それが目の前に居る少女であると、紅蓮は確信している。

以前から、その若さからは想像もできぬ手練である事を、彼自身の嗅覚が嗅ぎ取っていたのだ。

そんな男の問いを、少女は頷く事無く肯定する。

「はい、三年ほど前から、お世話になっております」

「三年前か……真理亜が斯衛を辞めた年だな。」

やはり、あの時から、全ては動き出していたという訳か」  
「……………」

齒車が重なった。

あの日、あの時、彼女を引き止められなかった事を、今更ながらに悔やむ。

そんな紅蓮に対し、沈黙を以って答える咲世子。

かすかに苦笑いを浮かべた紅蓮は、最早済んだ事と割り切って、ルルーシュへと向き直った。

「まあ良い。

いま語った事が、混じりツ気の無いワシの本心よ。

そして、これから語るのが、我が覚悟と知るがいい」

丹田に力を込める。

霸王たる者に惹かれて止まぬ武人の本能を、ジェレミアにすら劣らぬ忠義で押し潰した紅蓮はルルーシュと正対し、そして宣言した。

「ルルーシュ、お主がこれから如何なる道を歩もうとしているのかは知らぬ。

だが、もしも、その道程にて悠陽様を、害そうというのであれば、その時は  
「

巖の如き巨軀から、凄まじい殺気が溢れ出した。

脂汗を滲ませながら、それでも構えを崩さぬ咲世子を越えて、ルルーシュへと叩き付ける。

ただ一言。

「斬る！」

野獣の咆哮にも似た一喝。

それを真正面から受け止めたルルーシュの顔に、傲岸不遜な王者

の笑みが浮かぶ。

「紅蓮醜三郎、貴公の覚悟、確かに受け取った」

それが、星降る夜に交わされた侍と魔王の誓約と成った。

西暦一九八九年 十一月二十五日 米国・サンフランシスコ

「では、これで」

「契約成立という事ですな」

互いに契約書にサインを入れた男女は、相手にそれを返しつつ、空々しい笑みを交わした。

あくまでもビジネスライクに徹する両者にとって、それは別におかしな事ではない。

「お互い良い関係を築ける事を願っております」

「こちらこそ」

利を以って結び、契約により保障を取る。

極めてドライであるが故に、そこに人種に対する偏見は入る余地が無い分、公平ですらあった。

儀礼的な乾杯を交わし、相手側が退出したところで残された側の

代表　マクダエル・ドグラム社会長は、ホツと息を吐く。

「ふう、やれやれだ」

相手側の代表は、東洋人らしい年齢不詳の美女。

メリハリの利いたプロポーションと玲瓏たる美貌は、普段であれば即口説きにかかりたくなる程の良い女であったが、流石にビジネス絡みだとそうもいかない。

内心、惜しさを感じつつも、温くなった珈琲と共に、それを飲み込む程度には彼は理性的だった。

そんな彼に対し、契約の場に立ち会った側近の重役の一人が、わずかに不満を滲ませた声を掛ける。

「宜しかったですか？」

「良いも悪いも無い。」

こうしなければ、我が社は生き残れんのだからな」

今更何を言っている？

そう言わんばかりの口調で切り返す男に、側近は不愉快そうに咳いた。

「まさか、ジャップなどに頼る破目になるとは」

男の手が上がる。

手を翳し、押し止めるジェスチャーで、それ以上の発言を禁じた。

「止めておけ。」

これからは、ビジネスパートナーとしてやっていくんだからな」

「……ハッ」

内心で側近に見切りを付けつつ、表にはそれを出さずに嗜めた。憤懣やる方無いといった様子で、不承不承頷く相手の左遷先を考えながら、周囲に届く声で独白する。

「しかしこれで、H I - M A E R F 計画中止による損害から、何とか会社を立て直せるな」

アレはもう、災難としか言いようの無い出来事だった。

軍の強力なプッシュにより参入した戦略航空機動要塞開発計画は、これまた軍の戦略転換により無残な終焉を迎え、後には開発中止となったX G - 70 試作機数機と莫大な損失のみが残されたのである。傾いた会社の屋台骨、それを更にへし折るが如き、戦術機軽視の軍のドクトリン変更により栄光在るマクダエル・ドグラムも、このまま行けば身売りも止む無しという状況にまで追い込まれたのだ。自分の代で、そんな屈辱を受けるくらいなら、悪魔に魂を売る事も厭わない。

それを思えば、日本企業と手を組む事など屁とも思わぬ心境に彼は居た。

今日、この日、ようやく社を救うメドが立った以上、それを下らぬ人種差別などで潰されては堪らない。

そんな思いから、自社の現状をもう一度認識させる為の演出だった。

その効果は相応にあったのか、それ以上、日本企業   枢木工業  
と手を組む事に異を唱える者は居なかった。

だが、代わりと言わんばかりに、別方面からの危惧を口にする者が現れる。

「ですがイーグルは、売れなくなるのでは？」  
「それは無い。」

確かに、アップデートシステムは大した物だが、それでも繋ぎである事は確かだ」

下らぬ不安を、鼻先でせせら笑う。

既に、数多の戦場に投入され、スエズ防衛戦での勇戦を切っ掛けに、国連軍からの大量受注にまで漕ぎ着けたファントム・アップデートシステム。

第一世代機を、第二世代機以上にまで押し上げるコレは、確かに驚異的と言つていいが、それでも改修機は改修機。

純正第二世代機であるイーグルとは、やはり信頼性が違う。  
事実、軍の調達計画も、未だ変更は無いのだ。

今、自分達が考えるべきなのは、世界で一番普及しているファントムの膨大なアフターマーケットから、如何にして利益を引き出すかという事だった。

今回の契約で、南北アメリカ大陸における総代理店の地位とライセンス生産の権利は手に入れた以上、そこからどれだけ儲けを得られるかが勝負となる。

更にこれには、美味しいオマケも付いていた。

先だつて枢木が開発・発売を行っていた土木作業用人型機械『メアフレーム』の製造・販売も手掛けられるという特典が。

日本製という事で、今ひとつ米国内では売れ行きが伸びていない代物だが、これにマクダエル・ドグラムのマークが付けば、爆発的なヒットが見込める事もリサーチ済みだ。

ここ数年で予想される利益は、瀕死の自社が息を吹き返すには充分と見込まれている。

暗闇の中、やっと手にした灯火に、男はホッと安堵の溜息をつく。



「後は、こちらが契約を果たすだけだが……」

先方の要求も大半は頷ける。

戦術機の開発・実戦データの提供。

特に日本が立ち遅れている電子兵装と燃料電池関連については、自社でも供出に少々揉めた程の貴重な技術情報である。

だからこそ、それらを求めるのは理解できるのだが……

「何に使うのでしょうか？」

「さてな、理由は聞いているが、額面通りに受け取るのは危険だ」

同じく首を傾げる重役の一人に、男は答えた。

理由はまあ聞いているが、事実かどうかまでは不明。

そんなあやふやな状況に、別の重役がわずかに不安を覚えて尋ねる。

「……よろしいのですか？」

「契約は遵守するさ。」

我等は、アメリカ人だからな」

半ば投げやりになりながらも、異常とすら言える契約社会である自国をあてこすりつつ、マクダエル・ドグラム会長は、部下達にロビー活動の開始を指示したのだった。

西暦一九九十年二月

米国議会は、耐用年数に達した軌道ステーション『コロラド』を、  
枢木工業へ売却する事を承認。

併せて、往還用シャトルとして、退役間際のHSS T二機の売却  
も承認した。

これを受けて、枢木工業は宇宙開発事業への参入を発表。

譲渡された軌道ステーションにて、無重力環境下での新素材研究  
を主目的とする研究機関の立ち上げを開始する。

PHASE 4

・伏したる竜、鳳の雛と出会う（後書き）

やれやれと

色々と伏線を張ったが、回収が大変だな。

ちなみにイブラヒムの旦那は、1993年にクレタに居た事にはな  
ってますが、

この時点での所在は不明。

まあ、あまり気にしないでいただけると嬉しいですね。

あと、悠陽とルル様の接触は、当分無いですので、ハーレムとかも  
有り得ないのでご了承を。

閑話　：　簗唯依の日記　〳　西暦一九八九年十二月　〳　（前書き）

徒然なるままに　〳　

という事で、今回は閑話です。

題して、『唯依姫頑張る！』の巻

それでは、どつど

閑話　：　篁唯依の日記　西暦一九八九年十二月

西暦一九八九年十二月一日

師走に入りました。

今年も、あと一月で終わりです。

父様のお仕事も順調で、お正月はゆっくり出来るとのこと。とても楽しみです。

今年の初め、唯依は一つの目標を立てました。

唯依も、もう七歳。

そろそろ花嫁修業として、家事全般を一通りこなせる様になるという目標です。

お掃除とお洗たくは、もうちゃんと出来ています。

…… 枢木の電化製品を使っていますが、これはもう、どこの家でも当たり前なので問題なしです。

お裁ほうも、雑巾ぬいとボタンつけ程度ですが、それなりに出来る様になりました。

…… おじ様のワイシャツのボタンを付けた時、一緒に袖もぬってしまいましたがおじ様が、問題無いと言われたので、問題無いのです。

最後に残ったのが、お料理です。

刃物を使うので危ないからと、父様に止められていましたが、ようやく条件付で許してもらいました。

今年も残り一月。

何としても、やりとげて見せます！

西曆一九八九年十二月七日

また父様が泊り込みのお仕事の為、枢木のお屋敷にお世話になり  
に來ました。

それにしても、今年の三分の二は、こちらで過ごしているような

……

この間も、また真理亜おば様に、『やっぱりウチの子にならない、  
ルル・シユのお嫁さんになって』とか言われ……いわれ……言わ  
れ、ました。

『まだ、早いです』とお答えしたら、クスクスと笑われてしま  
いましたが。

コホンッ。

そうまだ早いのです。

お、お嫁に來るのは、ま、まだ早いと思います。

そ、そんな事は、まずは、一通りの家事が、で、で、出来るよう  
になってからのお話です。

それに唯依は、まだ七歳。

あと十年くらいは、余裕があります。

十年後には、唯依が十七歳で、ルル兄様は二十一歳、年齢的には  
丁度釣り合います。

その……似合いの夫婦、というヤツ……です、ね。

……さて、その為にも、まずはお料理をモノにしなくてはなりません。

お料理の練習に父様が付けた条件、咲世子さんの監督の下でというのが、少しだけ不満ですが、まあ、仕方がありません。

今は、ただひたすらに努力精進するのみと思います。

それでは、いざ参るっ！

……と、気合を入れていたのですが、兄様に平日はダメと言われてしまいました。

……ひどいです。ルル兄様。

西暦一九八九年十二月十日

普段の日は、学校やお勉強、あと剣の修行があるので、日曜に集中してお料理の練習をする事となり、今日は、その初日でした。

やはり基本も良いですが、ここはまずは得意料理というものをつくりたいと思いました。

切り札というのは、どのような時にも用意しておくべきだと、いわゆる叔父様もおっしゃっていましたから。

という事で、唯依が選んだのは肉ジャガでした。

父様に聞くところによると、母様の得意料理だったそうです。唯依が、肉ジャガが好きなもの、母様の味を覚えているからだろうと。

そう仰っている時の父様は、どこかさびしそうでした。

それを見てから、いつかお料理の練習を許されたなら、きっと肉ジャガをつくってみようと心に決めていたのです。

咲世子さんも、初めはしぶっていました。唯依が父様の事を話すと涙ぐんで許してくれました。

何故でしょうか？

……まあ、いいです。

とにかく、監督である咲世子さんの許しが出た以上、もう何も問題はありません。

幸いな事に、食材も山ほど用意されています。

後は、唯依の実力を示すだけ。

それでは、今度こそ、いざ参るっ！

…

……

……

……今日の唯依のお夕飯は、お肉とジャガ芋とニンジン、それにタマネギを混ぜ合わせたナニかの特盛でした。

……こんな日が続いたら、子豚さんになってしまいそうです。

ルル兄様、太った女の子は、お嫌いですか？



西暦一九八九年十二月十七日

今日も、お料理修行に失敗してしまいました。

何なのでしょう？

あの苦辛い不思議物質は？

……唯依は、肉ジャガを作った筈なのに。

やはり咲世子さんの指導を、受けるべきなのでしょう？

朧げな記憶に残る母様の姿と声。

わずかに残るソレを頼りに、母様の味を再現しようとしたのは無謀だったのかも。

このままだと、年内にお料理を身に付けることができません。

唯依の目標が達成できなくなってしまいます。

……イヤです。

それだけは納得できません。

唯依は、負けません。

負ける訳にはいかないのです！

何故なら、悠とかいうドロボウ猫は、夏以来、姿を見せませんが、そのこし巾着のManaだかMayaだかが、時々、物陰からルル兄様を見ている事に気付いてしまったのです。

それはもう熱心に、穴が空きそうな程、ジロジロとっ！

アレはきつと、悠とかいう女狐に命じられての事に違いないのです。

だからこそ、負けられません。

唯依は絶対に、誰にも文句の付けようの無い立派な大和ナデシコになって、ルル兄様を有象無象の盗人達から守り抜いてみせます！

……と心に誓っていたら、何故か咲世子さんがやって来て『その意気です。唯依お嬢様』と励まされてしまいました。

ほぼ全てを、声に出していたとか……嘘ですよ？

嘘だと言って下さい、咲世子さん！

……ああ、穴があったら入りたいです。

こんなはしたない真似をしては、もう、お嫁に行けません！

……これはもう、兄様に責任を取って戴くしかないと思いましたが。

西暦一九八九年十二月二十四日

出来ました！

ついに、ついに唯依は、やりとげたのです！

恥を忍んで咲世子さんの教えを受ける事しばし、ようやく肉ジャガが出来上がったのです。

お肉とジャガ芋とニンジン、それにタマネギを混ぜ合わせたナニかでもなく。

苦辛い不思議物質でもない。  
れっきとしたお料理です。

これでもう、子豚さんにならずに済みます！

……ではなくて、誓いを果たせたのです。

炊事、洗たく、掃除、家事全般が一通り、免許皆伝となったので  
す。

これでいつもで、その……お嫁さんになれますね。

……さ、さて、それでは記念すべき完成品を、まずはルル兄様に、  
ご賞味いただかねば！

…

……

……あの、咲世子さん。

その見慣れぬ西洋料理の群れは、何なのでしょう？

くりすます？

西洋の神様の誕生日？

ここは日本ですよ……ジェレミアさんや、ロイドさんが居るか  
ら？……ですか。

そうですね、そうですね。

あの方々も、故国を離れてこの地に来られたのですから、たまに  
はこういう日があっても良いですよね。

……でも、何もよりによって、今日でなくても良いのでは？

せっかく……せっかく唯依が作ったお料理が、貧相に見えてしま  
います。

……………えっ？

大丈夫？

兄様はきつと喜んでくれる？

そうでしょうか？

……………うん、そうですね。

ルル兄様なら、きつと喜んで下さいますよね。

結果は、咲世子さんの言うとおりでした。

恐る恐る、ルル兄様の前に出した肉ジャガを、兄様は少しおどろいた顔で見た後、ハシをつけて下さり、頬をほころばせて、とても美味しいと褒めてくださいました。

……………えっとお……………ルル兄様、これで唯依は、一人前の大和ナデシコですよ。

その……………いつでも……………その……………お嫁に来れますからね？

それと、ロイドさん。

気に入ってくれたのはうれしいですが、あまりパクパク食べないで下さい。

ルル兄様に召し上がっていただく分が、無くなってしまおうでしょ！

西曆一九八九年十二月二十五日

昨夜は、楽しいひと時でした。

唯依の初めてのお料理を、ルル兄様に召し上がっていただいて、ほめていただいて、美味しいクリスマスのお料理を、お腹一杯食べて、それで、その……兄様に添い寝もしてもらって……目が覚めた時、隣にルル兄様が眠って居られたのには、うれしいやら、恥ずかしいやら……

コホンッ

……まあ、とにかく、とても楽しい一夜でした。

でも、そんな一夜を過ごして思うのは、父様と叔父様の事。きっと昨夜も、お忙しい時を過ごされていたのでしよう。

お食事も、満足にされていないのかもしれないかもしれません。

そう思うと、唯依は親不孝な娘なのかもしれないです。

自分だけ楽しんで、父様や叔父様の事を忘れてしまうなんて……

といった感じで落ち込んでいると、ルル兄様が一つ提案をしてくれました。

昨晚、唯依が作った初めてのお料理を、父様への差し入れに持って行ってはどうかと。

とても良い考えだと思ったので、早速、昨夜の残りの肉ジャガを器に移したのですが、見たところ少し量が寂しいようです。

これでは、父様と叔父様のお二人に召し上がっていただくのには、やや不足ではないか？

そうやって首を捻っていたところ、話を聞いていたらしいセシルさんが、皆さんから隠れるようにして、そっと包みを差し出してき

ました。

中身を見てみると、ちょっと不恰好なお握りが沢山。なんでも、良い材料が手に入ったので作ってみたとか。お裾分けという事で、持って行ってほしいとの事でした。

ふむ、これなら後は、お味噌汁と香の物を添えれば、充分なお昼になりそうです。

そこで唯依は、セシルさんにお礼を言ってからお握りを受け取ると、手早く香の物を用意し、お味噌汁も作り、それぞれ別の器に入れました。

これで準備万端です。

幸い、家令の谷崎のおじいさんが、車を出してくれるとの事でした。

そのまま唯依は、兄様や咲世子さんに見送られて、技術廠へと向かいました。

ほどなくして着いた技術廠では、門の所の警備の方に身元を告げて、父様を呼んでいただけるようにお願いしました。

しばらくすると、何故か父様ではなく叔父様が、やって来られました。

叔父様が教えて下さったところでは、父様はメーカーとの打ち合わせの為、関東に出張中とか。

少しだけ落胆しましたが、叔父様だけでも居られたのは幸いです。お持ちした差し入れを叔父様へと渡し、唯依が初めて作ったお料理ですと告げると、叔父様は、一瞬、びっくりした顔になり、次にクシャクシャに顔を歪めながら泣き出してしまいました。

……えくと、叔父様？  
喜んでいただけるのは嬉しいのですが、正直、少し恥ずかしいです。

という事で、差し入れを押し付けると、そこから逃げ出すように帰ってきました。

帰り際、車の中から後ろを見ると、いつまでも、いつまでも手を振っている叔父様が見えました。

ちよっぴり邪険にしてしまった事を、唯依は後悔しました。

後で、謝っておかないといけませんね。

西暦一九八九年十二月二十六日

今日は、父様が、唯依を迎えに来られました。  
お仕事もようやく一区切り着いたとの事。  
でも、それにしても浮かない顔です。

どうされたのかとお聞きすると、いわやの叔父様が入院されたとの事。

昨日、お会いした際には、お元気そうだったのに、何があったのでしょうか？

何でも、昨晚、技術廠内のお部屋で、泡を吹いて倒れているところを発見されたとか。

「つわ言で、『むらさきの物質が……甘辛いナニかが……』とうめいておられたそうです。

食中毒との事ですが……昨日の差し入れにむらさき色のモノなど無かった筈ですし、あの後、物足りずに何か変な物を食されたのでしょうか？

困ったものです。

やはり叔父様にも、身の回りの事を気づかってくれの方が必要なのでは、と父様に告げると、父様も『そうだな』と言ってうなずかれました。

叔父様も、よいお歳ですし、そろそろ身を固められるべきなのかもしれません。

まあ当面は唯依が、気に掛けて差し上げればと思いました。

さて、今年もあと数日で終わりです。  
来年も良い年になりますように。

……ルル兄様と、初もうでに行く時に、しっかりとお願いして来ようと思いました。



閑話　： 簗唯依の日記 西暦一九八九年十二月（後書き）

そして、最後のメは巖谷さん。

ブルーベリーお握りは美味しかったんでしょうか？

合掌。

さて、この後の直近の予定としては、閑話をもう一度挟んで第五話へと。

仮題『黒き妖精郷、その名は……』

です。

八月中にはアップしますので、その節はよろしく。

閑話　： 簗唯依の日記（西暦一九九〇年三月）（前書き）

暑い日が続いてますね。

暑さにうなされつつ、一筆

題して、『唯依姫、大人の階段昇る』の巻。

H方面ではなく、真面目な方で。

閑話としては、ちょっぴりシリアス風味。

それでは、どうぞ

閑話　：　篁唯依の日記　西暦一九九〇年三月　

西暦一九九〇年三月一日

今日、ルル兄様から、思わぬ誘いがありました。

……逢引の誘いでは無いですよ。少しだけ残念ですが。

先月、枢木の会社が、米国から買い取った軌道ステーションへのお誘いです。

一度、宇宙からこの地球を、見てみないかとの事でした。

正直なところ、心惹かれるお誘いです。

ルル兄様からというのもそうですが、唯依は今まで国外に出た事はありませんし、ましてや宇宙へなど……

そう思うと、とても行きたい気分になります。

……ルル兄様も、一緒に行かれるからではないですよ。

あくまでも、あくまでも、知的好奇心からのモノなのですから。

……唯依個人としては、とても行きたいのですが、ここはやはり父様に相談してみるのが筋かと思えます。

父様が、どう判断されるか分かりませんが、唯依にとって悪いようにはしないと思えますから。

明日にでも、父様に相談してみましよう。

それでは、お休みなさい、ルル兄様、父様。

西暦一九九〇年三月二日

ルル兄様からのお誘いを、父様にお話したところ、しばらく考え込んでおりましたが、その後、兄様に連絡を取り、詳細な予定を聞いた上で、許可していただけました。

正直、ホツと一息です。

何故かと言うと父様が、とても難しい顔をしておられたからでした。

もしかして、折角のお誘いを断らねばならないかも　　そう思わせる程に。

それは、ルル兄様と話されている間も変わらず、むしろ余計に陰しくなった様にも。

やはり唯依が、宇宙へ行くというのは、早いと思われたのでしょうか？

ですが、唯依も、もうすぐ八歳。

それなりの分別くらいは、つくつもりです。

正直、父様の態度は、唯依を信じられていない様で不満でしたが、とにかくにもルル兄様が上手く説得して下さったのか、最後は許していただけました。

これでようやくルル兄様のお誘いに応えられます。  
本当に良かったです。

……でも、少しだけ気になる事がありました。  
出立の許しをくれた父様が、とても真剣な眼差しで、唯依に、こ  
う言われたのです。

『お前は今回の旅で、多くの物を見るだろう。』

中には、目を背けたい物、認めたく無い物もあるかもしれない。  
だが、それらを見、それらを理解する事を、止めてはならんぞ』

その場は、素直にハイとお応えしましたが、正直、唯依には父様  
が何を言われたのかが、良く分かりませんでした。

ルル兄様が、唯依に目を背けたくなるような物など、見せるとも  
思えないのですが……

……本当に、父様は、何をおっしゃりたかったのでしょうか？

西暦一九九〇年三月九日

今日、唯依は、初めて異国の地を踏みました。

米国西海岸最大の都市ロサンゼルスというとても大きな街です。

この街の空港に降り立ったのが、こちらでの朝八時。

時差のせいでも眠たかったのですが、それでも帝都でも見た  
事が無いような建物群に圧倒されてしまいました。

うつつ、ちよっぴり悔しかったです。

とはいえ、この街も最終目的地ではなく、ここから更に飛行機で  
フロリダ州のケープ・カナベラルというところに移動して、そこか

らHSSSTに乗り込むのだとか。

帝国も、一応、航空宇宙軍を持っているのですが、そちらの施設は使わせてもらえないそうです。

何故かとお尋ねすると、ルル兄様は少し困った様な顔をして、色々事情があるのだと言葉を濁しておられました。

唯依に心配を掛けたくないと思われるのが、なんとなく伝わってきます。

でも、本当のところを言うと、唯依も事情は、それなりに知っていました。

真理亜叔母様が、そつと耳打ちしてくれたからです。

英国人の血を引いている兄様と、そんな兄様を産んだ叔母様を疎む方達が、帝国上層部に居られる為、何かと嫌がらせをされるのだとか。

今回の件も、そのとおりだそうです。

仕方なく当面は、米国の施設を借り受けると同時に、夏に遊びに行った神根島の隣にある式根島に、枢木専用の発着場を建設中との事でした。

それを聞いた時、正直、我が耳を疑いました。

枢木は、帝国の企業としては数少ない国外にも通用する技術と資本を持つ会社です。

それを援助するどころか、足を引っ張る事を考えるなど………その方々は、一体何を考えているのでしょうか？

そんな人達が、国の舵取りをしている帝国は、本当に大丈夫なのでしょうか？

……等と、唯依がガク然としていると、今度は咲世子さんが、こっそり教えて下さいました。

枢木に敵対的な人の多くが、昔、叔母様に言い寄っては袖にされたり、演習で叩きのめされたりして、恥をかかされた人達だと。

……ええつと……叔母様？

もしかして、ルル兄様のご苦労の大半は、叔母様が原因なのですか？

恐る恐る問う唯依に、叔母様は何故かニコニコ笑っているだけでした。

……はあ……ルル兄様のご苦労、お察しいたします。

西暦一九九〇年三月十日

……唯依は、もしタイムマシンがあったら、昨日に行っ  
て思い切り自分を引っ叩いてしまいたい気分です。

ルル兄様のご苦労を、お察しする？

……そんな事を言う資格は、唯依には無かったという事を、今日、  
とことん思い知らされたのですから。

切っ掛けは、唯依が兄様の言いつけを破った事でした。

昨日は時差ボケもあり、市内で取ったホテルで一泊し、今日の午後、フロリダに移動する事になっていたのですが、ルル兄様はお仕事があるので、午前中、唯依はホテルで待っているようにと言われたのです。

それと、決して外には出ないようにとも。

無論、ルル兄様の言いつけに背くつもりなど、唯依にもありませんでした。

唯依が素直に頷くと、ルル兄様も安心され、ジェレミアさんと一緒に掛けて行かれたのです。

ですが、やはり退屈ではありません。

退屈で、退屈で、それでも我慢して待っていたのですが、時計を見るとまだ一時間も経っていません。

そこで、つい魔が差してしまったのです。

ホンの少し、ホテルの周りを回る位なら……と。

そうやって唯依は、ルル兄様と交わした約束を破り、程なくして、その報いを受けたのでした。

初めて自分の足で歩く異国の街は、不思議で、そして興味深く、唯依は兄様の言いつけも忘れてウロウロとしてしまいました。

そして、その結果、もの見事に迷子になったのです。

……  
いつの間にやら見覚えのない場所に出てしまい、出てきたホテルの建物も見えず、それどころかどちらの方角にあるかすら分からず

道行く人に声を掛けようとしても、汚いものでも見るかのような冷たい視線に足が竦んでしまいました。

それでも何とか勇気を振り絞って、声を掛けた相手からは、『綺麗なな！黄色い小ザルが！』と罵倒される始末です。

米国では、人種差別がヒドイと噂では聞いていましたが、これ程とは思いませんでした。



兄様の言いつけは、きつとこんな事を心配しての物だったのだと思ひ至りましたが、文字通り後で悔いる　後悔にしかありません。

そうやって、このまま兄様にも再会できず、異国の地で果てるのかと唯依が途方にくれた時です。

激しい言い合いが、唯依の耳に飛び込んできたのは。

なんとなく声のする方に行ってみると、一人の青みがかつた黒髪の少年を数人の白人の少年が囲んでいるのが見えました。

スラングが激し過ぎて、何を言っているのか持っている翻訳機では判別できなかったのですが、険悪な状況である事だけは分かりません。

そして、どうするべきかと唯依が迷った瞬間、殴り合い……いえ、多勢に無勢の一方的なリンチが始まってしまいました。

黒い髪の男の子も必死に抗いましたが、数には敵わず押し倒され、あとは殴る蹴るにされるまま。

唯依には、そんな男の子の姿が、帝国内で様々な圧力を受けるルル兄様と重なって見えました。そう見えてしまったのです。

そして、気付いた時には、男の子を取り囲んでいた少年の一人を投げ飛ばしていました。

思わず身体が動いてしまったのです。

突然の乱入に、少年達は一瞬呆気にとられていましたが、唯依が自分達より小さな東洋人の女の子と見て取ると、途端に聞き取れないような叫びを上げながら殴りかかってきました。

正直、力任せだけのソレをさばく程度の事は、唯依にも出来ません。

伊達にルル兄様や父様に、稽古をつけてもらっている訳ではありません。

ません。

……ですが、それが油断へとつながりました。

投げ飛ばされ地に伏した少年の一人が、そんな唯依の油断を突くように、スカートを引つ張り転ばせたのです。

これには唯依もたまらず、地面に倒れたところを寄って集って押さえつけられてしまいました。

ニヤニヤと見下ろす少年達。

唯依は、正直怖かったのですが、それでも衆を頼んで一人をいじめる様な相手に弱みは見せたくありません。

必死の気力を振り絞って睨みつけると、それがカンに障ったのか、一人の少年が拳を振り上げました。

悔しさと怖さに目を閉じた唯依の耳に、一瞬遅れて何かを殴る音が聞こえました。

……でも、まるで痛くありません。

それどころか、唯依を押さえつけていた手が、残らず離れていきました。

恐る恐る開いた瞳に映ったのは、見慣れた背中でした。

同時に、大きな手が優しく唯依を抱き起こしてくれます。

振り返ると、そこにはホツとした様子のジェレミアさんが居ました。

『ジェレミア、唯依と一緒に後ろを向いている……なに、五分で済む』

それは始めて聞く冷たいルル兄様の声でした。

ジェレミアさんは、兄様の命令に短く応えようと、唯依を抱きかかえたまま後ろを向き、ついでとばかりに、耳も塞ぎます。

……耳を塞がれて尚、唯依の耳にはナニかが聞こえていました。  
正直、唯依は、あの少年達に少しだけ同情してしまいました。  
そして、ホンの少しだけ、うれしくもあつたのです。  
ルル兄様は、唯依の、唯依だけの為に、怒ってくれているのですから。

そうして五分が経った後、そこにはうめき声をあげるナニかが幾つかと、少しすっきりした顔になったルル兄様、そして青い顔で腰を抜かしている黒い髪の男の子が残つたのです。

その後は、さすがに少しやり過ぎたと思つたのか、兄様は唯依をジエレミアさんから受け取って背負うと、腰を抜かしている少年を連れてくるように指示し、そのままその場を離れました。

程なくして、ホテルへと辿り着いた唯依と兄様は、そのまま取つていた部屋へと戻りました。

言いつけを破った事を叱られるのではと、ビクビクしていた唯依に、ルル兄様は、転ばされた時、汚れた服を着替えるように言いつけると、一緒に連れてきた男の子へと向かいます。

青かつた男の子の顔が白くなり、助けを求めるような目線が唯依へと向けられました。

え〜と……多分、大丈夫だと思います。

兄様は、事情を聞きたいだけだと思いますから……そうですね？

そうやって、内心で決着をつけた唯依は、お部屋に向かいました。良く見ると髪にも泥が付いていたので、まずシャワーを浴び、それから着替えを済ませます。

三十分ほどして、兄様の下に戻ると、ひどく恐縮した様子の男の子が、それでもそれなりに落ち着いた様子で、ココアを啜っていました。

ほら、やっぱり大丈夫。

と心の内で、ホッと一息ついた唯依に、兄様がココアを差し出してくれます。

ちよっぴりほろ苦く、それでいて甘いココアを飲んでいると気分が落ち着いていくのを感じました。

……ですが、それもルル兄様が、男の子から聞き出したらしい事の顛末を話してくれる事で吹き飛んでしまったのです。

男の子の名前は、レオン・クゼ君。

日系のハーフだそうで、親御さんのお仕事の都合で、こちらにいられたそうです。

唯依と同様に、初めての街が珍しかったらしく、散策していたところで彼らに絡まれたとか。

その絡まれた理由というのが、日系（まあ東洋系としか分からなかった様ですが）のハーフだから……ただ、それだけの理由だそうです。

それを聞いた瞬間、唯依は思わずルル兄様の顔を伺ってしまいました。

でも、兄様の顔には、何の表情も浮かんでいません。

そんな事は、先刻承知　　そう言わんばかりに。

唯依の胸が、ズキリと痛みました。

ルル兄様にとって、それが当然と感じられている事が、とても悲しかったのです。

そして、それを今まで気付かなかった自分が、とても恥ずかしか

ったのです。

そうやって唯依が落ち込んでいる間にも、話は進んでいきます。当初は、無視してやり過ごそうとしたクゼ君ですが、ご両親の事を馬鹿にされて堪忍袋の緒が切れてしまったとか。

唯依が耳にした言い合いは、その辺りからだった様です。後は、唯依が目にし、体験した通りとの事でした。

一通り話を聞き終えた唯依は、どうしていいか分からず黙っている事しかできません。

そんな中、クゼ君は、どこか憧れるような眼差しでルル兄様を見ながら、しきりに話しかけています。

どうも、事情を聞く過程で、兄様も日本人と英国人のハーフである事を話したらしく、それで兄様に親近感を抱いた様でした。

普段なら、唯依以外の人が兄様に馴れ馴れしくする事に不快感を感じるのですが、この時ばかりは別でした。

なにか両者の間に入り難いモノを感じてしまったのです。

何より、漏れ聞こえるハーフであるが故の苦労が、唯依の口を重くしていたのでした。

唯依は、今まで何を見ていたのでしょうか？  
何を聞いていたのでしょうか？

……きっと、何も見ず、何も聞かずだったのでしょうか。

ルル兄様や父様、叔母様や叔父様、その他多くの人に大事に大事に護られているだけで……

そうやって唯依が落ち込んでいると、そろそろ出立の時間が近づいたらしく、ルル兄様がクゼ君に空港に向かいがてら送って行こうと提案しました。

当初はクゼ君も遠慮していたのですが、やはり初めての土地故、

キチンと帰れるか自信が無かったらしく、最後はルル兄様のご厚意に甘えるという形になりました。

用意された車で、クゼ君が宿泊しているホテルへと向かう途中も、やっぱり彼はルル兄様と話しています。

時折、唯依にも視線を向けるのですが、こちらが反応するとスツと目を逸らしてしまいました。

……女だてらに男の子を投げ飛ばしたのを見て、怖い娘と思われるたのでしよう。

唯依の方から特に話す事も無かった為、結局、互いに会話を交わす事も無く、目的のホテルへと到着しました。

別れ際、何故かクゼ君がルル兄様と唯依の連絡先を聞きたがりました。

ルル兄様も、問題ないだろうと判断されたらしく、特にためらう様子もなく教えてしまいます。

こうなると唯依だけが、ごねる訳にもいきません。

すこし戸惑いつつも、連絡先を紙に書いて渡すと、クゼ君はともうれしそうにそれを受け取り、代わりに自分の連絡先を書いた紙を渡してくれました。

そうやって互いに連絡先を教えあった後、クゼ君とはお別れになりました。

走り去る車の窓から後ろを見ると、クゼ君が大きく手を振っているのが見えます。

遠ざかるそれを見ながら、唯依は小さく溜息をつく事しか出来ませんでした。

今日一日、いえ、半日で、見たもの、聞いたもの。

出立前に父様が言っていた言葉の意味が、少しだけ分かったような気がしました。

西暦一九九〇年三月十三日

今日、枢木の軌道ステーションに到着しました。

ケーブ・カナベラルについてから簡単な座学と訓練（講習？）を一日だけ受けた後、そのままH S S Tに乗せられて、気付いた時は宇宙でした。

昔は、もっと大変だったそうですが、今はそこまで手間ひま掛けている余裕が無いそうで、余りにも呆気ない宇宙旅行となりました。

でも、気付けば今日は唯依の誕生日。

ルル兄様は、それまでに間に合うように段取りを組んでくれた事が言わずとも分かります。

ありがとうございます、ルル兄様。

さて、そんな兄様の心づかいに感謝していた唯依ですが、さすがに初めての宇宙は勝手が違います。

フワフワと浮く体は、ちょっととした事で右へ左へと……

思わず目を回しそうになった唯依を、微笑ましそうに見ている兄様達。

……少しは、助けてください。

そうやって、ちよっぴりいじけていた唯依を、優しく抱きかかえてくれた兄様は、そのまま居住区へと連れて行ってくれました。

遠心力と言うそうですが、それが働いている居住区では、一応、

足が床に着きます。

まだ少しフワフワする感じが残っているのは、地上のそれよりも弱い力になっているからだそうです。

構造上どうか、回転半径と速度の関係がどうか、難しい説明を先に来ていたロイドさんがしてくれましたが、正直、今の唯依にはまだ理解できませんでした。

まあ少しだけ不便ですが、何とか歩けるだけマシだと割り切った唯依に、兄様が見せたいものがあるとおっしゃいます。

ルル兄様が、わざわざ唯依に見せたいもの？

その言葉に、強く興味を惹かれた唯依は、兄様に導かれるまま展望室へと向かいました。

二面ある強化ガラスの一方からは、宇宙に浮かぶ円筒形の籠の様な物が見えました。

兄様が説明してくれたところでは宇宙船を造る為のドックの骨組みとの事です。

そしてもう一方には、地球の姿が望めました。

青と白と緑で彩られた星は、とてもキレイで、溜息が出る程です。でもそれも、ルル兄様が指差す一点を見た瞬間、消し飛びました。

そこは、ユーラシア大陸の一角、いえ、大半を占める場所。

赤茶けた領域だけが延々と広がっている地。

BETAの支配地域と化した領域でした。

BETAは全てを削り取る。

緑も、大地も、そして数多の生命も。

知識として知っていたそれを目の当たりにし、立ち竦む唯依にルル兄様が告げます。



『このまま行けば、この星そのものが、ああなる日もそう遠くない』  
ガランとした展望室に響く兄様の声は、いつもとは違う鋭く硬い  
声でした。

傷ついた星を見下ろす眼は、とてもキレイで、恐いほどに透き通  
っています。

普段とはまるで違う兄様の姿に、思わず息を呑んだ唯依へと振り  
向きながら、兄様は問いました。

『唯依、お前は以前、父上の志を継ぐと言った。  
その思いに変わりは無いか？』

気圧されながら、それでも首を縦に振りました。  
答えなければならない　そう感じたからです。

『……ならば、その眼に焼き付けておけ。  
アレが、お前が挑むべき敵の一つなのだから』

そう言っただけは、再び指差します。  
青く美しい星を蝕む色を。

唯依の、いえ、全ての人類の敵。  
忌まわしき異星起源種　BETAを。

兄様に導かれるまま食い入る様に、それを見つめていた唯依でし  
たが、ふとある事に気付きました。

『敵の一つ……ですか？』

思わずこぼれた胸の内を耳聴く聞き取ったルル兄様の眼が、少しだけ細くなりました。

『唯依は聡いな。』

だが、もう一つの敵も、お前は既に見ている筈だ』

もう一つの敵。

兄様のその言葉に、首を捻りかけた唯依の頭の中で閃くモノがありました。

背筋が震えました。

恐怖と嫌悪で。

……でも、そんな、そんな事って。

唯依の顔色が、明らかに変わったのだと思います。

兄様は、わずかに苦笑を浮かべると、唯依の頭にポンッと手を載せました。

優しく髪を撫ぜる兄様の手の平。

普段ならホッと安堵させてくれる筈のそれも、その時の唯依の震えを止める事は出来ませんでした。

『ああ、唯依は本当に聡いな。』

人にとってのもう一つの敵、それは……』

途切れた兄様の言葉に、繋がる言葉が、唯依の口から自然にこぼれ落ちました。

『……人……ですか？』

兄様は、そこから先を続ける事はありませんでした。  
ただ震える唯依を、優しく抱きしめてくれます。

細身ながらしっかりとした強さを感じさせてくれるルル兄様の腕  
の中で、唯依は震え縋りつく事しかできません。

そんな情けない唯依を、兄様はいつまでもいつまでも抱きしめて  
いてくれたのでした。

西暦一九九〇年三月十七日

四日間の滞在を終え、今日、唯依は地上へと戻ってきました。  
地に足を着けた瞬間、ずっしりとした重みを感じます。

……別に、唯依が太った訳ではないですよ。

普段は意識する事の無い重力という物を感じつつ、それ以上に肩  
に押し掛かるモノを唯依は感じていたのです。

本当に色々な物を見、色々な事に気づく事になった旅でした。

帝国を発つ時には、思いもよらなかつた事ばかり。

正直、こんな事になるうとは、夢にも思わなかつたです。

でも、きつと父様は、初めからこうなる事を知っていたらしたので  
しょう。

それが、あの時の言葉だったのですから。

ヒドイとは思いません。

恨むつもりも無いです。

これらはきつと、唯依がいずれ必ず知るべき事だったのです。

そして兄様が、それを教えてくれたのは、唯依が成長したと認め  
て下さったからでしょう。

あの後、落ち着いてから、ゆっくり考えた結論がそれでした。

………落ち着いた後は、兄様に抱かれていた事を思い出して、赤  
面してしまいました。

コホンッ

とにかく、唯依は見るべき物を見、知るべき事を知ったのです。

後は、それにどう答えを出すかは唯依次第。

そうですね？

ルル兄様。

西暦一九九〇年三月二十日

ようやく帝都へと戻ってきました。

わずか十一日間の旅、でも途方も無く長く感じられる旅でした。

ああ、お味噌汁とご飯が懐かしいです。

……言っておきませんが、唯依が食いしん坊という訳ではありませんよ。

これは海外に出た方の殆どが感じる事なのですから。

さて、篋の屋敷に戻った唯依を待っていたのは、珍しくお仕事を早めに切り上げた父様でした。

父様のお部屋にて、旅の報告も兼ねた帰還のご挨拶をします。

彼の地にて見た事、聞いた事、感じた事を、とつとつと語る唯依の話に、父様は黙って耳を傾けられていました。

やがて、全てを話し終えても、父様はそれについて特に何かを言われる事はありません。

ただ、大きな手の平で唯依の頭を、撫でてくれただけです。

ルル兄様とは少し違う大きな手、伝わる暖かさも異なりますが、やはりホッと安堵させてくれます。

唯依の肩の重みが、少しだけ軽くなった気がしました。

そして今日は、久しぶりに父様と一緒に風呂に入り、一緒のお布団で寝る事になりました。

これを書き終えたら、もう就寝です。

それでは、お休みなさい、ルル兄様。

閑話　：　簗唯依の日記（西暦一九九〇年三月）（後書き）

これにて終幕。

とりあえず、子供の教育はきっちりしまししょうな魔王陛下でした。  
ナナリーという苦い失敗経験がありますから、見るべきモノは見せておくですね。

しかし、帝都爆撃による億に上る死者を、悪逆皇帝に虐殺された事に摩り替えた  
設定になってますが、バレなかつたんですかね？  
流石に100kmに及ぶ大穴が空いてる以上、馬鹿でも何があつたか分かりそうなもんですが……

さて、それでは次回は本編五話にて。  
何とか8月中のアップを目指します！

PHASE 5      ・黒き妖精郷、その名は……（前書き）

うーん、日曜は週末にカウントすべきか否か？  
まあ、何はともあれ更新です。

しかし、ルル様の出番を増やすと誓ったのに！  
……かえって減ってます。  
すみません。

次回こそは！

と誓いつつ、それではどうぞ。

統一暦二十九年 六月二日 軌道ステーション『アスガルド』

黒の騎士団技術本部長という要職を務める初老の女性ラクシャータ・チャウラーは、遙か下方に見える黒い巨影を見下ろしながら、満足そうに手にした煙管を振っていた。

お偉いさんになってしまってから、立場故に無聊な日々を過ごしていた彼女にとっては、久方ぶりに面白味のある大仕事。

ましてや、もう一度、あの憎たらしいプリン伯爵の鼻をあかせるとあらば、楽しくない筈も無い。

クルクルと指先で煙管を回す仕草も、ここ十数年見せていたどこか物憂げな態度とは異なり、勢いとも言うべきものを感じさせていた。



そんな彼女の背後で、唐突に微かな足音が鳴る。わずかな驚きと共に振り返った先には、現在のところ彼女にとっての直属の上司というべき仮面の英雄が、いつの間にもやら佇んでいた。

「……ゼロ？」

「準備が完了したと聞いた」

黒い仮面が発する変調された無機質な声に、ラクシャータの顔にも年輪を重ねた大人の表情が重なる。

まだ報告は上げていなかった筈だが 等と言う愚かしい考えは持たない程度の分別はある彼女だ。

その程度の事は、聞かずとも知る『眼』と『耳』が無ければ、世界の英雄などやっては居られまい。

また、そんな彼の庇護があればこそ、超合集国の眼すら盗んで、こんな代物を極秘裏に造る事も出来たのだという事を彼女も充分承知していた。

故に、英雄の突然の来訪にも余裕ある態度を崩す事無く、彼女はいつも通りに応じてみせる。

「フーン……まあ確かに、予定通り出来てるけどね」

そう答えると背後の強化ガラス、いや、その奥の空間に鎮座する物を手にした煙管で指し示す。

彼女の答えを受けると、ゼロは無言のまま歩き出した。

そのまま歩を進めた彼は、制御室の一面を占有している窓辺へと寄ると、そこから眼下の薄暗い空間へと視線を向ける。

「ご注文通りの機能を持たせたわよ」

背後から聞こえるラクシャータの声に、黒い仮面が微かに揺れた。  
一瞬の間を置き、無機質な声が、再び制御室に響く。

「……名は、なんと？」

「『スヴァルトアルヴヘイム』 北欧神話の中に出てくる黒妖精の国の名を使わせて貰ったわ」

そこで一旦言葉を切ると、彼女は、やや皮肉気な笑みを浮かべた。

「さしずめ『黒き妖精郷』ってところね。

妖精郷  
アヴァロンの代わりとしては、丁度良いでしょうよ」

今は、もう無い艦の名を引き合いに出すラクシャータに対し、ゼ口はゆっくりと首肯する。

「……了解した。」

手間を掛けたなラクシャータ」

「まあ、技術本部長とやらに祭り上げられて、暇してたからねえ……暇潰しには手頃だったわ」

英雄直々の労いの言葉にも、軽口で応ずる辺り、付き合い、いや、腐れ縁の長さが知れる。

まあ実際に、彼女にとっては暇潰しだ。

外に秘密を漏らす事無く、期限までに準備を整えるだけでも一苦勞だったなどと、口が裂けても言う気の無いラクシャータに見れば、これは何処まで行っても暇潰しなのだから。

そんな彼女の心情を知っているのか、いないのか。  
いや、恐らく知っていたのだろう。

黒き仮面の奥には、微かな笑みが浮かんでいた。

「何かメツセージはあるか？」

「フン、冗談。」

せいぜい青二才になったプリン伯爵に、よろしく言っとけばいいんじゃない？」

投げられた問いにも憎まれ口を返す。

ゼロは、ただ静かに頷いた。

「了解した」

泰然自若としたその態度に、ラクシャータの眉がわずかに上がる。何となく見透かされているのが、少しだけ気に食わなかったのだ。だがそれでも、彼女なりの矜持あるいは美意識が、それを態度に出すのを抑えてのける。

「じゃあねえ」

最後まで、その胸中を見せる事無く、背中越しに手を振りながら去っていく。

そんな彼女の背を見送りながら、ゼロは今一度だけ頭を垂れた。

光量の落とされた暗い室内に会した帝国軍の将官と兵器開発メーカーの重役達は、プロジェクターに映し出される戦術機の機動をじっと見つめていた。

全体的な印象は、現在帝国軍の主力を担う撃震に見えるが、通常のものとはフォームに大きな差異が見て取れる。

下半身がややスマートになり、逆に上半身、特に肩の辺りが肥大化した感じのソレは、どちらかという Second Generation 機以降の機体に近く、映像の中で演じられる機敏で滑らかな動作も、First Generation 機のものとは隔絶の感があった。

#### 撃震・甲型

それが光菱、富嶽、河崎三社による共同試作機であるこの機体の仮称である。

とある理由から、急遽、第一世代機である撃震の強化案として試作されたこの撃震・甲型は、計画開始から数ヶ月の時を経てようやく軍関係者に対してお披露目をするところまで漕ぎ着けたのだが、映像を見つめる軍高官や技術将校達の表情はかなり渋かった。

「……ダメだな、コレは」

「性能面では、まあ及第といったところだが……」

手元の資料を、ポントとデスクに置いたとある将官の言葉に、別の将校が消極的に同意する。

対面に座るメーカー側の重鎮達の頬が、わずかに引き曇った。

「もう少し、なんとかならんのかね？」

「値段が高過ぎる。」

「これでは到底、必要な数を揃えられんぞ」

堰を切った様に次々と上がる不満。

スペック面では要求通りでも、コスト面で当初の要望を大幅に上回る価格が書かれた資料に、軍官僚達は揃って渋い表情を隠そうともしない。

正直、これなら撃震を陽炎に置き換えた方が効率的だと呟く者すら居た程だ。

そんな失望感が見え見えな軍の態度に、メーカー側は冷や汗をかきつつ価格高騰の理由を何とか納得して貰おうとするが、続く一言がその口を凍りつかせる。

「つまり枢木には出来ても、君達には出来ない。」

「そう取って構わんのだね？」

重役達の表情が揃って強張った。

軍がメーカーに対し、ここまで露骨に失望して見せる理由がそれである。

要するに、既に枢木が製品化し大々的に販売中のファントム・アップデートシステムの二番煎じ、というか技術盗用によって産まれたのが撃震・甲型という訳だ。

現時点で、充分にコストに見合う製品が存在している以上、同価格帯で同じような製品が造れないという事は、明らかに技術面で後塵を拝しているという事になる。

無言の圧力がメーカー陣の上に、静々と押し掛かっていった。

## ファントム・アップデートシステム。

昨年より枢木から発売され、中東を中心に活躍を見せ始めたこの戦術機用追加装備群は、第一世代機であるファントムを、短時間で低価格で第二世代機以上にまで押し上げるという成果から、現在、各国軍関係者より熱い視線を浴びている。

既に欧州及び南北アメリカ大陸にまで広がりつつあるこの商品は、現状、枢木工業及びライセンス契約を結んだ米国MD社の独占販売状態が続いていたが、各国の兵器メーカーでも模倣あるいは概念・技術を導入した新兵装開発への着手が始まっていた。

この場合、帝国における撃震・甲型もその一例と言えなくもなかったが、やや複雑な事情 枢木工業を帝国の戦術機開発から弾いたという過去 がある所為で、本家本元への発注ではなく、他メーカーによる試作という奇妙な形になっていたのである。

その当時、実績不足・技術不足を理由に、枢木の戦術機開発参入に猛烈に反対したのが、軍の一部と結託した彼らメーカーであった事も、排斥に関わらなかった軍人達の評価を下げていた。

本来なら既に手に入っていた筈の物が手に入らない。その苛立ちが、彼等の舌鋒を鋭く尖らせるのは、ある意味必然ですらあった。

そんな軍の対応に対し、後悔先に立たずを地でいく破目になった重役達の顔色はすこぶる悪い。

しどろもどろに返す答えも、歯切れが悪く煮え切らなかった。

「正直申しまして、戦場で遺棄された残骸から解析するだけでは限界があります」

「構造自体は、ある程度解析できましたが、製造工程が全くわかり

ません。

試作機に用いた製法で同じ物を製作すると、量産化によるコストダウンを考えても、この程度は頂かないと赤字になってしまいます」「何とか製法的一端なりと掴めれば、そこからどうにか出来るかもしれませんが……………」

言外に、何とか製造工程の情報が盗れないかと匂わせる様に、一部の軍人は顔を顰め、その他の者は軽蔑の色を浮かべた。

日々増し続けるBETAの圧力に大陸派兵が急速に現実味を帯びてきた昨今、短期間での戦力向上が見込めるアップデートシステム（またはその類似品）を、可能な限り早く必要数を揃えたいというのが軍の本音ではあるが、枢木には注文を出し難く、他のメーカーでは妥当な価格で作れないでは話にもならない。

事態をややこしくする遠因となった枢木外しに、一枚噛んだ一部高官に対する他の面々の視線は、話が進んでいく事に鋭く険しくなっていた。

そんな中、座の末席を占めていた篁と巖谷は、事態の面倒さに溜息を吐きつつ顔を見合わせる。

『何で技術盗用を前提に話してるんだ？』

『面子の問題だろ。』

枢木を戦術機開発から弾いた手前、今更、手を貸せとも言えんからな

可聴域ギリギリの小声で意見を交わす二人。

巖谷の頬が、皮肉気に歪んだ。

『無断盗用の方が、よっぽど恥になると思うがね』

『独自開発技術だと誤魔化すんだろ？』

友の皮肉に、より辛辣な答えを返した篁は、そこで視線を感じると、発生源へと視線を動かした。

高官の一部、具体的には枢木外しに精力的だった面々が、何かを期待するような眼差しで彼らを見ている。

考えるまでも無く透けて見える意図に、篁はウンザリとした気分になりながらも無視する訳にもいかず問い掛けた。

「……何か？」

「君達も議論に加わらんかね」

「そうそう、いかに親友同士とはいえ、会議の場で内緒話ばかりしているのはいかがと思うが？」

明らかに自分達を巻き込む気満々な連中に、篁の表情も険しくなる。

確かに枢木とは私的な友誼はあるが、それをツテに公の面で無理を言うなど、篁にしてみれば出来ない相談だ。

ましてやこの場合、言っただけが非は軍の側にある。

まずは、キチンと筋を通した詫びを入れた上で、改めてというのが正道だと彼個人は思っていた。

しかるに、この連中には、そんなつもりはサラサラ無いらしい。

それどころか、この期に及んでもメーカー寄りの姿勢を崩すつもりは無いらしいのが雰囲気伝わってきた。

これあるを予期して、策を授けてきた少年の高笑い、篁を脳裏を過ぎる。

『これも彼の計算通りか……』

内心でそう嘆息した篁だったが、仕方ないと腹を括った。



親友に目配せで合図をすると、謹厳実直な彼にしては珍しい皮肉気な表情を浮かべ口を開く。

「小官といたしましては、盗人の片棒を担ぐような真似は、遠慮させて頂きたいのですが……駄目ですか？」

「……ッ!?」「」「」

思いも寄らぬ痛烈な嫌味に、一部の例外を除き、全員がグツと言葉に詰まる。

生真面目と評判の中佐からの手厳しい指摘に、メーカーの重役連は揃って彼から視線を逸らした。

再び降りかけた嫌な沈黙。

それを突き破るように、一人の軍人が拳手をする。

「議長」

巖谷が発言を求めた。

立ち上がる際、脇の篋に軽くウィンクを送って来る。

「どうでしょう?」

ここは正式に枢木に対し、アップデートシステムの発注を行うというのは「

正式に発注を出す事を提案する巖谷。

問題の正面突破を企図したそれに、引け目の無い一部の高官らは賛成の意を示し、逆に面子を潰されるであろう高官達からは強い反対意見が続出する。

「現時点で枢木の生産能力は、全て欧州・中東向けになっていると

聞く。

帝国の要望に、早急に応えられるとは思えん」

「左様、それならば必要な技術を公開させて、生産力に余裕のある他メーカーに造らせるのが効率的だ」

あまりにも露骨過ぎる言い分に、少なからぬ軍高官達が眉を顰めた。

兵器メーカーの代弁者めいた発言には、まともな軍人達が非難の声を上げかけるが、それを制するかの様に、冷静沈着な声が会議室内に響く。

「きちんとライセンス契約を交わして……という事ですか？」

シンと場の喧騒が静まった。

一瞬、呆けたような顔を見せたメーカーの重役達が、次の瞬間、顔を赤くして反論する。

「枢木の出した条件は、到底呑めん！」

「あんな金額を払っては、我々は大赤字だっ！」

「その通り、非常識過ぎる！」

……等々、非難めいたセリフを吐く資格があるか大いに疑問の残る面子だったが、枢木が各メーカーからの内々の打診に返した回答が、非常識だったのは確かである。

話題のライセンス料を例にとると、彼のMD社の実に十倍を超える法外な値段を吹っかけてきたのだ。

この挑発まがいの回答を受け取ったメーカー経営陣は、自分達の過去の行いを遠くの棚の上に放り投げて一様に怒り狂い、反枢木の意を固めたのだが、それを計算通りと笑う少年が居た事までは彼ら  
が知る由も無い。

室内に響く喧々囂々たる怒声に、唱和する声が相次いだ。

「アヤツらは、帝国の一員として、祖国を守る意志があるのか？」

「ある訳が無い！」

実質、枢木を動かしているという息子は、半分は日本人では無いのだからな」

「母親も同じだ！」

所詮は、英国人と情を通じて、私生児を産むようなふしだらな女だ」

自分達の失態を誤魔化すつもりか、メーカーの御用聞き達が口々に喚き立てる。

もはや当初の議題を忘れ、完全に枢木への悪口大会の様相を呈し始めた会議に、心ある将校の多くが不快気に眉を顰める中、今度は篁が挙手をした。

「議長！」

騒々しいだけだった場の雰囲気が一瞬だけ収んだ。

周囲の視線と意識を一身に集めながら、篁はおもむろに口を開く。

「小官に一つ愚策があります」

……一時間後、尽くされた議論の果てに、篁の提案は採用された。

そして、この日より三週間の時を経て、帝国議会の承認を得た日本帝国国防省は米国MD社に対し、大量のファントム・アップデート

トシステムの発注を掛ける事となる。

尚、この際、舞台裏では、国産に拘る一部将校が、枢木に製造技術を強制的にでも提供させ、国内メーカーに生産させるべしとの過激な意見を唱えたものの流石に非常識として退けられていた。

また今回の騒動の結果として、国内戦術機メーカーの技術力不足がより鮮明な形で露呈する事となり、国産派はその勢力に少なからぬダメージを負う形となったのである。

西暦一九九〇年 六月七日 帝都・神邸

良く整えられた庭園を見ながら、榊是親は一人、物思いに耽っていた。

現内閣において国防相の要職を占める彼は、自国の先行きに垂れ込める暗雲をヒシヒシと感じ取っている一人であり、それを何とか回避すべく様々な手段を模索していたが、未だ決定的な打開策を見出す事が出来ぬまま苦悶の日々を過ごしていた 否、過ごしていたと言つべきか？

榊の視線が手元に置かれた書類へと移る。

純白の紙に、墨痕凜々とした達筆で書かれた表題を、鋭い眼差し

で見つめていた男の耳に、襖の向こうから声が届いた。

「先生、お客様がお見えになりました」

「通してくれ」

ようやく来た待ち人に、榊が軽く吐息をついた。

一瞬、弛緩した心と身体を、改めて引き締めなおした榊は、客人を迎えるべく卓の前で姿勢を正す。

程なくして、秘書に伴われて姿を見せた軍人に、榊は軽く頭を下げた。

「お忙しいところ、お呼びだてして申し訳ない」

「いえ、お気になさらずに。」

大臣がそうされるには、相応の理由がお有りでしょう」

まずは、無理を言って時間を作ってもらった事に謝辞を述べる。

対して温和そうな表情を浮かべた軍人 帝国陸軍少将 彩峰菫

閣は、恐縮したように首を振って応えた。

軍の中では良識派として知られ、また、次期將軍殿下たる煌武院悠陽の教育係も務める程に見識にも富んだこの人物は、それ等の評価に驕る素振りも見せない。

今回、真つ当な軍人の代表格として、相談を持ちかける相手に選んだ事が誤りでは無かったと榊は内心で安堵した。

「確かに……まあ、お座り下さい、彩峰少将」

「ハッ、失礼します」

そうやって席を勧められると、彩峰も被っていた軍帽を脇に置き、榊の対面に腰を下ろす。

座の空気を見計らっていた秘書が、彩峰の前に茶を置き、榊の前に置かれていた茶碗も取り替えると、後は心得たもので、何も言う事も無く部屋を出て襖を閉ざした。遠ざかる足音を聞きながら、榊は、先程まで自身が見ていた書類を、彩峰の前に差し出す。

「まずは、これをご覧頂きたい」

彩峰の眉が、微かに寄った。

ザツと眺めた表紙の文字を、困惑しながら口にする。

「これは……建白書……ですか？」

「とある武家から、殿下に対して奏上された物の写しの一部です」  
「随分と時代がかった事ですな」

彩峰の顔に微かな苦笑が浮かんだ。

敵対者からは将道派などと揶揄される程、將軍への忠義に篤い彼であったが、その彼から見ても時代遅れの感は拭えない。

だが、今の世においては、時代錯誤としか言えないソレを前に、何のつもりかと榊を見た彩峰の頬が、そこで僅かに強張った。

真剣そのものな表情で、ジツと自身を見つめる榊の眼光が、笑い事ではないと無言で語っていたからである。

沈黙した彩峰を前に、ゆっくりと頭を振った榊は、重苦しい声でボソリと呟いた。

「中身は到底、古風とは言えませんよ」

苦笑を呑みこみ表情を変えた彩峰の面前で、コツコツと卓を叩く

音と共に榊の音が響く。

「向こう数年間に及ぶ世界の政治・経済・軍事に関する未来予測とそれに伴う帝国の方針に関して精細に記述されています」

「それは……いや、しかし……」

困惑が更に深まる。

刺す様な張り詰めた雰囲気を放つ榊に対し、彩峰は、半信半疑の面持ちで手元に置かれた建白書を見直した。

信用できるのか？

戸惑いながら、内心でそう呟く彩峰の耳を、一片の揺らぎも無い榊の音が打つ。

「まずは、眼を通して頂きたい。

それは建白書の概要に当たる箇所です。

大まかな内容は、掴めるでしょう」

冗談を言っているとは、到底思えぬ榊の態度に、彩峰も困惑しながら頷く。

「……分かりました。拝見させて頂きましょう」

少なくとも、榊是親という男が、他人を騙して喜ぶような人物ではない事を、彼も良く理解している。

半信半疑を、七信三疑程度に変えながら、彩峰は建白書の表紙をめくった。

室内に紙をくる音のみが、暫し響く。

徐々に、そのペースが落ち、代わって時折、唸りにも似た音が響く様になっていった。

……やがて……

「これは……本当に？」

中天にあった陽は既に傾き、やや赤みを増した光が障子越しに差す室内で、ようやく建白書を読み終えた彩峰が、呻く様に呟く。誰にとも無く投げられたその問いに、榊が無言のまま頷いた。悪酔いを醒ますように首を振る彩峰に、重々しい声で榊が告げる。

「枢木家から殿下へ奏上された物です」

彩峰の双眸に、理解の光が灯った。

「成る程、枢木でしたか」

ある意味、納得のいく情報に、彩峰は複雑な溜息をついた。既にして武家の範疇を越えつつある枢木は、日本最大級の企業体として無視しえぬ勢威を誇っている。

彼が目にした建白書を書く上で、必須とも言える正確かつ重要な情報群も、枢木になら入手可能だ。

そして、それは同時に、いま彼が眼にした未来予測が、荒唐無稽な夢物語ではないという事でもある。

手元から上げられた彩峰の眼に、緊張の面持ちを湛えた榊が映った。

一瞬、互いの視線が交錯する。

来訪前に、踏ん切りを付けていた榊が、先に口火を切った。



「政治、経済に関しては、私にもある程度は分かります。私見を言わせて頂くなら、殆ど穴らしい穴が見当たりませんでした」

そこで一旦言葉を切った榊が、真っ直ぐに彩峰を見る。誘われる様に、彩峰が問い返した。

「つまり、大臣が門外漢である軍事に関する評価を、小官にと？」「ご多忙中、申し訳ありませんが、是非ともお願いしたい」

そう言って卓に額を付けんばかりに、深々と頭を下げる榊の前に、彩峰は数瞬だけ躊躇った。

これ以上、関わる事に微かな恐れを感じたが故に。

だが、その躊躇いも微動だにせぬまま頭を下げ続ける榊の前に、ゆっくりと薄れていく。

ここまでされては退けないという思いと、軍人として、この書の先を知りたいという欲求が恐れを駆逐したのだ。

一度だけ眼を閉じ、深く息を吐いた彩峰は、覚悟を決めた声で榊の要請に応える。

「分かりました。」

浅学非才の身ではありますが、お引き受けしましょう」

榊が、明らかにホツとした表情で顔を上げる。

内容が内容だけに、胡乱な者には託せなかったのだ。

ここで彩峰に断られれば、次の候補を探すのは、榊をしても容易ではない。

「感謝します、彩峰閣下」

「いえ、こちらこそ」

差し出された榊の手に、彩峰の無骨な手が重なった。

西暦一九九〇年 六月九日 大阪

天下の台所の呼び名で名高い地 大阪。

日本中から、否、世界中からあらゆる物資が集まり、そして散って行くこの土地は、それ故に様々な顔を併せ持つ。

……そう、本当に色々な顔を。

そんな大阪の持つ顔の一つ。

うらぶれた倉庫街の一角に、その場には似つかわしくない男が一人紛れ込んでいた。

「はてさて、随分と堅い警備を抜いてみれば、出てきた物はタダの石ころとは」

かっちりとした麻のサマースーツを着こなした伊達者は、どこか芝居がかった口調で呟きながら、先程、開けたばかりのコンテナの中身を見下ろす。

其処には、赤みを帯びた石、いや岩の破片とでも言うべき物が、ギツチリと詰め込まれており、重量自体はかなりのものだ。

それらが更に大型のコンテナに整然と詰め込まれ、ボロではあるが相応の広さを持つ倉庫を、ほぼ埋め尽くしている。

とある大企業が、複数のダミーを介し、幾重にも隠蔽して国内に運び込んだ品がコレだった。

異常とすら言える程の秘匿ぶりは、上からの厳命で彼が注視していなければ、まんまと出し抜かれていただろう程に狡猾、且つ、巧妙であり、事の重要性をプンプンと匂わせていた。そう、報告を受けた上司をいきり立たせ、無謀な潜入を強行させる程に。

今回の潜入に費やされた人員と費用は尋常ではなく、そこまでのモノをつぎ込んで尚、この場に到ったのが彼だけと言う事実が、相手のガードの堅さを伺わせていた。

そして、喪われたモノを贖うに足るだけのモノが得られなければ、こちらもタダでは済まないという事も。

正直、意に染まぬ仕事ではあったが、仕事は仕事。

ましてや、多大な被害を受けた以上、彼としても得る物もなく退けないという立場がある。

それ故に、林立するコンテナの只中で、男は顎に手を当て、首を捻った。

その仕草からは想像しづらい切れる頭脳を、高速で回転させながら思考する。

問題は、これが何かという事だ。

その職業上、男は博識と言っていい知識の持ち主であったが、それでもこの石コロの正体は皆目見当もつかない。

暫し黙考した後、男は考える事を止めた。

分からないモノは仕方ない。

そうアツサリと割り切ると、男は、再び芝居めいた調子で独白する。

「……まあ、今をときめく枢木が、ここまでする以上、相応の理由があるのは明白。

差し当たり、行きがけの駄賃なりと頂いていきますかな」

餅は餅屋に。

分からないモノは、分かる人間に調べさせれば良い。

そう判断するや、店先のリングゴに手を伸ばすような気軽さで、コ  
ンテナの中に鎮座する拳大の石へと手を伸ばし 引っ込めた。

眼にも留まらぬ速さで。

音も無く石の上に突き立った銀色の物体 クナイを見据える男  
の眼が、スツと温度を無くすと同時に、倉庫内に良く通る声が響く。

『招かれざるお客人が、駄賃まで持っていこうとは、少々、欲が深  
過ぎるのでは?』

歳若き女性の声に、男の頬が微かに緩んだ。

出し抜いたつもりが、そうではなかった事に気付いたからである。  
だが、それは同時に……

「……これは、これは」

コレが、只の石コロではないという証左でもあった。

枢木の情報部門を統べる才媛が、わざわざ出張ってきた事自体が、その証となる。

「名高き篠崎のお嬢様のお出ましとは。

やはりタダの石ころではないという事ですか？」

音の反響すら利用し、居場所を掴ませぬ相手に向かい、男は不敵にも挑発を仕掛ける。脱出の機を伺いながら、少しでも情報を引き出すべく動く辺り、胆力・機転共に尋常ではなかった。

一方、こちらもある者というべきか、微塵も動揺を感じさせぬ声だが、いずこからともなく降ってくる。

『申し訳ありませんが、お答えする義務は御座いません』

男は残念そうに肩を竦める。

その口元が、微かに歪んだ。

「フム、つれない事を仰る。

仕方ありませんな、こちらで勝手に調べるといふ事で」

どこか勿体ぶった言い回しでそう告げると、再び、コンテナへと手を伸ばし、又、引っ込めた。

再び、石を貫いたクナイを眺めながら、ヤレヤレといった仕草を演じてみせる。

わずかに揺らぐ声が、どこからともなく響いた。

『それも、ご遠慮して頂きます。

帝国情報省外務二課の鎧衣左近殿』

素性を言い当てられた男　鎧衣は、場違いなまでに上品な笑みを浮かべた。

そして、さも困ったように首を振る。

「困りましたな。」

ここまで来るのに相応のコストが掛かっているので、手ぶらという訳にはいかないのですよ」

『ご安心を。』

お帰り頂くつもりも、有りませんので』

その宣言を契機に、不敵と言うか、いい度胸と言うか、未だにその姿勢を崩さぬ左近に向けて、複数の殺気が殺到する。

いつの間にもやら周囲を固められた事を悟り、左近の双眸が僅かに細まった。

いずれも恐るべき手練達　自身が、枢木の暗部を読み損なっていた事を理解しつつ、まるで降参とでも言うかの様に両手を挙げてみせる。

「フム、袋の鼠というヤツですか？」

『畏に掛かった古狸の間違いでは？』

必殺の間合いに捕らわれた男が、大袈裟なりアクションを演じてみせると、冷ややかな声がソレに応じた。

左近の笑みが深くなる。

「いやはや、これは手厳しい。」

……それでは、狸らしい芸の一つでもお見せしますか？」

男が嗤う。

そこに危険なモノを感じ取った咲世子が、配下に合図を送るより一瞬早く、倉庫街一帯を押し包むほどの轟音が鳴り響いた。

「クッ!？」

衝撃に碎けた窓の向こうで、火の手が上がるのが見えた。

次の瞬間、元の位置へと戻った包囲者達の眼に映ったのは、蓋をこじ開けられたコンテナのみ。

見下ろす咲世子の双眸が、わずかにキツくなった。

芸の種 あらかじめ周囲に配して置いた爆弾を目晦ましに、危地を脱した左近は、何事かと集まり出した人ごみに紛れ、悠々と現場を離脱しつつあった。

ある程度の距離を稼いだ後、路地へと逸れ、ホッと一息ついた男は、懐に収めていた『駄賃』を確認する。

親指大の赤い小石が一つ。

それが、現代の忍者・鎧衣左近の今夜の成果の全てだ。

今宵だけで喪われたモノを考えるなら、余りにも不釣合い過ぎる。

「篠崎の看板に偽り無しか。

全く未恐ろしい事だ おっと」

相変わらずな口調で、どこか演技をしているような男が、不意にユラリと身を翻す。

一瞬前まで、彼の頭が在った空間を、一条の銀光が貫いていった。チラリと背後へと向けた眼に、一瞬だけ、ほっそりとした人影が

映り、消える。

「くわばら、くわばら」

そう呟きながら、まるで誰かに見せ付けられるように肩を竦めると、鎧衣の姿もまた野次馬の中に溶ける様に消えていった。

赤々と燃え盛る炎が、夜の大阪の一角を不気味に彩っていた。  
高台にある枢木資本のホテルから、その光景を見下ろしていた少年　枢木ルルーシユは、面白そうに口元を歪める。

「流石に無視は出来なくなっただか。  
随分と大物が出張ってきた様だな」

ここ数年の枢木の大躍進は、どうやら予想以上の注目を集めていたかと苦笑する。  
出る杭は打たれるの例え通り、これからは枢木に対する圧力が、更に強くなるであろうと予測し、ルルーシユは対策を思考した。  
複数のプランが、並列して進み、取捨選択が彼の中で行われる。  
二十八通りの対策が、六件まで絞り込まれた処で、不意に少年は背後へと声を掛けた。

「咲世子か？」

「……はい。」

「鎧衣左近を取り逃がしました」

片膝を立てて跪き、己が失態を告げる咲世子。

だが、そんな彼女へと向き直ったルルーシユは、秀麗な容貌に悪



戯っぽい笑みを浮かべてみせた。

「持って行かせたか？」

「ハイ、しっかりと持って行きました」

どこか笑いを含んだ問いに、常のメイド服とは異なる忍び装束に身を包んだ咲世子が応じた。

ルルーシユの笑みが、陰謀家めいた色を帯びる。

世界各地に残る遺跡の残骸からサクラダイトを回収する際、目晦まし目的のダミーとして用意した小道具を利用しての小手先の策。上手くいけば儲けもの程度の認識だったが、予想通りに嵌ったとなればやはり気分は良かった。

主演女優を演じた臣下を、労う声にも喜色が混じる。

「ならば良い。」

全ては計算通りだ」

大山鳴動して鼠一匹。

ここまで事を大きくしておきながら、得た物が『タダの石コロ』一つだけとなれば、さてどうなる事か？

彼の口元に、人の悪い笑みが浮かぶ。

今回の一件を鎧衣に命じた反枢木の連中が、どう責任の擦り付け合いをするか？

そしてソレを利用して、どう連中を引っ掻き回し、失脚へと追い込むか？

自らが主導し、演出するであろう未来の悲喜劇を想像し、少年は心底愉快そうに高笑いを上げた。

西暦一九九〇年 六月十二日 帝都・枢木邸

「はあああつ！」

風切る音に、少女の氣勢が混じる。

敬愛する父から誕生祝いに贈られた木刀を手に、篁 唯依は遙か高みにある敵へと挑み掛かり

「おっと」

かわされた。いともアツサリと。

振り切った得物の反動を殺しきれず、勢い余ってたたらを踏み、転びかける唯依。

そんな彼女の醜態を前に、名高き双刀使いとして名を馳せた黒髪の美女は、左手のみに携えた小太刀をダラリと下げたまま意味ありげにニヤリと笑う。

プチッと、何かが切れる音がした。

「くううっ!」

「うっん、まだまだねえ」

悔しげに唸りを上げる美少女と、余裕綽々といった風情で笑う美女。

見ているだけなら眼の保養になりそうな一組であるが、一方が放つピリピリとした雰囲気ガソレを壊している。

調息を終え、足元を踏み締め直した唯依が、再び一閃を放った。

正眼の構えから放たれる突きが、一筋の矢と化して真理亜の喉元へと迫る。

「うおおお!」

「よっつ」

渾身の気合と共に放たれた一撃が、軽い掛け声と共にスルリと外された。

わずか十センチにも満たぬ最小の見切り。

立ち位置を半歩たりとも変える事無く、自身の最高の一撃を往なされて、唯依の闘志がグラリと揺らいだ。

空かさず放たれた一閃が、延びきった腕ごと木刀を弾く。

ただそれだけで、完全に重心を崩された少女は、抗う事も叶わず尻餅をついた。

挫けた心が錘となって、唯依の手足を萎えさせる。

滲みかけた涙を隠すかの様に、彼女は吼えた。

「はっ、はあ、はっ………叔母様、本気でやって下さい!」

悔しくて悔しくて堪らなかった。  
目の前に立つ人が、まるで本気を出していない事が。  
そして、本気を引き出せない不甲斐ない自身が。

追い付きたかった。

一日でも、一時間でも、一分でも早く。

…………… 追い付きたいのに。

遙か彼方に在るあの人の背中。

それが一層遠のく思いに、唯依は苛立ちを抑える事が出来なかった。

そんな彼女の心情を逆撫でするかの様に、リラックスし切った声が響く。

「え〜充分、本気だけど？」

「嘘です！」

なら、なんで反撃して来ないんですか!？」

普段の甘えっぷりは何処へやら、齒を剥き出さんばかりの勢いで唯依が噛み付く。

あまりのエキサイト振りに、珍しく真理亜が戸惑いを見せた。

困ったように頬を掻きつつ、さてどうしたものかといった表情で首を捻りながら宥めに掛かる。

「う〜ん…………… やっぱり、アレよ。」

唯依ちゃんの珠のお肌に、傷とかけられないでしょ?。」

女の子の身体に傷など付けられないと、それなりに正論っぽい事

を言ってみる。

だが、そんな程度の誤魔化しで納得させられる程、今日の唯依は甘くなかった。

キツと睨みつける眼差しに、真理亜は微かに気圧される。

「それが、本気でやってないと言ってるんです！」

叩きつけるような一喝を受け、真理亜は溜息を吐く。

何となく唯依の苛立ちの原因が理解出来たのだ。

そしてそれが、一朝一夕で解決が付くモノでもない事も。焦ったところで届きはしないのだ。

彼女の自慢の息子が、これまで積み上げてきたモノは、決して易くなく、安くもないのだから………

……いや、唯依にもそれは分かっているのだろう。

分かっているても、焦る思いは止められない。

逸る気持ちが抑えられない。

所詮、人間の感情は、ロジックではないのだ。

仕方が無いか。

そう胸中で呟くと、彼女は、今この時だけ道化を演じる事とした。オヨヨとばかりに蹲り、目元を押さえながら嘆いてみせる。

「嗚呼、唯依ちゃんが虐める。」

これが嫁の姑イビリというヤツなのね」

……何気にノリノリであった。

悲嘆にくれる様を演じながら、唯依の急所をピンポイントで抉る。幼い美貌が、真つ赤に染まった。手の平で隠された女の唇が、ニヤリとばかりに釣り上がる。

「はあわっ？　だ　誰が、よ、嫁ですかっ！？」

「唯依ちゃんが、ルルーシユの　違うの？」

裏返った声で絶叫する唯依。

それに対して、打てば響く様に答えが返る。

少女の顔が、赤くなり、青くなり、また赤くなった。

「お、叔母様あっ！」

「あゝハイハイ、分かったから。

今日は、それなりに動いたし、もう終わりにしましょう」

喘ぐように絞り出された声。

春風駘蕩とばかりに緩んだ声。

酸欠状態に陥り、パクパクと口を痙攣させる唯依の手から、ヒョイツと木刀が取り上げられる。

得物を奪われ、頭に昇った血が降りる事で、彼女が正気づいた時には、既に真理亜は背を向けていた。

「~~~~~」

その背に恨めしそうな唸りが届く。

だが、その程度の事では、歳経た老獪な女狐様を振り返らせるには、力不足も甚だしかった。

そのままスタスタと歩み去る姿を、しばし睨みつけていた唯依だったが、プツクリと頬膨らませつつも、根負けしたようにその後を追う。

稽古に使っていた広い庭を横切った二人は、良く磨かれた縁側へと腰掛けた。

「はあ、もう随分と暑くなって来たわね」

先程の爆弾発言など無かったかの様に、涼しい顔でのたまう。

唯依の眼が、微妙に釣り上がった。

微かな笑みが、真理亜の口元に浮かぶ。

どうやら唯依の自省癖悪い癖が発動する前に、お茶を濁せたと判断した真理亜は、用意されていた水出しの煎茶をグラスに注ぎ少女へと渡した。

渡されたソレを、しばし親の敵の様に睨んでいた唯依だったが、喉の渴きには抗い難かったのか、ムスツとした表情を崩す事無く口を付ける。

喉を過ぎる清涼感に、唯依はホツと一息ついた。

微かに吹く風が、稽古で火照った身体を冷ましていく。

身体の内と外を冷やされて、やや冷静さを取り戻した唯依は、まだ固い調子で口を開いた。

「……叔母様は、何故、唯依に剣を教えてくださいださらないのですか？」

それも又、彼女の不満の一つ。

どれ程乞うても、眼前の女性は、自分に剣を教えようとはしなかった。

稽古や打ち太刀の相手はしてくれても、である。

そんな彼女の姿勢は、唯依に不満と不安を抱かせるには充分だった。

どこか躊躇いを宿した眼差しが、チラチラと真理亜へと注がれる。

コトリとグラスが置かれた。

「……………私のは我流に近い邪剣だからね。

それに唯依ちゃんは、篁中佐から正統な剣を学んでるでしょ？

妙な癖とか付けちゃうと、申し訳ないのよね」

苦笑混じりの答えは、彼女にしては、ある意味素直だった。

武人としての嗜みと言うべきか？

一応は、それなりに気を使ったの事だったのだと告げる。

唯依の身体から少しだけ力が抜けると、変わって拗ねた様な空気が、その身に宿った。

「……………ルル兄様には、教えていらっしやるのに……………」

「あの子は、私の剣と相性良さそうだったから、ついね」

愛らしい唇を僅かに尖らせ抗議する唯依に、真理亜の苦笑が深くなる。

……………そう、思った以上に相性が良かった。

砂地が水を吸う様に、彼女独特の剣理を受け入れ、咀嚼し己が血肉へと変えていく様は、そうとしか評しようが無い。

以前、紅蓮が断言した様に、いずれは自分達を超えて行くだろう。



それも紅蓮や自身の見立てよりも早く。

そして飛び立っていくのだろう。

遙か彼方へ。

何人も至る事叶わぬ高みへと。

遠からず訪れるであろうその時に、親としての喜びと寂しさを感じつつ、これ以上は藪蛇と真理亜は話題を切り替えた。

「ルルーシュといえば、もう神根島についた頃かしらね？」

「ルル兄様は、お仕事で出掛けられたのでは？」

ピクンツと眉を跳ね上げて、唯依が食いついてくる。

用があるからと告げ、今朝方、腹心の面々と共に出掛けて行ったルルーシュ。

てつきり会社の仕事とばかり思い込んでいた少女は、ワタシ聞いてませんと真理亜に詰め寄った。

「うーん……半分は仕事で、半分は私用よ」

「私用……ですか？」

苦笑いを浮かべつつ返された答えに、スツと筆で刷いたような綺麗な眉を寄せながら、不機嫌そうな声が漏れる。

だがそれは、この場合は悪手だった。

その事に唯依が気付くよりも数瞬早く、獲物を見つけた猫の目で真理亜が混ぜっ返してくる。

「ああ、ムクれないの。」

別に唯依ちゃんの知らない可愛い子と遊びに行った訳じゃないし」  
「そ、そんな事、言ってます！」

慌てて否定するが、上ずる声が内心を如実に示している。  
本当に？ とばかりに覗き込まれるともうアウトだ。

心底楽しそうな笑い声が弾ける。

肩を震わせながら笑う真理亜を前に、唯依は真っ赤になって俯く  
事しかできなかった。

そうしてひとしきり楽しんだ後、笑いの余韻を深い吐息と共に吐  
き出した真理亜は、羞恥に震える少女を膝の上に抱き上げる。

複雑な表情をしながら、それでも大人しく膝の上に収まった唯依  
を抱かかえたまま彼女は静かに告げた。

「……昔の友人に会いに行っただけよ」

常とは異なる声。

どこか透明感のあるその響きに、少女は戸惑いながら首を傾げた。

「ご友人ですか？」

疑問が言葉となって零れ落ちる。

自身が兄と慕うその人は、複雑な出自と年齢に釣り合わぬ異才故  
に、同年代の友人という存在に縁遠い事を彼女は良く知っていた。

もう結構長い付き合いになるが、未だにその手の人物に遭遇した  
事が無いのが、その証拠と言えよう。

唯一、同年代で兄と接点があるといえば、事ある毎に突っ掛かっ  
てきては、その度に凹まされ悔し涙を流しながら帰っていく月詠真

耶くらいものだ。

そんな兄が、昔の友人に会いに行った等と聞かされれば、疑問に思うのは、むしろ当然と言えよう。

もどかしそうに探る視線で、真理亜を見上げる唯依。

そんな少女に向けて、真理亜は優しく微笑むと、どこか遠くを見る眼差しで東の空を見上げながら呟いた。

「そつ、遠い遠いところに住んでる古い友人に、ね」

西暦一九九〇年 六月十二日 神根島『遺跡』前

つい数時間前の喧騒が、まるで嘘のような静寂が、その場を満たしていた。

遺跡を丸ごと内包する巨大な仮設ドームに覆われた空間には、先程運び込まれたばかりの無数のコンテナが所狭しと林立している。

石油に代表される油脂類が。

鉄、銅、アルミ等の鉱物資源が。

或いは金、銀、白金などの貴金属が。

更には、各種のレアメタル、レアアースが。

ある物は専用のタンクに収められ、ある物は鉱石のまま、又ある物はインゴットに姿を変えられ、それぞれが、それぞれのコンテナにギッシリと詰め込まれている。

そんな一財産どころか、一軍を編成出来そうな膨大な資源の只中、遺跡の前に置かれた薄赤く輝く複数のシリンダーの前に彼　　柩木ルルーシュは居た。

シリンダーを満たすのは、世界中から掻き集めた遺跡の残骸より抽出された流体サクラダイト。

その量は、彼らが手にした総量の実に八割に達している。事実上、地表上に存在するサクラダイトの殆ど全てが、今この場に集められていると言っても過言ではなかった。

そして、これらは全て、喪われる為に集められた物だ。

ドーム内に集積された膨大な資源と共に。

これから直ぐに。

全ては彼、ルルーシュの目的の為に。

その為の力を、手にする為の贄として。

ルルーシュの胸元で、三回だけ何かが震えた。

物思いに耽っていた彼の意識が、こちらへと引き戻される。

懐をまさぐり、懐中時計を取り出したルルーシュは、時が満ちた事を知った。

「　時間だ。行くぞ」

漆黒の衣が翻った。

振り返ったその姿を、此処とは異なるとある世界の者が眼にしたなら、皆、異口同音に同じ言葉を紡いだろう。

悪逆皇帝ルルーシュ、と。

未だ未完成、そして白を黒へと変えて尚、その姿は、かつての彼のものだった。

人類史上唯一、世界を統べた霸王。

そして、全ての罪と憎悪を背負い、仮面の英雄に斃されし魔王。

幼き少年の身でありながら、揺ぎ無い王者の威風を纏う彼の前で、彼の騎士達が一様に跪いた。

「……コイエス・ユア・マジエスティ……」

膝を折る四人の男女が纏うのは、かつて一時だけ彼の騎士となつた親友のソレを模した騎士服。

黒を白へと変えながらも、それは彼の騎士として、彼の円卓に座す資格を持つ証。

武を以って、あるいは智を以って、彼に仕える騎士達である。

彼らが造る道を通り、彼が地上に残つた最後の遺跡へと歩み出す様は、一種の儀式を思わせる、否、これは儀式そのものであった。

終焉と生誕の為の儀式　彼が、ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアから枢木ルルーシュへと移り変わった事を宣言する為の儀式が、今、この場にて始まるうとしているのだ。

彼の手が、遺跡の石扉へと触れる。

触発されるように赤い輝きが場を満たし、金色の残照へと変わった。

世界そのものが切り替わった様に、黄昏に沈む世界へと彼と彼の騎士達は再び踏み入っていく。

「一別以来だな。」

「愛しき我が魔王よ」

林立する朽ちた遺跡の石柱の奥から、年齢不詳の女の声が響く。背に届く髪を揺らしながら現れた美女の出迎えに、ルルーシユの口元が微かに緩んだ。

「そちらでも、こちらと同じ時間が経っているというのが不思議だな」

「やはり決意は変わらぬか？」

「無駄に苦勞する事もあるまいに」

挨拶代わりの軽口を無視し、不老不死の魔女が切り込んでくる。金色の瞳に映るのは凧いだ色のみだ。初めて出会った頃に似た虚無を湛えた眼差しで彼を見つめてくる。

試す様な、誘う様な、その問いにルルーシユは一度だけ瞳を閉ざした。

僅かな間を置き開かれた双眸には、峻烈なまでの意志の光が宿っている。

「確かに逃げてしまえば楽だろう。」

「だが、それではオレが、オレでなくなる」

告げられる声音は、静かで、それ故に重かった。

背後に控える騎士達が、沈黙と共に主の言葉に耳を傾ける。

良くも悪くもルルーシュという人物の生涯に逃げは無い。

戦略的な撤退はあっても、本当の意味での逃走は無かった。

心折れかけた事はあっても、最後は常に戦陣へ立つ事を選んだ。

無論、それは彼を支えた者が居たからこそではあったが、それでもその生き方を選んだのは彼自身である。

その生涯は常に闘争の中にあり、そして戦い勝利する事こそが、彼にとって生きる事と同義でもあった。

だからこそ、この生き方だけは変えられない。

例え生まれ変わろうとも。

もし、それを変わるといふのなら

「負け犬に成り下がり、無様に生き延びた処で、そんな生に何の意義がある」

ある筈が無い。

生きるという事は、ただ息をしている事と同義ではないのだ。

もし、それを生きると言ふなら、彼は叛逆などしなかつただろう。

傲然と、あるいは超然としてルルーシュが胸をそらす。

これまでも、そうしてきた様に。

「この世界が滅び行く運命にあるというなら、その運命を変えてみせるだけの事だ」

告げる世界の命運を変える事を。

神でもなく、魔でもなく、ただ人の意志と力のみで。

「奇蹟が必要だというなら、何度でも奇蹟を起こしてみせよう。

英雄が必要だというなら、オレが英雄になれば済む話だ」

不可能を可能と為して、奇蹟を演出した様に。

徒手空拳の身から、世界の希望を束ねる英雄へと駆け上がった様に。

それが必要だというなら、何度でも、と。

傲岸不遜な王者の威を纏い宣言するその姿を前に、不老不死の魔女は眩しそうに眼を細めた。

虚無を装っていた瞳に、苦笑めいた色が浮かぶ。

『英雄セロの仮面は、アイツに譲ったのではなかったかな？

……………まあいい、それがお前の選択であるというなら、これ以上、無粋な事は言わんさ』

いささか残念。

素直にそう思う。

だが、己が王が、ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアではなく、枢木ルルーシュとしての生を、この世界で全うする事を選ぶと言っなら諦めよう。

そう胸中で嘆息しながら、コードの呪縛に囚われた女は、その身に架せられた呪いに生涯二度目の感謝をした。



彼等の魂は本来こちら側に属するモノ。  
それが何故、異世界へと移ったのか？

その理由に見当がついていたＣ・Ｃは、それ故に、今生のルルーシュに固執することは無かった。

『いずれにしろ、お前は帰って来る。

いつか必ず私の元へ』

永劫を生きる魔女が、楽しげに笑いながら予言する。

今回は、あくまでもイレギュラー。

次の生は、再び、本来の世界に戻る筈。  
ならば、それまで待とう。

人の生など、自分にとってはホンの一時に過ぎぬ。  
だから、少しくらいの戯れは赦すと。

言外にそう告げる魔女に、彼女の魔王は微かに苦笑するだけだった。

そんなルルーシュの態度に、少しだけ面白くなさそうに鼻を鳴らしたＣ・Ｃは、彼の背後へと視線を向ける。

無言の問い掛けに、背後に控えていた騎士達は、それぞれに応じた。

「我が忠義は、ルルーシュ様の下に」

「ここで又、仲間外れつてのはヒドイよねえ」

「ご厚意だけは、ありがたく受け取らせて頂きます」

「まあ、色々あるから……仕方ないですよ」

予想通りの返答に、魔女は、もう一度だけ鼻を鳴らした。

『フフン、まったく揃いも揃って馬鹿ばかりだ。

好き好んで苦勞を背負い込むとは……マゾか、貴様等』

その美貌からは、想像し難い悪口雑言が、ポンポンと飛び出してくる。

そう告げながら楽しげに笑う魔女に、ルルーシュが短く応じた。

「ぬかせ魔女が」

聞き慣れた短い切り替えしに、魔女と呼ばれた女が破顔した。

それでこそ我が魔王。

豊富な胸の奥で、満足そうに呟いたC・Cは、そんな心情を隠したまま、ニヤリと人の悪い笑みを浮かべる。

厚意を謝絶された以上、少し位の悪だくみは許されて当然。そう内心で嘯くと、巧みに一服盛る事にした。

『ああ、やはり確信したよ。

お前が何故、『ワイアード』繋がりし者と成ったのが良く分かる』

前回の邂逅の際、自分だけ気付いた事実。それを餞別として渡す。ただし

「『ワイアード』？」

何の事だ、C・C。」

予想通り食いついてくる様に、胸中でニンマリとほくそ笑む。投げたのは、事実由来する言葉の毒。

まあ、せいぜい首を捻れ。

胸の内で、そう呟いた魔女は、掛けられた問いに答える事無く、人を食った笑みを返す。

『さてな……まあ、私がワザワザ教える必要が無いとだけ言っておこう』

「C・C……！」

『折角の厚意を拒絶された事へのささやかな意趣返しさ。』

その位は大目に見るのだな　さて、始めるぞ』

はぐらかされ、怒りの声を上げるルルーシユを黙殺し、魔女は果たすべき役目に取り掛かった。

まあ、これ以上、続けるとこちらの手札をさらす破目になるのを、恐れた訳ではない。………多分、きっと、その筈だった。

C・Cの額に刻まれたコードの紋章が輝きを放つ。

呼応するかのように黄昏の間全体が、ゆっくりと光で満たされていった。

眩いばかりの光の中、一同は眩しそうに眼を細める。

世界を満たす黄金の光の中、いずこからとも無く、魔女の声が響いた。

『受け取るがいいルルーシユ。』

お前が為した偉業からすれば、到底釣り合わせぬ対価だがな』

そう、この程度では釣り合わない。

だが、この程度しか贈れない。

そんな不満を噛み殺し、彼女は遺跡の制御に全力を注ぎながら、最後に告げる。

『……そしてこれは、私からのささやかな贈り物だ』

そう、これだけは、彼女から彼への贈り物。

そして、彼女にしか出来ない贈り物。

そんな誇らしさと共に、魔女と呼ばれる少女は、久方ぶりに己の全力を振り絞った。

光が世界を満たし、暫しの時、異なる世界の間架け橋を産む。

光の中に、薄っすらと黒い影が浮かび、やがてそれは一人の男となつて顕現した。

予定に無い出来事に、相変わらずイレギュラーには弱い少年が固まる中、『彼』がゆっくりと口を開く。

「ルルーシユ」

聞き覚えのある声だった。

年月による変化を受けても尚、忘れる事の無い懐かしい声。

震える声が、『彼』の名を紡ぐ。

「……スザクか？」

ゼロの仮面を小脇に抱えた壮年の男性が、ゆっくりと首肯する。歳経て尚、その容貌には、かつての親友の面影が色濃く残っていた。

「老けたな」

「君は小さくなったね。」

昔を思い出すよ」

動揺する心のまま、思わず零れた本音に、スザクが苦笑した。時の流れを考えるなら、彼は既に五十に近い。

対して自身は、ようやく十歳を少し越えたところだ。

親子ほど歳の違ってしまった親友達は、互いに顔を見合わせる。

「それが歳を取った証拠だろ」

「ハハハ、そうかもしれないな」

屈託の無い笑いが、互いの間で弾けた。

無駄に言葉を重ねる必要は無い。

彼等は、親友で、共犯者で、敵同士。

ある意味、これほど縁の深い相手は、どちらにも他に居なかった。そして、それ故に、英雄セロの仮面は、彼に引き継がれたのだから。

小脇に抱えていたその仮面を、軽く掲げたスザクは、感慨深そうに呟く。

「この仮面を引き継いでから色々な事があったよ。」

中には『ゼロ』にも、どうしようもない事も……あったね」

そう、本当に色々な事が

兄の意志を継ぐと称し、自国の臨時代表から正式な代表になろうとした政治的センスに欠ける少女を、秘匿された真実 首都と共に、その地に住まう億を越える民を虐殺したのが、本当は誰だったのか を楯に阻止し、終生、公職から追放した事もあった。

或いは、英雄の片腕としての虚名を武器に、一国の首相まで登り詰めた男が、能力不足故にメッキを剥がされ、顕職を追われる際の悲鳴混じりの救援要請を黙殺した事も。

そして、とある君主国家が柱石たる男を病で喪った後、乱れた国を立て直す為、内政干渉紛いの真似までして、強引に立憲君主制に移行させたりもした。

正直、自分には荷が重かったそれらの出来事。

それでも英雄セロの仮面とあの日の誓約ギアスを支えに、何とか踏み越えてきたのだった。

その時の苦悩と苦勞を思い出し、スザクは、ほろ苦い表情を浮かべる。

「……………ああ」

そんな彼の心情を察したのか、ルルーシュも言葉短く相槌を打つ。友に負わせた重荷を思い、申し訳なさと感謝の念が、彼に沈黙を強いた。

スザクの口元が、スツと綻ぶ。

「でも、それなりに頑張ったと思う。  
少しは優しい世界になったかな」

「そうか」

どこか満足気に、やり遂げた男の表情で、そう告げる親友。  
その姿を前にして、ルルーシユの相好も、わずかに崩れた。  
向かい合うスザクの面にも、柔らかな笑みが浮かび、そこに一筋  
の陰がさす。

「君は、また戦うんだね」

「ああ」

気づかわしそうに掛けられた問いに、少年は小さく頷いた。

それは既に成された選択。

枢木ルルーシユとして、この世界で生きる為に戦う　その決定  
が揺らぐ事は無い。

言外に、そう告げる年少の親友に、スザクは苦笑を浮かべるだけ  
だった。

一度言い出したら聞かない、どこか頑固な相手の性格を、よく分  
かっている彼にとって、それは無駄なだけなのだから。

だからこそ……

「頑張つてね」

ただ激励の言葉のみを贈る。  
端正な面差しに、不敵な笑みが浮かんだ。

「もちろんだ。」

「オレを誰だと思っている」

「そうだったね。」

「君は奇蹟を起こす男だった」

小さな身体で、それでも傲然胸を張る友の姿に、懐かしさと嬉しさを感しながらスザクは応じる。

そう、何も案ずる事など無いのだ。

己の親友は、奇蹟を起こす男。

神すらも跪かせ、世界を壊し、世界を創った暴虐の霸王。

ベータだろうが、アルファだろうが、叩き潰し、踏み躪って、道を拓いていくのを疑う事自体馬鹿馬鹿しい。

そうやって安堵の念を新たにするスザクに、悪戯っぽい笑みを浮かべたルルーシュが軽く突っ込みを入れた。

「今は、それはお前の役目だ」

「……………そうだったね。」

「忘れるところだったよ」

苦笑いと共に頬を掻く。

数十年ぶりに流れる優しい時間に、気が緩んだ自身を笑った。

だが、そんな刻は、いつまでも続かない。

そんな贅沢は、彼らには許されないのでから。



『オイ、気分を出しているところ悪いが、そろそろ限界だ』

どこか不機嫌そうな魔女の声が、いずこからか降ってくる。

終わり難い、終わりたくない時が、終わる事を、彼等は理解した。

向かい合う紫と緑の視線が交錯し、そして別れる。

「……それじゃあ」

そう告げながら、再び仮面を被ろうとするスザクの耳に、柔らかな声が届く。

「ああ、またな」

スザクの手が、止まった。

半ばまで被られた英雄<sup>ゼロ</sup>の仮面。

その中で、未だ露出していた口元が綻ぶ。

「うん、またね」

最後の言葉に乗せて贈られた『約束』に応え、彼は再び、彼<sup>ゼロ</sup>へと戻った。

大小二つの人影を呑み込み、世界を満たす輝きが力を増す。

世の理を引き裂き、異なる世界へと架けられた架け橋を越え、膨大な量の情報が、あちら側からこちら側へと押し寄せてきた。

本来なら、そのまま霧散する筈のそれらを、不老不死の魔女に制御された遺跡が集約し形成していく中、送り込まれた巨大な情報塊

は、用意されていた贅を糧とし、己の血肉へと変換し実体化している。

本来の用途を超え、限界を越えて崩壊していく遺跡を押し潰し、かの世界から、こちらの世界へと贈られた最初で最後の贈り物が顕現した。

そして、閉ざされていた眼を開いた時、魔王は、自身の身が、無数の電子機器にて囲まれた空間にある事を自覚する。

どこか斑鳩のブリッジに似たそれは、彼が望んだ物。

世界の命運を変える為、世界を渡った彼の艦。

親友が、彼の為だけに用意してくれた最初で最後の贈り物。

「……………スザク……………」

わずかな未練が、友の名となって零れる。

そんな自身の未練がましさを、軽く首を振って弾き飛ばしたルルーシユは、早くもコンソールの一角に噛り付いていたロイドに声を掛けた。

「どうか、ロイド？」

応えが無い。

……………いや、呻きにも似た声を漏らしながら、肩を震わせていた。

怪訝そうな顔をする彼の前で、唐突にロイドが爆発する。

「……………くっ……………くううっ！」

ボクが……ボクが……ボクが完成させる筈だったのにいいい！」

眼を血走らせ喚き散らす姿は、どうみても危ない人だった。

流石に啞然とするルルーシュの横手から、恐る恐る声を掛けてきたセシルが、困ったように顔をしかめながら、狂乱の原因を告げて来る。

「ロイドさんの未完成の研究を、全部ラクシャータが完成させた上で、詳細なデータを送りつけてきたんです」

どっちも、どっちだった。

共に大人気ない事、甚だしい両者に、面識のあるルルーシュとしては、額に手を当て呆れる事しかできない。

とはいえ、無駄に時間を過ごしている程の余裕もなかった。

恐縮しきりといった様子で畏まるセシルに向けて、代わりに報告をする事を命ずる。

「……全てご要望通りです、ルルーシュ様。

ラクシャータは、良い仕事をしてくれました。

この艦により、私達は更に時を縮める事が叶うでしょう」

満足の行く報告に安堵する。

正直、妙なギミックでも仕込まれていたらとの僅かな不安も無くなかった。

「そうか」

ホッとした様子で頷く主君に、気を取り直したセシルも笑みを浮かべる。

あちらの方で、ヒステリーを起こしている誰かさんを、華麗にスルーしているのは、どちらも手馴れたものだった。

そのまま手近な制御卓により、自身でも情報の引き出しを開始したルルーシユの頬が、面白そうに歪む。

「艦名は『スヴァルトアールヴヘイム』……『黒妖精の国』か。  
ふん、『アヴァロン』に引っ掛けたな」

前世での最後の乗艦の名を呟きながら、霞む様な指捌きで次々に情報を引き出していくルルーシユ。

その指先が、不意に凍りついたように止まる。

「ッ!？」

「ルルーシユ様？」

「……………これはっ!？」

驚愕の表情を浮かべ固まった主君の姿に、不審そうに手元を覗いたセシルも同じく絶句した。

SSS級のプロテクトが掛けられ、彼にしか閲覧できないようにされた一塊の情報群。

そこに記された一節に、主従共に息を呑む。

「何を考えているスザクっ!」

魔王陛下の怒声が、ブリッジに轟き渡った。

『Field Limitary Effective  
Implosion Armament』

ディスプレイに映し出されたソレは、かつての彼が親友と共に時代の闇へと葬った筈の物の名だった。

女神の名を冠する悪魔の兵器。

忌まわしきその名を、『フレイヤ』という。

西暦一九九〇年 六月十七日 帝都・榊邸

十日前と同じ座敷、同じ場所に座しながら、榊は待ち人の訪れをまっていた。

今日は約束の日。

彼が、彩峰に依頼した件の結果を貰う日であった。

「……………」

瞑目したまま、微動だにせず時を待つ。

静寂に満ちた室内に、榊の呼気のみが微かに響く中、不意に襖の向こうに人の気配が生じた。

先日と同じく客人の到来を告げに来た第一秘書に、これまた先日同様、こちらへ通すよう伝える。

程なくして、秘書に伴われ彩峰が姿を見せたのも、先日と同じだった。

わずかな既視感に内心苦笑しながら、出迎えた榊に彩峰が遅参の詫びを口にする。

「お待たせしました榊さん」

「いや、こちらこそ無理を聞いていただき申し訳ない」

そう言いながら席を勧めると、前回同様、榊の対面に腰を下ろす。茶を出した秘書が、以前と同じく退席するまで、互いに無言のまま対峙していた両者であったが、立ち去る秘書の足音が聞こえなくなった処で、榊が口火を切った。

「それで、どうでしたかな？」

「……純粹に軍人として評価するなら、見事と言わざるを得ません」

そこで一旦言葉を切ると、彩峰は出された茶を啜った。

これから告げる事は、正しくは在っても多くの反発を産む。

その事を、誰よりも理解していた彩峰は、緊張に乾く喉を潤すと再び口を開いた。

「榊木の提言は、大まかに言うなら大陸失陥及び後の大陸反攻を前提とした戦略案です」

そう、榊木は、人類がユーラシア大陸を失う事を前提に戦略案を出してきた。

現時点のBETAの推定戦力と人類の戦力、それも様々な要因に

よる減衰分までも予測した上で、人類の戦略的敗北を冷徹なまでの視点から論じた上で断言している。

そう、『人類の敗北』を、だ。

一人の人としては、それを否定しなかった。

だが、誤魔化し様の無い数字と共に示されるソレを、理性的な軍人として彩峰は否定できなかったのである。

榊の眉が寄り、額に深い皺が刻まれるのを見ながら、彩峰は言葉を繋ぐ。

「初期段階においては遅滞防御を主体とした時間稼ぎにより、住民と資産の避難を可能な限り安全に行わせる方策を二十七通りの想定状況に基づいて示しています」

勝てないなら逃げる。それも出来るだけ被害を抑えて。

この試案を示されれば、多くの者が言うだろう。  
所詮、枢木にとっては他人事だからと。

だが、勝ち目の無い戦で死ぬ兵士。

護って貰えるとの期待が裏切られ、家財も命も失う民。

その局面に到った時、彼らはきっと後悔する。

あの忠告を聞いておけば、と。

「続く中期における策として、戦線そのものを縮小していく事により、無駄な兵力の損耗を極力抑える利とその為の手順が九段階に分けて書かれていました」

徹底した割り切りと取捨選択。

切り捨てられる側は恨む筈だ。  
枢木よそ者に、何が分かるか。

しかし、両手一杯に荷物を抱え、疲れ果て消耗し尽くしたその果てに、BETAの腹に収まる時、彼らはきつところと思う。

あの時、従っていれば、と。

「そして最終局面において、沿岸部の港湾都市を来るべき大陸反攻時の拠点とする為の絶対防衛線として整備し、時期が来るまでの持久戦術へ移行させる案が七個ほど記されています」

非情の策だ。

大陸を犠牲にして時間を稼ぎ、反攻の体勢を整える。  
血も涙も無い魔王の戦略だ。

だが、資料を読めば読むほど、正しく思えてしまう。  
考えれば考えるほど、これ以外は無いと思ってしまう。  
それは、そんな提案だった。

詳細な説明を補いながら、そう思う彩峰の面前で、榊の顔色も徐々に悪くなっていく。

そして一通りの説明を終えた頃には、豪胆をもって聞こえた政治家も、青い顔で黙り込むのみだった。

両者の間に、重苦しい沈黙の帳が落ちる。

暫しの間、粘つくような空気の中、対峙していた両者の内、一方



が均衡を崩した。

「彩峰少将は、上手く行くと？」

「少なくとも現在中華が採っている戦略よりは、遙かに優れています」

現在の統一中華、というか共産党政府は、国土防衛の美名の下、広過ぎる防衛線を敷いており、各戦線では戦力不足に喘いでいる。

そして薄い防衛線ではBETAの物量に抗しきれず、結果、各所で寸断された末に各個撃破され、無益な出血を強いられているのだ。

中国が、国連で軍事援助 具体的には、日本を主体としたアジア諸国の出兵を要請しているのも、最早、自国の戦力だけでは、どうにもならない所まで追い詰められているが故である。

彩峰は、そんな現状に、苦い溜息を漏らした。

「正直、大陸は広過ぎます。」

内陸部の諸都市まで防衛しようとするれば、戦線が長大になり過ぎる分、防衛線に厚みを持たせられません。

更に言うなら、枢木の建白書には、我が国の大陸派兵が行われた場合、派遣軍の補給線は早晩破綻するであろうとの予測も書かれていました」

この時点での中国大陸内陸部では、インフラの整備が余り進んでいなかった。

建白書にもロクな物流網が無い事が詳細に記述され、現状の物流事情で運搬できる物資の予測量までしっかりと書かれており、そしてそれは大規模な軍にとっては、お世辞にも充分と言えるものでは

なかった。

更には、軍需物資の横流しも日常的に行われ、潤沢とは言えぬ補給を、更に瘦せ細らせているとの警告も為されている。

では、その充分でない補給路を、中華を含めた各国で取り合つたならばどうなるか？

考えるまでも無く分かる事だろう。

古来より補給の断たれた軍は悲惨な物だ。

特にB E T Aを相手にする場合、圧倒的な物量に抗するには、どうしても大量の弾薬の供給が不可欠となる。

それが維持できないとなれば、彼の地に派遣されるであろう帝国軍将兵の末路は決まったも同然だった。

だが、枢木の案なら、その悲惨な未来を回避できる。

最終的に設ける反攻時を想定した橋頭堡的な絶対防衛線も、海に面した港湾都市を主軸として形成するなら、常に大量の物資を海上輸送で送り込める分、補給線の維持も容易な筈だ。

その辺りを、門外漢である榊にも分かり易く説明する。

そして同時に告げられる現状の危うさに、榊の顔も更に曇っていた。

「……………そうですか」

「……………」  
「それでは質問を変えますが、彩峰少将は、この戦略案を我が国が取り得ると思われませんか？」

なにかを確信しているような榊の問い。

それは、きっと自分と同じだと感じていた彩峰は、気負う事無く本音で答えた。

「……無理でしょう」

「何故です？」

予想通り、動揺の欠片も見せずに問い返す榊に、彩峰は微かに苦笑しながら告げる。

「一つは政治的な問題です。」

この戦略案は、統一中華、いえ共産党にとっては到底受け入れられる物では無いからです。

中国人は特に面子に拘る面がありますが、そんな彼らにしてみれば自分達の領土を根こそぎBETAに進呈するような真似はできる筈も無い。

台湾総統府に対する意地からも、断固として拒否する事は明白です」

大地を打つ槌が外れても、この予測は外れない。

それだけの自信をもっての返答に、榊もゆっくりと頷いた。

「否定できませんな。」

特に我が国に対する彼の国の感情は複雑だ。

こちらから提案しても意地になり、かえって拗れるかもしれん」

先の大戦とそれ以前の関係が、両国の間に見えざる溝を穿っている。

BETAの侵略が無ければ、中国と日本の関係はもっと冷たくギスギスとしたものになっていた筈だ。

それを理解している彼らにとって、中国の反応など想像するのは

容易いことである。

とはいえ、分かるから手が打てるという物でもなかった。端的に言ってしまうえば、手詰まりなのは同じ事である。

無論、とことん追い詰められれば、手の平を返す事は有り得るが、その時には既に詰んでいるのが確実だった。

そして、彩峰の側には、それ以外にも懸念している事がある。

「更に言うなら我が国……いえ、帝国軍内部の問題もあります。

言い難い事ですが、我が軍はBETAと本格的に刃を交えた経験が乏し過ぎます」

「BETAを甘く見ていると？」

無念そうに告げる彩峰に、榊が問い返す。

微かな期待を帯びたその問いを、彩峰は頭を振って肯定した。

「遺憾ながら……実感としてBETAの脅威を知らぬ今、枢木の案を出したとしても、消極的過ぎるとして反発を招く可能性が高いでしょう」

そこまで言うと、彩峰は辛そうに溜息をつく。

釣られる様に榊も嘆息した。

「……政治・経済の建白書についても穴は無い。

だがやはり、受け入れられないでしょう」

「……損をする人間、恥をかく人間が多過ぎますか？」

切れ過ぎる男は、口にしらない事情まで察して見せた。

榊の頬が、苦渋に歪む。

凶星だったからだ。

枢木の案を実行すれば、失脚する政治家・官僚・企業家達で一個連隊くらいは編成できるだろう。

そして、そんな彼等の抵抗を排し、枢木の献策を実行する程の力は榊にも無かった。

ままならぬ現状に、男達は天を仰いで慨嘆する。

「ああ……枢木の意見は正しい。

だが、正しいからと言って、それが採用されるとは限らん。情けない限りですな……………」

その一言に全てが集約されていた。

正しい筈の事が、押し通せずに潰される。

それがこの国、日本帝国の現状なのだ。

そんな国の未来を憂い、苦々しさを噛み締める榊を他所に、彩峰はより直近に迫った未来、大陸派兵により彼の地にて玉砕するであろう兵達の事を思う。

せめて一人でも多くの兵を連れ帰りたかった。

その為にも、現在編成中の大陸派遣軍への編入を、何としても通すと決意を改める彩峰に、榊が険しい表情で問いかける。

「彩峰少将、貴官は大陸派遣軍への編入を希望していると聞いたが、事実ですか？」

「はい、そういう意味でも、今回の件は勉強になりました。これで少しは兵達を、護ってやれるかもしれません」

確かに得難い勉強だった。

焼け石に水であっても、わずかなりとも兵達の生存率を上げられる多くの知識を得たのである。

その点で、榊に深く感謝していた彩峰であったが、続く言葉が、その思いを揺らがせた。

「……私としては、貴官に本土軍に残って欲しいと思っている」

「榊大臣」

ひどく遺憾そうな表情を浮かべ、反論しようとする彩峰を、榊は手を上げて制した。

「貴方の気持ちは良く分かります。」

榊木の予想通り、大陸派遣軍が彼の地で磨り潰されるなら、その犠牲を少しでも減らしたいと思うのは私も同じだ」

そこで男は言葉を切った。

整理できない思いを無理矢理捻じ伏せ、苦渋に満ちた声を絞り出す。

「だが、そうになると、残された帝国はどうなります？

大陸派遣軍を丸々喪った状態で、前線国家としてBETAと対峙する事になるのですぞ」

「……………」

「榊木の予測は、最悪の未来予測なのかもしれん。」

だが、そうなる可能性があるならば、我々はそれに備えなければならぬ」

大陸が陥落した後は、帝国が前線となる。

その為の入念な準備を、早期に行うべきと。

非道非情は承知の上、それでも帝国の舵取りを預かる者として断ずる榊に、彩峰の顔に苦悶の色が浮かんだ。

仁将として知られた男にとって、部下が犬死するのを指を啜えて見ていると言うに等しいそれは、我が身を切られるよりも辛い。

だが同時に、榊の心情も察せてしまふ彼にとって、どちらも選び難かった。

「……申し訳ありませんが、即答出来そうにありません。少し時間を頂けませんか？」

無言のまま考え続けていた彩峰であったが、袋小路に陥った思考が活路を見出す事はなかった。

申し訳無さそうに頭を下げる男に、榊も又、済まなそうに首を振る。

「……すみません、無理を言います」

「いえ……政治家としては当然の事でしょう。」

むしろ事が軍事に属する分、軍人として恥ずかしく思います」

互いに己の無力さを噛み締めながら、男達は揃って溜息をつく。

この件は今日ここまで、といった暗黙の了解が、互いの間で成立すると、場の空気を換える意図も込めて、榊は、もう一つの懸案を口にした。

「……しかし、色々引っ掻き回してくれる。

これは一度、枢木と接触すべきかもしれんな」

投じられた一石は、古式ゆかしい建白書が一つ。

ただそれだけで、自分達を苦悩のドン底に突き落としてくれた枢

木に嫌味の一つも言っていてやりたいのも事実。

だが、それ以上に気になる事を、榊も彩峰も、確かめずにはいられなかった。

「これ程の智者が居るなら、会っておいても損にはならないでしょう。」

それに、その真意を質しておく必要は、有るかもしれませんが」

そう繋ぐ彩峰に、榊も黙って首肯する。

受け入れられないであろう建白書を、これ見よがしに出した理由。それを確認せずに、捨て置くのは危険過ぎる気がしたのだ。

これ程のものを作り上げる人間が、彼らが気付いた受け入れられない理由を見逃すとは思えない。

ならば、そこには別の意図が隠されていると考えるべきであった。その事を、直接問う必要性を彼らは感じ、榊木との接触の機会を探る事で合意すると、機を見てその時を作る事で、この場は散会となる。

だが、この日の決定が、この後、榊木の取るある行動により、大きく実現が遅れる事となるのを、神ならぬ身の彼らが知る由もなかった。



「むう……少し薄いですか？」

身長の不足を補う為、台の上に乗った唯依は、小皿に移した味噌汁を味見し、わずかに顔を顰める。

彼女のには、これでもアリだが、他人に振舞うとなれば別だった。ことに……

「もう少し濃い目の方が、兄様は好まれるかも」

台所に立つ姿も、それなりに様になってきた唯依は、煮立たせて味噌の風味が飛ばないように注意しながら、心もち味噌を溶きこんでからズラして蓋をすると、今度はト口火でじっくり煮込んでいた隣の鍋へと注意を移す。

初めての成功から早半年。

おぼろげな母の記憶と自身の舌を頼りに、更に改良を加え続けた自慢の一品こと肉ジャガは、父からも母の味そのもののお墨付きを得るに到っていたが、彼女の研鑽はまだ止まっただけではなかった。試行錯誤しつつ、自分の味と言うよりは、食べさせたい人好みの味を追及する。

そんな少女の姿を、いつの間にやらやってきた真理亜が楽しげな笑みを浮かべて見つめていた。

「頑張ってるわねえ」

「叔母様っ？……と、当然の事です。」

今夜の夕食を任された身として、無様な物は出せません！」

唐突に掛けられた声に、一瞬、ビクツと背を震わせた唯依であったが、振り返った先で面白そうに笑っている真理亜の姿に、まだ膨らむ兆しも見えぬ胸を張って見せる。

真理亜の目元に悪戯っぽい光が浮かんだ。

「うんうん、やっぱり唯依ちゃんは、良いお嫁さんになるわよ。

……………まあ、私が言うのもナンだけどね」

料理はからつきしと公言して憚らぬ女傑は、そう言ってカラカラと笑う。

このところ生来の真面目さに拍車が掛かったかのように、唯依は勉強に、習い事に、或いは家事にと精力的に取り組んでいた。

誕生日に合わせての宇宙への旅で、何か思うところがあったようである。

彼女個人としては、この愛らしい少女が、息子同様あまりにも早く大人になってしまうのはつまらないと思っていたが、これから更に厳しさを増すであろう時代の流れを思えば、それも仕方ないかと諦めていた。

されど、である。

「お、叔母様っ?」

真理亜の目論見通り、『嫁』の一言に動揺しまくった声が、淡い桜色の唇から漏れる。

まあせめて、その日が来るまでは、せいぜい楽しませて貰おうかと割り切った根性悪な女狐様は、最近、嫁云々に過敏に反応するようになった唯依を、イジって遊ぶのを期間限定の趣味として存分に満喫していたのだった。

「ほぐらほら、早くしないとルルーシュ達が帰ってくるわよ」

「わ、分かってます！

焦らさないで下さい」

煽られてあたふたと鍋に向かい合う唯依。

だが、真理亜の遊びは、まだ終わらない。

「やっぱり夕食とお風呂の準備を整えて、三つ指揃えて旦那様を迎えるのが妻の役目よねえ」

「っ、妻あっ!?!」

幼い美貌が真っ赤に染まる。

そのままフリーズし、ナニやら妄想状態に入ったらしき唯依の背を、しばらく間を置いた真理亜が軽く叩いた。

「ハイハイ、急がないと間に合わないわよ」

「わ、わ、分かってますっ!」

再起動を果たし、裏返った声で唯依が叫ぶ。

だが、その返答とは裏腹に少女の手元では、加熱され過ぎた鍋の際から、ブクブクと白い泡が立ち上り始めていた。

空気に混じるやや強めの味噌の香り。

微妙に焦げ臭さを増した醤油の匂い。

どうやら彼女が、一人前になるのは、まだまだ先の話の様だった。

統一曆二十九年 六月十二日 神根島

崩壊した遺跡の前で、ゼロは一人、物思いに耽っていた。

打てるべき手は全て打ち、やれる事は全てやったとの思いと、まだ何か出来たのではという疑念。

相反する思いを持って余すように、崩れた遺跡を眺めていた彼の背後から、今回の一件のみの共犯者が声を掛けてくる。

「どうしたゼロ」

「……いや、何でもない」

からかう様な口調で掛けられた問いに、ゼロはゆっくりと首を振る。

自身の内にあつた未練を、その一振りで飛ばしたゼロは、肩越しに背後の魔女に問うた。

「それでC・C・

君はこれからどうするつもりだ？」

「どうするも、こうするも無いさ。」

当面は、やりたい事も無いからな、『Cの世界』に籠るだけだ」

返された答えに、仮面の奥の双眸が細まった。

今更、『Cの世界』に何の用があるのか？  
そんな疑問が、言葉となって口をつく。

「『Cの世界』に？」

「ああ、暇潰しがてら、向こう側を覗いて過ごすぞ」

明らかに不審げなゼロに対し、C・Cは、いつそ堂々とすら言えそうな態度で、これまでと同様に向こう側を覗いて過ごすと言  
した。

ゼロの呼吸が一瞬止まる。

わずかに息を乱した仮面の英雄が、疑念と期待が半々の声で、い  
ま一度、問い直した。

「向こう側って……あちらに、まだ無事な遺跡があるのか？」

「いや無い」

あまりにもアッサリと否定する。

ゼロは一瞬、我が耳を疑い、次に仮面の不調を疑うが、しれっと  
した態度を崩さぬC・Cに、聞き間違いではなかった事を確信し  
た。

仮面越しにも、明らかに呆れている声が、変調器を通してこぼれ  
落ちる。

「無いって……君は、こちらとあちらの遺跡の力を利用して、覗き  
見していたんじゃないのか？」

「まっ、覗き見程度なら、他にもやりようはあるのぞ。

なにせ私は、C・Cだからな」

ニヤリと笑って嘯く魔女に、仮面の下で苦笑が産まれた。

嘘か真か確かめる術は、彼には無い。

だが、この魔女がそう言うのなら、そうなのだろうと割り切った。そんなゼロの心境を見切ったのか、魔女がつまらなそうに鼻を鳴らす。

「……さて、それでは、これでお別れだ。

また当分は会うこともあるまいが……まあ、達者で暮らせ」

相変わらずの態度で、そう告げると、軽く伸びをして背を向ける。立ち去る背中を見送ろうとしたゼロの脳裏に、不意に閃くモノがあった。

「C・C・」

「何だ？」

呼び止められた魔女が、不機嫌そうに振り向く。

「『ワイアード』とは、何の事だ？」

魔女が魔王に投げかけた一言。

魔女の実体の隣で、それを聞いていた彼にとっても馴染みの無いソレが、何故かひどく気に掛かる。

金色の双眸が、面白そうに細まった。

「……言葉通りの意味さ。

『ワイアード』 世界と繋がりし者、世界の端末、あるいは抗

体

「世界と繋がりし者、世界の端末、あるいは抗体……それって……」

意味不明の言葉の羅列に、仮面の下で顔を顰める。

経験により様々なスキルを身に付けようが、本質的に体力勝負な彼にとつては、謎めいた言い回しをされても困惑するしかなかった。

そんな彼を、出来の悪い生徒を見るような眼差しで眺めていたCは、仕方ないといった様子で肩を竦めると、ヤレヤレと言わんばかりに言葉を続ける。

「私も実物を見るのは初めてだったかな。」

嚮団の古い資料に、わずかな記録が残るのみの稀少種さ」

「稀少種って……嚮団の資料に残っているって事は？」

嚮団の一言に反応したゼロに、ようやく気付いたかと言わんばかりに魔女が告げる。

「天然ギアスユーザー……いや、恐らくは、こちらが本来のギアスの形だったんだろっ」

「本来のギアスの形……」

唐突に飛び出してきた思わぬ情報に、頭がオーバーフローした彼は、鸚鵡返しに呟く事しかできなかった。

対して、珍しく真面目な表情を浮かべた魔女は、滔々とした口調で秘事を語る。

「そうだ、世界が必要とした存在に宿る力。」

大英雄、救世主、あるいは魔王と呼ばれる様な連中の力さ。

これは私の推測だが、遺跡やコードは、ソレを世界から盗み取る為の道具だったのだと思う。

そう、プロメテウスが、神々の手から火を盗み、人間に与えた様にな」

本来は、世界の物の筈だった力を盗んだのだと。どこか苦々しい口調で、彼女は告げる。

無論、証拠とすべきものは無いが、コード保持者の直観が、そう囁くのだ。

コードを通して己が繋がるもの、そしてコードを通して契約により与えられるギアスもまた繋がるもの、その根源は同一の物なのだと。

世界、或いは万物の根源とでも称すべきナニか。それこそがコードとギアスの源。

そしてコードという道具を経由する事無く、そのままソレに『繋繋がらし者がれる』者こそが、『ワイアード』　ギアスの本来あるべき形の体現者達なのだ。

Ｃ・Ｃ・にしては珍しい懇切丁寧な説明に、流石の彼も理解に及ぶ。

理解して、仮面の奥の顔が真っ青に染まった。驚きが、叫びとなって迸る。

「それじゃ彼は、また絶対尊守の！　「それは無い」　えっ？」  
「私のコードがもたらすギアスは、相手の深層心理、いわば願望を映すものだ。」

だが、ワイアードギアスは、本人の素養に従い発現する」

ゼロの驚愕を遮った魔女は、平然としたまま断言する。



有り得ないと。

数瞬、呆けたゼロは、数秒、考え込むと、恐る恐ると言った様子で問い質す。

「願望と素養は別の物という事か？」

「そうだ。」

まあ、全く影響を受けない訳でもなかるうが、多分、別物だな」

いとも軽い口調で返されて、ゼロは張っていた肩をがくりと落とす。

「……そんないい加減な……」

自分達の人生を振り回し続けたギアスを、ちよつとした毛色の違い程度に言い切る魔女に、彼は微かな怒りを覚えつつ抗議する。

だが、鉄面皮で鳴らした彼女にダメージを与えるには、その程度では力不足も甚だしかった。

ニヤリと人の悪い笑みを、その美貌に浮かべると、そのまま堂々と切つて捨てる。

「フン、それもこれもアイツが、自分の立場を自覚してからの話さ。いずれルルーシュは、あの世界に転生した理由に巡り会うだろう。そして知る筈だ、己自身に課せられた役割をな」

そこで視線をゼロへと移した魔女は、もう一度、ニンマリと笑った。

とてもとても楽しそうに。

「まっ、それまでは、ちよつと異常な運動能力のあるタダの人だ…

……お前と同じでな」  
「!?!」

仮面の英雄の動きが止まる。

完全に凍りついた様に静止した彼の耳元で、甘やかな声が囁いた

「ああ、勘違いするなよ。

お前は『ワイアード』繋がりし者じゃない。  
いいところ成り損ないが、関の山だ」

硬直が解けた。

ギギギツと音がしそうなぎこちない動きで、仮面の正面が魔女へと向けられる。

「……脅かさないでくれ。C.C.」

「この世界の救世主殿が、その程度で動揺してどうする。情けない」

搾り出すような抗議の声を、女は鼻先で笑い飛ばす。

相変わらず、自分以外に激辛な彼女の態度に、仮面の奥で溜息が漏れた。

「ふう………君は、知っているのか？」

ルルーシュが、あの世界に生まれ変わった理由を」

「知らん。

だがアイツが、『ワイアード』繋がりし者として生を受けた事から予想は付く」

貴様にも、予想はついているのだから？

言外に、そう問い返す魔女に、ゼロは僅かに顔を顰めながら、彼

女との会話で思いついた事を口にする。

「BETAから人類を救う為か？」

魔女の双眸が、冷たく輝いた。

赤点を取った出来の悪い生徒を見る教師の眼差しで、清楚と言って良い美貌に氷の笑みを浮かべる。

「フンツ、違うな。

世界を救う為さ」

夏の夜空に、冷たい宣告が響いて消えた。

西暦一九九〇年 九月

枢木工業は、軌道上にて建造していた新造艦「スヴァルトアール  
ヴヘイム」を発表。

併せて、宇宙空間における大規模な居住空間 所謂、スペース  
コロニーの建造計画をも発表。

当初、資源採掘も兼ねて小惑星を掘削し居住スペースを造り、そ

れをラグランジュポイントに設置するというこの計画は、技術的難易度の高さ、そして予想される巨費と時間から、荒唐無稽の絵空事として多くの嘲笑を浴びる破目になる。

更には、話を持ち掛けられた帝国政府も、計画成功の可能性を絶無と断じて出資を拒否、結局は、枢木の単独事業としてコロニー建造計画 通称『アヴァロン』計画はスタートする事となった。

そして初手から踏んだり蹴ったりな目にあつたこの計画は、枢木の隆盛を妬む者達を大いに喜ばせる事となり、計画失敗による没落の時を虎視眈々と狙わせる事になるのであつた。

うーん、これにてギアス側の出番は、当分ナシです。  
ナナリーを含めたアチラ側のその後は、まあ、あんな感じかなと思  
つてます。

後は、魔王陛下が何の因果で、オルタ世界に生まれ変わったのかの理  
由付けが少々。

まあ細かい事は、いずれ巡り会うであろう理由が出てくるまで内緒  
という事で。

コードとギアス、そして遺跡に関する解釈は、ナナのエデンバイ  
タルを元にした独自解釈ですのでご注意ください。

スザクが何故『フレイヤ』を送ってきたかは、まあ、その内に。  
多分、当人はあそこまで激怒するとは思って無かった筈です。

さて、今回は、オルタサイドのオジさん達が頑張った形になったか  
な？

さり気なく『光州の悲劇』を戦略レベルで潰しに掛かってますし。  
まあ、光州作戦を発起させ、無双演舞やっているSSなんてごまん  
とありますから、これはこれでありかなと思ってます。

というか、原作開始十年前から干渉している状態で、戦略状況が全  
く変わらず、オルタの史実通りに動いている時点でダメダメですし  
ね。

戦略レベルで敗北が決定している訳で、救世主・白銀の出現が無け  
れば負けますな。

という訳で、本作品はルル様の口癖通り戦略・戦術で勝負です！

さて次は、スワラージ作戦を潰すかな。

閑話　：　簗唯依の日記　西暦一九九〇年十一月　（前書き）

今回はサラッと閑話を。

トラブルメーカーの傍に居ると、どうしても巻き込まれる。  
そんなお話です。

題して『唯依姫、とばっちりをくっ』

それでは、どうぞ。

閑話　：　眞唯依の日記　西暦一九九〇年十一月

西暦一九九〇年十一月二日

世相が騒がしくなってきました。

カシユガルを発した大規模BETA群は東進を続け、ユーラシア北東部、東アジアそして東南アジアで激しい戦闘が繰り広げられているそうです。

またインド領パールにも新たなハイヴが建設され、大陸東部に於けるBETAの圧力はこれまでに無い程高まっているとか………

こんな情勢を受け、帝国内でも大陸派兵がほぼ本決まりとなり、来年には間違いなく第一陣が大陸の地を踏むだろうとルル兄様が、以前、言っておられました。

そんなルル兄様も、今までにない程、お忙しそうです。

先々月に発表された『アヴァロン計画』　宇宙空間に本格的な居住空間（スペースコロニーと言うそうですが）を設け、そこに後背地として機能させる為の大規模な生産施設を造り上げるというソレにかかりつきりだとか。

その所為で、唯依もここ二ヶ月ほど、ロクにお話する機会も無い程なのです。

眞理亜叔母様が仰るには、やはり帝国上層部に居る反枢木の方々が、色々と妨害を仕掛けて来ており、それを排除して計画を進めるのにご苦労されているとの事でした。

『まあ、あの子にしてみれば、これも計算通りなんでしょうけどね』



とか、最後には笑って誤魔化していましたが、やはり心配です。お身体とかを、壊されなければ良いのですが……

……ちなみに、ここ二月程で、政治家の方が三人ほど体調や年齢を理由に職を辞し、官僚も次官クラスが二名、局長クラスが五名ほど相次いで辞めたそうです。

何故、そんな事を唯依が知っているかというところ、時折、ルル兄様が、何故か高笑いを上げて読んでいる新聞を、後からこっそり見てみると、ごく小さな扱いですが必ず載っていた辞職・辞任の記事の合計がそれだったのです。

……唯依は、何も見ていません。

見ていないのなら、見ていないのですっ！

西暦一九九〇年十一月五日

相変わらずルル兄様はお忙しい日々が続いています。ここ何日かは、朝のご挨拶くらいしかできません。

はぁ……憂鬱です。

勉強や稽古、習い事にも今ひとつ身が入らない日々です。

……こんな事ではいけないと思いはするのですが。

真理亜叔母様は、お友達と遊んで気晴らしでもすればと勧められますが、元々、唯依は人付き合いの良い方ではありませんし、その所為か、それほど親しい友人とかも居りません。

それでも、それなりに級友との付き合いは有ったのですが、この所、何故かよそよそしいと言うか、壁を感じるといつか……

こちらから話しかけても、あまり相手にされない事が多かったです。

その為、何となく学校にも居づらい雰囲気があつて、篁の家か、枢木のお屋敷で、ボオ〜っとしていた事が多くなりました。

はあ……本当に憂鬱です。

西暦一九九〇年十一月七日

………なんと書けばいいのか。

なにを書けばいいのか………

どうも唯依は、イジメというモノに遭っている様です。

ここ最近よそよそしかつた級友達ですが、ついに何を話しかけても全く反応してくれなくなっていました。

まるで唯依など居ないかのように、空気のように無視されるのです。

それは以前、叔母様が冗談交じりに教えてくれたイジメそのもの

出来事でした。

よくよくコレまでの日々を思い返してみると、何となくですがクラス全体に唯依を排斥するような空気が、ジワリジワリと広がっていたような気がします。

ただ正直、原因にサッパリ思い当たる物がありません。

唯依は、何かおかしな事をしたのでしょうか？

何かの誤解だと思うのですが……

少しだけ、少しだけ、不安が募ります。

本当に、どうすれば良いのでしょうか。

西暦一九九〇年十一月十五日

………悔しいです。

本当に、本当に悔しいです。

今日まで、相も変わらず無視される日々が続いていました。

こちらから積極的に話しかけても、全く無視されるというのは正直かなり堪えます。

何よりも、その事を愉しむかのような空気が、教室内に蔓延している事が心を削るのです。

そのような心根の方達が、唯依の級友であるという事実が、悔しくて悲しくて堪りませんでした。

それでも、今日まではジツと我慢して耐えてきました。

唯依が諦めず、誤解を解く努力を続ければ、いつか報われると信じて。

でも、その期待も砕けました。  
今日、木っ端微塵に。

……帰り際、級友の一人が珍しく唯依に声を掛けて来ました。  
何でも担任の先生が呼んでいるとの事。  
特に身に覚えはありませんでしたが、とにかく行ってはみたので  
す。

すると職員室に居られた先生は、そんな覚えはないとのお返事。  
首を捻りながら教室に戻ってきた唯依が見たのは、ひっくり返ったカバンと床に散乱した中身。

明らかに踏まれた痕のあるそれ等を、唯依は呆然と見ている事しか出来ませんでした。

その後の事は、良く覚えていません。

ただ正気づくくと、家の自室の布団の上で涙を流している自分に気が  
付きました。

悔しくて、辛くて、悲しくて、流れる涙を、唯依は止める事ができ  
ません。

……兄様、ルル兄様。

お会いしたいです

お声が聞きたいです。

唯依は、唯依は………挫けてしまいそうです。

西暦一九九〇年十一月二十日

ふ……ふふ……ふ……

この想いをなんと言えば良いのでしょうか？

我が胸の内に滾るドス黒いナニかを……

いえ、分かっています。

分かっているのです。

これがナンなのか等という事は。

思えば、今日の朝、登校した時から妙な気配は感じていたのです。

何かを期待するような、暗い空気を。

これまでの経緯から、まさか直接仕掛けては来るまいと油断していた唯依も愚かでした。

どうやら唯依が、我慢に我慢を重ねた事で、相手を悪い意味で調子づかせてしまった事に気付かなかったのですから。

油断のツケは、直ぐに唯依に襲い掛かりました。

何となく厭な空気を感じながら、自分の席に着き……そのまま後ろへ無様に倒れるという形で。

突然の出来事に呆気にとられる唯依の耳に、クラス中から囁きたる声が聞こえます。

ブタ、ブタ、子ブタ……と。

唯依の椅子が座った途端に壊れた事を。

それが、それが……唯依の体重の所為だと揶揄している事に気付いた瞬間、目の前が怒りで真っ赤に染まりました。

周囲から音が消えた赤い視界の中、何故か三人だけ色が着いている女の子が居ました。

その瞬間、唯依は気付きました。

彼女達が犯人だと。

握り締めた手の平に爪が食い込み、僅かに血が滲みました。

……もし、もしあの時、担任の先生が来るのが後三十秒遅かったなら、間違いなく唯依は彼女達に殴りかかっていただでしょう。

そして、そして……大変、不愉快ですが、一方的に唯依が悪い事になっていた筈です。

残念ながら、あの時、あの場には唯依の味方は誰一人として居なかったのですから。

そう先生さえもです。

朝礼の為にやって来た先生は、思わぬ騒ぎに何事かと問い質してきたので、誰よりも早く唯依が答えたのでした。

これまでの経緯も全て含めて。

ですが、話を聞いた先生は、他の人達にも問い質します  
唯依の言う事が事実かと。

……結果は、考えるまでもありませんでした。

唯依以外の全員が、唯依の言葉を否定した結果、結局、誰もお咎めなし。

それどころか、証拠も無しに級友を疑うなど恥すべき事と、唯依の方がお小言をくらう破目に……

……良いでしょう。  
良く分かりました。  
証拠が必要というなら、動かぬ証拠を突きつけましょう。

この喧嘩、最高値で買って差し上げます！  
そして唯依を子ブタと罵った事、必ず後悔させてみせましょう！

だいたい唯依くらいの年代は、多少、ぼっちゃりしていた方が良いのです。

真理亜叔母様も言っていました。  
子供の頃から痩せていると、成長したらガリガリの洗濯板決定なのだ！

だから、唯依は、唯依は……決して、子ブタなどではありません！

西暦一九九〇年十一月二十四日

何と言うか、事態は思わぬ結末を迎えました。  
事実は小説よりも奇なりとでも言うべきでしょうか？

あの日から、とにかく動かぬ証拠を掴むべく唯依は動き出しました。

とはいえ、そうそう簡単に尻尾が掴めるとも思いません。

なにせ敵はクラス全て、対して味方は皆無。  
物量に差が有り過ぎて勝負になりません。

ですが、正攻法がダメなら搦め手から攻めれば良いだけです。  
戦力差が大きいなら、罨を張って嵌めれば良いのです。  
それがルル兄様の教えでもありました。

故に数日は、相手を油断あるいは増長させる為、何もしないで過  
ごします。

但し、相手にも付け入る隙を見せる事無く。  
妙な小細工が出来ないよう教室内に私物は置かず、いつも机の中  
も空っぽ。

これで当面のチョツカイは避けられると踏み、事実、その通りと  
なりました。

思い返せば、これまでの嫌がらせも、全て偶然、あるいは唯依の  
不注意と言い張れる事ばかり。

ある意味、狡猾とも言えますが、逆に言うと、そう主張できない  
状況で仕掛ける度胸が無いとも言えます。

結果、ここ数日は、奇妙な平穏が続いていました。

ですが、逆に言うなら、そろそろ向こうの我慢の限界とも言えま  
す。

だからこそ、今日、唯依は罨を仕掛けたのです。

今日が唯依の習い事の日であるというのは、クラス内の大体の人  
間が知っているのですから。

放課後になり、そのままそくさと帰ります。

いえ、帰るフリを見せ付けました。

習い事の先生には申し訳ないですが、本日はお休みとさせて頂い  
たのです。



そのまま唯依は、教室から少し離れた人気の無い場所で時を待ちました。

正直、クラス全員が積極的に協力していたりするとお手上げでしたが、流石にそれは無いと踏んでおり、そしてそれは正解でした。

『群集は扇動者の尻馬にアツサリと乗るが、逆に、積極的に協力するのは一部に留まるものだ』

とは、何かの折に兄様が教えてくれた事です。

流石はルル兄様と感心しながら、三十分ほど間を置いた唯依は、こっそりと無人になった我が教室へと戻りました。

最初に自分の席を調べて、特に小細工されていない事を確認します。

問題ない事を確認し、ホッと一息ついた唯依は、速やかに教卓の下へと潜り込み、機を待ちました。

さて、どうなるか？

胸の内で、そう呟きつつ、本音は少し不安でした。

これが空振りに終わったら、また神経にヤスリを掛けられるような日々が続く訳ですから。

ですが、兄様も父様も、今が大変な時、頼る訳にはいきません。なんとしても、唯依の問題は、唯依自身の手で決着をつけてみせます！

そう心に誓っていた唯依の耳に、微かな物音が聞こえました。

ドアをソロリソロリと開ける音でした。

教卓の陰からそっと覗いてみると、教室の後ろのドアが開き、そこから三人分の人影が入り込んできます。

彼女達です。

あの時、唯依が確信した通り。

二人は唯依と同じ武家の出で、同じ山吹の家柄。

残りの一人は、帝国軍の将官の娘とか。

正直、殆ど話したことも無く、恨みを買う覚えなどサラサラ無かったのですが、今は、そんな事を気にしている場合ではありませんでした。

彼女達が、忍び足で唯依の席へと向かうのを、固唾を呑んで見守ります。

やがて、唯依の席の周りに座り込んだ彼女達が、何かを始めました。

それと同時に、唯依も右手に構えた物のスイッチを入れます。

父様の部屋から、内緒でお借りしてきたビデオです。

申し訳ありません父様。

微かな駆動音が鳴り、事態の一部始終が記録され始めました。そのまま五分ほど経ったでしょうか。

彼女達は、細工を終えたらしく立ち上がりました。

小波のように楽しげな笑い声が聞こえてきます。

唯依の中で、冷え固まっていたナニかが、ゆっくりと融け出していくのを感じました。

そして気付くと、唯依は教卓の陰から立ち上がり、彼女達に声を掛けていました。

何がそんなに面白いのか、と。

ギョツとした様子で、彼女達は唯依へと振り返りました。同時に唯依も、内心、大慌てです。

本来なら声を掛けるつもりなどなかったのですから。

このままやり過ぎし、証拠のコピーを取った上で、しかるべき筋から学校へ提出すれば済んだのです。

それなのに………どうやら、自身が思った以上に怒りに囚われて  
いる事を自覚せざるを得ませんでした。

何たる未熟。

そう己自身の至らなさを噛み締めながら、それでも彼女等の反応に注視します。

対して彼女達はと言うと、真つ青な顔で唯依を、いえ、唯依の右手に握られたビデオを見つめていました。

どうやら一部始終を、撮られてしまった事に気付いた様です。

一瞬、視線を合わせた三人は、次の瞬間、何かを決めたように頷き唯依へと向き直りました。

ああ、そう来ますか。

唯依は、胸中でそう呟きました。

各々が手にした道具　ヤスリに金槌、後はドライバー　を構えて、唯依へと向けてきます。

対する唯依も、右手のビデオを左手に持ち替え、半身で構えま  
した。

運足、目配り、息遣い。

ただそれからでも、相手の力量はある程度掴めます。

武家の二人は、やはりそれなりの修練を積んでいる様子。対して、残りの一人は滅茶苦茶でした。

唯依も片手が塞がってはいませんが、これなら武家の二人が余程上手く連携しない限り、充分対処できます。

そう安堵した瞬間でした。

『貴様ら、何をしている』

鋭く堅い声が、互いの間に割って入りました。

驚きと共に振り向いた先には、数名の上級生が立っています。

困った事に、その先頭に居たのはルル兄様と犬猿の仲である月詠真耶でした。

良く見ると真耶以下の上級生達は、週番の腕章を着けています。

放課後の見回りと云った所ようですが、余りにも間が悪過ぎる状況に、唯依はしばし固まってしまいました。

正直拙すぎる展開です。

ルル兄様を毛嫌いしている月詠が、唯依に良い感情を持っているとは思えません。

それを現すように、唯依を見るその眼差しは冷え冷えとしたものでした。

そんな唯依と月詠の関係を悟ったのか、犯人達はこれ幸いとばかりにある事ない事喚き出し、唯依を非難し出しました。

堪らず唯依も反論しますが、こちらを見る冷やかな眼差しは変わりません。

そして、双方の言い合いが途切れた所を見計らう様に、月詠は再び口を開きました。

『笑えんな、実に笑えん話だ』

切り捨てる様な物言いに、唯依は悔しさに唇を噛み締めました。ここまで来て、また負けるのかと思うと、悔しさと無念さで目の前が真っ暗になりそうです。

そんな唯依の視界に、勝ち誇った笑みを浮かべた彼女達が映りました。

握り締めた拳が、ギリリツと軋みます。

最早、我慢の限界でした。

『貴様らは分かっているのか？

校内の備品を故意に破損させたのだぞ。

器物損壊　これは立派な犯罪行為だ』

唯依に『背を向けて』月詠が言い放ちました。

一瞬、何が起こったか判らず、硬直した唯依の眼前で、犯人達がキョトンとした顔をしています。

彼女達も、ナニを言われたのか理解できなかったのでしょうか。

そしてそれは、致命的な遅れとなりました。

成り行きを見守っていた他の週番達が、その一言が合図だったかのように一斉に動きます。

啞然としていた三人の少女達は、抗う事すら出来ぬまま、アツサリと押さえ込まれていました。

一体、何がどうなったのやら……

全く訳がわからず、呆けていた唯依を、チラリと一瞥した月詠は、つまらなそうに口を開きました。

『もう時間も遅い。』

『篋は帰るが良い』

そうぶつきらぼうに言い捨てる、真っ青になった生徒達を週番達に拘束させ引き摺っていききました。

悲鳴とも哀願ともつかぬ声が、しばらく聞こえていましたが、やがてそれも途絶えます。

予想外の成り行きに、しばし呆気を取られていた唯依ですが、誰も居なくなった教室にいつまでも残っている訳にも行かず、止むを得ず家へと帰ってきました。

遅くなった事を心配していた父様にお詫びし、お風呂と夕餉を頂いた後、これを書いている訳ですが、本当に何が何やら……

正直、混乱するばかりではありませんでしたが、何となく一区切りが着いたような気がします。

本当に、そうであって欲しいと思いました。

とてもくたびれてしまいましたから……

西暦一九九〇年十一月三十日

本当に、結局、なんだったのでしょうか？

切実にそう思います。

あの後、事態は完全に唯依の手を放れた為、詳しい事は良く分からないのですが、彼女達の親御さんが呼び出された事だけは確かな

ようです。

ただ何故か、ご両親ではなく、母親だけがやってきたとの事。それ程の大事と捉えなかったのかもしれないが、それはそれで面白くない話です。

呼び出された親御さんと学校側の間で、どのような話し合いが持たれたのかまでは唯依に知らされる事はありませんでした。

ただ誰にでも分かる決定的な変化はありません。

件の三人の女子が、翌日、教室に姿を見せる事はなく、代わって担任から彼女達の転校が伝えられたのです。

何でも、親御さんのご都合により一人は九州に、残りの二人は東京へと転校になったとか。

あまりの急転回に、今回の一件が原因かと思い、後でこっそり担任の先生を問い詰めましたが、本当に親御さんのご都合との事。

何故か、妙に怯えた様子でしたが、それだけに嘘を吐いている様にも見えませんでした。

つまりアレですか。

後、一日我慢すれば事態は収まったと。

とすると、唯依のやった事は無駄だったのでしょうか？

地味に落ち込みます。

あの苦労が徒労だったとは……

……いえ、お忙しいルル兄様に余計なご心配を掛けず、唯依自身の手で事を終わらせられたのです。

それだけでも意味があったのだと思います。

というか、そうでも思わなければやっていられません。

ふう……何はともあれ、これでイジメは終わりました。  
どうやらそれだけは確かな様です。

あれ以来、無視されることも無く、妙な嫌がらせを受ける事もありません。

正直、色々と分からない事も多く、気分が悪い点も多々あるのですが、取りあえずはそういう事で、納得するしかないようです。

……とはいえ、少しだけ気に入らないこともあります。  
何と言つか、アレ以来、教室内で妙な扱いを受ける様になりました。

いえ、イジメとは違うのです。

何と言つか、こう……妙に恭しい態度で接せられるのでした。  
級友はもとより、先生ですらも。

本当に、一体、何がなにやらサッパリでした。

ああ、本当に訳がわかりません。

……兄様、ルル兄様。

唯依は、唯依は、一体どうすれば良かったのでしょうか？



欄外秘話 『ある夜の彼と彼女の色気の無い電話』

『フム、そうか手間を掛けたな』

『別に貴様の為にやった訳じゃない。』

私自身、ああいった陰湿な真似が気に入らなかつただけだ』

『それでも感謝しよう。』

唯依が世話になつたな月詠』

『……それでどうする気だ枢木？』

今回は私が介入して事を収めたが、あの手の連中は、ほとぼりが冷めたら、また同じ事を繰り返すぞ。

ついでに言うなら、私ももうすぐ卒業だ。

貴様の可愛い可愛い妹を、気に掛けてやる事は出来なくなる』

『問題ない。』

今回の一件の根は、こちらに在った。

そして、それへの対処も完了した以上、同じ事は起こらんさ』

『どういう意味だ？』

『なに、オレの気を逸らしたい連中が居て、その内の三人がお前が捕まえた女生徒の父親だったというだけだ』

『……そういう事か。下種共が！』

『そういう事だ。』

「まあ既に報いはくれてやったがな」

「……貴様、何をした？」

「さてな。」

「知りたかったら、明日の朝刊でも精読する事だ。」

「記事の片隅位には載っているかもしれんぞ」

「チツ……この悪党が」

「最高の褒め言葉だな」

「切るぞ！」

「ああ、お休み。良い夢を」

「き、気色の悪い事を言うなあ！」

「それは悪かったな」

「……貴様なぞ、貴様なぞ、悪夢に魘されてしまえ！」

閑話　： 篁唯依の日記（西暦一九九〇年十一月）（後書き）

という事で、災難に遭う唯依姫でした。

敵が多いルル様の傍に居るのは大変という事で。

それでは次回は本編で。

『 P H A S E 6 　： アヴァロンへの険路 』（仮称）です。

PHASE 6・1：アヴァロンへの険路【前】（前書き）

うん。

膨らみすぎ。

書いてる内にどんどんと。

Myページで三連休中のアップを予告した手前もあるので、  
今回は前後編に分けますね。

どうかご容赦を。

西暦一九九〇年 九月九日 帝都・枢木工業本社

どちらかと言うと秘密主義。

きつぱり言うなら独断専行の気が強い枢木にとって、無用の長物と化していたこの場 広報部・会見場は、この日珍しくも千客万来の様相を呈していた。

国内のみならず、日本に支社を置く海外のマスコミさえも、多数、姿を見せているその場にて、顔見知りの記者達は各々小グループを自然に形成しつつ、手持ちの情報を交換する。

「おい、一体何の発表か聞いてるか？」

「知らん。社の方に、重大発表があるから来いと連絡があっただけだ」

「ウチもだ」

困惑の気配が広がっていく。  
どの記者の顔にも、やはりという色が滲んでいた。

元来、異様な程に枢木のはガード堅い。

自社の情報を外に漏らす事を、とことん嫌っており、社内の動静をとある記者に漏らした社員が、数日後には機密漏洩の罪に問われて懲戒解雇された例などザラだ。

社員に対する給与や福利厚生は、同業他社に比較すると抜きん出ている枢木であるが、その辺りの厳しさが、今一つ日本人の気質にそぐわないのか、企業規模に比して国内での知名度や人気が余り振るってはいない。

どちらからと言うと、国内よりも国外での評価の方が高い日本企業らしくない変わり者。

それが、彼ら日本人記者達の枢木に対するイメージだ。

そんな変わり者が、何を思っただか、自分から積極的に情報を流そうというのである。

彼らにしてみれば興味半分、恐いもの見たさ半分といった感が拭えなかった。

もつとも記者達の一部、具体的には枢木と業態の被る一部企業と懇意にしている者達は、この会見の後に予定されている会食での饗応と相応の小遣いの方に興味が集中しており、そこまで深く考えを巡らす者は決して多くは無い。

そんな同床異夢そのものとも言える会見の場で、記者暦二十年というところあるベテランが、煙草の無い口元に無意識に指を添えながらボソリと呟いた。

「さて、鬼が出るか蛇が出るか？」

「物騒な言い方だな。」

「たかが記者会見だろ？」

思わず漏れた男の本音を別の記者が窺める。

だが窺められた方はというと、至極、常識的な反応をこそ鼻先で笑った。

「あちこちに敵を作りまくりながら、我が道を行く枢木だぞ。」

絶対、騒動の種になるに決まってる」

記者としての真面目な勘、そして職業柄、騒動を求める願望。

混じり合うそれらに、眉をひそめた相手は、反論を口にしかける。

だがそこに、小さな叱責が割って入った。

「しっ！」

「……お出まし……だ？」

語尾が微かに鈍る。

わずかに見開かれた眼が、ソレを驚きと共に見つめた。

いぶかし気な視線、戸惑いを帯びた視線、どこか納得した様な視線。  
線。

それら全てが交差する演壇で、一人の少年が良く通る声を発する。

「記者諸君、急な発表にお付き合い頂き感謝する」

そう告げる目の前の少年こそが、枢木の真の支配者。

そう知る者が、果たしてこの場に何人居ただろうか？

大半の者が、唐突に現れた年端も行かぬ少年に眼を白黒させつつ、大人顔負けの堂々とした態度で場の中心を奪った彼に、注目せざるを得ない状況が産み出されていく中、その場の空気を完全に掌握した少年は、朗々たる声で己の素性を告げた。

「私の名は枢木ルルーシュ。

今回の計画の一切を、取り仕切る立場にある」

その姓名を聞きハツとした表情になる者が幾人か、それ以外の者も、枢木の姓からルルーシュの素性に大まかなあたりを着けるや、特ダネの予感に視線を鋭く尖らせた。

対して、既にその正体に気付いていた情報通な面々は、彼の言った『計画』の方に興味を惹かれ耳を澄ませる。

ここ数年の枢木の大躍進を支えてきた複数の計画。

それ等によつて産みだされた数々の品々　OSであったり、建機であったり、或いは戦術機の強化装備であったり　は、多くの者達の興味をそそつて止まぬものだった。

それがそのまま今回の『計画』に対する興味へと引き継がれるのは、ある意味、必然と言えよう。

そうやって様々な理由から圧力を増した視線の群れ。

その集中砲火を浴びながら、そよとも動ずる様も見せず、少年は軽く手を振る。

フツと室内の照明が落ち、入れ替わる様に背後に設えられた大型プロジェクターが映像を映し出す。

「まずは、こちらをご覧ください」



瞬く星々と画面の三割程を占める蒼い星。  
宇宙、それも地球近辺から映した映像である事がそれだけで分かった。

「この映像は、対地高度五百？の地球周回軌道からリアルタイムで送られてくる映像だ」

次第にズームアップしていく映像を背にルルーシュが語る。

撮影の焦点が彼の左上、恐らくは軌道ステーションと思われる小さな点へと移っていく中、眼の良い者達が、『ソレ』に気付いた。

「あ、アレは？」

「再突入駆逐艦？」

いやしかし……大き過ぎる？」

ざわめきが広がっていく。

映像がズームされていく中、軌道ステーションに寄り添う様に在る黒い巨影　垣間見えるフォルムからして軌道ステーションとは異なるソレ　に居合わせた者達が徐々に気付きだしたのだ。

そんな中、ステーションとの対比で、その規格外のサイズを悟った一部の連中が驚きの吐息を漏らす。

概算でも五百メートルを下らぬ巨体を持つ恐らくは宇宙船と思しき構造体。

一般的な再突入駆逐艦が、六十メートル前後である事を考えれば、常識外れと称してもおかしくはない。

徐々に鮮明になっていく黒い怪物を背後に従える様に、ルルーシュは整った容貌に薄い笑みを浮かべた。

「あの艦こそ、我が枢木が新たに建造した超大型宇宙艦『スヴァルトアールヴヘイム』」

ざわめきと共に、呆れとも、感嘆ともつかぬ溜息が広がっていく。ごく短期間で、あれだけのスケールの宇宙船を建造してのけた枢木の技術力と生産力に、一同は驚きと畏怖の念を隠せなかった。

「全長六百m超、長期間・長距離航行が可能な最新鋭宇宙艦。必要とあらば単艦でも、太陽系外縁部まで進出可能だ」

再び、どよめきが起きた。

今の人類にとっては破格過ぎるスペックに、その場の面々が気圧される中、いち早く気を取り直したベテラン記者が反撃の口火を切る。

「新聞の田中です。」

質問よろしいでしょうか？」

「ああ、どうぞ」

フワリと柔らかな笑みを浮かべて応じる。

だが、彼の身近な者がソレを見れば、明らかに違和感を覚えるであろう造られた笑みである事が、ビジネスと割り切ったの対応である事を示していた。

もつとも、そんな事など分からぬ記者は、一瞬だけ見惚れるように呆けるが、気を取り直すや慌てて質問を再開する。

「ど……失礼……どうしてそんな化物染みたスペックの宇宙船を？」

出てきた質問はと言えば、凡庸の一言。

だが、同時にとても重要な事でもあった。

何故なら月を奪われ地球に逼塞するしかない今の人類にしてみれば、太陽系外縁部まで進出可能な宇宙船など明らかに過剰性能オーバースペックと言える以上、その建造目的こそが一番の関心事となる。

とはいえ、当然の如く質問される側も、その程度の事は事前に想定済みであった。

わずかに考える素振りを見せつつ、ルルーシュは迷う事無く問いに答える。

「ふむ、当たり前と言えば当たり前な疑問だな。

火星を占拠され、月すらも奪われた人類には、外惑星まで進出可能な宇宙船など無用の長物」

ここで一旦、言葉を切ると、自身の為した自問自答が、一同の中へと浸透して行くのを待ってから言葉を繋ぐ。

「ならば当然、その無用の長物を建造する理由が存在する」

再び、その手が振られた。

記者達へと面を向けたままの彼の背後で、プロジェクターの映像が切り替わる。

「これは……」

小波のように広がっていく眩き。

無意識の内に零れたそれ等に気づく事無く、記者達はプロジェクターを注視する。

漆黒の空間に浮かぶゴツゴツとした岩肌を曝す『ソレ』は、どこ

か太ったサツマイモを連想させた。

### 小惑星

そう呼ばれる類の物だと気付いた者、気付かぬ者の区別無く、ルルーシユの解説が彼等の鼓膜を震わせる。

「太陽系内に無数に存在する小惑星の一つ。

天文学的には別の名がついているが、我々は計画の便宜上『MF?』と呼称している」

会場内の各所で、記者達が顔を見合わせた。

互いの顔に、自身と同じモノを見て取った彼等は、混乱しつつも、唯一の解説者へと視線を戻す。

そんな彼等の醜態を、どこか面白そうに眺めていた少年は、演台に用意されていた水を一口含み喉を潤すと、彼等の疑問に答えるべく口を開いた。

「この『MF?』は、最大長約八十?、凡そ八年周期で公転している訳だが、来年早々にも地球に最接近する。

まあ最接近と言っても、数百万キロを隔ててのもので本来地球には何の影響も無いがな」

そう言っって少年は、三度、その手を振った。

「『アヴァロン計画』Project Avalon?」

誰かが、プロジェクターに投影された一文を呟く。  
ルルーシユの顔に、今度は不敵な笑みが浮かんだ。

「その通り。」

今後、我が枢木は、最優先・最重要の計画として本計画を推進する」

そこで再度、少年は言葉を切った。

想定通り、狐に摘まれた様な顔で呆けている一同を確認すると、彼は計画の概要を語り出す。

「具体的には最接近する『MF?』の軌道を変更、しかる後、地球・月間のL4宙域に移動させる」

プロジェクター上に概念図が映し出され、彼の言葉を補足する様に、モデル化された図の中で軌道を変更された『MF?』が、L4宙域へと移動するまでを示した後、啞然として沈黙する一同を他所に、再び画面が切り替わった。

「L4にて安定作業完了後は、『MF?』内部に恒久的な居住空間を設け、そこに大規模生産施設を建設する」

今度は、『MF?』の概要図が表示され、そこにどのような施設を設けるかが概略で示された。

各人の予想を完全にブツ千切った『計画』に、皆が皆、眼を白黒させる事しか出来ない中、辛うじて我に返った一人が、喘ぎながら問いを紡ぐ。

「け、建設するって……資材は……」

「我が方の分析では、『MF?』には豊富な資源が埋蔵されている可能性が高い。

必要な資材は、『MF?』から資源を採掘し、現地にて生産する予定だ」

立て板に水を流すが如く、サラリと返された答えに絶句する一同。BETA 侵攻から三十年近い時が流れているが、その間の人類の宇宙における活動は、お世辞にも活発とは言えない。

再度の着陸ユニットの侵入を防ぐ為、一対宇宙全周防衛拠点兵器群《SHADOW》を筆頭とする地球周辺での防衛・監視システムの構築こそ熱心だったが、逆にそれを越える領域へは殆ど手を出していないのだ。

当然、くだんの小惑星『MF?』とやらについても、資源探査など行われてはいないだろう。

有るかどうかも分からぬ資源を当てにしているの大計画。無謀を通り越して、狂気と言われても不思議では無い程だ。

困惑の眼差しが、狂人を見るそれに徐々に替わって行く中、当の本人はと言えば、涼しい顔で聴衆を見渡すと口元をわずかに釣り上げる。

秀麗な容貌故に、より禍々しさを感じさせるそれに、皆が皆、背筋を寒くする中、演台から張りの有る声が飛んだ。

「これは、枢木一社の為ならず。帝国の未来を慮つての計画である」

断ずる声が、僅かにあつたざわめきを押し潰す。

声変わりを終えたばかり位にしか見えぬ少年の放つ覇気が、海千山千の経験を経た筈の記者達を完全に圧倒していた。

水を打ったような静けさの中、ルルーシユの声のみが朗々と響いていく。

「現在、帝国では大陸での戦闘激化に伴い、友好国の多い東南アジアを後背地とすべく生産拠点の移転を計画しているが、これは愚策である断言しよう」

切り捨てる様な鋭さが声音に混じった。

帝国政府の方針を、真つ向から愚策と断じる様に、多くの者達が顔を無くす。

中でも、帝国の方針に賛同の意を示し、提灯記事を書いていた大新聞などの記者達については、それが顕著だった。

そんな彼らを、せせら笑う様に、少年の演説が続く。

「考えてもみるが良い。

もし大陸が失陥し、帝国が前線国家となった場合、東南アジア諸国が後方国家であり続けられる可能性が、どれ程あるというのか？」

幼子に言い聞かせる様に、疑問を織り混ぜながら重ねられた言葉に反論する声はない。

大陸が陥落するという事はそういう事だと、告げる声にただ固まるだけだ。

回答を或いは反論を期待してもいなかったのか、少年は場をざつと見渡すと再び口を開く。

「そうなった場合、帝国は自国のみならず後背地である筈の東南アジア諸国の防衛義務まで負うことになる。

それがどれ程の負担を、帝国に強いるかなど考えるまでもあるまい？」

疑問符でめられた一言に、日本人記者達が口元を引き結ぶ。

無資源国である日本が、B E T A達と戦う力を維持する為には、資源が豊富で且つ友好関係にある東南アジア諸国との結びつきを強化するしかないと分かっているにも、面と向かってデメリットを突き

つけられれば、躊躇いを覚えずには居られなかった。

だが、それでも代案が無い状態なら、それも通った。

だからこそ限られた状況の中、比較的一番マシな選択をした筈の政府。

それ故に賛同の意を示し協力してきた自分達<sup>マスコミ</sup>。

そうやって掲げられた免罪符を、眼前の少年は愚策と断じて引き裂いて見せた訳だ。

「ご丁寧にも代案まで用意して。」

整った容貌の中、三日月の様に弧を描く唇

畏怖と反感を、否応無く掻き立てるソレに、日本人記者達の目線が険しさを増す。

対して、少なくとも国外の記者達は、日本帝国内に嵐の訪れを予感し、その中心となるであろう黒髪の少年を見定めるように注視した。

そんな人々の様々な感情の渦を束ねながら、ルルーシュは傲然と胸を反らす。

「故にこそこの『アヴァロン計画』。」

BETAは、地表から一定高度にある人工物を攻撃しない事が、これまでの経験則から判明しており、また宇宙空間における人工物も同じ傾向にあるとの分析がなされている」

これもまた事実。

先年、着陸ユニットと思しき飛来物を、『SHADOW』が迎撃に成功した事は世界中に知られていたが、それに対するBETAの報復あるいは排除行動は確認されていない。



また、月面監視ステーションや月周回衛星も無傷だ。

この事実から、BETAには宇宙空間にある構造物を攻撃しない習性があるのではとの推測が有力視されつつある。

故にこそ。

「合理的に考えるなら、奴等のその特性を利用しない手は無い。

帝国が将来を見越して後背地を設けるなら、それは地上ではなく宇宙にあるべきだ」

自身が推進する計画こそが正しい。

言外にそう言い切る姿は、一片の揺らぎも無い程、自信に満ちていた。

帝国政府共々、面子を潰される事となる大マスコミすら反論できぬ程に。

強靱な意志を感じさせる紫の眼差しが、薙ぎ払うように一同を見回す。

畏怖、あるいは反感を抱いた者達が、亀が首を引っ込めるように居竦む中、少年はいま一度手を振った。

背後に投影されていた映像が途切れ、室内の照明が元のレベルに戻る。

「本日の発表は以上となる。

計画の概要については、出口にて資料を配布するので必要な者は持ち帰るように」

もはや伝えるべき事は終わった。

そう言わんばかりに会見の終了を宣告する。

本来なら、質疑応答を求めるべきところだ。

だが、完全に気を吞まれた一同に、それを望むのは酷と判断したのか、手元の資料を取り纏めた少年は顔を上げて告げる。

「それでは、貴重な時間を割いて頂いた事に改めて感謝を贈り、本日  
の会見は終了とさせて頂く」

礼儀作法の見本として使いたくなるような綺麗な一礼を残し、少年は踵を返す。

律動的な足取りで、袖へと消えるその姿を、一同は声もなく見送ることしか出来なかった。

翌朝の新聞は、この日この出来事を大々的に報道。

一部の好意的な記事を除き、紙面は、ほぼ批判一色で染め上げられた。

ことに某国粹主義的傾向の強い新聞社は、現役帝大教授、航空宇宙軍高官、あるいは高級官僚のコメントまで取り集め、口を極めて批判の論陣を張った拳句、最後にこう結んでいる。

曰く『子供の妄想に振り回される愚か愚かな保護者達』と。

「お忙しい中、時間を取って頂き申し訳ありません」

「いやお気になさらずに、前は私の方が無理を申しましたしな」

卓に着いた二人の男が、互いに頭を下げあつた。

どちらも本質的に生真面目過ぎるくらいがあるのか、会う度に同じ光景を繰り返す様に、脇に控えていた第一秘書は、笑いの衝動を噛み殺すのに苦労しながらも何とか節度を保ちつつ、いつも通りに茶の準備を整えると礼儀正しく一礼し襖を閉ざす。

遠ざかる足音が聞こえなくなるまで、互いに口を閉ざしたまま向かい合う榊と彩峰。

手持ち無沙汰から伸ばした茶碗を手に持ち、ゆっくりと茶を啜っていた両者は、計ったように同じタイミングで茶碗を置くと、互いに視線を交差させた。

「……それで、答えは決まりましたか？」

「はい……」

先に口火を切った榊に彩峰が応じた。

わずかに言い淀む様が、言葉とは裏腹の迷いを感じさせる。

そんな逡巡を断ち切る様に、真剣な眼差しで榊を見つめた彩峰は、ゆっくりと、そしてはつきりと続く言葉を口にした。

「前のお話、受けさせて頂こうと思えます」

「そうですね。」

感謝します、彩峰少将」

「……いえ、決断がここまで遅れた事を、お詫びしたい位です」

ホツとした様子で礼を返す榊に、苦味を噛み締めるかの様に顔を顰めたまま彩峰が答える。

……確かに、彼にとっては苦い苦い決断だった。

これまで積み上げてきた信用と実績。

部下や同僚達からの信頼。

そして何より罪無き兵達の生命。

最悪の場合、それら全てを失い、或いは泥に塗れさせる覚悟が要った決断。

言葉で言うのは容易いが、実際にそれを為すには途方も無い苦悩と葛藤を越えて来る必要があった。

それでも尚、それを越えることが出来たのは、彼自身が抱く信念ゆえであろう。

人は国のためにできることを成すべきである。

そして国は……人のためにできることを成すべきである。

その思いに従って彩峰は選択した。

自らが最善と信じる道を。

そんな彼の決断の重みを、十分に理解していた榊は、敢えて労いの言葉を飲み込んだ。

いま必要なのは、そんなものではないと解っていたからこそ、彼

は、これからの事を問う。

「さて……となると席は、どちらに用意すればよろしいか？」

帝都近郊の部隊か、或いは、いずれ侵攻が予測される九州・中国地方の部隊か。

どちらが動き易いかと問う榊に、彩峰は予想外の回答を返した。

「可能なら、本土防衛軍にお願いしたいと思います」

榊の眉が微かに寄った。

前線指揮官としての名声が高い彩峰少将としては、意外な選択だったからだ。

そもそも現在の本土防衛軍とは、作戦に応じて各軍から必要な部隊を抽出し統合作戦指揮を執る任務部隊的な組織であり、平時には少数の戦術機甲部隊除き、固有の戦力という物を殆ど保持していない。

確かにその性格上、日本が前線国家となった場合、指揮系統の一本化という観点からも、本土防衛軍がインシアチブを握る事は充分考えられるのだが……

「……よろしいのですか？」

辛い選択となりますぞ」

「元より覚悟の上です」

前線指揮官であった彩峰が、大陸出兵を控えたこの時期に後方に下がるとなれば、それだけで口さがない者達の非難や中傷の的となるだろう。

ましてや、現時点で実働戦力を殆ど持たぬ本土防衛軍に行くとな

れば、風当たりは更に強くなる。

だが彩峰は、それさえも覚悟の上と言い切った。

「理由を、お聞かせ頂いてもよろしいか？」

「無論です」

そこで言葉を切り、もう一度、茶で喉を湿らせる。

手にした茶碗を卓に置き、彩峰は訥々と喋り出した。

「以前、大臣よりお話があつてから、色々と考えさせていただきました。正直に申し上げれば、本土に残る事については、かなり早い段階で決心が着いたのです」

「答えが今日まで延びた理由が、本土防衛軍行きの理由だと？」

榊の問いに、彩峰は無言で頷くと、再び、言葉を繋ぐ。

「ええ、多くの犠牲に眼を瞑り、未来の為に本土に残るといふなら、どのような選択を採るのが最も望ましいかを、無い知恵を絞って考え抜きました」

そこまで答えると、今度は彩峰が質問を投げる。

「大臣は、大陸派遣軍壊滅後、日本が前線国家となつた場合、軍がどのような防衛体制を敷くと思われませんか？」

「……残された戦力を、有効活用すべく動くでしょうな。その為の詳細な体制までは分かりませんが」

そう答えつつも、榊にもある程度の予測はついていた。先程、想像した通りに流れる可能性が高いと。

そんな榊の内心を見通した様に、彩峰は静かに首肯すると、その後を引き取る。

「その理解で正しいでしょう。」

そして恐らく予想されているでしょうが、その為には指揮系統の一本化、すなわち統合作戦指揮能力を向上させる事が主張される筈です」

「その役目を担うのが本土防衛軍だと？」

再び返された問いに、彩峰は肯定の頷きを返した。

「はい、私もそれ自体に異議はありません。」

指揮系統を分散させ、遊兵を作る余裕など、恐らくその時の帝国には無い筈です」

「だから事前に本土防衛軍に地盤を作っておくと？」

重ねられた確認に、今度は、彩峰の表情に躊躇いが生じた。

既に組織として存在している以上、そちらを利用するのは間違いないではない。

但し、そこに合理性以外が、介在しないかという点と無いとは言いきれなかった。

少なくとも、彩峰はその可能性を感じ、そして恐れている。

一瞬だけ、口にすべきか悩むが、ここは告げておくべきと判断し、彩峰は本心を吐露した。

「……それも確かにあります。」

ですが、それ以上に、本土防衛軍、いえ、それを直轄している参

謀本部を牽制できるようにしておきたいのです」

榊の双眸が、わずかに陰しさを増す。

「参謀本部……ですか？」

「はい」

互いの間に、重い沈黙が落ちた。

帝国の軍制は大東亜戦争以来、文民統制の観点から、参謀本部に実働戦力を持たせる事を避けてきた。

参謀本部直轄の本土防衛軍に、現状、固有の戦力が無いのもその余波である。

ここまで来て、榊にも彩峰の言わんとしている事が理解できた。

国土防衛の美名の下、どさくさ紛れに参謀本部が、再び実働戦力を隷下に置き暴走する。

政治家にしてみれば悪夢であり、彩峰のような真つ当な軍人にとっても顔を顰める事態だろう。

正直、無いとは言えなかった。

いや、充分に有り得る事態と言える。

現在の軍高官の顔ぶれと、その言動や行動を思い起こし、榊は、そう判断した。

厳しい顔に、苦々しさを隠しきれない表情が浮かぶ。

「BETA相手に死力を振り絞らねばならん時に、それは堪りませんな」



「ええ、その通りです。  
だからこそ、その様な事態は未然に防ぎたい」

その為の本土防衛軍行きであると、彩峰は結んだ。

これは断れない。

話を聞き終え、胸中で、そう呟いた榊は、彩峰の希望通り本土防衛軍に席が与えられる様、軍に働き掛ける事を約束する。

この動きにより、彩峰は榊派閥の軍人と認識されるだろうが、それは仕方が無い事と割り切った。

その事により、メリット・デメリットが生じるのは確かだが、その点は彩峰の才覚に頼るしかなく、それは当人も承知している。

何はともあれ、まずは一山。

そう安堵した榊は、その途端、喉の渴きを覚えた。

柄にも無く緊張していた自分を悟り、目の前に置かれた茶を啜る喉を過ぎる温い感覚に、ホッと一息つきながら、不意に彼は事の発端を思い出した。

連鎖して思い起こされる騒動の記憶。

緊張の緩んだ口元から、それが零れ落ちる。

「そう言えば、枢木の件ですが……」

言いかけて言葉を濁す。

先日の一件以来、どう評価したものかと頭を抱えているのが現状だった。

それは彩峰にとっても同じだったらしく、渋い表情を浮かべつつ、

歯切れ悪く呟く。

「……さて、どうしたのですか？」

「あの様な真似をするとは、思いもせませんでしたからな」

「確かに……正直なところ困惑するばかりです」

そこまで会話を交わすと、互いに苦笑いを浮かべた。

彼等の選択に大きな影響を及ぼす原因の暴走。

正直、これをどう判断すれば良いのか、さっぱり見当もつかない。とはいえ、全てを白紙に戻すというのも有り得ない事であり、彼らとしては今後の対応をどうすれば良いのか決めかねるとというのが本音だった。

故に彼等は

「当面は様子見、という事でよろしいか？」

「………そうですね。」

今回の一件で、枢木の真価を測り終えてからでもよろしいでしょう」

妥協した。

ある意味、日本人らしいと言えらしい対応ではあるが、この場合は仕方なかった。

こうして榊らは、当初予定していた枢木との接触を当面保留する。そしてそれは、あまりにも突飛すぎる『アヴァロン計画』が、歴史の歯車を歪ませた一例となるのだった。

西曆一九九〇年 十二月三日 帝都・料亭『瓢』

未だ後方国家としてあり、世界でも有数の国力を保有する日本帝国。

今のご時勢でも、多少の出費を覚悟すれば、一般庶民さえ苦も無く天然食材に舌鼓を打てる恵まれた国。

そんな帝国の中にあっても、やはり贅沢の極みと言われるに足るであろう豪華な料理と天然醸造の酒に囲まれながら、彼等の心が晴れることは無かった。

ジリジリと真綿で首を絞めるように、或いは、暗闇から唐突に白刃が襲い掛かってくるような恐怖が、彼等の精神を荒ませている。

それ等の根源的な原因はと言えば……

「昨今の枢木の専横は眼に余る」

恰幅の良い帝国議員が、押し殺した怒りを酒気と共に吐き出した。

「奴等、一体何様のつもりか！」

軍服を身に纏う高級将校が、杯ごと卓を叩く。

「もう少し持ちつ持たれつというの理解して欲しいですよ」

枯れた感じの老紳士が、さも不快そうに顔を歪めた。

「あの武家の恥さらしめが！」

鍛え抜かれた隆々たる体躯の男が、汚物を見る様な眼差しのまま不満をブチ撒ける。

企業の重役あり、官僚あり、軍人あり、政治家あり、あるいは武家もあり

様々な立場・階層から、様々な理由で枢木に反感や敵意を抱く一同が介し、互いの立場を越えて反枢木の策を練る。

これはそういう集まりであった。

まあ、辛辣な言い方をするなら、『負け犬の集い』とも言える。いずれも反枢木の旗幟を鮮明にしていた分、今更、おもねる訳にもいかず、そのままの姿勢を堅持せざるを得ないという意味で。

そしてそれは、彼等の命 政治生命だったり、社会的生命だったり、或いは実際の生命だったり 危地に追い込む危険な遊びであるという事を、ようやく理解した時には既に手遅れとなっていたのである。

ジワジワと伸ばされる枢木の魔手が、彼らとは別グループである反枢木集団を叩き潰し、失脚或いは左遷の憂き目に遭わせたのは、つい一月前の事。

それ以来、自身の首筋に冷たい北風を感じ始めた彼等は、こうして集まっては事態打開に知恵を絞っているのだ。

「このまま連中の好きにさせておいて良いものか？」

吼える。

「良い訳が無かるう。」

これ以上、デカイ面をさせてなるものか！」

吠える。

……勢い良く。

だが、それが虚勢であるのは、彼等以外、いや彼等自身にとつても明らかだ。

眉間に皺を寄せた某大企業の重役は、苦々しそうな表情で危惧を口にする。

「……とはいえ、彼等の二の舞は、ご免ですぞ」

「あんな無能と一緒にするな！」

「待て、それは聞き捨てならんぞ！」

私も多少の親交は有ったが、決して無能などではなかった」

弾かれるように上がった否定を、別方向からの声が更に否定する。一同のまとまりの無さが露呈する中、憎々しげな声がトドメを刺した。

「どこがかね？」

ただの石コロを掴まされて仲間割れした拳句、好き放題やられたではないか」

「責様っ！」

「まあまあ、抑えて抑えて。  
ここで我等が仲間割れすれば、枢木を利用するだけですぞ」

知人を馬鹿にされ、激昂し立ち上がりかけた武家の男を手馴れた様子で宥めた重役の老人は、場の空気を締め直すべく枢木の名を口にした。

「……………」

効果絶大と言うべきか。

言い合いをしていた両者が、不承不承といった態ではあるが、互いに矛を引く。

呉越同舟、同床異夢。

元々、雑多な所属である一同に全てを貫く理念もなければ、目的も無い。

唯一あるのが枢木憎しの感情だけ。

そんな集団に、内心で溜息をつきつつ政治家の一人が口を開く。

「だが正直な話、このまま枢木の勢力が増せば我等も危うくなる」

弱気とも取れる発言に眼を四角くする者も居れば、黙って俯く者も居た。

自身が追い詰められつつある自覚のある者ほど、その傾向は強い。敗北主義が蔓延しそうな状況に、先程、仲裁に入った老人が慌てて嘴を差し挟んだ。

「今ならまだ巻き返せます。」

幸いにして、向こうが大きな失策を犯してくれた事ですしね」

見た目上、自信たっぷりといった風情で、そう断言する男に周囲の注意が集まる。

「失策？」

「『アヴァロン計画』」

老人が皺深い顔を歪めてニヤリと嗤った。  
座に不審と疑問の空気が生まれる。

批判的となっている『アヴァロン計画』については、この場に居る全員が承知している事だが……

「確かに荒唐無稽な夢物語だろうが、それが何故、我々の利になるのだ？」

訝しげな表情を浮かべた武家が、一同を代表して疑問を口にする。  
確かに、枢木の計画が失敗するのは痛快であろうが、それに何の意味が有る、と。

対して、優越感に満ちた表情を浮かべた老人は、嬉々として語り出す。

「武家の方には、ピンツと来ないかもしれませんが。」

ですが、あれだけの計画を動かすとなれば、動く資金と人も尋常ではないのですよ。

いかに枢木であれ容易ではないレベル　そう計画が頓挫すれば、一気に屋台骨がへし折れかねない……こう言えば、お分かりになりますかな？」

室内に緊張が走った。

次の瞬間、歡喜の表情を浮かべた軍人が膝を叩く。

「成る程、その手があったか」

投了直前での起死回生の一手に、互いに顔を見合わせる。

そんな一同の耳元に、更に甘い言葉が注がれた。

「それに今回の計画では、枢木内でも危惧する声があるとか。

上手くそれ等の不満分子を取り込めば、あるいは枢木自体を乗っ取る事も」

笑い声が弾けた。

先程まで、通夜の席の様に沈んでいた者さえも、興奮しながら身を乗り出し、思い思いに言葉を発していく。

「それは痛快だ！」

「奴等が帝国を蔑ろにし、貯め込んだ全てを奪つ。

いや、帝国の下へ取り戻す訳だ……面白い、実に面白い趣向だ」

暗闇の中に見えた勝機。

それが彼らのテンションを上げていく。

だが、熱狂に身を曝す者ばかりと言つ訳でもなかった。

「となると、どうやって計画を潰すかだが……」

早くも、実行手段を模索する弦きが、将校の一人から漏れる。

枢木の手強さを、嫌という程、味あわされてきた者に見れば、実際に倒れる所を見るまでは樂觀する気になれなかったのだ。

対して、もはや勝った気になったのか、政治家の一人が樂觀論を



口にする。

「放っておいても勝手に自滅するのでは？」

専門家の連中も、口を揃えて無謀の極みと嘲っていますぞ」

「しかし、もし万が一成功してしまったら？」

「ますます手が付けられなくなるぞ」

「その通り、人事を尽くして天命を待つべきだ」

根拠の無い予想に、寄って集って反論が集中した。

バツ悪そうに黙り込む発言者を他所に、何とか妙手をと一同は知恵を絞る。

「年明けには、あの艦……スバルトなんたらが出港するとか。

そうなってしまうえば、こちらからは手が出せないな」

「しかし、軌道ステーションへの出入りは、かなり制限されている筈だ」

迂闊に手は出せん。

そう結ぶ声が小さくなる。

移動手段が限られるが故に、容易くは手出しできそうに無い状況に、一旦は喜色に彩られた室内が徐々に暗くなっていった。

そんな時である。

事の発起人とも言うべき老人が、何かを思いついた様に指を鳴らしたのは。

「……式根島ですな。」

あそこには、枢木の造った専用の宇宙港があります。

もし、あそこが『重大な事故』で使えなくなれば物資の搬入もま

まならず、計画の進捗に致命的なダメージとなる筈です」  
「それで事足りるのか？」

差し出された打開策に、誰かが半信半疑といった様子で疑問を投げける。

わずかに同意する声が、チラホラと続くが、勝算ありげな企業家の応えがソレを封じた。

「あれだけの規模の大計画です。

スケジュールの遅延一日で、眩暈がしそうな金が、羽を生やして飛んで行きますよ。

そうですな、流石に半年も遅延すれば、枢木本体の資金繰りにも回復不能な問題が生じるでしょう」

兎に角、流れを断ち切る事こそが肝要とばかりに主張する。  
そしてそれ自体は、誤りでもなかった。

計画が停滞してしまえば、確かに枢木にとって途方も無いダメージを招くのは確実なのだから

「そこが狙い目か。

『重大な事故』が起きたとなれば、枢木の管理責任を追及できる。  
その辺りで時間を稼げば、半年や一年などあつという間だ」

「よし、それで行こう！」

腹を括った表情で、一同が頷きあう。

最早これしかないという思いが、彼らの背を押していた。

逆に言うなら、そこまで追い詰められていたという事でもある。

恐らく今の立場・地位を維持したまま、年を越せるのはこの中の半分も居まいと言う焦りが、彼らに非常の手段を取る事を選択させたのだった。

そうやって仲間内での合意に漕ぎ着けた反枢木の面々は、より現実的な話へと移って行く。

いや、移ったのだが……

「となると、実際に手を下す駒が、必要な訳だが……」

「枢木のガードの堅さは有名だ」

「我等の手の者も、何度、煮え湯を飲まされた事か……」

再び躓いた。

苦い物を噛み締めるような表情で黙り込む面々。

これまでに、色々とチョツカイを掛けた末の結末を思い出したのか、一部の者は青褪めていたりもする。

「……あやつを使うしかないか」

今にも齒軋りしそうな呟きが、沈黙を破って響いた。

その一言で意味を悟ったのか、官僚の一人が問い質す声を上げる。

「『石コロ』を、ですか？

いやしかし、それは余りにも無謀では」

先の話にも出た別の反枢木グループ壊滅の切っ掛けを作った男を、この重大事に起用しようという話に、一座の中でも反対の声が次々に上がる。

だがしかし、そうかと言って他の適任者を押す声上がる事も無かった。

現実問題として、曲がりなりにも枢木のガードを破って生還を果たしたのは、今のところ彼しかない。

その実績を前に、躊躇する声も徐々に声量を落としていった。

「他に枢木のガードを越えられる者はおらんだろう。」

ヤツとしても、雪辱の機会を与えられたとなれば励む筈だ」

ついに痺れを切らした政治家の一人が、空回りする議論に終止符を打つ。

互いの顔を見回していた他の面子も、流石に決心がついたのか、それに反論する事はなかった。

「閑職に回された恨みに期待しますか？」

「それにメリットもある。」

もし失敗したとしても、以前の件の逆恨みという事で処理すれば、我等にまで類は及ぶまい」

「案外、妙策かもしれませんな」

さざめく様に肯定の意見が重なる。

自らの不安を押し殺しての賛同。

だが、ここに最終的な意見の統一は成った。

その光景を確認し、制度上、彼の人物を動かし得る官僚が、深い吐息と共に宣言する。

「……………いいだろう。」

鎧衣に、この件を命じよう」

ここに再び、賽は投げられた。

西曆一九九〇年 十二月十日 帝都・帝国軍技術廠

「ようやく揃ったか……」

最後の書類のチェックを終え、帝国陸軍少佐 巖谷榮二は、天を仰いで安堵の吐息を漏らす。

するとその横手から、湯気の立つコーヒーカップが差し出された。

「ギリギリだったな」

そう言いながら、淹れたてのコーヒーを巖谷に渡した篋は、自身も手にしたカップを軽く掲げて見せた。

敵つい顔が、僅かに緩む。

チンツと澄んだ音が鳴った。

流石に職場での飲酒は憚られるので、濃い目に淹れた珈琲で乾杯を交わした二人は、ここ数ヶ月の修羅場を互いに労いあう。

そう正に修羅場だった。

枢木には出せぬ注文を、米国MD社に出す事で危急を凌ぐ策を出しはしたものの、まさかその担当者まで押し付けられるとは、流石に想像もしていなかった兩名にとっては……

言い出しつぺに押し付けてしまえとの安易な発想と、そして恐らくは面子を傷つけられた高官や軍需メーカーの意趣返しが混合した結果の労苦であるが、まさか嫌ですとも言えない為、本来の業務と並行しての折衝作業の日々。

正直、過労死しなかった事が不思議な程のハードワークの連続に、良くぞ耐え切ったと内心で自分を褒めたくなった程だ。

とは言え、これでも他の人間がやった場合に比べれば、三割方作業が軽減されているというのが恐ろしい。

本来、枢木とライセンス契約を結んでいるMD社の活動範囲は、南北アメリカ大陸に限定されており、この件で日本と取引するのは契約に抵触する恐れがある為、おいそれとは行かない筈だったのである。

内密にMD社と話を付けてくれた彼には、どれだけ感謝しても、し過ぎという事は無さそうだった。

やがて疲れた表情を浮かべつつ、それでもホツとした様子の篋が、ポロリと本音を漏らす。

「何はともあれ、これで本業に戻れるというものだ」

「ああ、全くだ」

そう言っって軽く首を回す親友を横目で見ながら、巖谷は、手付かずで残っていた書類へと意識を移した。

「しっかし、随分と出てきたもんだな」

傍らに積み重ねられた報告書をザツとめくりながら、巖谷が呆れた様に呟く。

帝国が、技術盗用もなんのそので、撃震・甲型を試作した様に、各国もファントム・アップデートシステムを模倣した『新兵装』を開発していたのだが、その内の幾つかについての情報が其処に記されていた。

……………記されていたのだが。

「<sup>F.I.S.E</sup>タイガー向けアップデートシステムは兎も角……コイツら、一体なにを考えてるんだ？」

心底、訳分からんといった口調で呟きながら、見るからにポリウムたっぷりな『新兵装』の概要を記しているページをめくった。

装甲内部に増槽を設ける。

「……………」  
ちよつと眩暈がしたが、気を取り直して次を見る。

固定内蔵火器を装甲内に組み込む。

「……………ふう……………」  
巖谷は、溜息と共にパタリと資料を閉じた。

やはり訳が分からない。  
見も知らぬ技術者達が、一体何を志向して、こんな物を造ったのか、彼には全くわからなかった。

アップデートシステムの中核を成す多機能装甲<sup>M.C.A</sup>という概念を、表層的にしか捉える事が出来なかったのか、装甲内に雑多な機能を搭載する事で自己満足した結果、本来の目的 装甲の換装のみで第

一世代機に準第三世代機相当の機体特性を付与する　を見失っている物が殆どを占めている。

正直、蛇足の塊りにしか見えないそれ等を反芻しつつ、巖谷は友へと問い掛けた。

「……………あゝ……………増槽が必要なら、外部に着脱式で付ければ済む話だよな？」

「推進剤を使い切ったらパージ出来る分、それが一番合理的だ」

常と変わらぬ冷静沈着な親友の答えが、巖谷の気分を落ち着かせてくれる。

「……………なら、固定火器が必要だとして、お前ならどうする？」

「装甲表面に支持架を追加して固定した後、空力を考慮したカバーで覆う。」

整備や砲弾の補給もやり易いし、いざという時は捨てて逃げれば重しにならない」

立て板に水が流れる様に淀み無い篁の回答に、巖谷はそつだよなと、言わんばかりに頷いた。

チラリと動いた視線が、手元で閉じられた資料へ向かう。

「……………」

無意識の内に巖谷は、イヤイヤをする様に首を振る。

何も考えず、装甲内部に詰め込めるだけ詰め込んでみましたと言わんばかりの画期的な<sup>トシテモ</sup>『新兵装』が、目白押しと言える状況に、やはり彼は首を捻る事しか出来なかった。

何ともいえない気分、思わず愚痴が零れる。



「試行錯誤の過程で、色々なアイデアが出てくるのは分かるんだが……」

鈍重な第一世代機を、更にゴテゴテとデコレートした所で時代に逆行するだけだろうか？」

「……まあ、それだけ余裕が無いという事なのかもしれないが、明らかに戦術機の進化に逆行してはいるな」

篁は軽く肩を竦めて肯定する。

珍しく皮肉の色があるのは、技術将校の視点からみても呆れる面が多々有ったからだ。

流された血を対価とし得られた戦訓に基づき、現在の戦術機の進化の方向性は『防ぐ』ではなく『避ける』へと定められている。

より軽快に、より俊敏に、そしてより効率的に、攻撃を『避ける』。

その思想の元、第二世代機、第三世代機魔法の譜の概念は提唱されており、枢木のアップデートシステムが高評価を受けているのも、その概念機動性と即応性の向上を装甲の交換だけで実現している故である。

なのに、それを模倣した筈の『新兵装』が、何故か明後日の方向へと驀進した拳句、厚みたっぷり中身もギツチリな重装甲へと成り下がっている姿に、巖谷は首を傾げるしかなかったが、技術将校である篁には、大まかな理由の想像がついていた。

『OBLを装甲に組み込む』

言葉で言えば単純だが、装甲全体に張り巡らせたOBLを十全に

機能させ、且つ、軽量化しつつも装甲自体の強度や耐久性を、従来以上に保つというのは地味に難しい。

そして更に、その製造技術 具体的には、歩留まりの低減には必要不可欠な製造工程と品質管理が完全に秘匿されている為、製品そのものを模倣できても、商品として扱うレベルに達する事はなかった。

現時点で、それを商業レベルで可能としているのは、開発元である枢木とそこから技術供与を受けたマクダエル・ドグラム社のみである。

先日も、国内メーカーが挑んだ拳句、恥を掻いて終わる結果となったのは記憶に新しいところだ。

そんな実現困難な命題にぶつかり挫折した各国の技術者達が、上の要求するままにゴテゴテと詰め込んだ結果が、これら万能を詐称する『無残な失敗作新兵装』の実態なのだろうと。

篁は、名も知らぬ技術者達の苦衷を察し、かすかな苦笑を浮かべると、話題を変えるべく親友に水を向ける。

「国内の連中も、結局、モノにするのを諦めたらしいしな」

「色々と悪あがきをしていた様だがな」

友の言葉に、巖谷は肩を竦めて応じた。

撃震・甲型がお蔵入りとなり、開発費その他を含めて手痛い出費を被った国内メーカーが、その後も、何かと蠢動していた事は、彼等の耳にも届いている。

だが結局、何らかの打開策を得る事も無く、泣き寝入りする破目になった事も。

とはいえ、横道に回されていたリソースが、本道 すなわち、

耀光計画へと戻ってくる事は、彼らに見れば喜ぶべき事でもあった。

メーカー側に見れば、災難の一言であるが、自業自得の面がある以上、あまり同情する気にもなれない。

精々、茶呑み話の一つ程度であり、そして彼らにとって、それは一つではなかった。

手にしたカップの珈琲を啜りつつ、今度は巖谷が、小耳に挟んだ話題を提供する。

「そう言えばタイガー絡みで、EUから技術提携の打診があったそうだが、こちらは枢木側から断ったそうだ」

現在EUで活躍中の小型軽量戦術機であるタイガーは、練習機を元にしていてものの機体自体の評価は高い。

だが惜しむらくは、小型機の悲しさ、拡張性に乏しいという点がネックとなっていた。

元々の設計に余裕のあるファントムのように、装甲の換装だけで済ますには難しいものがあるらしく、それ故、枢木も手を出すのには二の足を踏んだ結果がそれである。

「基礎設計そのものは悪くないから、機体自体を弄れば、まだいけるとはロイド氏の言だが、同時にアップデートシステムのコンセプトから外れるとも言っていたな」

早く、安く、簡単にというのも、枢木のアップデートシステムの売りであり、駆動系を含めた改装までいくとなると、最早、その範疇から外れた単なる改修である。

次期主力戦術機の開発又は選定に難儀しているEUに見れば、場つなぎという位置づけでなら、それでも良かったのだろうが、枢

木の視点からみるとコストパフォーマンスの面から見て意義を見出せなかったというのが実情だ。

その際、そんな無駄をする位なら、イーグルかファルコンでも買っておけと放言し、EUあちうの担当者を激怒させたのは、ロイドらしいといえばらしいと言える。

まあ結局のところ、あらゆる機体に適応できる万能兵装などという代物は、所詮、子供の空想の中にしか存在し得ないという世知辛い現実を示す一幕となった出来事だった。

だが、それにしても悔やまれるのは……

「正直、枢木が戦術機関発から弾かれた時、周りから反感を買っても良いから、口添えしておけば良かったな」

ただ、その一事。

卓越した枢木の技術力と、それを支え、そして産み出し続けている奇矯な天才の手を、この先も、直接借りる事が叶わぬことが悔やまれた。

だが篁は、そんな未練を一刀の元に斬り捨てる。

「今更だな」

死んだ子の歳を数えても、空しくなるだけだ」

そう言って軽く肩を竦めて見せる親友に、巖谷の口元もわずかに綻んだ。

過去を振り返り反省の糧とするのは良いが、それに囚われるのは頂けない。

時計の針が戻らぬ以上、確かに篁の言う通り、空しくなるだけだと気付いた巖谷は、軽く息を吐くと、速やかに頭を切り替えた。

「……まあ、あちらの口利きで、必要な装備が揃えられただけ御の字か」

「ああ、これで大陸に渡る将兵達に、必要な装備を持たせてやれる」  
「それだけでも、当面は充分……といった所だな」

何はともあれ、当面のやりくりは付いた。

現在の帝国の主力を担う撃震<sup>F.4J</sup>が、老朽化による耐用限界を迎え始める二〇〇〇年代初めまでは、アップデートシステムの導入により、相応の戦力維持は叶うだろう。

後は……

『……耀光計画を、どうするべきかだな』と、篁は胸中で独白した。

紆余曲折こそあったが、帝国軍の戦力向上は成った。

……しかし

『耀光計画が失敗すれば、帝国の未来が閉ざされるのに変わりはない』

これはあくまでも、次期主力戦術機が完成するまでの場つなぎではない。

次へと繋げる為にも、新たな機体の開発が必須である事を、彼は良く理解していた。

『何とかしなければ』

再び停滞気味の耀光計画を、そして帝国の未来をこそ彼は案じる。現状は、高い要求仕様に対し、保有技術の劣勢が、どの様な形で影響するかが頭痛の種であった。

技術面の問題から、設計余裕をギリギリまで切り捨てたタイトな設計案が上がって来る辺り、この懸念が老婆心とは思えず、彼の胃がキリキリと痛む日々が続いている。

『やはり……根本から考え直すべきかもしれない』

この時、篁の胸中には一つの案が産まれていた。突飛過ぎる案であり、間違いなく大きな反発も産むだろう。だが、上手く行けば多くの課題を一気に解決できる筈だった。

そうやって逡巡する思いを抱え、迷いを覚えた男は、無意識の内に背を押される事を期待し、親友へと視線を移す。

篁の眉がわずかに寄った。

「……どうした巖谷？」

何か考え込む様に、窓外を見ている友が其処に居た。思わず零れた問いに、巖谷がハッと反応する。

「……いや、何でもない」

掛けられた問いに言い難そうに言葉を濁す。

分かり易すぎる親友の仕草に、篁は苦笑を浮かべながら重ねて問うた。

「嘘を吐くな。」

傍から見ればバレバレだぞ」

「……貴様には敵わんな」

内心を、あっさりとは看破された巖谷は、どこかほろ苦い表情を浮かべると、胸中を整理するように眼をつぶった。そのままリズムでも取るように指を動かす仕草を、しばし続けた後、彼は眼を開く。

何かを決意した眼差しが、篁を射抜いた。

「年明けには、大陸派遣軍の第一陣が出る訳だが……それと一緒に訳にはいかんが、俺も大陸に渡ろうと思ってる」

「巖谷っ!？」

唐突な親友の宣言に、思わず篁は大声を張り上げる。

冷静沈着を旨とする親友には似つかわしくない反応に、巖谷の面に一瞬だけ痛みにも似た色が浮かんだ。

……だがしかし、

「『耀光計画』の進捗が思わしくないのは、貴様も分かっている筈だ。

ここは計画自体に刺激を与える為にも、実戦でのデータを取っておくべきだと考えた末の事だ」

既に腹を括った巖谷の結論は変わらなかった。

彼もまた、彼なりに耀光計画の進捗を案じ、その打開策を模索したが故の結論なのだから。

「だが、お前が直接行く必要は……」

唾然として、呟くように零れた友の言葉が、巖谷の心に響く。だがそれでも、これだけは譲れないとの思いが、彼の言葉に力を

宿した。

「有る！」

今この時、実戦で得た生きた経験は、必ず次期主力機開発の益となる」

触発されるように、篁が激しい語調で反論する。

「兵器開発に実戦経験者の意見が、必要不可欠なのは事実だろう。

だが、必ずしも開発担当者が、実戦に出てデータを集める必要は無い筈だ！」

正論だった。

全ての開発者が実戦経験者である必要性は何処にも無い。それでは開発者の数を揃える事自体が、困難になるだけだ。

そうやって正論を掲げ、翻意を促す親友と、巖谷は睨み合う。

「お前は、反対という事か？」

「ああ、反対だ」

もはや売り言葉に買い言葉に近い。

互いに、互いの存念を掛けて双方の意志が激しく火花を散らした。

このままでは埒が明かぬ。

そう判断した巖谷は、一つ深呼吸をして気を鎮めると、唐突に攻め手を変えてみた。

「俺が斯衛から帝国軍へ移った理由は、貴様も知っているだろ？」

「……ああ知っていると」



篁の顔に、一瞬だけ戸惑いが浮かぶ。

巖谷が斯衛軍から帝国軍へと移った理由を思い出したからだ。

満足そうに巖谷が頷く。

「俺が帝国軍に移ったのは、BETA共と戦う為だ。

戦って、奴等の事を肌で感じ、そしてそれを戦術機開発に生かしたい。

それをお前は、間違っていると云うのか？」

それが理由。

それを考慮する限り、巖谷の行動は終始一貫しており、何処にも矛盾は無い。

その事を理解できてしまいが故に、どうしても返す答えは鈍くなつた。

「……そうは言っていない。

確かに『耀光計画』の進捗は思わしくない。

だからこそ、計画半ばにして開発衛士の中心である貴様を、欠く訳にはいかんのだ！」

わずかに歯切れが悪くなりつつも、篁は反対の姿勢を崩さない。

それ程までに、『伝説の開発衛士』のネームバリューは大きかった。

計画への悪影響を懸念せざるを得ない程に……

だがそれは、巖谷にも分かっていた。

分かった上で、それでも必要と決断した以上、彼もまた止められない。

「その計画を進める為にも、必要だと言っているんだ!」  
「実戦データを集めるだけなら、貴様が戦場に出る必要は無いと言っている!」

互いの主張がすれ違つた。

親友達の間を生じたわずかな亀裂、それが産む結果を、今はまだ誰も知らなかつた。

西暦一九九〇年 十二月十八日 式根島

夜空を覆う雲が、月を、星を隠す。  
曇天の下、闇に包まれた海原には、ただ波のみがユラユラと蠢いていた。

そんな中、暗い色の海に、一筋の白い線が浮かんだ。  
ゆつくりと広がり行く白い筋。  
それを更に切り裂くように、黒いナニかが浮かんで来た。

有る程度の知識がある者なら、それが何かを看破出来ただろう。  
軍の保有する特殊潜航艇であると

やがて、穏やかな波間に浮上を完了した潜航艇のハッチが開かれ

た。

最初に上がってきた男は、狭い甲板に降り立つと波間へと黒い物を放り投げる。

着水した瞬間、ドタバタと暴れまわり出したソレは、やがて黒いボムボートへと変じた。

ボートに付いた綱を引き、船体へと横付けしたところで、ホッと一息つく。

その時

「手間を掛けた。

後は宜しく頼むよ」

背後から唐突に掛けられた声に、ギクリツと心臓を一つ鳴らしつつ、彼は振り返った。

振り返った先に立つのは一人の男。

トレンチコートとそれに合わせた帽子を粹に着こなしている。

今回の任務のお客人だった。

呉からここ式根島まで、彼を運ぶのが上から下された命である。

それ以上の事を知る権限は無く、また知るべきでないと判断していた軍人は、労いの言葉にも、定型通り任務の粹内にて応じた。

「ハッ、ご武運を！」

返された形式的な敬礼。

答礼を返すべきかと一瞬考えた客であったが、軍人でもない自分がやるのもおかしかろうと軽く会釈を返して応じると、そのまま危なげない足取りで、ボートへと飛び移った。

いきなり掛かった負荷に、不安定なゴムボートが激しく揺れるが、

絶妙なバランス感覚の賜物か、特に問題なく揺れを収めてのけると、備え付けのエンジンに火を入れる。

ゆっくりとした速度で動き出すボートが、安全圏まで離れたと判断したのか、彼の背後で潜航艇が、再び、潜航を開始していた。

波間へと沈み行く姿を、何処か醒めた眼で眺めていた男は、口元にニヒルな笑みを浮かべる。

「……いやはやご武運とは。」

もし放火魔に、そんなモノがあつたら洒落にならんだろ？」

燻る自嘲を吐き出した。

そして……

「やれやれ、こんなベタな真似をする破目になろうとは」

……己の美学に反する行為を嘆く。

余りにも堅い枢木のガード。

関係者以外の出入り困難な離島という立地条件。

更に、短過ぎるタイムリミット。

悪条件を上げればキリの無い今回の任務。

正直、格好悪いだのなんだのと言える余裕がなかったが故の選択であつた。

そうやって胸中の不平不満を零す中、船はゆっくりと岸边へと近づいていく。

島影を挟んだ反対側、宇宙港などの施設が集中する側とは逆になる闇の多い方へと進むボートは、やがて小さな入り江に辿り着いた。

手早くボートに穴を空けると、男は軽く縁を蹴る。

二メートルを越える距離を助走なしで跳んで見せた男は、無事、砂浜に降り立つと背後を見やった。

ゆっくりと沈み行くボートが、掛けっぱなしのエンジンに引き摺られ、沖合いへと動いてくのが見える。

やがて波間に完全に没した一時の相棒を見送った男は、さてとばかりに僅かに乱れた襟元を直すと、まるで既知の土地であるかの様な足取りで歩き出し、数分後、待ち人の下へ辿り着いた。

「釣れますかな？」

「っ！？」

磯の岩場から釣り糸を垂れていた男が、ビクリッと身体を震わせながら背後へと振り向いた。

ややくたびれた感じの中年の男だった。

取り立てて特筆すべきところもない極々普通の男。

資料では、妻と子供三人、更に年老いた両親を養っていたなと、脳内で反芻しつつ、コートの男は言葉を重ねる。

「釣れますかな？」

カワハギ辺りが釣れたなら、一匹譲って貰えませんか？」

恐怖に彩られていた男の顔が、安堵と疑心を取って代わった。

わずかに逡巡する眼が、値踏みするようにコートの男を見回す。

やがて、内心の決着がついたのか、男は震える指先で脇に置かれていた大き目のクーラーボックスを指し示した。

「そ、そのクーラーボックスに入ってる。  
欲しけりゃ……持って行けばいいさ」  
「それはそれは」

動揺しまくった男の声を、脳内で吟味しつつコートの男は、ボックスに手を掛ける。

敢えて見せた背中、だが危険を知らせるモノが彼に伝わる事はなかった。

そのままボックスの中身を改めると、必要な物を取り出す。振り返ったその先には、青い顔に脂汗をびっしりと浮かべた中年が居た。

男の口元に憐微の色が浮かぶ。

「おお、これは見事な。

これ程の物を、タダで頂くのは心苦しい。

些少ではありますが、代金としてお納めを」

何かを誤魔化すような芝居があった口調と仕草。

どこか作り物めいたソレを演じつつ、男は用意していた封筒を中年の男に渡す。

ズシリと重いソレを手にした瞬間、相手の顔に歓喜と後ろめたさが複雑に交じり合った色が浮かんだ。

「あ、ああ」

「それでは」

見届けるモノを見届けた男は、もう用はないとばかりに背を向ける。

どこか呆然とした様子で、その背を見送る中年の視界から、やがて木々が彼を覆い隠した。

「どう見ても素人丸出し……篠崎のお嬢様の手の者という線は消えたか」

生い茂る樹木の間を、かすかな月明かりのみでスイスイと抜けて行く男の唇から、独白がこぼれ落ちる。

上が用意した内通者という事で、始めから疑ってかかっていたのだが、どうやら杞憂だったようだ。

「巨大に成れば成る程、どうしても隙が出来るものだが……」

自身の疑念を、言葉に出しつつ整理する。

如何なる組織であれ、完全な一枚岩という事は有り得ず、必ず何処かに付け入る隙はあるというのは事実だが、少し都合が良過ぎる気もした。

わずかに燻る警戒心。

だが、事実がどうであれ、これからの自身の行動は変わらないと判断し、男はその場で立ち止まった。

手にした品を広げ、わずかに覗く月明かりにかざす。

大金と引き換えに得た品 地下まで含めた最新の島内施設の詳細情報を僅か数分足らずで脳内に納めた男は、木々の隙間から垣間見える雲隠れしつつある月を見上げた。

「さて、気の進まないところではあるが、これも宮仕えの悲しさというヤツですか」

そう一言呟くと、男 鎧衣左近は、再び落ち始めた夜闇の中に、

溶ける様に消えていった。



PHASE 6 - 1 : アヴァロンへの険路【前】（後書き）

嗚呼、何でオジサマばかり。

唯依姫が出てない！

ヒロインにはヒロインらしい扱いをせねばと思う今日この頃であります。

後編は、何とか今週中に上げますのでご容赦を。

PHASE 6・2：アヴァロンへの険路【後】（前書き）

やれやれようやく書けた。

微妙に遊び心を入れすぎた気もチラホラと。

その分、唯依姫分が薄くなってしまうかもしれませんが、まあ仕方ないかな？

それでは、どつぞ。

西暦一九九〇年 十二月十九日 帝都・枢木邸

「このジエレミア・ゴットバルド、我が身命に換えても、必ずや、必ずや、この使命果たしてご覧に入れましょっ！」

朱塗りの大杯を片手に、真つ赤な顔でジエレミアが叫ぶ。

周囲を囲むカメラロットの面々が、やんややんやと喝采を上げる中、手にした杯に口を着けそのまま一気に中身を飲み干した。

空になった大杯が振り上げられるや、一際、歓声が高まり、座を華やかに彩っていく。

『スヴァルトアールヴヘイム』の出航を間近に控えての壮行会兼忘年会は、関係者一同を巻き込んで、天井知らずに盛り上がりつつあった。

あちこちで笑いが弾け、奇声上がる。

混沌の様相を呈し始めた大座敷でも、やはり一番目立っていたのはジエレミアだ。

良くも悪くも一本気で、どこか憎めない気質の彼は、何気に部下からの人望は厚い。

周囲を取り巻く部下達と共に浴びるように酒を飲みつつ、大声で忠義を語る様は、どこか微笑ましく、楽しくもあった。

「我が忠義は、不変不滅！」

折れず、弛まず、曲がらず、全ては我が主ルルーシュ様の御為に  
いっつー！」

……まあ、少しだけ暑苦しくもあつたりするが。

何はともあれ、そうやって意図する事無く、場を盛り上げている  
ジエレミアを、少し離れた位置で眺めながら、ロイドがボソリと呟  
いた。

「相変わらず暑苦しいなあ〜ジエレミア君は」

「……………」

まあ、そう言いつつもニヤニヤと人の悪い笑みを浮かべている辺  
り、本音が垣間見えていた。

何せ学生時代からの腐れ縁、それも同じ境遇の存在、いかにロイ  
ドが捻くれていても友情らしきモノ位は感じて不思議は無い。

とは言え、そこで素直になれる程、真っ直ぐな性格をしている訳  
でもない奇矯な天才は、やはり素直でない憎まれ口を叩いた。

それがどの様な結果を招くかも知らぬままに……

「ホント、もっとクレーバーにやって欲しいよねえ〜」

「……………うるひゃい……………」

ひどく小さく、そして平坦な声が左手から聞こえた。

「へっ？」

何となく背筋が寒くなるようなソレに、ロイドの口から間抜け声が漏れる。

恐る恐る振り向いた側には、白皙の頬を真っ赤に染めた女性が一  
人。

個体名セシル・クルーミーと呼称されるソレは、妙に据わった目付きで、彼　ロイド・アスプルンドを見上げている。

「……うるひゃいって言うてるんら、このプリン野郎！」

呂律が全く回っていないかった。

左手に持った空の湯呑み茶碗、右手に握り締めた一升瓶　『美

少年』のラベルが貼られたそれは、中身が三割程度まで減っている。

ロイドの背筋をイヤな汗が、タラリと流れていった。

「……えくと、セシル君？」

「なんら」

恐る恐る掛けられた声に、ひどく抑揚に欠けた声が返る。

完全にすわりきった眼は、とても虚ろで感情を読み取る事が出来な  
なかつた。

ロイドの脳裏で、本能が警鐘鳴り響かせる。

逃げ出したくなる衝動に駆られつつも、学者故の矜持か、理性的な対応を優先させてしまった。

それが、大失敗へと繋がるとも知らずに……

「もしかして酔ってる?」

「よってなんかいにやいろお」

「……………」

いやもう、完全に酔ってるから。

内心で、そう突っ込みを入れながら、さてどうしたものかと思え込みかけた彼の前に、ズイツと一升瓶が差し出された。

「呑め!」

額に脂汗が滲む。

救いを求めて忙しく動く視線、だが、その悉くがさり気なく逸らされた。

世の無常を感じながら、ロイドは恐る恐る、なるべく刺激しないように答えを返す。

「あ、いや僕は、アルコールは、あんまり摂取しない方だから」

「ワラシの酒が呑めないっていうのかああ?」

更に低く、そして冷たい癖に背筋が炙られる様な感じの音が、彼の聴覚を驚掴みにした。

噴出す汗が眼に入るのを感じながら、ロイドは霞む視界に向けて頭を垂れる。

「……………頂きますです。ハイ」

明確に分かれる勝者と敗者。

両手持ちで差し出されたグラスに、セシルは上機嫌で酒を注ぐ。

と思いきや、急に瓶を引き、替わってズイツと真っ赤に染まった美貌を突きつけて来る。

「大体らな、ジェレミア卿にモンクいへる立場かつての。いつもいつもワラシに迷惑かけすぎっ！」

女性としてどうなのだろうと思いたくなる酒臭い息を浴びながら、ロイドは天を仰ぎたくなるが、ここは頭を下げるべきと判断し、素直に詫びを口にする。

「……あゝ……すみマセン」

セシルの双眸に、剣呑な光が宿った。

バンツ！

と畳の悲鳴が聞こえた。

間髪入れず突き出された一升瓶の口が、ロイドの目と鼻の先に付き付けられる。

「誠意があ！」

かんじられえないっ！」

ロイド・アスプルンドは、深い深い溜息を吐く。

彼が、日頃の行いの報いを受け終わるには、まだまだ時間が必要な様だった。

西曆一九九〇年 十二月十九日 十九時 帝都・枢木邸

「…………ふう…………」

宴会の人いきれの熱気に当てられた唯依は、部屋の隅の方に逃れ、ようやくホツと一息つく。

壮行会を兼ねた宴会と聞き、今まで実家で経験した事のあるモノと同じと考えていたのだが、実態はまるで違っていた。

年齢・性別はおるか出身や人種すらお構いナシに集まった一同が、思い思いに騒ぐ様は、唯依がこれまで経験した宴会が随分とお上品に見える程、混沌とした活気に満ち溢れている。

どこか別世界の様に感じられるその喧騒を、そこに混じっている父達を、呆れと興味が半々の眼差しで眺めていると、少女の横手から柔らかな声が降ってきた。

「どうした唯依？」

振り仰げば優しい笑みを浮かべた少年が、そこに立っていた。少女の幼い美貌が、喜びと安堵に彩られて綻ぶ。

「あつ、兄様」

「退屈だったか？」



覗き込む様にして問うルルーシュに、壁の花になっていた自分を気に掛けて、ワザワザ来てくれた事を悟り、唯依は少しだけ胸を高鳴らせた。

と、同時に申し訳なさも感じる。

今回の計画の責任者として、この宴会のホストの役目もある兄が、自分だけにかまけていては不味い事くらいは、彼女にも理解出来たのだ。

「いえ、知らない方も多かったので、少し……その……」

せめて心配を掛けないようにとの虚勢を張るが、長い付き合いからか余り効果は無かったらしい。

「ふむ……確かにそうだな」

そう言いながらルルーシュは、唯依の横手に腰を下ろした。しばらく相手をしてくれる事を、態度で示してくれた兄に、唯依の頬も、いけないと思いつつ緩んでしまう。

「ここしばらく忙しくて、まともに話す間も無かったからな」

「あ……はいっ！」

そう言って話しかけてくれるルルーシュに、唯依も久方ぶりの充足感を覚えていた。

思っていた以上に、兄との会話に餓えていた事を自覚した唯依は、何を語るべきかを一生懸命考える。

アレも言いたい、コレも聞きたい、いやその前に、と。

だが、予想に無い幸運に、グルグルと回る頭の中から弾き出されたのは、彼女にしても想定外のモノ。

「ルル兄様……差し出がましい口を利く事を、お許し下さい」

言った瞬間、唯依は、自分が真っ青になるのを感じた。

何故、そんな問いを口にしたのか、後になっても全く分からなかったが、ただその時は、滔々と流れ出す言葉の羅列を止められなかった。

「『アヴァロン計画』は、本当に必要なのでしょうか？」

唯依は、自身の顔面から、更に血の気が引いていくのが分かった。きっとその時の自分は、紙の様に白い顔していただろうと後に思う。

怒られる。

嫌われる。

そんな想いが、少女の心臓を締め付けた。

だが……

「唯依は、必要とは思わないと？」

どこか笑みすら含んだ表情で、穏やかに問い返される。

失言と緊張に強張っていた少女の身体から、スツと力が抜けた。

だが今度は、兄の逆鱗に触れずに済んだ事を安堵しつつも、自身

すら意図していなかった問い故に、どう応じたものかと悩む。

そうやってウンウンと唸る妹の姿を、ルルーシユは嬉しそうに見つめていた。

やがて整理がついたのか、俯き加減であった頭を上げて真っ直ぐにルルーシユを見つめてくる。

淡い桜色の唇が、ゆっくりと言葉を紡ぎ出した。

「……………正直分かりません。」

でも、とても危険な賭けであると、多くの識者も言っています」

ニユースで、新聞で、或いは教室で流れる噂で、絶え間なく語られる否定的意見。

それを聞く度、見る毎に、心を痛めていた少女は、飾りの無い本音を吐露した。

対してルルーシユはと言うと、一連の『識者の意見』とやらを思い出したのか、やや皮肉気な笑みを浮かべる。

「そうだな。」

もつとも、もう少し過激な言い回しだったかな」

「兄様！」

少女の一喝が皮肉屋を打つ。

一瞬、驚いた様に眼を丸くしたルルーシユであったが、自身の非を悟り素直に頭を下げた。

「……………許せ、冗談だ。」

まあ常識的に考えれば、無謀な計画であるのは確かだな」

それは認めよう。

確かに、『この世界』の技術水準からすれば、成功する事が奇蹟に近い事業である以上、技術的な根拠から、それを否定するのは誤りではなかった。

どちらかと言えば、ズルをするつもり満々の自陣営が非難を受けるのは正当と、彼は胸中で苦笑する。

とはいえ、それを表に出すようなへまはしない。

理由はどうあれ、可愛い可愛い妹に叱られたくはないのだ　　シ  
スコンだから。

故に、そんな胸の内を覆い隠し、真剣そのものといった表情で彼は言葉を繋ぐ。

「だがそれでも、オレは断言しよう。」

『アヴァロン計画』は、如何なるリスクを負おうとも遂行されねばならないと」

「……ルル兄様……」

力の籠った答えに、唯依は困惑の色を浮かべる。

ここまで言い切る兄を信じたい気持ちと、世相に流れる批判、そして何よりどこか常と違う兄の姿勢に戸惑う気持ちを隠せなかった。そんな彼女の内心を慮ったのか、声を和らげてルルーシュが問う。

「そこまで拘るのが不思議か？」

「……はい、兄様らしくありません」

疑問を正確に突かれ、一瞬、眼を見開く唯依。

だが、長い付き合いから来る慣れからか、速やかに切り返す。  
少年の相好が少しだけ崩れた。

「らしくないか？」

重ねられた問いに、唯依は、白い飾り布を揺らしながらコクリと頷いた。

一度だけ眼を閉じ、言葉を整理した彼女は、ゆっくりと慎重に答えを返す。

「いつもの兄様なら、一つの計画に固執したりしないと思います」

そう、それが不思議。

どんな時でも、どんな状況でも、余裕を持って対処してきた兄には似つかわしくない執着。

そこが、とても引っ掛かる。

言外に、そう告げる妹を前にし、ルルーシュの双眸には楽し気な色が浮かぶ。

元々、聡明であった娘が、より深く細かく物事を見れる様に成長しているのが、彼にはとても嬉しかったのだ。

緩みそうになる頬を、意志の力で抑え込みながら、さてどう答えたものかと思案する中、抑え切れぬ想いが言葉となって少しだけ零れる。

「まあ、確かにそうだな」

「……ルル兄様、唯依の言葉を真面目に聞いて下さい！」

……どうやら誤解されてしまったようだった。

彼の眩きを、誤魔化しと感じたのか、白い頬をプクリと膨らませながら睨みつけてくる。

ルルーシュは、幼い頃からの変わらぬ癖に、微笑ましさを感じな

がら、誤解を解くべく口を開いた。

「そういう訳では無いのだがな……」

……ふむ、なんと言えば良いのか」

珍しく言葉を濁すルルーシュに、唯依も不審気に眉をひそめる。

誤魔化すつもりが無い事は理解できたが、この切れ過ぎる程に切れる兄が、言葉を濁す様に奇異さを感じたのだ。

そうやって、ちよつぱり恐い顔になった唯依の前で、しばし考えを纏めていたルルーシュは、ゆつくりと十を数える位の間を置いて、ようやく重くなった口を開く。

「確かに、いつものオレなら一つの計画に固執したりはしない。

何故なら、常に変化する情勢に合わせ、複数の計画を用意するのがオレのやり方だからだ」

そこで一旦、言葉を切ると、彼が続きを言うよりも先に唯依が問い掛ける。

「一つの計画が潰れても、別の計画が替わる、或いは補うという事でしょうか？」

「ああ、その通りだ。

唯依は聡いな」

全て言わずとも悟る妹を、少年は手放しで褒めた。

微妙に兄馬鹿の気が仄見えるが、それはいつもの事である。

一方、褒められた側はというと、頬をわずかに上気させつつも、誤魔化されないぞとばかりにルルーシュを凝視していた。

少年の整った容貌に薄い苦笑が浮かぶ。

「だから、お前が違和感を覚えるのは無理の無い事ではある」  
「……………」

肯定に返されるのは沈黙。

この後続くものが有るのを、敏感に察していた少女は、沈黙を以って先を促す。

「……………とは言えだ、常にオレの思う通りの情勢を作り出せる訳ではない。

大変遺憾ではあるが、一つの計画に望みを託さざるを得なくなる事もある」

経験した事のある大変遺憾な策 富士決戦での乾坤一擲の勝負を思い出す。

のるかそるかの大博打。

本来の自分らしくないやり口ではあったが、必要とあらばその手も取る。

そして今回の計画についても、それは同じだった。

「アヴァロン計画がソレだと？」  
「そつだ」

可愛らしく首を傾げる唯依に、言葉短く応じた。

しばしの間、綺麗な眉根を寄せて考え込んだ少女は、少し疲れたように首を振る。

「……やっぱり分かりません。」

枢木の会社は、順調そのものと聞きます。何故、そこまでのリスクを取る必要があるのですか？」

今の会社に、そこまで無理をする必要が何処に有ると問う妹に、兄は静かに間違いを指摘する。

「枢木の為ではない。」

いや、枢木だけの為ではないと言つべきか」

「………帝国の為………ですか？」

「少し違うな。人類の為だ」

ひどく重く静かな声が、その場に響く。

いつの間にか喧騒が鎮まっていた事に、唯依はようやく気付いた。

座の視線が、彼女の目の前に座す少年へと集中している事が分かる。

余人なら気圧されるような不可視の圧力。

それは、皆が皆、どこかに抱いていた不安感の具象であると、そしてそれ故の大騒ぎであったのだと、少女はようやく気付いた。

多くの視線と、そこに宿る想い全てを一身に受けながら、彼女が敬愛する兄がゆっくりと口を開く。

「世界は滅ぶ。」

そして人もまた然り。

………今のまま時を過ぎす限り、それは避けられん」

絶対の予言を告げるが如き声が、一同の耳を打つ。

冷徹そのものといった宣告に、殆ど全ての者達の顔が青褪めた。



「そ、そんな事は……」

「有り得ないか？」

震える声に重なる声。

唯依は思わずブンブンと首を縦に振る。

振って振って、そして……

「父様も、叔父様も、そして何よりルル兄様も、帝国を、いえ世界を護る為に必死で」

父の、叔父の、そして何より、兄その人の努力を掲げ、否定の言葉を紡ぐ。

だが、対峙する兄の双眸には、哀れむような色が滲んだ。

「それでもだ。」

それでも世界は滅ぶだろう」

「……兄様……」

再び放たれる非情の宣告に、唯依は呆然と呟く事しかできなかつた。

何かなんだかサッパリわからない。

目の前の人が言っている事が。

理解を拒否しかかる少女の前で、どこか悲しげな笑みを浮かべた少年は、幼子に説くかの様に、ゆっくりとした口調で話を続けた。

「今の人類は、水の入った鍋に放り込まれたカエルの群れと同じだ。鍋の中の水は、まだ温く心地よい。」

だからカエル達は逃げ出さず、内輪もめにご執心だ。  
鍋の底が、業火に炙られている事にも気付かぬままに」

整った容貌に、一瞬だけ冷たい笑いが浮かぶ。

思い当たる節があるのか、その場の人間の多くが苦々し気な表情を閃かせた。

かつて神の島で、彼が腹心と語り合った様に、未だ人類はバラバラのまま。

目の前に迫る滅びにすら気付く事無く、様々な領域で内部抗争を繰り返している。

溜息が出る様な現状。

だが、己が身を、そして部下達を守る為にも、その無益な闘争に勝利すべく尽力せざるを得ない矛盾。

何ともやりきれない思いを感じつつ、彼は己が抱く存念の一部を明かす。

「このまま時を過ごせば、人類は徐々に消耗していく。  
そして遠からず破断点を迎える事だろう。」

明日、その日が来る事にすら気付く事無くな」

蔽し過ぎる断定に、無意識の内に否定を求めた唯依の視線がさ迷う。

だが、求めたモノが彼女に与えられる事は終ぞ無かった。

父達を含め、誰もが皆、真剣な、或いは深刻な表情で兄を見ている。

その意味が理解できない程、愚かではない自分が今は恨めしかった。

そんな彼女を他所に、冷徹たる声が響く。

「国も世界も頼りにならぬと言うなら、それはそれで良し。まあ本音を言えば、『もう勝手にしろ』だな。だからオレも、勝手にする事にした訳だが……………」

そこで言葉を切ったルルーシユは、一同をザッと見渡す。不安、疑念、葛藤、その他様々な感情を宿す皆の顔を見ながら、誰もが見惚れるような笑みを浮かべた。

不敵にして不遜、そして何より力に満ち溢れた微笑に、誰もが惹きつけられる。

ゆっくりと掲げられた手の平。

そこに、その場の全てを載せる様な仕草を見せた少年は、それを力強く握り締めた。

「後は、この手で掴み取れるモノを、掴み取るだけの事。全てを救えぬとあらば、九を切り捨て一を救う。それも、一つの選択の形だろう」

告げられた言葉の意味を噛み砕いた時、その場には再び無数の感情が溢れた。

正と負の感情が、後ろめたさと安堵の念が拮抗し、混じり合う。

そんな微妙な均衡の中、わずかに陰を帯びた問いが、ルルーシユへと突きつけられた。

「君は、『箱舟』を造るつもりか？」

そう言つて鋭い眼差しで、こちらを見る筈に、ルルーシユは挑戦的な笑みを返す。

「さて、どうでしょうか？」

ですが、最悪の場合に備えた選択肢は必要でしょう」

「だが、その力を別の方向に向ければ、活路が開けるかもしれんだぞっ！」

僅かに離れた位置から放たれた巖谷の舌鋒。

皮肉を湛え、ルルーシユの口元が歪んだ。

「砂地に水を撒いたところで、大輪の華が咲く事は イタッ！」

ゴキンツと痛々しい音が鳴った。

脳天を押さえて沈む彼の背後には、いつの間忍び寄ったのか、右手の拳骨を振り下ろした姿勢の真理亜が佇んでいる。

頭蓋を叩き割られたような強烈な衝撃と痛みに、涙目になったルルーシユが背後の加害者へと食つて掛かろうとする。

「は、母上!？」

……いや、したのだが。

「なに悪役ぶつてるのかしら、コ・ノ・コ・ハ」

「……………」

笑顔でありながら、全く眼の笑っていない母を前に、思わず腰砕けになった。

メデューサすら裸足で逃げ出しそうなドス黒いオーラを撒き散らす美女の姿に、彼のみならず、この場に居る面子の全てが思わず後ずさる中、白い指先が息子の背後を指し示す。

「ほら、唯依ちゃんが涙目になってるじゃない」「うっ」「うっ」

振り返ったルルーシユの視界に、涙で潤んだ双眸が映る。

思わず呻き声が漏れたが、ジイッとばかりにこちらを見る眼は微動だにしなかった。

背後に感じる黒い怒気、前で涙ぐみ悲嘆に暮れる妹の姿。

前門の狼、後門の虎を地で行くシチュエーションに、彼に残された手段は一つしかなかった。

「……最悪の場合、そういう選択もあるという事だ。

本来の目的は、BETAの脅威が及ばない安全な後背地を築く事にある」

「……本当ですか？」

白旗を揚げた筈の彼に、非情の追い討ちが掛かる。

彼と同じ色の綺麗な瞳に、ジワリと涙を溜めたまま唯依は問い質してきた。

乙女の涙というある意味、最終兵器の連打に、ルルーシユは深い溜息を吐く。

「唯依に嘘は言わん」

「……嘘吐いたら、針千本飲ませますからね」

そう言って掲げられた小さな指に、少年の指が絡む。

誓いを交わして指を離すと、ようやく泣いた子雀が笑ってくれた。

何故か、今日に限って微妙な距離を感じさせる親馬鹿コンビの肩からも、ホッと力が抜ける。

様々な意味で、枢木ルルーシュという台風の眼が、帝国から離反する事を、彼等も恐れていたからだ。

一方、何故か一人負け状態に追い込まれたルルーシュは、憮然とした表情を浮かべながらも、告げるべき忠告を告げる。

「……まあ、何はともあれだ。

危なっかしい状態にあるという自覚すらないのが、現在の世界、いや、一握りのお偉方という事だけは覚えておけ」

「あ……はい……」

唯依は、小さな手でグググシと涙を拭いながら、どこか半信半疑といった様子で頷いた。

その様に、苦笑を浮かべた少年は、ハンカチを取り出すして、優しく涙を拭いながら、重ねて告げる。

教え諭す様に……

「信じられんという顔だな。

そうだな、客観的に見れば愚行の極みでも、当人から見れば最善手と思ひ込む事がある。そう覚えておけば良い」

どこか毒のある兄の言葉に、唯依は、サラサラと黒髪を揺らしながら小首を傾げた。

案外、兄様にもその気があるのでは？

などとちよつぱり失礼な事を胸中で呟きつつ、それでも素直に頷いてみせる。

これ以上、大好きな人の口から、悲しい話を聞きたくはなかったから……

そんな彼女の心情を知ってか知らずか、先程から姿が見えなくなっていた咲世子が、いつの間にか彼らの傍にやってきてルルーシユに声を掛けた。

「ルルーシユ様」

「どうした咲世子？」

返された問いに答える事無く、主の耳元に口を寄せ何事かを囁く。紫の瞳に、一瞬だけ辛辣な光が浮かんで消える。

そして最後に一度だけ、唯依の頭を撫でると、ルルーシユは腰を上げた。

そのまま座を占める一同を、ゆっくりと見回しながら声を掛ける。

「申し訳ないが、来客があったようだ。」

少し席を外すが、皆はこのまま愉しんでいてくれ」

そう言い残すと彼は、咲世子を伴い去っていく。

その背を、どこか寂しそうに見つめる唯依を、後に残して。

西曆一九九〇年 十二月二十日 帝都・料亭『瓢』

「おおおっ！」

歓声が弾け。

「盛大な火祭りですな」

「いや、まったく！」

抑え切れぬ歓喜が満ちる。

闇の中、轟々と燃え盛る紅蓮の焰を見ながら、彼らは勝利の美酒に酔い痴れていた。

式根島沖に配された特殊潜航艇から、リアルタイムで送られてくる大火の光景に、嬉々として浮かれ騒ぐ。

忌々しい宿敵の失墜。

そしてそれにより齎されるであろう栄華と富。

今宵、彼らは、その生涯における幸せの絶頂にあったと言っても過言ではあるまい。

そんな幸福な連中の下に、最大の功労者から連絡が届く。

『いかがでしょう。』

『ご期待に沿えましたかな？』

無線を通して聞こえる伊達男の声に、一同がこぼれ落ちそうな笑



みを浮かべた。

「ああ見事だ。

よくやった鎧衣！」

「報償は思うがまだまだ。

期待するが良い」

喜びに沸く高位・高官にあるやんどころ無い方々は、実に気前良  
くお褒めの言葉と望みどおりの報酬を手駒へ与える事を約束した。

その程度の事は、気にも成らぬ程、気が大きくなっていた証とも  
言えるだろう。

そうやって浮かれ騒ぐお偉方を他所に、無線機越しに聞こえる男  
の声が、形式的なお愛想と共に響いた。

『ありがとうございます。』

それでは、後始末がありますので』

「ああ任せたぞっ！」

笑いが止まらぬと言ったところだろうか？

喜色に溢れた大声で、そう告げた軍人は、そのまま無線を切った。  
その脳裏からは、既に汚れ仕事を押し付けた男の事など、綺麗サ  
ッパリ消え失せている。

いま彼の、否、彼らの意識を占める事は、今回の『重大な事故』  
で産まれたであろう犠牲者の事でもなければ、無念の内に斃れた反  
枢木の同志達の事でもない。

その胸中を満たすのは……………

「さて、後は『事故』の隠蔽などさせぬようにせねばな」

「うむ早速、調査団を編成させよう。」

奴等に建て直しの猶予など与えるべきではない」

「世間への周知も徹底させるべきですな。」

こちらの息の掛かったマスコミに、大々的な報道をさせるべきです」

如何にして、枢木にトドメを刺すか。

そして

「ここで揺さぶりを掛ければ、枢木の中の不満分子もこちらになびく筈だ」

その富を、技術を、権益を、如何にして掠め取るかだけだった。

互いに欲望にギラつく眼を向け合いながら、彼らの枢木解体への密談が急加速していく。

これからは、如何に迅速に事を運ぶかが鍵だ。

折角、乾坤一擲の大博打に勝ったと言うのに、トンビに油揚げを攫われては眼も当てられない。

場に満ちる粘つく熱気が、更に強くなった。

「多少の無理はしても、資金の調達を急ぎましょう。」

枢木の株は非公開ですが、それでも二割程は枢木家以外が所有しています。

その内の幾らかは、内々にですが、相応の値段でなら譲るとの言葉も取っておりますのでね」

「二割では、意味が無いのではないかね？」

欲に溺れつつも、それなりに理性は残っているらしく、議決権すら覚束ない数に不安を述べる者もいた。

だが、事を主導した形になる枢木のライバル企業の重役は、自信

満々といった態で、及び腰になる同志を叱咤する。

「なに揺さぶりには使えます。

それに此処が押し処でしょう。

投下した資金についても、後々、株式を公開させれば元は取れま  
す」

「そうだな……」

欲望をくすぐり、そして焚きつける説得に、やや気後れしていた  
連中も積極的になってくる。

それほどまでに、枢木の保有する物は彼らにとっても魅力的だっ  
た。

それ等全てを手にする事が叶えば、彼ら自身の元々の権力・財力  
とあいまって、帝国そのものを牛耳る事すら可能だろう。

そうやって多くの者が、胸中で取らぬ狸の皮算用を始める中、そ  
れでも尚、踏ん切りがつかぬ風情の官僚の一人が、恐る恐るといっ  
た様子で意見を差し挟んだ。

「しかし、今回の件のダメージを考えると……」

老人の目に、呆れた様な光が宿る。

ここまでやっておいて、今更なに言うというのが、老人の本音  
だ。

この手の輩を下手に放置すると、思わぬところで足を掬われる事  
を経験上知っていた男は、押し込むような口調で捲くし立てていく。

「場合によっては、特許や資産を切り売りするという手もあります。  
腐っても鯛 決して赤字にはならないでしょう」

きつぱりと言い切る様に、場の空気も完全に決まる。

最後まで逡巡の色を見せていた官僚も、やや不安げな表情は残るものの同意へと転じた。

最早、この場で枢木接收に反対する者は居なくなる。

そして、一座の意向が固まった事を見取った政治家が、最後の確認を取るかの如く、或いは自身を鼓舞するかの様に強い口調で断言した。

「いいだろう。」

確かに此処が勝負所だ」

さざめく様に各所から同意の声が上がった。

「可能な限り金を掻き集めよう」

「ああ、ここが正念場だ」

一同が、互いに顔を見合わせ立ち上がる。

具体的な獲物を目の当たりにする事で、バラバラだった集団が一つへと纏まった瞬間だった。

こうして、枢木の全てを奪うべく、彼ら反枢木の要人達は活発な動きを開始する。

より多く、より美味しいところを貪るべく、欲に塗れた獣達が宵闇の中へと散っていった。

西暦一九九〇年 十二月二十日 大阪

クライアント、否、元クライアントへの連絡を終えた鎧衣左近は、ダンディズムに溢れたニヒルな笑みを浮かべた。

「やれやれ、大はしゃぎと言ったところすな。

他人の不幸が、余程嬉しいと見える」

常とは異なる毒を含んだ口調に、対面より嘲りを含んだ声が返る。

「好きなだけ騒がせてやればいい。

どうせ直ぐに覚める夢だ」

「これはこれは……手厳しい事で」

歳に似合わぬ辛辣なセリフを平然と口にする相手に、鎧衣はジロジロと無遠慮な視線を送った。

ここは敵陣のど真ん中。

少しでも妙な真似をすれば、或いは、こちらの癪に障っただけでも消されかねない状況。

それら全てを承知した上での無作法に、対峙する相手 枢木ル

ル―シユは、秀麗な容貌に苦笑いを浮かべた。

「……狸が良くほざく。

煮ても焼いても食えないヤツと咲世子が言っていたが、確かにその通りの様だ」

「ハハハ、随分と高く評価されたようで。

光栄の至りとても言っておきますか」

そう言っただけで面白そうに笑う少年に、狸と評された男が上品に応じた。

互いに何枚も、或いは、何十枚も毛皮を被った者同士。

どこか通ずるモノを感じあった可能性も皆無ではなかったろう。

だが所詮は、どちらにとっても、これはメインの前のオードブル程度の感覚でしかない。

それを証明する様に、互いの間にある張り詰めた空気が緩む事は無かった。

そのままひとしきり嘘くさい笑いを交し合った両者は、やがてそれにも飽きたのか無言のまま睨みあう。

一方は全てを見下す傲岸不遜な支配者の眼差しで。

そして、いま一方は、狡猾を極まらない年経た獣の眼差しで。

睨みあう。

睨みあう。

その心底を見透かさんとして。

……紫の双眸に、冷たい光が宿った。

「フン……まあ前ふりは、この程度でよからう」

切り裂くような鋭さが、少年の声に籠る。

にこやかな笑みを湛えたまま、それを受け止めた鎧衣に向けて、間髪入れず二の太刀が放たれた。

「何故、寝返った？」

「寝返り？」

「はて何の事やら。」

私は、公僕として当然の務めを果たしただけ……そうではありませんかな？」

掛けられた問いに、実に心外と言わんばかりの表情と声が返される。

式根島に侵入するや、自分から率先して出頭してきた拳句、事の次第を洗いざらいをぶち撒けた男。

更には、元クライアントを嵌める片棒を担ぎながら、その事に一片の後悔も無さそうな男。

そんな鎧衣の態度に、ルルーシユの眼差しが、スツと細くなった。裏切りと言う行為に、余り良い思い出の無い彼にしてみれば、男の行為は、評価を下げる事はあっても上げる事は無い。

問い質す声も、更に冷たく堅くなった。

「ほう……公務か？」

「はい、帝国の安寧を護る為、私憤・私欲により公権力を私し、無意味な騒乱を起こそうとした者達を取り除く。立派な公務と思いますが、枢木氏はどう思われますかな？」

明らかにこちらの気分を害した事を承知の上で、しれっと毒を吐く。

私事で、公の権力を振りかざした連中を、畏に嵌めて排除しただけ。堂々とそう言い切る姿には、迷いも躊躇いも、ましてや後悔

など微塵も感じられなかった。

どこまでも人を食った物言いに、彼に余りよい感情を抱いていなかったルルーシュも、毒気を抜かれて破顔する。

「成る程、確かに立派な仕事だな」

嘲りと感心が、合い半ばする。

そんな年少の相手の態度に、鎧衣は、軽く肩を竦めて見せた。

「ご納得頂けて幸いです。」

不幸な行き違いは、時として無駄な血を流す元となりますからな  
「それは否定せんよ」

飄々とした答えに、笑いを含んだ声が応じた。

だがそこで、言葉と共にプツリと切れた感情の色に、鎧衣の眼が  
微かに細くなる。

今までと同様、ソファに深く背を預けたままこちらを見るルルー  
シュ。

ホンの数秒前とどこも変わらぬ筈なのに、鎧衣には、彼が全く別  
人に見えた。

見下すでもなく、嘲るでもなく。

全てを貫き通すような眼差しが、彼の奥底まで覗き込んでいる様  
な。

精密極まりない不可視の秤で、彼という存在そのものが推し測ら  
れている様な。



そんな不思議な錯覚を、鎧衣は覚えた。  
未だ崩れる兆しすら見せぬポーカーフェースの裏側に、粘り気のある汗が滲む。

自身が、人生の分岐路　生と死を別つ分水嶺に立たされている事を、彼はその時、理解した。

「で、確認だが、貴様の公務とやらは、これからも同じ方向を向いているのかな？」

何気ない声で、変わらぬ仕草で放たれた問い。

だが、これに返す答え如何で、自身の未来が決まる事を鎧衣は悟った。

誤った選択を為した瞬間、目の前の少年は己の生命を奪うだろう。まるで路傍の草花を、戯れに筆って捨てる程度で、何の感慨も持つ事も無く。

数多の修羅場を潜り抜けてきた筈の男が、らしくない緊張を感じた。

今まで感じた事の無い感覚。

威圧感と共に、膝を折りたくなるような重圧が、その身に押し掛かる。

渴いた喉が、ホンのわずかだけ声をひび割れさせた。

微かな掠れと共に、男の答えが放たれる。

「……しがない宮仕えの身としては、帝国の安寧の為、身を粉にして働く事になるでしょうな」

「帝国の安寧か……」

含み笑いが少年の声に籠る。

先程までの剣呑な気配が消えていく感覚に、鎧衣は自身が正解を選んだ事を理解し、ホッと胸を撫で下ろした。

そして同時に、わずかな意外さを覚える。

彼の見立てでは、当の昔に帝国を見限った筈の相手が、帝国に忠誠を尽くすと返した自身の事を認めたのだ。

意外と言え、意外としか言えぬ反応である。

対して、訊くべき事を聞き終えたルルーシュは、やや雰囲気を軟化させつつも、一旦切った会話を辛辣な言葉で結んだ。

「まあ良からう。」

我等が安寧を乱す元にならない限り、敵にはならないという訳だ」

逆に言うなら、状況次第では敵に回るのだろうとの問いに、鎧衣の表情も再び渋くならざるを得ない。

もし、そうなったとしても、それは鎧衣自身に非が無い話だからだ。

少なくとも、武家として帝国に有る以上、その安寧を乱すというなら、非はルルーシュの側にある。

正直、理不尽とは思いが、武家と言う特殊な立場に有る以上、それは避けて通れぬしがらみだった。

「私としても、そう有り続けて欲しいと願っておりますよ」

「ああ同感だ」

言外に、そちら次第と告げる答えに、当の本人は誠意の欠けた返事を返した。

その態度に、鎧衣もわずかに眉を顰める。

再びの衝突を予感しつつも、今は分が悪いとの判断が、この場から速やかに退去する事を選択させた。

「さて、それでは私も、後始末がありますので……」

そう言つて、この食えない男にしては、やや忙しく立ち上がる。微妙にペースを狂わされるモノを、少年から感じた彼は、三十六計とばかりにそそくさと立ち去ろうとした。その時

「待て」

制止の一声が、その足を留める。

振り返った鎧衣の右手が、ごく自然な動作で飛来した物を受け止めた。

「持つて行け。」

それを持つて、煌武院の姫君に会うが良い」

どこか年相応の悪戯っぽさを秘めた眼差しで、少年が告げる。

左手の人差し指と中指の間に挟まれた一通の封書を、胡散臭そうな目付きで一瞥した男は、確かめる様に問い返した。

「煌武院悠陽様に……ですか？」

「そうだ。」

帝国の安寧を口にするなら、会つておいても損は無い筈だ」

躊躇う事無く返された答えに、鎧衣が僅かに眼を細める。

数瞬、脳内で事の次第を吟味した男は、探るような視線を向けてきた。

「……ふむ、確かに。  
しかし、どのようなご関係で？」

次期將軍殿下の名は、それだけ重い。  
少なくとも、帝国に忠誠を尽くすつもりで鎧衣にとっては。  
ましてや、発言者が発言者である。  
容易に聞き流せる言葉ではなかった。

だが、おいそれと答えてくれる程、甘い相手であろう筈も無い。  
氷細工の如く冷たく美しい笑みを浮かべたまま、ルルーシュは冷  
たく言い放った。

「好奇心は猫を殺すそうだが、狸はどうか？」

そう言うと、ルルーシュは、ゆっくりと唇の端を吊り上げる。  
背筋に走った怖気を、自身の内に押し込めたまま、鎧衣はおどけ  
た風情で口をOの字にしてみせた。

「おお、恐い恐い。  
やはり貴方は、恐い方だ」

道化を演ずる男に向けられるのは、底知れぬほどに深い紫闇の瞳。  
ルルーシュは、冷笑を浮かべたまま、軽く手を振り退出を促す。  
君臨し、命ずる事を当然とするその仕草に、鎧衣は軽い会釈を返  
して従った。

もうこの場で、交わすべき言葉は無い。  
互いに、そう理解したが故に。

重々しい音と共に重厚な樫の一枚板で作られた扉が閉じる。

一人の男を飲み込んで閉ざされたソレを、冷たい笑みと共に眺めていた少年の背後で、聞き心地の良い女性の声が湧き起こった。

「よろしかったのですか？」

それまで美しい彫像の様に、微動だにせぬまま彼の背後に控えていた咲世子が、彼女にしては珍しく不満気な様子を見せる。

だが、ルルーシュは、それを振り返る事無く前を見たまま応じた。

「構わん。事を成すには良く聞こえる『耳』と、良く見える『眼』が必要だ」

「彼の者は、今後、ルルーシュ様に、仇なすかもしれませんが……」

控えめな懸念を口にする。

彼女にしても、鎧衣左近という男は無視しえぬ脅威だ。

今回の一件でも、侵入に気付くのが僅かに遅れ、左近の叛意が無ければ被害ナシで済ませたられたかは微妙である。

わずかな隙を巧みにすり抜けて来るアレは、叶う事ならサッサと始末してしまうべき相手と言えた。

命令さえあれば、生かしては帰さなかったものを。

そう言外に告げる咲世子に、少年は苦笑を浮かべた。

彼女の危惧は良く分かる。

あの手の人物は、生きて有る限り、足掻き続ける事を諦めないものだ。

今後も、こちらの周りを、さぞ五月蠅く飛び回ってくれる事だろう。

だが、それを承知の上で、彼は鎧衣を生かす事を選択した。  
お節介、或いは、要らぬ気遣いと思われる事を承知の上で。

何故なら……

「オレには、お前が居るからな。

あちらにも、アレくらいの者が居なければ不公平と言うものだ」  
「恐れ入ります」

忌憚の無い本音が、絶対の信用と共に籠った主の言葉に、白い頬をわずかに染めながら、彼女は見惚れるほどに見事な一礼を以って応じてみせた。

西暦一九九一年 一月十五日 軌道ステーション

青と黒のコントラストに彩られた宇宙に、漆黒の船影が浮かんで見える。

つい昨日まで、船の周囲を取り巻いていた様々な構造体も撤去あるいは収納を終え、今はもう遮る物すら無いままに、軌道ステーションからも、その威容が垣間見えた。

『ルルーシュ様、出港準備完了致しました』

「そっか」  
『お言葉を』

正面に設えられたモニターの中で、礼を取るジエレミアに頷き、一歩前が出る。

管制室の中央へと到った少年に向け、数え切れぬ程の視線が集中した。

今この場の出来事は、肉眼のみならず機械の眼を通して、世界中へ配信されている。

悪意による脚色や編集をされては面倒との判断から、枢木自身によるリアルタイムでの中継のみが為されていた。

無論、この後のニュース等で録画配信される際には、さぞ色々と手が増えられるであろうが、オリジナルを先に公開してある以上、その辺の影響は予想の範囲内と割り切られている。

あまり性質の悪い真似をするようなら、法的措置を取った上で、見せしめに二つ三つは潰してしまおう　　そう啞って見せた本人が、そんな素振りはそのよとも見せず、ヘッドフォン一体型のマイクをオンにした。

主を迎えたジエレミアが、最敬礼の姿勢を取るや、腹の底からの大音声を張り上げる。

『総員傾注っ！』

精神的に背中を蹴飛ばすその一声に、モニターの中で、或いは彼の周囲で、一斉に敬礼の姿勢が取られた。

シンツと静まり返る室内に、微かなファンの駆動音と人の呼気のみが取り残される。

ゆつくりと、そして昂然と胸を反らすルルーシユの口元が、微かな笑みを湛え、そして動いた。

「 告げる」

決して大きくはない、だが、どこまでも届くような不思議な響きが、今、この時、この場を注視する者達全ての意識を惹き付けた。

興味本位で見っていた者も居ただろう、或いは、マスコミの報道を鵜呑みにし嘲りと共に見下す者また然り、もしかしたら純粹にその挑戦に好意を寄せていた者も居たのかもしれない。

それら全ての人々が、ただ一声を以って、老いも若きも、男も女も、人種、性別すら超えて、吸い込まれる様に、ただ一人の少年に己が眼を奪われていた。

彼自身は、恐らく強く否定する。

だが、『双方を知る者』なら、この光景を前にして、間違いなく肯定するだろう。

似ている、と。

滅びを待っただけだった老いさらばえた弱小国を、ただ一代で世界最強国家まで押し上げ、世界の半ばを手にした彼の征服帝に。

理性を消し飛ばし、常識を踏み碎き、混沌と熱狂の渦へと人々を誘い巻き込む力。

カリスマと呼ばれるその才においては、この親子は似過ぎる程に良く似ていた。

『彼らこそ稀代の暴君、一度世界を滅ぼした暴虐の霸王達。』



だが、だからこそ彼ら親子は、世界を造り替える大英雄足り得たのだ』

全てが歴史となった時、かつて有った筈の恩讐さえもが、ただの情報へと変わるほど時経た後に、とある高名な歴史学者が、この似た者親子を評した名言だった。

彼らは暴君、そして、それ故の英雄。

そんな霸王の片割れの声が、意志が、いま再び、人々の心を震わせ、その魂を突き動かす。

後世、『アヴァロンの宣言』と呼ばれる事になる演説は、こうして始まりを告げたのだった。

「かつて人類は、千数百万キロもの距離を越え、火星にまでその手を伸ばしかけた。

だが、今となっては、その栄光も見る影もなく、火星はおろか眼前に在る月すら奪われ母なる星に逼塞するのみ」

淡々とした声が、誰もが知る事実を語る。

染み込む様な響きが、皆の胸に、かつての屈辱と怒りを呼び覚ました。

自らが宇宙の孤児でないと知った時の歓喜。

その期待が、流血を以って切り裂かれた時の絶望。

そして、手にした筈の新たな版図を、数多の生命と共に理不尽に奪われた時の憎悪。

己が胸中に沈殿していた想いを掻き立てられ、やり場の無い怒り

を膨らませ、人々の耳が更に彼へと傾けられる。

「全ては忌まわしき異星起源種BETAの仕業　　殆どの者が、そう信じ  
て疑わぬだろう」

滔々と語られる言葉が、そこで不意に途切れた。  
ゆっくりと紫の瞳が巡らされる。

そこに居る誰かを、何かを見渡すように。

画面越しに、見つめられたような感覚を覚え、数限りない人々が  
一瞬、息を詰まらせた。

形良く整った唇が、再び開かれ、再び聴衆達の心を抉る。

「だが、果たしてそれは、正しいのだろうか？」

『常識』に、敢えて疑義を呈する一言。

余韻を伴い放たれたソレに、随所からざわめきが起きる。

広がる混乱の渦、それに巻き込まれ行く人々が、縋るように彼を  
見つめた。

答えを求めて

ただ一人、超然とした姿勢を崩さぬままに、ルルーシュの声が再  
び響く。

「確かに、我等人類から、月を、そしてユーラシアの大半を奪った  
のは忌々しき化物共BETAの所業。

だが、奪われた我等の先人達には、本当に何の落ち度も無か  
ったのだろうか？」

いま一度問う。

重ねられた問いに、聴衆達の脳裏に、未だ明確な形を取らぬ曖昧模糊としたナニかが浮かぶ。

「無論、恭順派の説く隷従も、和平派が夢見る共存も、どちらも語るに足らぬ狂人の妄想に過ぎぬ。

人類とBETA この二つの種族の決着は、いずれかの滅び以外は有り得ないと断じよう」

次に重なるのは否定。

神の試練を謳う狂信者と理想と夢想の区別すらつかぬ幸せな連中を、まとめて無造作に切り捨てると、辛辣かつ冷徹な事実を突きつけた。

突きつけて、そしてその上で、再び問う。

「ならば先人達は、『何処』で『何』を間違えたのか？」

仕草で、声で、大きく問い掛ける。

この場に臨む者全てに。

己自身が、直接問い掛けられている様な錯覚に、多くの者達が囚われた。

囚われて、思考して、そして……

ある者は苦悶の表情を浮かべ、又、ある者は、己の血の巡りの悪さを恥じ入る。

そして、掛けられた問いに、答える術を見出した一握りが、続く言葉を息を呑んで待ちわびた。

「私は断言しよう。

彼等は傲慢であり、そして怠情であった。

それこそが彼等の過ちであり、今の世界を招いた罪そのものであるとっ！」

今の世界を形作つたモノ全てを、彼は糾弾する。

七つの大罪たる『傲慢』と『怠情』。

それにより齎された悲劇を、彼は人の罪であると断じてのけた。

先人の罪を糾弾する声が、烈火の如き怒りを宿し木霊する。

「かつて先人達は、火星にて接触したBETAを『傲慢』故に侮つた　凶暴なだけのタダの獣である、と」

誰かが、何処かで唇を噛む。

血が滲むほど強く。

「そして彼等は、それ故に『怠つた』。

BETA 凶獣の本性を解き明かす事を。

再び、接触する日に備える事を」

苦渋に満ちた呻きが零れた。

この声が響く全ての地で。

「重なつた二つの大罪の贖いとして、我等は月を失つた」

そこで言葉が途切れたのは、言つべき事を言い終えたのではない事が、誰の眼にも明らかだった。

虚空を睨む鋭く激しい眼差しが、彼の胸中を如実に示している。

続く言葉を悟り、大陸東方に追い詰められつつある中華を称する者達が、彼の地にて罵声を上げていたが、それが此処まで届く筈も無かった。

罪を数える声が続く。

「そして、更なる『傲慢』と『怠惰』の報いとして、母なる大地すら蝕まれる始末」

BETAの猛威を知って尚、否、だからこそ地上なら勝てると『傲慢』にも思いつがった拳句、取り返しのつかないところまで事態を悪化させた『怠惰』なる者達を、彼は容赦無く吊るし上げた。

悲鳴にも似た叫びが、彼の地で満ちる。

自らを被害者として位置づけている指導者達は、ホンの二十年足らず前の事を綺麗さっぱり忘却し、蓋をし、狂乱の罵声を上げ続けた。

紫の双眸に、憐れみとも、悲しみともつかぬ色が浮かんで消える。

「人は、何故過ちを繰り返す。

何故、『今』も変わらないのか？」

その一言に聴衆達が息を呑む。

誤解しようの無い明確さで彼は語っていた。

再び、人類が過ちを、犯そうとしている事を。

世事に疎い者は、言い知れぬ恐怖に怯えた。

世事に通じた者は、より深い意味を理解して背筋を震わせる。

そして、見せ掛けだけの団結の下、机の下では足の引っ張り合いを繰り返す今の世界を形作る者達の内、ある者は怒りに震え、ある者は羞恥に身を縮こまらせ、そして又、ある者は嘲笑を浮かべる少年の糾弾を幼さ故と見下して。

そんな人々の心の機微を全て見通しながら、ルルーシュは、再び世界に向けて言葉を放った。

「今、ここに問う」

世界が凪いだ。

強くも無く、激しくも無い、だが抗い難い威厳の籠った声が、全ての思いを押し潰し、彼の膝下に引き据える。

彼を認める者、認めぬ者、憎む者、愛する者、そしてその何れにも属さぬ者。

何者も、今の彼を無視する事が出来なかった。

正邪善悪、あらゆる区分を超えて、たった一つの問いが世界を駆け抜ける。

「我が言葉を聴く全ての者達よ。

諸兄らは、滅びを受け入れるか、否か？」

シンツと一瞬全てが鎮まった。

呼吸すらも止まった世界の中、ゆっくりと感情が、思考が動き出す。

怒りが、拒絶が、人の意志として世界に満ちていき、それは此処、軌道ステーションも例外ではなかった。

滅びに抗う意志。

生きとし生ける者の根源でもある感情の爆発を、ルルーシュは心地良さに受け止める。

生きようとする意志、有り続ける事を望む想い。

それこそが、彼にとって最も価値あるものなのだから……

彫刻の様に整った美貌に、獰猛極まりない戦士の表情が浮かぶ。そして彼は、その胸中に猛る想いを、言葉に代えて解き放った。

「ならば立て！」

立って戦うが良い。

滅びを招くモノ全てと

抗え、戦え、と。

「滅びの魔手を退けるのは、戦い続ける者のみと知れっ！」

幼き日より、その生涯を闘争の中で生きた霸王の言葉が、意志が、広く広く世界へと広がっていく。

呼応する意思と反発する意思が、世界中を駆け巡り、人々の心の中に様々な種を撒き散らしていった。

この日より彼は、数え切れぬ程の熱狂的な信奉者を得、そして同時に、それに匹敵する数の敵対者を産む事となる。

そして、それ等全て承知の上で

「今日、この日の出来事は、その為の第一歩」

少年は、再び剣を執る。

「いま我等は、再び宇宙へと手を伸ばす。

いつの日か大地を、月を、そして失われた全てを奪い返す為に！」

彼自身が生きる為に。

彼が愛し、愛される者達の為に。

その為に、失われた全てを奪い返す。

そして、その意志を、世界に

「 告げる」

始まりと終わりの言葉を重ね、そして宣言する。

「今日、この日この時より、我等の反攻は始まる」

歓声が弾けた。

絶叫が迸り、怒声が木霊する。

ステーションを雛形とし、世界中へ広がり行く混沌の中、渦の中心たる少年は右手を振り上げ、そして振り下ろした。

『 出航！ 』

忠実なる騎士の命令一下、彼等の希望を載せて『スヴァルトアールヴヘイム』が、ゆっくりと加速を開始した。



星を渡る船が行く。  
いつか蘇るべき王の島を目指して。

### アヴァロンの宣言

西暦一九九一年一月十五日に行われたこの演説は、後の歴史家達にとつて、様々な事象の開始点または転換点として大きく注目される事となる。

その注目理由は、大きく分けて三点。

まず一つ目が、この時代の歴史に不朽の名を刻む事になる枢木ルルーシュが、初めて歴史の表舞台に出てきた転換点として。

次いで二点目としては、当のルルーシュが、後に帝国を見限ったのも、この時点からの既定路線とされている点が挙げられる。

『アヴァロン計画』自体が、帝国からの離反を見越してのモノとされる所以である。

但し、後者に関しては有力な反論も多く、特に有力視されるのが、

一九九〇年代末期に起きたBETAによる予想外の帝国侵攻の際、当時の軍及び政府が取った不誠実極まりない態度に激怒した事が離反の主な要因であり、この時点では帝国を離れる意思は無かったという意見である。

この辺りの事情に関しては明確な物証が殆ど無く、また彼の周囲には当人も含め筆不精が多かったのか、唯一残された資料 当時の彼に一番近かったとされる旧姓・篁唯依の日記から類推するしかないのが実情だった。

ただ、その日記の記述についても、篁の個人的な記述が多く、逆にルルーシュ本人の意図を読み取れるモノは極端に少ない。

それ故、この学説 帝国離反の契機 については諸説乱立し、未だ明確な結論が出ていないのが実情である。

そして最後に残った三点目。

実のところこれが、一番重要な点であったりする。

この宣言を開始点として建造が始まった人類初の本格コロニー『アヴァロン・ゼロ』。

存在しない存在 ゼロという名の記号を与えられたこの地こそが、ルルーシュの語った宣言通り、この後、BETA大戦を終焉へと導く計画群の中心として機能したからだった。

当時、この一連の対BETA反攻計画群には明確な呼称が付けられる事は無かったが、後世の史家達により、同時期、国連主導で進んでいた対BETA極秘計画の総称『オルタネイティヴ計画』をもしり命名される。

即ち、？でも無く？でも無い、存在しない計画 『オルタネイ

ティヴ・ゼロ』と。

〈BETA大戦の真実〉【西暦二二二四年二月 民明書房刊行】

PHASE 6・2：アヴァロンへの険路【後】（後書き）

どうもねむり猫Mk3です。

第6話後編はいかがでしょうか？

楽しんでいただけたなら幸いですね。

結びは、いつもと微妙に変更

『ぬう！』

『アレはもしや！？』

『知っているのか、雷電！』

でした。

マブラヴにも、雷電氏は居りますのでね。

それでは次回もよろしくお願い致します。

閑話　：　簗唯依の日記（西暦一九九一年一月）（前書き）

まあ、軽い息抜き気分です。

題して『唯依姫のお正月』

では

閑話　：　篁唯依の日記　西暦一九九一年一月

西暦一九九一年一月一日

本日は元旦。

年の初め。

一年の計は元旦にあり。

な、元旦でした。

ふうう……

微妙に凹んでしまいます。

つまりアレですか？

今年も去年と変わらないと？

せつかく色々頑張ったのに。

いつも山吹ばかりでは代わり映えないと感じ、思い切ってイメージを変えた大人っぽい紺の振袖を新調したのに……

……うつつ……無念です。

はあああ……

……事の始まりは初詣でした。

今年も、父様もお休みを取られ、枢木の家の方もご一緒にとの事。巖谷の叔父様が御用で来られないのが、やや残念ではありましたが、それでも賑やかで、そして楽しい一日になると期待していたのです。

いえ、まあ、楽しかったのは、楽しかったのですよ。

何と云うか、英国人の血を引いている所為か、この一年で身長も随分と伸び、もはや大人と呼べる程に高くなっておられる兄様。

濃いグレーのスーツに黒のコートを纏った姿は、とても大人びていて、溜息が出る程に凜々しかったです。

それに引き換え、唯依は……

下に向けた視線が、そのままストンと石畳に落ちました。

……クツ……ま、まだです！

確かに、まだ胸はぺったんこですし、身長差も開くばかりですが、唯依と兄様の間には四歳の年の差があります。

きっと四年後には、唯依もルル兄様の隣に立つても恥ずかしくない器量良しになっている筈、否、なってみせます！

そう心に誓いながら、せめて今は胡乱な者を兄様に近づけないよう気を配っていました。

見目麗しく、文武に秀で、尚且つ大変な資産家。

良からぬ者達女狐に狙われるには、充分過ぎる理由です。

だから、これは当然の事でした。

兄様と手を繋いで参道を歩くのも、ルル兄様に妙な欲に駆られた者達女狐が集らぬ為の工夫なのです。

決して、兄様に甘えたくてやっていた訳では無いのですよ。

そうやって何とか初詣を無事に終えた唯依達は、一同、打ち揃っ

て篁の家に戻ります。

明日からは年賀の祝辞で、篁一門が集まる事になっていますが、今日元旦は内輪でのんびりと祝いの席を設ける事となっていたからです。

暖房の入った室内に置かれた大きめな炬燵。

十人ほどが入れるそれに、各々が、思い思いの座に着きました。当たり前前の事ですが、唯依の場所は、父様と兄様の間です。

卓の上には心尽くしの御節を中心とした料理が並び、一同の前にも杯が置かれていきました。

何故か、セシルさんの前には、お茶の入った湯飲みが置かれていましたが、何故でしょう？

……まあ良いです。

兎に角、父様の短い年始の挨拶が終わり、各々が杯を打ち合わせ乾杯し出します。

当然、唯依は父様やルル兄様と。

そうして、なごやかな空気の中、楽しい宴が始まりました。

やがて時が経ち、座も乱れ出します。

思い思いに会話を交わし、笑い声が飛び交う中、ふと何かを思い出したような兄様が、懐から何かを取り出しました。

えっ？

お年玉ですか？

……兄様。

幾らなんでも、これは多過ぎでは？



父様も、青くなっていますし……

気にする事はない？

年末に臨時収入が、あったからお裾分け？

そう言っつて、分厚いとしか表現のしようが無いお年玉を、唯依の手に握らせませす。

本当に強引です、ルル兄様。

とはいえ、兄様のご厚意です。

唯依としては拒める筈も無く、その場は済し崩しに頂く事になりました。

しかし宴が終わった後、自室へ戻ってきて、ふと思ったのです。

え〜……これは、アレですか？

唯依は、相変わらずルル兄様の中では、可愛い妹認識だと？

気になる女の子認識なら、お金ではなく、櫛なり、簪なりくれそ  
うなものですし……

……ふう……地味に凹みます。

うつつ、何とかコレを覆さないと、その内、完全に『妹』に固定  
されてしまいそうです。

本当に、どうすればいいのでしょうか？  
どうしてくれましょう？

……あの朴念仁。

西暦一九九一年一月五日

寒い、寒いです。

コタツの中に入っけていても肩と背が冷えます。

帝都は夏蒸し暑く、冬は骨身が凍る程に寒い。

何故、このような劣悪な環境に都を置いたのでしょうか？

風水？

四神相応？

そんな物が役に立つなら、大陸の戦況があそこまで悪化する筈がありません！

まったくもう……とはいえ、この身は山吹の譜代武家。帝都とそこに住まう人々を、身命を賭して護るが定め。

幾ら暑かるうが、寒かるうが、その事を、ホンの一時とはいえ忘れるとは、何たる未熟！

ここは水垢離で、緩んだ精神を引き締め直さねば！

……えっ？

何ですか咲世子さん？

………夕餉の支度が出来ました？

今夜は寒いので、良く温まる猪鍋です………か。

……直ぐに参りますと叔母様と兄様にお伝え下さい。

コホン……この家の主と嫡子であるお二方を、お待たせするのは居候の身としては許されません。

残念ですが水垢離は、明日に延期と致しましょう。

……お、お鍋に釣られた訳ではないのですよ？  
唯依は、そんな食いしん坊では、ないのですから！

西暦一九九一年一月七日

今日は、一月七日。  
人日の節句です。

一年の無病息災を祈ったの七草粥。  
叔母様をお願いして、今朝の朝食として唯依が作らせて頂きました。

セリ、ナズナ、ゴギョウ、ハコベラ、ホトケノザ、スズナ、スズシロ。

春の七草を具材に、あっさりとした塩味で仕上げた粥を、丁寧に心を込めて。

色々とお忙しく、お疲れ気味な兄様の為に。

いつもより少し遅めに起きてこられた兄様にお出されると、ちょ

っただけ驚いた顔をされてから、唯依の意図に気付いたのか、優しく笑って『ありがとう』と言われました。

少しだけ、少しだけ、赤面してしまいました。  
うつつ……恥ずかしいかったです。

さて、明日は篁の家に戻るの、一日遅れとなりますが、父様にも七草粥を作って差し上げましょう。

西暦一九九一年一月十五日

世界が震えている。

それが、その時、唯依が感じた全てでした。

良く知っている筈の人が……  
直ぐ傍に居た筈の方が……

今、この時は、まるで知らない人の様に、そして途方もなく遠くに感じました。

アレは、アレは、一体、『誰』……いえ、『何』なのでしょう？

唯依の胸が、激しく震えました。  
畏怖と歓喜……そして、どうしようも無い程の喪失感に。

時代が、世界が、変わる。

何の根拠も無く、唯依は漠然とそう思いました。

ただ一人の意志が、世界を捻じ伏せ、在るべき運命を造り替える。

本来なら笑い話にしかならない出来の悪いオトギバナシ。物語の中にしか存在しない筈の荒唐無稽な英雄譚。

それが、今この時、始まったのだと。

でも、何故？

何故それが、ルル兄様なのですか？

そう心の中で問い続ける唯依を、いつの間にかやってきた叔母様が抱き上げてくれました。

その途端、胸の内から湧き上がってきた衝動が、どうしようもなく溢れてしまいます。

ワンワンと、ただ泣きじゃくるだけの唯依を、胸の中に抱き止めてくれた叔母様は、唯依が落ち着くまで、そうしてくれていました。優しく髪を、背を撫でながら。

そうして、唯依が落ち着くのを見計らい、叔母様は話しかけて来ました。

「ウチの放蕩息子は、とんでもない所まで翔け上がるつもりよ」

誇らしげに、寂しげに、そう言いながら叔母様は、空を見上げ、そして言葉を重ねます。

「唯依ちゃんは、どうするの?」

どうする。

どうすれば。

いえ、唯依はどうしたいのか?

……そんな事……

「決まっています」

唯依の口が、意思に寄らずに動きます。

思わず両手で口元を押さえる唯依を、叔母様は楽しげに笑いながら見ていらっしやいました。

……うつつ、恥ずかしかったです。

でも、それが唯依の本心。

兄様が、どこまでも翔け上がっていくというのなら、その時は、唯依も、きつと……

西暦一九九一年一月二十日

今日は嬉しい事と恥ずかしい事が一つずつ。  
禍福はあざなえる縄の如し　な一日でした。

『スヴァルトアールヴヘイム』の出航も無事に成り、兄様もようやく一息つけ、今日はゆつくりと相手をして頂けるとの事。

先日の一件以来、少し気後れするモノもあつたのですが、だからこそ楽しみにもしていたのです。

楽しみにしていたのですが、まさかあんな事になるうとは……………

その時、唯依とルル兄様は、縁側で日向ぼっこしながらお茶をいただき、話に花を咲かせていたのです。

ですが、ある時、不意に兄様の言葉が途切れました。

唐突に途切れた会話に、唯依も動揺してしまい、思わず兄様を呼びます。

「兄様？」

返事がありませんでした。

まるで屍の様だ……………ではなくて、眠っておられました。

一月とはいえ風も無く、陽射しも暖かい所為でしょうか？

縁側に腰掛けた兄様は、うつらうつらと舟を漕いでおられます。

対して、唯依はと言えば、話の途中で眠られてしまい少しだけムツとしましたが、ここ数ヶ月の兄様の激務を思い出し、仕方ないかと諦めました。

そうでなくても、平気で無理をなさる方なのです。

ここは、少しくらい休ませて差し上げるべきだろうと。

とはいえ、手持ち無沙汰となつた事は否めませんでした。何せ、話し相手のルル兄様が眠ってしまったのですから。

さて、どうしたものか？

そう首を捻った直後、唯依の懸念は吹っ飛びました。

ユラリと傾いだ兄様の身体が、唯依の方へと倒れ掛かってきたからです。

一瞬ビクツとしましたが、咄嗟の反応で唯依が兄様のお体を支えることで事無きを得ました。

……でも、これは……近い！ 近いです！ ルル兄様っ！

こんなにも近くで兄様を見るのは、以前、添い寝して貰って以来の事。

サラリとした濡羽鳥の髪が、唯依の頬に掛かります。

規則正しい安らいだ寝息が、唯依のうなじを撫るのです。

頬が燃える様に熱くなり、胸がドキドキと張り裂けそうな程に高鳴りました。

熱に浮かされた頭が、自分のモノとは思えぬ程、ボォ〜っとなつてしまいます。

……そう思わぬ事態に、パニックになっただけなのです！

だから、だから………

気付いた時には、兄様の頬に、せ、接吻していたのも唯依の本意デハナイノデスっ！

ゆ、唯依は、常に容儀を整え、貞淑で慎み深く在らねばならぬ武家の娘なのですから。



こんな……こんな、ふしだらな真似をってしまったのも、ね、熱に浮かされただけなのです！

そんな風に、兄様に口付けたまま、千々に乱れる胸中で絶叫していた時でした。

カシャツと、破滅の音が鳴ったのは。

振り向いた先には、何故かカメラを構えた真理亜叔母様が……つて、叔母様アアアアツ！？

羞恥のあまり茹蛸の様に真っ赤になる唯依を他所に、叔母様は実にイイ笑顔を浮かべました。

そう……まるで極上の獲物を目の前にして、舌舐めずりする猫の様な。

そして、あまりの展開にアウアウとうわ言を漏らすだけの唯依に向け、軽くウインク一つを投げかけると、そのまま叔母様は去って行きました。

ルンルンと擬音が付きそうな楽しげな足取りで。

それに対して、支えているルル兄様を放り出す訳にもいかず、なによりパニックに陥っていた唯依は、叔母様を制止する事すらできませんでした。

そのまま幸せな重みを感じつつ、ドキドキと違う意味で心臓を打ち鳴らす時間が暫し続き、やがて眼を覚ました兄様に、平謝りに謝られても心此処に在らずの状態で、そそくさと逃げ帰ってきてしまいました。

ルル兄様、唯依の素っ気ない態度に、お気を悪くされていなければ良いのですが。

……嗚呼、でも本当に、禍福はあざなえる縄の如しな一日でした。

叔母様があの写真をどうする気なのか？

気になって気になって、今夜は眠れません！

西暦一九九一年一月二十一日

今日、叔母様から昨日の写真を、こっそりと渡されました。

なんなのですか！？

この永久保存加工とやらはっ！

いつまで経っても色褪せない？

いつまでも美しいまま思い出を残せる？

そんな事は訊いてません！

……えっ？

ネガは、きつちり完全密閉の上、某大銀行の金庫に入れてあるから大丈夫……って……

……

……

…

うつつ、結局、唯依は脅迫に屈しました。

ゴスロリ？

という服らしいですが、西洋のヒラヒラとした服を何着も着せられる破目に。

更には、写真までパシャパシャと。

これでまた一つ、叔母様に頭が上がらなくなってしまいました。

……でも少しだけ、ほんのチョッピリ、可愛い服が着れた事が……い、いえ、武家の娘たる者、その様な浮ついた気持ちは厳として戒めるべきモノ。

唯依も、まだまだ精神修養が足りません。

己の未熟さを強く意識する一日でした。

西暦一九九一年一月三十日

衝撃の事実を知ってしまいました。

叔父様が、巖谷の叔父様が……はて、以前にもこんな事を書いた様な？

……いえ、そんな事は、どうでも良いのです。

あの巖谷の叔父様と父様が、仲違いをされていたとは……

元旦は兎も角、三が日はおろか松の内にも顔を出されなかったの  
で、どうされたのかと案じていたのですが、その後、ルル兄様絡み

で色々あり過ぎて忘れておりました。

今日、久しぶりにお休みの父様と過ごしている内、不意に思い出して聞いてみると、なにやら父様らしくない歯切れの悪いお返事が。

不審に思い問い詰めてみると、年末に今後の戦術機開発の方針で意見が割れ、喧嘩になってしまったそうです。

唯依としては、叔父様と父様が仲違いしているなど、到底、納得できる筈も無く、それなりに時間も経った事ですし、そろそろ仲直りされてはと、お勧めしたのですが……

どうも、父様も叔父様も、意地になってしまったらしく、中々、芳しいお返事がいただけませんでした。

本当に、どうしたら良いのか？

新年から、頭の痛い事です。

閑話　・ 篁唯依の日記（西暦一九九一年一月）（後書き）

ちゃんちゃん

悩み多き乙女・唯依姫でした。

いやでも、これを歴史の資料にされたら本人は悶絶するな。

さて、それでは次回は本編で。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1236t/>

---

Muv-Luv Alternative The end of the idle

2011年11月1日00時17分発行